

Fremd  
Der Witz und  
seine Beziehung  
zum  
Unbewußten

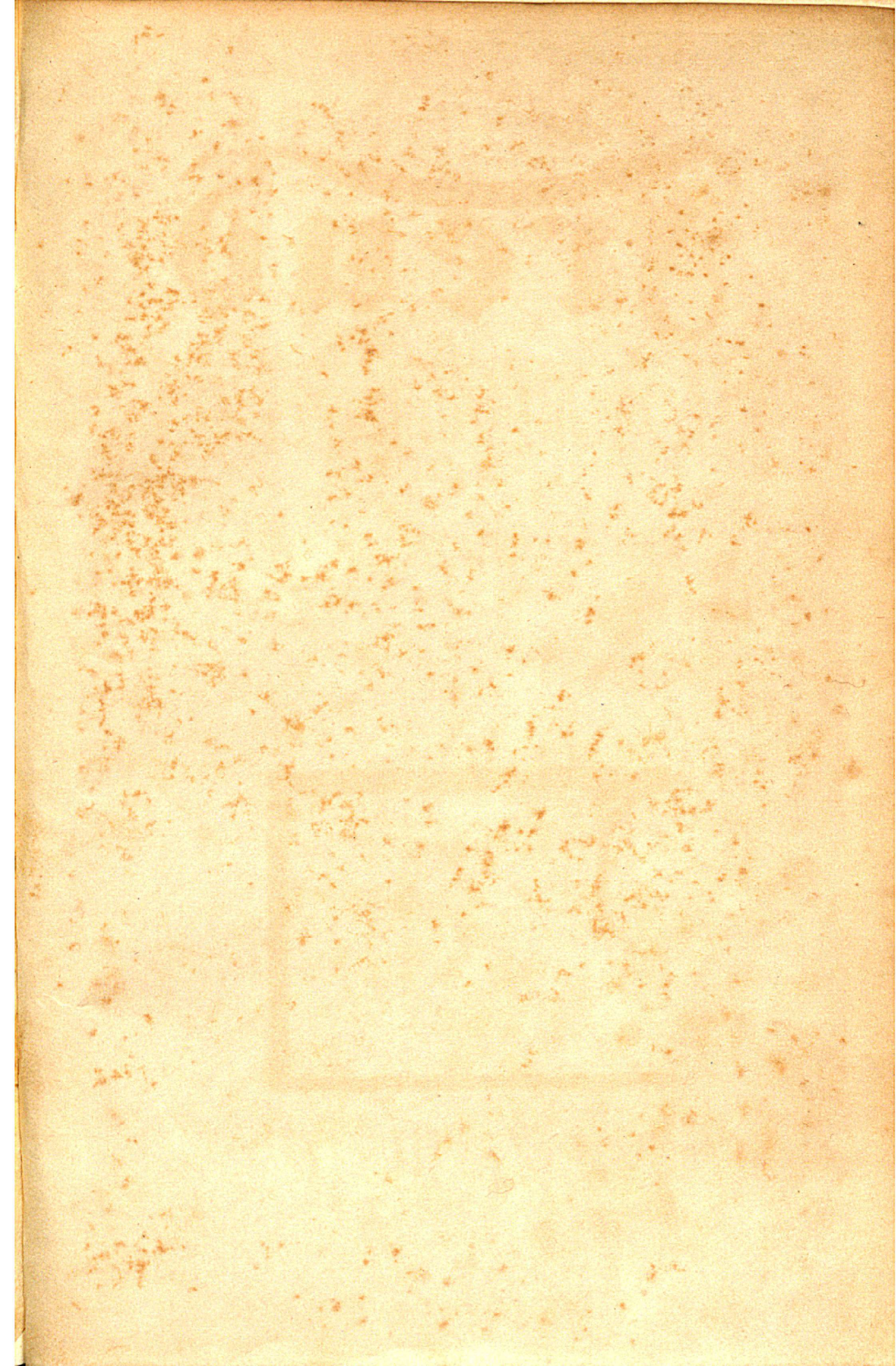














friend

酒落の精神分析

正木不如此

フロイド  
精神分析  
系  
9

アールス刊







S Freud

析分精神の落洒

訳 丘 如 不 木 正

ドイ ロフ  
分 神 精  
系 大 析  
9

刊 ス ル ア







## 譯 序

此書は Sigm. Freud の著書 Gesamte Schriften の 1 部 Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten を譯したものだ。

一般に翻譯は困難なもので、他國語は他國人の思考が表現されて居るものだから、當然思考の順序配列も、自ら私達と異なる所があるので、これを私達の言葉に移すには、原著者の思考の内容を、先づ他國人になりきつて洞察し、然る後に自國人にもどつて、自國語としてはき出さなくてはならない。特に文學書などに於ては、此點が翻譯の重大な難所だ。

此著は文學書ではなく、一種の論文だから、理論さへ間違ひなく翻譯すればいいのである。精神分析は事件を論ずる學問でなく、私達の精神現象を取扱つて居るものであるから、理論そのものの表現が、思考とかたく結びついて居る。そのために寧ろ文學書よりも翻譯は骨が折れるのではないかとさへ感ずる。況んや私の扱つたのは、洒落と云ふ一種獨特の精神現象の部であつた。翻譯の困難さの最大にぶつかつた様なものだつた。

私はやむなく出来るだけ原文に近く、そして日本人に理解出来る事を標準として此仕事を果した



積りである。

一體 „Der Witz” を「洒落」と譯するのがよくない。洒落と云ふ日本語は元來、言葉によつて表現されたものを指して居る。此著は勿論言葉の表現の方面も扱つては居るが、又思想を主としたものも取扱つて居る。後者を日本語では頓智と云つて居る。一言にして云へば、此著は、洒落と頓智との綜合を扱つて居るのだ。それでやむなく、日本語の「洒落」を「言葉の洒落」とし、日本語の「頓智」を「思考の洒落」として置いた。かう云ふ様に此譯著中には私達の日常語に特別の範圍を設けた意味を持たせた文字が、散見して居る。その都度私は原語を竝記して、錯誤を避ける様にしておいた。

精神分析は元來難解な學問だ。だからスラ／＼と読み續けても、樂に頭に入る様にかみくだきなから翻譯した積りだが、その數箇所は、理論そのものが難解なのだから、二三回読み直しをして貰はなくては、理解出来ない所がある。學問なのだからそれはやむを得ない。

最後には是非云つて置きたいのは、此著はフロイドと云ふ歐洲の學者の著したものだと云ふ點だ。従つて引用してある無數の洒落が、皆歐米の產物であつて、私達にはしつくりしないものもある。私は巴里在住の頃の一つの失敗を思ひ出す。夏の日に下宿の婆さんが、あんまり暑い／＼と云つて



うるさくてならなかつたので、「涼しくする法を教へようか」と云つた。「どうするんです」「天井から細い絲をぶら下げて、それに大きな石を結びつけて、其下に腰かけてるのだ」かう私が云ふと婆さんは眼を丸くして「何故だ」ときいた。私は心の中に「ひや／＼する」と云ふ概念が浮んでるのだが、どうしてもそれがフランス語で出て來なかつた。結局「お前は非科學的な頭腦だ」とやられてしまつた。かう云ふ譯で言葉の洒落にせよ、思考の洒落にせよ、他國人にはなか／＼理解出來るものでない。

此著でフロイドは、洒落のあらゆる種類をあげたと揚言して居る。此點は私も反對しないが、唯一つ遺憾に思ふのは、同音の技巧を使用する洒落に他國語と自國語との交錯を論じなかつた事だ。

漱石の「我輩は猫である」の中に、“Do you see the boy.”とやると、「圖々うし／＼ぜ、やう」とやる所がある。これは日英同盟だ。又議政壇上でメートルをあげて居る代議士高見之通氏を彌次つて「御高見の通り」とやつた名士もあつた。日支親善の洒落だ。もつとも日支と云つてもそれは今の中華民國ではないのは當然で、漢音を使つてある。

此洒落は同音技巧の洒落ではあるが、自國語よりは、他國語が幾分縁が遠いために、一瞬時、聴き手をまごつかせて、直ぐに又「落ち」があるからだらう。



餘事ながら、私は此著を譯して大分得る所があつたから、日本人の洒落は、歐米人よりも數歩進歩して居るのを感じたので、日本の洒落の研究に手をつけて見る氣を起した。随分愉快なものがあつたらう。今、日比谷の公會堂で大辻司郎氏が漫談をやつたが、私の此室のラウドスピーカーがそれを傳へて居て、日曜日にアメリカの教會へ行くと「入口のところで、後から來たものが、ヅツと後にならんで居る」と云ふとドツと聽衆の笑聲が聞えて來た。これは折からの洒落だつた。分析して見ると此笑は日本人を聽手が卑下して笑つたのだと分る。後の雁が先になるのが日本の風習で、それを誰でも輕蔑してゐるから、アメリカの話で、それを思ひ出したに相違ない。

此翻譯に就いては、醫學士有福精一氏に大變手傳つて戴いた。厚く御禮を申し述べて置く。

Herr Dr. Freund; sei Freund !

昭和五年陽春

富士見高原に於て

正木 不如 丘



# 目次

## 一 分析の部

洒落の技巧	三
洒落の傾向	一〇

## 二 合成の部

洒落の享樂機轉並に洒落の精神的發生	一五
洒落の動機・社會現象としての洒落	一八

## 三 理論の部

洒落と夢並に無意識との關係	二三
洒落と滑稽の種類	二四

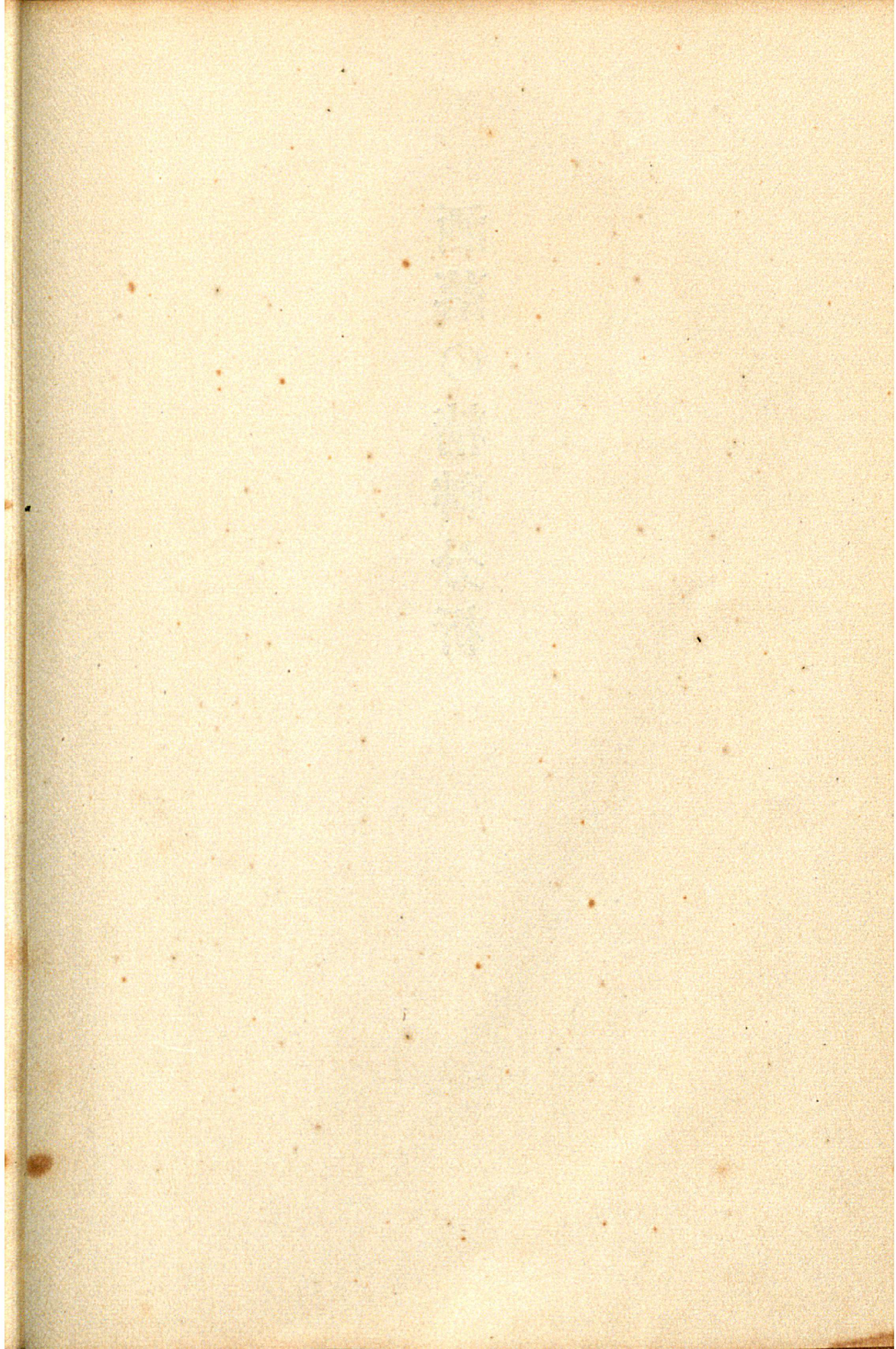






洒落の精神分析

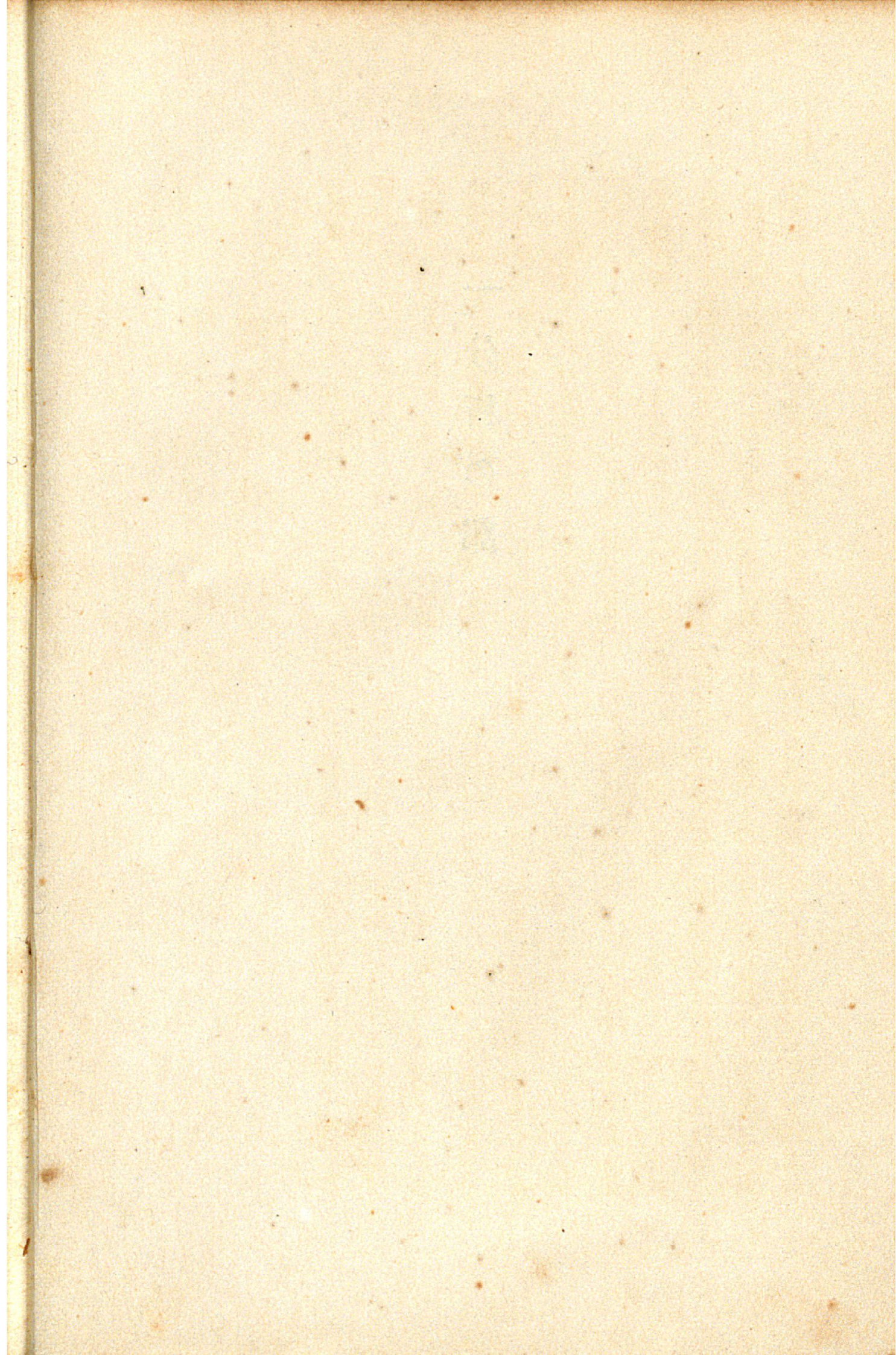






一、分析の部







## 洒落の技巧

「路加の入湯」と云ふ旅物語を見ると、ハンプブルグの富籤集金人で、魚の目の手術の上手だつた Hirsch-Hyacinth がおしやれをした様子が書いてある。此男がハイネに向つて自分と Rothschild 男爵との間柄を自慢して終りにかう云つて居る。「何と云ふ私はしあはせものでせう、だつて先生！ 私は Salomon Rothschild と同席出来るんですよ。殿様は私を身内のものゝ様に、全く Familiönär (譯註、後を読み續けて下さい) に扱つて居るんですからね。(Und so wahr mir Gott alles Gute geben soll, Herr Doktor, ich sass neben Salomon Rothschild und er behandelte mich ganz wie seinesgleichen, ganz familiönär) 此滑稽なる例に就つて Heymans や Lipps は洒落の効果はきくものをまごつかせてそれから「落ち」をつける所にあるのだと説明して居る。此點はそれとして私は次の事を考へて見よう。……一體何故 Hirsch-Hyacinth の言葉は洒落になるのか！ 此場合に二つの考へ方がある。元來洒落の性格と云ふ物があつて、その性格からかう云ふ思考が出て来るのか、それとも一つの思考が發表される時の表現に洒落がくつつけられるのか、どつちか



である。此二つの事を解決するために分析的の追究を試みよう。

一つの思考は一般に種々の話し方や言葉によつて表現され又適切に翻譯され得るものだ。Hirsch-Hyacinth の言葉は一種特別な表現の型が出て居るが、これは實際獨得なもので、なかなか簡単に領解されるべきものでないのが分る。

私は Hirsch-Hyacinth の思考を他の言葉で適切に表現する事を試みよう。Lipps も既に Heine が此洒落をどううけ入れたかを十分説明して居る。

「Heine はかう云ひたかつたのだ……待遇は全く familiar (家族的)であつた。百萬長者が金持らしいやみをお客に見せない様に氣をくばりながら」

私は此意味を變へずに他の表現法をしてもつとうまく Hirsch-Hyacinth の言葉に追加をする事が出来る。「Rothschild は私を全く友人扱にした。百萬長者が行ひ得る限りをつくしてまるで私が彼の家族でもある様に」。もう一つ私が附け加へたいのは、「金持の謙遜は一度經驗した人には實にいやみたつぷりのものだ」と云ふ事だ。

此洒落の内容となつて居る思考が大體以上に述べたやうなものであるとすれば、吾々の先に提出して置いた問題は解決されて居る。即ち此例では洒落の才能は思考とは關係がない。Heine が



Hirsch-Hyacinth<sup>ヒルシュ・ヒヤシンthus</sup>をして代言させた思ひ付は、正當な鋭利な且皮肉な思ひ付で、大金持に面と向ひあつた貧乏人が承認しなくてはならぬ思ひ付ではあるが、私はこれを洒落だと云ふ勇氣がない。

誰か Heine<sup>ハイン</sup> の解釋をどうしても否定する事を肯ぜぬ人があつて、思考そのものが洒落なのだと何處迄も云ふならば、私達は此解釋では洒落の洒落性が忽ちにして失はれてしまふ事を確信を以つて指摘する。Hirsch-Hyacinth<sup>ヒルシュ・ヒヤシンthus</sup> の話は私達を高らかに笑はせるが Tippi<sup>Tipps</sup> の忠實な解釋や私の解釋そのものは私には正しいと思はれるし、又後印象をももたらすが、然し解釋してしまつてはもうをかしさはなくなつてしまふ。

吾々の例の洒落性<sup>しゃらくせい</sup>が思考に結びつけられて居ないとすれば、此洒落性<sup>しゃらくせい</sup>は表現の語調に求めなくてはならなくなる。洒落の話術や表現術が獨得のものであり、又、洒落の内容關係にはどう云ふ事がひそんで居るかと思ふ點を學ぶために、私達は此特別な表現方法を問題にしたい。洒落は他の言葉で完全な文句とすれば、洒落性<sup>しゃらくせい</sup>も洒落の効果も失はれてしまふものだから。

洒落と云ふものは言葉の形式に重大價值があるのだと認めれば、大家の説と一致する事になる。

K. Fischer<sup>カー・フィッシャー</sup> は洒落が洒落であるためには飾のない形式でなくてはならないと云ひて居る<sup>ジャン・</sup>、Jean

Paul<sup>ペール</sup> も亦次の様に云つて洒落の性質を同じ様に説明して居る……「文武はすべからく赤裸々たれ」



一體洒落の技巧と云ふものは何處にあるのか。一つの思想があり、それが發表される時にそれに先立つて働くものは何だらう。その働きによつて洒落となり私達を心から笑はせるものは何だらう。

私の解釋と Heine<sup>ハイン</sup>の言葉とを比較對照すると二種の考へ方がある様に思はれる。第一は極端な省略だ。此洒落に含まれた思想を十分表現するためには Rothschild<sup>ロートシルド</sup>は私を全く彼同様に全く家族的に扱つた Rothschild behandelte mich ganz wie と云ふ言葉に極端に省略された次の結文を附加しなくてはならない——「百萬長者が出来る程度」。此明瞭な補遺をした上に尙私は云ひ落してはならない事がある。Heine は簡単に「Rothschild は私を彼同様に、全く家族的に扱つた。」と云ふだけだが、此第一章句をなす「家族的の取扱ひ」に附け加へられる第二章句の重要文字さへ洒落のために省略されてしまった。がその代理のものさへなくても、言葉の變化があるから間に合ふのだと。一向に洒落のない Familiar と云ふ思想の表現は洒落の讀本では Famillionär と變化するのだ。

此文字の構成と洒落の可笑味と洒落性<sup>しゃらくせい</sup>とは重大な相關關係があるのは疑へない。

此新造語は第一章句では家族的——Familiar——を始めの綴で示し、其終の綴では百萬長者——Millionär を意味して居る。即ち此新造語は Millionär の一部を持つ事によつて第二章句を代表して、第二章句を推察させる事になる。



此新造語は Familiar, Millionär の二つの組成分子から成立した混合語であつて、その出來具合を圖解して見ると次の様になる。

Famili	är
Milli	o
	när

Famillionär

そして此思考が洒落に導かれた過程を稍幻想的かも知れないが次の様に云へば十分に書き現す事が出来る。Rothschild は私を全く家族的に扱つて居た——百萬長者が出来る範圍に於て。」

(Rothschild behandelte mich ganz Familiar, d. h. soweit ein Millionär es zustand bringt)  
今假りに此文章に對して省略力が及んだとすれば、自然第二章句の方が薄弱なのが當然だ。それ故第二章は消えてしまひ、其意味の中心をなす Millionär と云ふ字は此壓縮に抵抗して第一章句中の似よつた字 Familiar にとけ込んでしまひ、此偶然の出來事で第二章句を救助し、他の不必要の部の破壊に役立つて洒落が出來上る。

R. behandelte mich ganz Famillionär

Millio—när



いづれ後に此壓縮力に就いては説くが、かう云ふ壓縮力を今問題にしないにしても、洒落の成立、即ち此場合の洒落の技巧と云ふものは、言葉の壓縮並びに補償形成だと云ふ事が出来る。即ち此例では一つの混成語の作成によつて補償力が發露したのだ。

Famillionär と云ふ混成語は單獨では理解出来ないが、前後の關係を見ると直ちに理解されて、極めて意味深長なものとなり、洒落として笑ひを催す効果をもたらす。然し此メカニズム(機構)は洒落の技巧を説明しただけでは理解出来ない。どうして言葉の省略、混成語による代償は我々に興味をひき起させ笑を招くのか！ だが此問題は私達が唯端緒をつかむ迄は一時其取扱を猶豫して置くべきだと考へる。私はまだ續けて洒落の技巧を論じ續けなくてはならない。

洒落の技巧が洒落の本質の洞察に對して重要なものだとは私に考へるから、Heineの書いた Famillionär と云ふ様な混成語の他の例をさがして見よう。こんな例はさう澤山はあるまいが、少々の例ならば見當る。

Heine 自身が Millionär と云ふ字から Millionarr と云ふ第二の洒落をやつて居る。それは Millionär と云ふ字と Narr —— 馬鹿 —— と云ふ字の關係がはつきり分るもので、第一の例が壓縮された連想を表現して居るのに似て居る。



私の知つて居るのにこんな例がある。伯林人は自分の街に一つの曠泉を持つて居るが、その曠泉の建設は Forckenbeck と名乗る市長の不機嫌をかつたので、此曠泉を Forckenbecken と叫んで居る。Brunnen(泉)と云ふ字が今は古語になつてしまつた Becken と云ふ字に代へられて居るにしても、たしかに洒落になつて居る。名前が一致して居るからだ。

歐洲人の駄洒落は通稱を Cleo と云ふ女と關係があつたからと云つて王様の Leopold を Cleopold と改名させてしまつた。

此疑ふ餘地のない壓縮法はたつた一字を使つただけで不愉快な諷刺を常に含む事となつて居る。固有名詞は一般に洒落の技巧によつて改悪されるものだ。キーンに Salinger, Börsensaal と云ふ兄弟があるが、それからヒントを得て一人を Sensalinger と名付け、一人を Scheusalinger と云ふいやな名をつけて區別して好評を博した事がある。確かに便利で洒落になつてゐるが、正當かどうかは知らない。——洒落は勿論そんな事には無關係のものである。

次に述べるのは字を節約して二様の意味を含ませた洒落だ。今迄外國で永い間愉快に暮して來た或る青年が暫くぶりで友人に逢つた。友人は此青年が結婚指輪をはめて居るのを意外に思つて「君は結婚したんかえ」ときいた。青年は高らかに答へた。——Trauring, aber wahr 實にうまい酒



落だ。Trauringと云ふ言葉には二つの意味が含まれて居る。TrauringはEhering（結婚指輪）と云ふ字とTrauring（みじめだ）と云ふ意味がある。（譯註、Aber wahrは「だが本當だ」と云ふ意味だ。少し低級な洒落で申譯けないが、悪友の一人が指輪をはめて居るのを見つけた悪友の一人が「おい婚約したのか」ときくと「うん、婚約——この發音はヤクともワクともつかぬものたるべし——さ、それもほんとだよ」と苦笑した、と云つた様な）

洒落の効果は此場合も完全だ。元來混合語と云ふものは、分り易いものでFamillionärの様に存在價值のないもので、唯二つの言葉の壓縮された成分からなり立つて居るだけだ。

Famillionärと全く同じ意味の洒落の材料を私自身談話の中で偶然に提供した事があつた。私は一婦人の前で或る研究家の大きな功績を話して居た。此研究家を私は前にある不正があつた様に誤解して居た。「人間は Monument（記念碑）を儲ける様なものです。」と婦人が云つた時「全く、一度は貰ひますが、しかし功績は Momentan（一時的）で僅かなものですよ」と私は答へてしまつた。

MonumentとMomentanとは全く反對の意味に使はれる言葉だ。此婦人は此反語をうまく合せて「だから私達は彼に Monumentanen（記念碑に値する）な功績を希望します」と答へた。

これと同様なテーマが英語に翻案されたので私は外國語の例をもらつた。Famillionärと同様に



壓縮のメカニズムが示されて居る。Brill<sup>ブリル</sup>は言つてゐる「英國の作家 de Quincey<sup>ド・クインシー</sup>は何處かで老人達が Anecdote に陥る悪傾向があるのを認めた。」この言葉は Anecdote (逸話)と Dotage (子供っぽい言葉)の兩つから成立して居る。

### Anecdote

#### dotage

又 Brill<sup>ブリル</sup>はある無名の短詩の中にクリスマス<sup>クリスマス</sup>の事を the alcohol holidays と書いてあるのを發見した、これも同じく alcohol と holidays の兩者の結合だ。

Flaubert<sup>フローベール</sup>がカルタゴに起つた事を書いた Salambo<sup>サラムボ</sup>と云ふ小説を發表した時、Sainte-Beuve<sup>サン・ト・ブーヴ</sup>はあんまり不快な事が詳細に記述してあるのを讀んで、

Carthaginoiserie と稱した。

### Carthaginois (カルタゴの)

#### chinoiserie (くだらぬもの——支那的事)

此種の秀逸な洒落の第一人者はオーストリーの或る上流人だ。此人は科學的並に社會的貢獻で此國の高貴な位置を占めて居る。私は特徴のあるいゝ洒落を手に入れると云ふ意味で此人の洒落を研



究の材料とする自由をもつて居る。

N氏は或日ウキーンの新聞記者で冗長な論文を著した點で有名な人の話をした。此論文はナポレオン一世とオーストリーとの間の小さなエピソードを取扱つたものだが、其著者は赤毛の男だつた。N氏は其記者の名が話題に出るや否や云つた。(Ist das nicht der rote Fadian, der sich durch die Geschichte der Napoleoniden zieht?)「其人はナポレオン後裔の歴史の泌み込んだ rote Fadian ではありませんか」と。

洒落の技巧を發見するためには吾々は洒落の言葉に還元操作を行つて、其表現法を變へながら、洒落としての價值を高め、最初の意味を十分含ませたまゝ、よき洒落として味ふ必要がある。N氏の rote Fadian と云ふ洒落は二つの成分から出來て居る。即ち一つは記者を罵倒する言葉で、もう一つは Goethe が Wahlverwandschaft の中の Otiliens Tagebuch の序文に拔萃した有名な寓話を追想させる言葉だ。悪評の方では、「だからあいつはいつになつても新聞の雜報欄でナポレオンとオーストリーとの關係を永々と書くしか知らないのだ。」と云ふ事實なのだ。この言葉はこれでは洒落にならない。又 Goethe の言葉を連想してもやつぱりちつとも洒落にならないから笑ひたくならない。



若し此の二つの間に深い関係があり其關係に特殊な壓縮と融解操作とが行はれれば、其處に初めて洒落が出来上り且第一流の洒落となるのだ。私は此不體裁千萬の斷定と Wahlverwandschaft 中に出て来る美しい長物語の著者がした寓話との結合に就てこれから説かう。その目的のためにはいつもする様にこの事の根柢になつて居る或る力の説明を先にしなければならぬ。私は此洒落の本當のいきさつと思はれるものを次の構造に代へて見よう。

又くり返して云ふが、N氏のテーマは „es zieht sich wie ein Faden” と云ふ文章を引用して居る Wahlverwandschaft 中の文句のたつた一部を思ひ出させるだけだ。寓話のうちの rote Faden と云ふ言葉は此場合罵倒される記者が偶然赤毛であつたために初の章句の上に變化が起つて來たのである。それ故正しくは次の様に綴られる。 „also dieser Mensch ist es, der die langweiligen Feuilletons über Napoleon schreibt”

では二つのものを壓縮して一つのものとする方法に踏みこんで見よう。先づ „rot” と云ふ言葉はそのまゝだが、„langweilig” と „Faden” と云ふ二つの言葉が一つになつて fad (拙劣な) と云ふものに統一され、此二つの成分が融合して洒落の文句となつて居る。そして此文句が初めて誹謗句となり引用句の一部分をなす事になつたのだ。即ち



„also dieser rote Mensch ist es, der das

fade Zeug über Napoleon

Schreibt.

der rote Faden der sich durch

alles hindurch zieht.

Ist das nicht der rote Fadian, der sich

durch die Geschichte d. N. zieht ?

かうした表現や説明は、又後章に於て單に形式の上からばかりでなくもつと深く分析して見るつもりだが、此表現や説明をあやしげであると思ふ人も壓縮と云ふ事が行はれて居ると云ふ點は疑はないだらう。

壓縮の結果は一方では著明な短縮となり、他方では偶然の混合語作製……いやむしろ兩成分の融合と稱すべきものになる。„Roter Fadian”と云ふ言葉は洒落でなく單純な惡口として存在してもいいが、此場合は壓縮產物である事は確かだ。

若し讀者のうちで、私が洒落の面白さの源に一寸もふれぬのみか、むしろその面白さを破壊する



嫌のある觀察方法をとつて居るのに不快の感をいなく人があるならば、今暫くお待ちをお願いしたい。洒落の技巧を十分に闡明するためには此觀察方法が理解の鍵となるのだから、私はまだ此方法を續けながら研究を運んで行かう。

壓縮作業は必ずしも壓縮された言葉の代償を他の言葉に混合させるばかりでなく、他の方法もあると云ふ事を私達は今云つた最後の例でうす／＼感付いて居る。この別の方法をN氏の他の洒落で習ふ事にする。„Ich bin tête à bête mit ihm Gefahren” 此洒落はこれ以上短縮しようがない。

これをもつと分り易く云へば „Ich bin tête à tête mit den X gefahren” (譯註、tête は頭と云ふ佛語で tête-à-tête は胸襟をひらいてと云つた熟語だから、此章句は私は心をうちあけながらXと旅行した、と云ふ意味である) und der X ist ein dummes Vieh (譯註、そしてXはまるでおろかな豚の様な奴だ)と云ふ事になる (譯註、bête は四つ足。譯者の駄洒落を一つ。一心にあまつた事があつてあいつでもこんな場合にはと思つて

平常は輕蔑して居る男を訪ねて「君今日は智慧をかりに來たよ。豚とも談合と云ふからね」)

かう二つの文章に書いて見れば、ちつとも洒落にはならない。又 „Ich bin tête-à-tête mit den dummen Vieh von X gefahren” と書いても同様洒落にならなう。dummes Vieh が全く除去されて、其代償に唯 „tête” の „t” が „b” に變へられ、しかも省略された „Vieh” を意味する事に成



功して初めて洒落になつたのだ。此種の洒落の技巧を、*Verdichtung mit leichter Modifikation*（輕微な變形變更による壓縮）と云ふ。これで見れば變形の程度が少なければ少ない程洒落は秀逸なものとなるのが想像される。

もう一つ同様な技巧から出た洒落がある。N氏は一人の毀譽褒貶のやかましい人物を形容してかう云つた。*„Ja, die Eitelkeit ist eine seiner vier Achillesfersen“*（「うん、うぬぼれは、あいつの四つのアヒレスの踵の一つなのだ」）（譯註、アヒレスは足が強すぎたので妬まれて一方の踵の筋をきられた）アヒレスの場合は勿論問題のかゝとは一つである。此處では四つになつて居る。四つのかゝとは云ふ迄もなく四つ足で獸が持つて居るだけだ。この二つの言葉が短縮されて洒落になつたのだ。

*„Y ist bis auf seine Eitelkeit ein hervorragender Mensch; aber ich mag ihn doch nicht, er ist doch eher ein Vieh als ein Mensch“*（Yはうぬぼれをとりわけにすれば偉人だ。だが私はあいつはきらいだ、あいつは人間と云ふよりはけものだ。）（譯註、譯者は尙此洒落にも一つの内容があると思ふ。アヒレスの弱は、たつた一つのかゝとだが、Yは四つも——弱を持つて居る）

一層單純な例だが、私はある家族からどさくさまぎれの最中に似た様な例をきかして貰つた。二人の兄弟があつて、共に高等學校の生徒だつた。一人は優等生だが一人は中等の成績だつた。或時



その優等生が怪我をした。母はこの椿事がこれから初まる永い不幸の初めでゝもある様に心配の表情をして話して居た。今迄兄のために暗い気分になつて居た弟はふと此機會をつかんで „Ja, Karl geht auf allen Vieren zurück“ (譯註、Karl はすべての四つの上で歸つて來ますよと直譯すべきだが、四つん這で歸つて來るよの意味だ)

此場合の變形は <sup>カール</sup>Karl が必ず歸つて來ると云ふ保證を意味する外に又他の補遺を持つて居る。弟の立場の熱烈な辯護なのだ。「學校の成績がいゝから自分より彼が賢いと云ふ事を母に信じさせたくない。彼はのろまな豚の様なものだ、私も馬鹿だが彼は尙馬鹿だ。」

N氏は又きはめて容易な變形と壓縮とで秀逸な洒落を提供した。彼は社會的に名のある人物に就て „er hat eine grosse Zukunft hinter sich“ (あの男は大きな將來を自分の後ろに持つてゐる) 此洒落の目標となつた青年は氏と育ちと其人物の點で評判よく、かつては大きな黨派の指導者となり、その先頭に立つて其操縦に成功した男だつた。時代が變つて、其黨は支配出來なくなり、其指導者たる宿命を持つた彼も今はどうもかうもならないのが豫想出來た。そんな譯だからこの洒落を云ひかへれば „Der Mann hat eine grosse Zukunft vor sich gehabt, mit der ist es aber jetzt aus“ (あの男は大きな將來を過去に於ては持つたのだが、今はもういけなう) となる。



„gehabt” (持つの過去分詞で持った) と副文章の代りに主文を少し變へて „vor” (前) を „hinter” (後) に變へて居る。

同じ例をN氏がある騎士の話に使つて居る、其人は農林大臣になつたが、その功は唯農場經營をやつただけだつた。社會は大臣迄した人としては、今迄例のなかつた程の少額の報酬しか與へなかつた事をN氏は知つた。そして此人が退職後又農場經營に興味を持ち初めたのを知つた時、N氏はかう云つた。„Er ist wie Cincinnatus, auf seinen Platz vor dem Pflug zurückgekehrt” (彼は<sup>シンシナトゥス</sup>Cincinnatusの様に、鋤の前の彼の位置に歸つた) 農業經營から官職に移つた<sup>シンシナトゥス</sup>Cincinnatusは矢張り鋤の後についた譯だが、鋤の前にはその頃も今も牡牛が居るばかりである。

もう一つ成功した例がある。<sup>カール・クラウス</sup>Karl Krausは所謂惡德記者から„Er sei mit dem Orientexpresszug in eines der Balkanländer gefahren” と報告された。この言葉には Orientexpresszug (東方行特急列車) と云ふ言葉と Erpressung (脅迫) と云ふ言葉が一緒になつて居る。あだかも誤植でもある様に<sup>シム</sup>シムが<sup>ハム</sup>ハムとなつて吾々の興味をそゝる。(譯註、つまりかう云ふ洒落なのだ。彼はバルカンの一國へ東方行特急列車で脅迫に行つたのだらうよ)

かう云ふ短縮と變形との例ならばいくらでもあるが、この種の洒落の技巧の本質を掴むためには



もう新しい例は不用だと思ふ。で第一種に屬する混成語の作製と第二種の短縮と變形との技術を比較して見ると、其間には絶對的の區別はなく、兩者の過渡に屬するものがあるのが洞察出来る。

單語の混成も、變形も代理となる言葉を造ると云ふ觀念に従屬するものであつて、もし吾々が希望するならば混成語作製を、第二の言葉による第一語の變形と云つてもいい。

X X X

偕私は上に述べた多くの例を根據として、第一の決論が得られたかどうかを考へて見る事にしよう。第一の決論は *Jean Paul* が洒落の魂だと云つた簡約と云ふ事だ。然しすべての簡潔な言葉が洒落でない如く、簡約それ自身が洒落の技巧でない。洒落の簡潔さは一種獨特のものだ。Lippes も洒落の簡潔さに就いて詳しく論じて居るが、洒落の簡潔さは洒落の句の中に第二の句の痕跡を遺す事が大切であつて、此第二句の代償となる言葉を造りあげる事によつて洒落が出来上るのだと云ふ事を私は研究し且つ證明したと信じて居る。

洒落の面白さは壓縮過程を逆に還元して見て、その内容の割にいかにも言葉がうまく簡約されて居ると云ふ點にもある。此點が吾々の興味を甚だしく引く點であるが、此事は今迄あまり顧られなかつた。私達はこの事なくしては洒落の價值、洒落の齎す喜びが生れ出ようとは思はれないのだ。



私が此處で述べた洒落の技巧と似た現象が他の精神現象界に見られるだらうか。これは確かに唯一のもので意味深長なものだ。私は千九百年に「夢判斷」を著して夢の不可思議を説明して、夢が正常の精神作用から誘導されたものであるのを主張した。其際私は屢々不思議に感ぜられる夢の顯在内容 (Manifester Trauminhalt) とそれを導き出す潜在思考 (Latenter Traumgedanken) とを比較對照して、夢の潜在思考がどう云ふ過程で夢を生むか、又それを變形させるために働く精神作用などに就いて熱心に研究する機會を得た。此變形の全過程を私は夢の作業 (Traumarbeit) と名付けた。此作業の一部として私は壓縮過程 (Verdichtungsvorgang) を述べて置いた。その壓縮の過程は簡約する事、同種の意味の字を作製する洒落の技巧である壓縮過程と非常に似よつて居る。誰でも夢に現れて來る物や人が混合された物や人である事を思ひ出すだらう。夢の中で造り出された言葉は *Auto dikasker = autodiktat + Lasker* の様に分析する事が出来る。又時としては夢の壓縮作業が混合物を作りあげずに、一人の人物又は一つの事物と違はぬ形象を造りあげる事もある。勿論何かの原因でこれに一寸したものが追加されたり又は幾分の修正を被る事はあるものだが、そして此場合はN氏の洒落の場合と同じ變形である。私達は洒落の技巧と夢の作業とが非常に近似なものである點に大きな興味を持つ事が出来、又夢と洒落とを比較して洒落の本質の釋明に成功する



事に多大の期待をつなぐ事が出来よう。

然し私達は洒落の技巧を唯僅かの例によつて學んだだけであるから、此相似が何處迄續くものかを知る事は出来ない。だから又洒落の技巧に話をもどす事にして、今は夢と洒落との比較研究に一本の釣絲を垂れて置くだけにしよう。いづれその絲に何かひつかゝる事もあらう。

X X X

次に私は、洒落はどんな洒落でも、きつと壓縮と代償語の作製の過程を、證明されるものかどうかを研究しよう。つまり其過程が洒落の技巧に共通な性質と云つていゝかどうかである。

私は今或る特別の事情から、私の記憶に残つて居る、一つの洒落を思ひ出した。私の青年時代の  
大先生だつた或人は、いまだかつて一度も洒落を云つた事がなかつたので、私達は洒落の價值を論ずるに足りない人だと思つて居た。ところが此先生が或日研究室でこゝしなから、恰度自分の快活な氣分を私達に知らせようとする態度で話し出した。

「私はとてもすばらしい洒落を読んだよ。ある巴里ツ子の客間に一人の青年が案内されてはひつて來た。その青年はあの偉大な ジェー・ヂェー・ル・ソー J. J. Rousseau の親戚であると思えて同じ姓だつた。彼の毛は赤かつた。彼の舉動が餘り不思議だつたので、其家の夫人は、案内した夫に向つて、批評の表情で話



した。„Vous m'avez fait connaître un jeune homme roux et sot, mais non pas un Rousseau”  
 (あなたは私に赤毛のおろかな青年を御紹介下さつたのですね。だけどルーソーさんではない)  
 (譯註、佛語では roux et sot をルエソウと讀む) 教授はかう云つて又改めて笑つた。

これは大家の語彙では語音による洒落 (Klangwitz) で實際最低級のものだ。この例はあの有名な Abraham a Santa Clara が寫し出した Wallenstein 宿泊所の Kapuzinade (カプチン派の僧侶の諧謔百出の懲戒説教) の様なものだ。

„Lässt sie nennen den Wallenstein, ja freilich ist er uns allen ein Stein des Anstoßes und Ärgernisses.”

かう云ふ洒落の技巧は一體何であらうか。この場合は省略も短縮も一向に示されて居ない。第一の例では夫人の考へを知り得るためのすべての言葉が夫人の口から云はれて居る。「あなたは Rousseau の親戚だと云つて、同じ様な天才でもある様に私に氣を引かせましたが、この人は唯赤毛のおろかな人に過ぎないではありませんか。」私は少し言葉を附け加へたが、それでも尙此説明は洒落をぶちこはしはしなかつた。この洒落が、

Rousseau  
roux et sot

と云ふ同じ響を持つて居るからだ。それ故此洒落の出来るためには代償語作製によ



る短縮が無關係であることが證明された。それならば何なのだらう。

私は茲で Rousseau と云ふ字が他の名前で置換へられても尙洒落が成立するかどうかを検べて見る。例へば Racine と云ふ名前を代りに持つて來たとすると、此奥さんは前と同じ批評は一向洒落の痕跡さへもなくなつてしまふだらう。

かう云ふ風に此洒落を研究して來ると、此場合の洒落の技巧は書式 (Formulierung) で左右されて居るのを知る事が出来る。私はこれを次の様に説明する。此洒落の技巧は一つの言葉即ち姓を二度使用する、即ち一度はそれを全體として用ひ、二度目には綴字の謎 (Scharade) の様に其綴に分解して用ひる事にある。

私は茲に同じ技巧を用ひた二三の例をあげて見よう。かう云ふ一つの言葉を二度使用する方法の洒落の技巧で、ある伊太利の貴婦人がナポレオン第一世の失禮な言葉に對して復讐した事がある。ナポレオンが彼女に宮中舞踏會の時、彼女の國民に就いて „Tutti gli Italian danzano si male” (イタリー人はダンスが下手だ) と語つた。彼女は當意即妙に „Non tutti, ma buona parte” (みんなちやない、だが大部分は) (譯註、ナポレオンはナポレオン・ボナパルトだ) と答へた。

又ある時ベルリンで Antigone が上演された時、ちつとも古典味がないと云ふ評判が立つた。べ



ルリン人は此評判をたちまち洒落にした。“Antik? oh, nee!” (古典味? そんなものはちつとも)

刀圭界の方にも、同じ様な言葉の分解による洒落がある。若し若い患者に、手淫の経験があるかと質問すると、きつと“Oh, na, nee.” (いえ、決して)と云ふ答をきくであらう。(Onanie は Masturbation 手淫だ)

以上三つの例は、みな同一な洒落の技巧が使用されて居る。一度はそのまゝとして用ひられ、二度目には其綴に分解され然も別な意味が與へられて居る。此種の方法が壓縮と違つた洒落の技巧の第一例なのだ。

私達はかう云ふ例には數限りなく出會ふが、かう云ふ例からの新しい研究によれば、この技巧は材料に殆んど制限がないのがすぐに氣づかれる。即ち一つの文章中にある一つの言葉、又は一つの言葉から得られる成分は一寸考へられない程、いろいろな方法で使用出来るものだが、然しこの多くの場合がいつも洒落の技術として用ひられるものだらうか。さうなのだ、その一例が次に出て来る。

先づ一つの言葉の成分があればそれを順々に變化する。變化が少なければ少ない程、洒落として



の印象は強いのだ。又一つの言葉が色々の事を意味すれば、ます／＼洒落の技巧と云ふ點から見て都合がいゝ。

デー・シムツツヒヤ  
D. Spitzer

(Wiener Spaziergänge II. Bd.) の例だが「或る夫婦は大名暮しをして居る。或人は夫は Viel verdient und sich dabei etwas zurückgelegt haben (金廻しはうまい、大分貯めても居る)と云ふと他の人は細君の方は etwas zurückgelegt und dabei verdient haben. (貯めもするが、金廻しもうまいものさ)と云つた。まあ何と云ふすばらしい洒落だらう。然もほんの少しの言葉 Viel verdient; sich etwas zurückgelegt だけからなりたつて居る。要するにこれは二つの熟語を單に位置を置き換へただけだ。それで夫と妻との噂を別々に云つて居る。

洒落の技巧としてはまだ／＼範圍は廣いもので、同じ材料を色々な風に使用出来る。洒落を含む單語、又は熟語を、一度はそのまゝ用ひ、二度目にはそれは幾分かも知つて使ふ事も出来る。

例へばN氏の一つの例があるが、N氏はユダヤ生れの或紳士が、ユダヤ人の顔の醜惡な事を説くのを聞いて、かう云つた事がある。「宮中顧問官よ、あなたが Antisemitis mus (ユダヤ生れ) であるのは知つて居ましたが、Antisemitis mus (ユダヤ人排斥家) でいらつしやるのは、今初めて知りました。」(譯註、官邸から大官が被告として引致された時、官邸の門衛が口をきはめて大臣をのゝしつた



のを聞いた小生「君は官邸の門衛だと知つて居たが奸智の門衛だとは知らなかつたよ」

此例では餘程注意して發音しなければ氣づかない程の變化……たつた一字がもちつてあるばかりだ。この洒落は先に述べたN氏の洒落に似ては居るが、短縮がない點がちがつて居る。洒落と云ふものは云ひたいと思ふだけの事を、言葉の中に全部含ませて置かなくてはならない。「私はあなたがユダヤ生れだと云ふことは知つて居る。だからあなたがユダヤ人の惡口を云ふのは實に不思議だ。」これだけが此洒落には含まれて居る。

かう云ふもちつた洒落には有名な科白がある。

Tradu thore—Tradi tore !

(譯註、忠臣藏がかゝつた時、おかるの役の役者がなかつたので、おかる勘平の段がとばされて居た。忠臣藏——中心ガラ——)

かう云ふ様な全く同一の言葉とも云つてよい程似て居る言葉を翻譯する事はとても出来ない。かう云ふ洒落の言葉のもちり方は色々あるが、夫々みんなちがつたもちり方をして居るものだ。

法律の試験の時の洒落がある。志望者は *Corpus juris* の處を翻譯する事になつた。„*Labeo ait*“……„*Ich fall*“ (私が落ちる)と志願者が譯すと、試験官が言下に *Sie fallen, sage ich* (君は落ち



る、と僕が云ふよ」と云つて、それで試験はおじやんになつてしまつた。法律の大家の名前を單語と考ひ違ひをする様ぢやなんとも困りものだ。此洒落の技巧は、受験者の無智を表白した言葉を、そのまゝ試験官が懲罰に利用してしまつたのだ。この洒落は實に當意即妙で、別に洒落の技巧の説明を要しない。(譯註 „Jabes” は「落下」 „aio” は「云ふ」のラテン字)

言葉と云ふものは、元來すべての事の根本となる有形の材料だから、ある使ひ方をすれば言葉は本來の意味を失つてしまふし、又或使ひ方では初めて其意味が復活する様な言葉もある、*Trichten*<sup>ツヒテン</sup> *beis*<sup>ベイス</sup> の洒落は、此關係を明瞭に示すもので、意味のなくなつてしまつた文字に又意味を持たして居る。盲が甞に „Wie geht's?” (譯註、直譯すれば、いかに行くか、だが、御機嫌は? の事だ) と聞くと、甞は „Wie sie sehen” (ゝらんの通り) と盲に答へてしまつた。(譯註、こんな例は日本語でも出来る。蟬に向つて盲が借金催促に行つた。「おい、今日こそはす事はならねえ、いつもの科白もどきで、そりや聞えませんが、などゝは云はせねえぞ。」とおどかすと、蟬はせゝら笑つて「さう云はれたつて、無い袖はふり様がない、鍋釜も賣りはらつてる仕儀ぢやねえか、目の見えねえにも程がある。」で幕)

29  
獨逸語には一つの字で、その字の本來の意味がなくなつてしまつて、意味のない綴として他の言葉にくつついて居る事がある。勿論本來の意味のある時も又本來の意味を失つた時も同じに發音さ



れる。此或字が意味があつてもなくとも同じに響く事は、しば／＼出會ふ事で、この關係は洒落に利用出来る。Schreiermacher シュライマハマン はこの様な技巧の適例を示した。

Eifersucht ist eine Leidenschaft,

die mit Eifer sucht, was Leiden schaft.

(譯註、これは譯したならば面白くない。聲を立てゝ讀まなくてはいけない。嫉妬は腹の立つ事をあせつて探す感情だ。と云ふ意味である。日本語ならば、焼餅を焼く間に餅がやけちまひ、とでも云へるか)

これは洒落と云ふ程ピンと來ないが洒落に近い。この場合、今迄の洒落の分析にやつた様に分解研究をして見ても、洒落の特徴と云ふべき人をまごつかせる所も落ちもない。此本文に現れて居る思想は、どつちみち嫉妬の定義を十分に表現して居ないから、大した價值はない。「無意義中の有意義」や「かくされて居る意味」や「人をまごつかせてそして落ちをつける事」などは此例では問題にならない。此文句を讀みながら、何程思ひめぐらして見ても、此文章中の文字そのものゝ表現する意味と、此文章全體が表現しようとして居る意味とを區別判定する事は到底出来ない。然も短縮もないのである。本文からは寧ろ「迂遠」と云ふ印象さへうける。然し洒落ではある。その獨特のいゝ性質は同じ言葉をいろんな風に使ひ分けた處にある。それがあつてこそ初めて洒落になつて居



るのだ。

それでは此洒落は洒落のどの部類に入れたならいいのか。一つの言葉を一度は全體として用ひ、二度目には分解して用ひる部類——Rousseau; Antigone の様な——に入れるべきか、それとも一つの言葉の意味のある部分と、ない部分とを色々に組合せる部類に入れたならいいのか。

だが洒落にはその技巧としてもう一つ価値のあるものがあるのだ。それは今度初めて説くものだが、統一と云ふ方法なのだ。即ち嫉妬を説く言葉が Eifersucht と云ふ字に統一されたのだ。此統一が洒落の一つの技巧なのだ。

同一の言葉を種々に使ひ分ける方法のうち、尙他の方法があるかと探して見ると、今度出會ふのは、Doppelsinn (重複意)で、これが Wortspiel (ひっかけ言葉)だ。これは洒落の技巧としては既に周知のもので、且その価値も認められて居る。

だが私は一體何のために、薄つぺらな洒落の研究から新しく何物かを引き出さうとして浮身をやつして居るのだらう。實は私は言語による表現と云ふものを、特別な見地から重要視して居るのだ。今迄大家の手で、洒落の氣隨氣儘な性質として指摘されたものを、私は言葉の種々な使用法として批判したのである。



種々な使用法の第三類に入れるべき *Doppelsinn* は更に細別する事が出来るが、此細別は、第三類と第二類(譯註、話はこんがらかつて來たが、後段これの細別表があるから、安心して讀み續けられて差支ない)が、はつきり區別されない様に、これも又根本的には區別出來ない。

(A)、人の名と物の名とが重つた時。これの一例は „*Drück dich aus unserer Gesellschaft ab, Pistol!*”(譯註、ピストル君、僕等の仲間から出て呉れ! と云ふ事と *abdrücken* は引金を引くの意味もあるから洒落になる。ピストル、おれたち以外を打つてくれよ。の意味が出て来る) 又永年縁談を待ちきつて居る大勢の若い美人を知つて居る洒落のうまいキーン人が、„*Mehr Hof als Freieung*”(自由よりも愛を)と云つた。ところが *Hof* も *Freieung* も向ひあつたキーンの廣場の名前なのだ。Heine が云つた。「このハンプルグはあの卑しき *Macheth* が支配しない代りに *Banko* (譯註、ハンプルグ市發行の小型紙幣の事だが *Banko* がもぢつてある) が支配して居る。本來の名がそのまゝ用ひられないから、少しもぢつて、重複意をもたせて居るのだ。「何故フランス人は *Lohengrin* を還付したのか」と云ふ謎が戰勝の時に出來た。 *Elsás* (*Ersatz* 代償) のために、と謎がとかれる。(譯註、*Lohengrin* と *Elsás* とはラインランドの二州で獨乙と佛蘭西とは戰の度に此二州をとられたり取つたりして居る。日本語なら、山梨縣の蠶業家が毎年長野縣から蠶種を買つて居る。何故だときくと「品にやまなしだから」



と答へた、と云つた工合だ。」

(B)、一つの言葉が物質的と抽象的に二重の意味を持つてゐる場合

これは洒落の技巧として、なか／＼深い味があるものだ。その例、頓才があるので知られて居るある醫者が、詩人の Arthur Schenitzler にかう云つた。

君が大詩人になつたのは當然だよ。君のお父さんは存命中からあの時代の人をいまして居たのだから。(譯註、Den Spiegel vorhalten と云ふ字が使つてある。直譯すれば、鏡を目の前に持つ、となるが、いましてと云ふ熟字だ。)「詩人の父は有名の醫學博士の Dr. Schenitzler といつても手に喉頭鏡を持つて居たのだつた。Hamplet の有名な科白によると芝居の目的……つまりその芝居をかく詩人の目的は、次の事を知らしめるにある。「自然も又鏡を持つて居る。徳にはその姿を見させ、恥にも又自身の顔を見させ、又世紀には世紀の、時には時の姿を見させる。」

(C)、本來重複意のあるものは、最も應用の廣いもので理想的なものだ。

此場合には言葉に對してどんな力も加へられず、又分解もされず、もぢられもしない。固有名詞として文中にある字を他の意味にかへるにも及ばない。その文字のまゝ、又その文章そのまゝで役に立つ。その言葉が元來二重の意味を持つて居るお蔭である。この例はあり餘る程ある。



K. Fischer の記した所を見ると、ナポレオン第三世の第一の施政の一つは、有名なオルレアン市の財貨の没収であつた。その時に面白い落首があつた。

C'est le premier vol de l'aigle. „vol” は飛躍の意味と掠奪との二つ語意がある。(譯註、これが鷲の最初の vol だと云ふ事をこの佛文は意味する。)

ルードキツヒ第十五世は、才能があると云ふ點で評判になつてゐるあの家臣の、洒落をためして見ようと思つて、ある機會に、王自身の、つまり王を *Sujet* (主題) とした洒落を云つて見よと命じた。家臣はその命令に對して、實にうまい洒落で返事した。

*Le roi n'est pas sujet.*

(王様は決して *sujet* にはなりません)

*Sujet* と云ふ字は主題と云ふ意味の外に家臣と云ふ意味があるのだ。

ある醫者が夫人の病床をはなれて、彼に就いて來る彼女の夫に頭をふりながら、かう云つたものだ。

*Die Frau gefällt mir nicht; mir gefällt lange nicht; beillt sich dieser zu zustimmen.*

(譯註、この文句は當然二つの意味がある。一つは、奥さんはどうも思はしくありません、前から思はしく



ないと思つて居ました。どうかさう御承知を願ひます、と云ふ意味で、も一つは奥さんは私の氣に入らないんです。前からいやでした。どうか誤解下さらぬ様に、と云ふ意味だ)

勿論醫者は夫人の病狀について云つたのだが、患者に就いての心配を云ふのに „Mir gefällt nicht” と云ふ様な言葉を使つたので、夫は今迄患者と醫者が仲好くて今になつて氣に入らなくなつて、愛がさめでもした確證を握れた様に考へた。

Heine がある諷示的な喜劇を批評した。「この諷示も、もう少し著者がかみしめて (beissen かむと云ふ動詞) かゝれば、これ程辛辣 (bissig beissen と云ふ動詞から出た形容詞) でもなかつたらうに。此の洒落は共通な二重の意味を持つて居る適例だ。

Heymans や Lipps の様な大家が、Wortspiel (ひっかけ言葉) として多くのいゝ例をあつめて居るが、それでは却つて複雑になつてしまつた様な氣がする。最近に私は今迄あんまり引合に出されなかつた洒落を集めたものを見て、其表現と意味とを理解する事が出来た。Saphir はある時 Rothschild と一緒にあるきながら眞面目に話しあつて居た。

「やう、ロートシルド君、僕の金庫は心細くなつて來たよ。百ヅカーテンばかり貸して呉れないか。」「え? そいつは僕には重荷だよ、君が一つ洒落を云つたら貸してやるとしようか。」「そいつ



は僕にも重荷だよ」「まあいや、ぢあ明日の朝、僕の事務所へ來給へ。」

Saphir は翌日ちゃんと約束の時間にでかけて行つた。「あつ」と Rothschild は彼を見て云つた。

„Sie kommen um Ihre 100 Dukaten“ (君は百ヅカーテンが欲しくて來たね。」「いや!」と Saphir は聲をかけてから云つた。„Sie kommen um 100 Dukaten“ (君は百ヅカーテンを取られつばなしだよ。)まさか約束以上の別な百ヅカーテンを君が拂はなくてはならないとは、今の今迄思はなかつたね。」(譯註、原文を見る方がよく分る。昨日洒落る事は問題外にして貸す約束をしたのだ。所が um etwas kommen は或ものを得るために來るの意と、或ものを失ふの兩意があるので、すつかり洒落になつてしまつたので合計二百ヅカーテンの出入になるのだ。)

あの外國人が生粹のベルリン子に廣場に立つてる記念像と向ひあつて尋ねた。„Was stellen diese Statuen vor?“ (譯註、此銅像は何を意味してるんですか、の意味と、何を此銅像は陳列(前にさらす)して居るんですかの意味とがある。旅人は勿論前の方の問を發したのだ。)きかれた男は「え? そいつは左足か右足ですよ。」と答へてしまつた。

Heine は Halz の旅に居た。「今となつても私はすつかりの學生の名は覚えて居なかつた。もつとも教授のうちにだつて全く名もない先生方があるんだからな。」



Professor と云ふ字の有名な洒落をこれに附け足すと、恐らく Heine の洒落の鑑別診斷が出来るだらう。„Der Unterschied zwischen ordentlichen und ausserordentlichen Professoren besteht darin, dass die ordentlichen nichts ausserordentliches und die ausserordentlichen nichts ordentliches leisten“ (譯註) これは譯してはつまらなくなるが、兩様の意味がある。教授と助教授の違いは、教授は見榮のしない仕事は決してやらないが、助教授は見榮のする事はちつともしない點にある、と云ふのが一つの意味で、もう一つは、教授は副席的の事はしないし、助教授は正席的の事はやらない。の意味だ。)これは確かに „Ordentlich“ と „Ausserordentlich“ (ordentlich 以外) との字が二つの意味がある點から出發した言葉の遊びに相違ない。„Ausser der Ordo“ は一方けたをはづれた、の意味があり、他方には忠實なとか優秀なとか云ふ意味がある。然し此洒落がいかにも統一されて居る事は、前のハイネの例などゝ比較して、重複意だと云つて置くよりは、寧ろ一つの字を色々に使ひ分けたものだと云ふ方が適して居る。此文章では „Ordentlich“ と云ふ字をそのまゝ使ふのみならず、逆に否定の形に迄應用を波及させて居る。とにかく一つの考を文章に現すのに、實に巧みな藝が行はれたのだ。即ち二つの相對的の考を否定の形をも一緒に錯雜させて、韻をうまくふませながら、十分な記述をなし遂げて居る。かうして統一性の見解が確保されるし、吾々が期待したよ



り以上の密接な關係を言葉の構成分子の夫々の間に探し出す事も出来たのだ。

Heine がハルツ旅物語でかう云つて居る。「Sch. 巡査は私を同僚扱ひにして居る。尤も彼も文士なのだ。半年毎に彼の出す著書にいつも私の事を必ず書いて居る。何遍彼は私を zitieren (譯註、第一意、文章を引用する。第二意、召喚する) したらうか。若し私が不在の時には、彼は Zitrat (譯註、第一意、引用文。第二意召喚狀) を私の室の戸に白墨でかきつけて行く程親切だ。」

Wien の散歩者を書いた Daniel Spitzer <sup>ダニエル・シュピッツァー</sup> は佛獨戰爭後に目立つた社會相を簡潔な頓智のある又傳記風な云ひ現し方をして居る。

Eiserne Stirn—Eiserne Kasse—Eiserne Krone.

(譯註、鐵面皮——鐵の金庫——鐵の勳章。と云ふ字で圖々しい奴が金も出来、華族にもなるの意)

皆 Eisen と云ふ字に統一されて居る、此の様な然もあまり目立つて對立しない „eisern“ と云ふ形容詞は多方面の應用を可能にした。

ひっかけ言葉は、重複意の技巧中、更に細別すべき種類を提供する。先に云つた頓智のある醫者が、Dreyfushandel の時に洒落のめした、「此の小娘は Dreyfus を思ひ出させる。軍隊も彼の Unschuld (無罪。性的の無邪氣) を信じないだらう。」unschuld は普通犯罪のないと云ふ意味だ



が、しばしば性的知識のないと云ふ意味にも用ひられる。此種の重複意の例は澤山あるが、大抵の場合、性的の意味が取扱はれて居る。此種のことを *Zweideutigkeit* (曖昧味) として置かう。

此種の例中秀逸なのは先に云つた「ある人の話では、夫は金廻しもうまい」<sup>1</sup> したためても居るらしい。又他の人の話では、細君はためても居るし又金廻しもうまい」と云ふ例だ。

然しこの曖昧味を持つ重複意の技術と他のものとを比較すれば、すぐに區別はつくが、その區別は洒落の技巧の方から云ふと僅かのものだ。

„Unschuld“ の例では、一つの意味とも一つの意味とが同じ程度によく理解される。性的の意味と、さうでない意味とのどちらの方が私達にピンと来るかを區別する事は出来なう。D. Spitzer の例では、„*Sich etwas zurückgelegt*“ と云ふ言葉の平凡な意味の外に、尙性的な意味がかくされて居る。これは無邪氣の人には分らない事だ。(譯註、譯者は無邪氣なので此句に含まれて居ると云ふ性的の意味が分らない。さう云はれると臆測がつかないでもない。亭主は細君につくすが、まだ餘力があるんだ。女房はかくし事があるんだが、それでなか／＼亭主の機嫌はとつてゐるんだ。と云ふ様な事ではあるまいか。) もつと重複意の例を具體的にあげて見よう。これは明瞭に性的の意味を現して居る。Heine はある浮氣な奥さんの性的抽寫をかう書いて居る。„*Sie konnte nichts abschlagen ausser ihr*



Wasser.“ (小便 Wasser abschlagen) は小便するの意味だから、あの女は小便する事しか出来なかつたのだ。と云ふ事になる。いやはや——)これはまるで猥談で洒落の印象など殆んどない。

これ等の例では、重複意の一つの意味は、慣用されるもので、それでも一つの意味は文章の連絡からもなか／＼分らなくて、然も性的の意味が實はかくされて居る點が特徴だ。かう云ふ場合を私は Doppelsinn mit Anspielung (諷示を持つ重複意)と名付けたい。

× × ×

吾々は今迄餘り澤山な種類の洒落の技巧を學んだから、それを統計的にする事が出来ないおそれがある。だから此處でそれを整頓して置かう。

# 一、壓縮 (Die Verdichtung)

(イ) 混合語の作製によるもの (mit Mischwortbildung)

(ロ) 言葉の變形によるもの (mit Modifikation)

## 二、同一材料の使用 (Die Verwendung des nämlichen Materials)

(ハ) 全體として、次に一部を使用するもの (Ganzes und Teile)

(ニ) 順序の變更 (Unordnung)



(ホ) 輕微なる變形 (leichte Modifikation)

(ヘ) 同一語を有意味と無意味とに使ひ分けて (dieselben Worte voll und leer)

### 三、重複意 (Doppelsinn)

(ト) 固有名詞と物質的意味あるもの (Name und Sachbedeutung)

(チ) 抽象的と物質的の兩意あるもの (Metaphorische und sachliche Bedeutung)

(リ) 本來の重複意、即ちひっかけ言葉 (eigentlicher Doppelsinn. Wortspiel)

(ヌ) 曖昧味 (zweideutigkeit)

(ル) 諷示を持つ重複意 (Doppelsinn mit Anspielung)

右に表示した様に多くの種類があるから混亂に陥り易い。その混亂のために洒落の技巧の研究は誠に煩しくなるし、又技巧の研究などは却つて洒落の本態には餘計な出過ぎ事の様になぜか推されもする。然し技巧を重んじ過ぎると云ふ邪推に對しては疑ふ餘地のない次の事實が雄辯に答へてくれるだらう。

「若し思考を表現する時に所謂洒落の技巧の適用がなかつたならば、洒落は絶対に成立しない！」  
今茲で此複雑さを統一するものを探す事にしよう。きつと此色々の技術は統一出来るに違ひな



い。前にも云つた通り第二群と第三群を一つにひつくるめる事は困難ではない。重複意、ひつかけ言葉は二つとも同一の材料を二度使つた場合の理想的なものであり、ひつかけ言葉は特にさうだ。同じ材料を分解したり、又順列を變へた例や、極く僅かの變形を加へた多方面の應用例などは、容易に重複意の範圍におしこめる事が出来る。

然し第一群の技巧、即ち代償語の作製の短縮と、第二群第三群との間には、どんな一致點があるだらう。私は簡單明瞭だと思ふ。同じ材料を使ふと云ふ事は、短縮の特殊な場合だと思はれる。ひつかけ言葉は代償語を持たない短縮に過ぎない。即ち短縮と云ふ事がいつも存在して居る。要するに簡潔にし、又正しく省略する傾向が、すべての技術を生むのだ。

各々の例に就いて節約と云ふ事を研究して見よう。“C'est le premier vol de l'aigle.”この例では飛翔でもあつたし又掠奪逃走でもあつた。“Vol”と云ふ字は洒落には都合よく飛翔と掠奪との二つの意味があつたのだ。其處には短縮も節約もないではないか？ 確かに第二の考を代表する何物もなう。“Vol”と云ふ字の重複意は、そんな代償語は必要としないのだ。即ち次の様に云ふのが本當だ。“Vol”と云ふ言葉は、云ひ出されなかつた第二の意味のすべてが含まれて居るので、第一の文章に附加したり又はそれを變化したりする必要がなかつたのだ。此點こそ重複意の申分ない所



だ。

„Eiserne Stim—Eiserne Kasse—Eiserne Krone” 何と云ふ極端な省略で思考が表現されて居るのだらう。若し „eisern” と云ふ字が探し出せなかつたとしたならば、一體どうなつたらう。恐らく „Mit der nötigen Frechheit und Gewissenlosigkeit ist es nicht schwer, ein grosses Vermögen zu erwerben, und zur Belohnung für solche Verdienste bleibt natürlich der Adel nicht aus.” (圖々しさと無良心さへあれば、巨萬の富も握れるし、巨萬の富を持てば、その手柄できつと貴族にもなれるものだ。)と云ふ永々しい文句を書かなくてはならなかつたらう。

云ふ迄もなく此例では壓縮即ち節約がはつきり分る。どんな洒落でも此事は證明されるべきだ。

„Rousseau—roux et sot” „Antigone—antik ? O-nee” では何處に省略があるか。之等の洒落では今迄短縮が見つからなかつたから、同じ材料を色々に用ひる技巧の部に入れて置いたのだつたが、どうもこの場合は短縮ではきりぬけられさうもない。然しそれをもつと廣い意味の節約と云ふ事と置き換へて見れば、それ程むつかしくはならない。„Rousseau” „Antigone” の例で節約されたものを指示するのは容易だ。即ち批判したり、判斷したりするのを節約したのだ。それが固有名詞の中に含まれて居るからだ。„Leidenschaft” „Eifersucht” の例では廻り遠い方法で定義をつけるのを



やめて、唯 „Leidenschaft, Eifersucht—Leiden schaft, Eifer sucht” と云ふ字に助詞をつけただけで、定義が完全になつたのだ。Saphir の例では素晴らしい節約がある。„Sie kommen um Ihre 100 Dukaten” と云ふ問の文句だけで、答の文句は全く節約されて、話しかけた人の文句がその答を十分に表してしまつたのだ。これは珍らしい事だ、然も確かに洒落だ。問を答にする事、即ち一つの言葉を種々に應用する方法は、確かに節約だ。Hamlet<sup>ハムレット</sup> が父の死に繼いで母の婚禮が行はれるのを豫知して云つた言葉が参考になるだらう。

„Das Gebackene

Vom Leichenschmaus gab kalte Hochzeitsschüsseln”

(譯註、婚禮の焼餅が葬禮でさめると云つた様な意味)

洒落の技巧の共通性はしばらくお預けにして、此處では「節約の目的」が存在する事を承認して、論歩を進行させよう。一體節約と云ふ事は何處から起つて来るのか。節約にはどう云ふ意義があるか。何故節約があると、洒落の面白さが出て来るのか。私は當然起つて来るべき之等の疑問を掲げて、その答を傾聴しよう。

あらゆる洒落の技巧に、言葉の省略の傾向があるからと云つて、その逆は必ずしも眞ではなく、



言葉の省略、文章の短縮が必ずしも洒落ではない。私は先にかう云ふ見地に一度立つた事があつた。その際に既にすべての洒落に短縮過程を證明しようとして努力したが、簡潔は必ずしも洒落でないと云ふ正當な注意を喚起して置いた。確かにある特殊の短縮と節約とがあつて、其處から洒落の洒落らしさは出て来るのだ。だから此特殊性を知り得ない限りは、洒落の技巧の特徴を發見したつても、まだ吾々の問題は未解決のまゝである。洒落の技巧の節約と云ふものは、それだけでは私達を感服させるものでないのを、私は告白したい。この節約は恐らくは、主婦が少しでも廉い野菜を買ふために、遠い市場迄、金と時とを費して出かける場合の節約見たいなものだらう。

45  
洒落は其技巧によつて何を節約するのか。即ちどんな事でも、やす／＼と現す事の出来る新しい文章を組立てゝ、不要のものを節約するのだ。その代りに、二重の意味を表す言葉なり文章なりを採し出す苦勞をしなければならぬ。時々普通あまり使ひ慣れて居ない形を造つて、第二の考と一緒に思はせる根據にしなければならぬ。二つの考をかう云ふ方法で表す事にすれば、それは前にのべた様に、却つて複雑になつて、思つたよりも省略が困難になり、且又あまり簡潔でもなくなるのではなからうか。又表現の一致が缺けるのではなからうか。言葉が省略されて居るために、それを理解する時、無駄な精神力が使はれて却つて無駄が多くなりはいまいか。そしてかうなつては



一體何が節約された事になるのだらう。又どんな効果があるのだらう。

だが私はこれ等の疑問を提出したゞけで、しばらく此問題から回避してゐよう。一體私達はまだ全部の洒落の技巧を學んだのではないのだ、まだ新しい例をあつめて分析を行ふべきなのだ。

×

×

×

私達は最も数の多い例のある洒落の一部類の事を考へて居なかつた。いや考へて居たにしても、それを輕蔑して居たのだ。それは一般に „Kalauer (Calenbours)“ 地口とか駄洒落とか云はれて居る、言葉の洒落のうちでも最も低級な變種で、恐らく安つばい故であらうか、わけなく出来るものである。(譯註、なんと日本と云ふ國にこの種の才能のあるものが多い事よ。) 實際本質的な Wortspiel (ひっかけ言葉) は高級な技巧を要するが、地口では技巧など不用だ。本質的の Wortspiel は二様の意味を一つの言葉、つまりたつた一度口にした言葉に含ませなくてはならないのに、地口では二つの言葉の綴が似て居ても、或は韻の様な同じ響を持つて居ても、或は又同じ綴が一部共通であっても、ちつとでも似た所さへあればそれでいいのだ。

かう云ふ Klangwitz (ひびきの洒落)……あまり適切な名稱ではない……は Wallenstein に屯して居るカプチン派の坊主共の説教のうちには山程もある。



„Kummert sich mehr um Krug als den Krieg.”

(戦よりビールコップを氣にかける——戦争よりも勳章)

„Wetzt lieber den Schnabel als den Schnabel.”

(劔よりもペン先ばかりみなくなり——武人より文人ばかり多くなり)

„Rhein strom ist geworden zu einem Peinstrom.”

(ライン河悲しい河にいつかなり——濟南が災難になる時世なり)

„Die Klöster sind ausgenommene Nester.”

(僧院は卵とられた巢の騒ぎ——淺草寺六區に行けば戦争寺)

(譯註、原文にはまだ例があるが、あまりくだらないから略した。譯文の後句は譯者の道樂と知られたし)

此種の洒落は好んで母音を變へる。皇帝嫌ひの伊太利詩人が、獨逸皇帝から六脚韻の詩を詠めと命ぜられた。その時の事を Hevesi が書いて居る。

„Da er die Cäsaren nicht auszurotten, merzt er wenigstnes die Cäsuren aus.”

(王様——Cäsaren——は征伐出来ないから、せめては句讀點——Cäsuren——でも征伐する)

地口の例を澤山あげると、地口の定義が分る事になるが、又別の興味が出て來ると思ふ。だから



Heine の造りあげた惡例を示さう。「彼は印度の王子になりきつて振舞つて居た。後で自分の正體を女友達に白狀した。奥さん達、私はあなた方をだましたんです。私は昨日のおひるに食べた Kalku tenbraten (カルカツタ風の焼鳥) と同じにカルカツタに居た事はありませんよ。」

此洒落は此二つの言葉が似て居るところでなく、全く同意味の言葉である點で大失敗だ。彼が食べた焼鳥は、カルカツタから初まつたと云はれて居るからだ。K. Fischer は此の種の洒落を Wortspiel と嚴格に區別して居る。「駄洒落は言葉を言葉として取扱はずに發音として弄ぶから下劣な洒落だ。」かう云つて居るのだ。尙又 K. Fischer は „Famillionär; Antigone.“ の様な洒落を Klan gwis (發音による洒落) だと云つて居る。私は此點では、彼に従ふ必要を認めなう。Wortspiel では言葉は單に二つの意味を結合する音を發すればいいのだ。言語の慣用法と云ふものはなかく複雑のものだ。言語の慣用上の見地から駄洒落を輕蔑し、本來の Wortspiel を尊重するのは間違ひで、洒落そのものの價值は、技巧の點から論ぜらるべきものだ。

駄洒落を人からきいた時、十分に注意して、それがどう云ふ洒落の種類に屬するかを注意して御覽なさい。或る男が妙な才能があつて、氣分さへよければ、他人に話しかけられると、すぐに駄洒落で返事をした。此男は私の友人だが、平常は謙讓そのものの様な人だが、彼自身の科學的努力に



就いて語り出す時には、いつも自慢だら／＼にやり出す。或時彼の懇意な仲間が、彼の根氣に感心してしまつた時、彼がしやべつた。

„Ja, ich liege hier auf der Ka-Lauer.“

(譯註) Kalauer は駄洒落で Lauer は潜伏所だ。うん、僕は此處に自分のかくれ家を持つてゐるのだ。の意と、此處でいつも洒落のめしてるんだよ。との二つの意味なのだ。」かう洒落られたので、仲間が「もう降参だ」と云ふと又彼は「それなら僕を將來 „Poeta Ka-laureatus.“ (詩人、カラウレアツス) と呼ぶか、そんなら勘辨してやると云つた。„Kalauer“ も „Kalaureatus“ も短縮によつて造られた秀逸な混合語だ。

駄洒落とひつかけ言葉との別に關する議論はもう止めよう。駄洒落は新しく洒落の技巧を學ぶには別に役立つとも思はれない。駄洒落も一つの言葉を色々の意味に使ふ事だと主張したところで、その興味は同じ言葉を探す事や、發音の似た字を地口で探す事に重きがおかれてゐるのは事實だ。とは云ふものの、駄洒落も又 Wortspiel に隸屬するものゝ一小部のものである事だけは認められる。

X

X

X

然し、どの部に入れていゝのか分らない様な洒落がまだ／＼此外にある。Heine<sup>ハイン</sup>が或る晩詩人の



Soulie と巴里人の客間で雑談して居た時に、ある巴里の金持がはいつて來た。此男は金を持つて居る點だけでは Midas と肩をならべて居た。此男は自分をうやうやしく出迎へた人達をしばらく見廻して居た。それを見た Soulie は、Heine に云つた。

„Sehen Sie doch; wie dort das neunzehnte Jahrhundert das goldene Kalb anbetet.“

(君見給へよ。十九世紀が金の犢を拜んでるよ。)

Heine は早速禮拜の的をちらつと見た。そして訂正をした。

„Oh, der muss schon älter sein.“

(あいつはもつと年寄りだよ。)

此洒落の技巧は何處にあるのか。K. Fischer はひつかけ言葉だと云つて居る。金の犢と云ふ言葉は福の神とか又は偶像とかを意味するもので、第一の場合は金から出て財寶を意味し、第二の場合合は動物の像が眼目となつて、馬鹿な奴となつて居る。此言葉は金があつても智慧のない奴を遠慮なく批評する役目を持つて居る。若し Goldenes Kalb と云ふ字を使はなければ、

„Sehen Sie doch, wie die Leute den dummen Kerl umschwärmen, bloss weil er reich ist.“



「君見給へ、唯金があるだけで、あんな大馬鹿をとりまいて居るよ。」

となつてしまつて全く洒落でなくなつてしまふ。又 Heine の答も洒落でなくなるだらう、

然し私は Soulié の言葉が洒落だと云ふ點よりも、Heine の言葉の方がはるかにいゝ洒落だと云ふ事に重きを置きたい。勿論 „goldenes Kalb” と云ふ熟字はそのまゝにして置かなくてはならな

5° „Oh, der muss schon älter sein” と云ふ字を分解して見れば、„Oh das ist kein Kalb mehr, das ist schon ein ausgewachsener Ochs” (もう犢ぢやない、一人前の牛だ。)と云ふ事になる。だから Heine の洒落には金の犢は抽象的のものでなく金犢だけの人の個人そのものの形容と認めたのを省略してある。Soulié は決してかう云ふ重複意で云つたのではないとしてもだ。

何故か。私は以下の様に分析して決して Heine の洒落を破壊せず、又その本態を少しも傷けはしなかつたのを信ずる。

„Soulié sagt: sehen Sie doch, wie dort das neunzehnte Jahrhundert das goldene Kalb anbetet! Und Heine zur Antwort gibt: Oh das ist kein Kalb mehr, das ist schon ein Ochs.”

(Soulié が云ふ。一寸見給へ、あそこで十九世紀が金の犢を拜んでるよ。Heine が答へる。あれ



は君もう懐じやないぜ、一人前の牛だぜ。)

この分析した文體でも、やつぱり洒落だ。かう分析しなくては洒落の形がなくなつてしまふ。(譯註、この話は Soulié や Heine でなく二十世紀の人だと尙面白い。若しさうならば、十九世紀は舊時代だから舊時代の奴が金の懐を拜んでる事にもなり、又 Heine の返事も、舊時代の金持と云ふ惡口迄含まれてる事になつていよいよいゝ洒落になるのだが。)

此素的な洒落も技巧が複雑過ぎる事になると残念だから、此邊で此例の説明はやめにして、この洒落と密接な關係があると思はれる別の例を分析して見よう。それは風呂の洒落 (Badewitz) とでも云はうか、猶太人の入浴に對する嫌惡の情を取扱つたものだ。一體私達は洒落の例を、貴族の手紙からばかり引き出さなくともいい。私達は洒落の由來は問題にしない。唯その効果即ち吾々を笑はせ得るかどうか、又吾々の研究の興味と材料として價值があるかどうかと問題なのだ。此二つの要求から見るとこの猶太人の洒落は、誠に適切なものだ。二人の猶太人が浴場の近所で出會つた。

„Hast du genommen ein Bad?“ (君、湯に入つたか。)と一人がきくと „Wieso? Fehlt eins?“ (どうして、何かがなくなつたのか。)と反問した。

一體、洒落をきいて、吹き出して居る瞬間は、洒落の技巧を研究するには、最も都合のわるい時



だ。だから今これを分析するのは六ヶ敷い。(譯註、さて讀者諸君。著者はこんなに云ふが、此獨乙語のしやれを日本人はきいたつても、まだ吹き出しはしない。だから一つ吹き出してもらひたいものだ。競争の形で文壇へ飛び出したAとBとがあつた。Aは原稿がどん／＼賣れるが、Bは近來書けなくて苦しんで居る。そしてAの多作をBはいつもうらやんで近來はAに逢ふのも差控へて居る。今日は復興祭だからAを引っぱり出して仕事の邪魔をしてやらうと思つて、BはAを訪ねた。Bが玄關に立つと、恰度Aは外出の姿で大元氣で出て來た。おい、おれは昨夜すばらしい恥を書いたぞ。とAが云ふと、Bは、え？又か、一枚いくらだ。)それは滑稽な誤解だとは思はれる。然し此洒落の技巧は何だらう。明かに文字の重複意を利用して居るのだ。一方では *Nehmen* を意味のない助動詞として „*ein Bad nehmen*” 入浴するの意味とし、他方では意味のはつきりした動詞の「とる」と云ふことに使つて居る。即ちかう考へれば一つの文字を或は意味を持たせ、或は意味を持たせぬ場合だ。(第二群「く」) „*ein Bad genommen*” を „*gebadet*” (入浴) と云ふ一つの動詞にしてしまへば、洒落もなくなり又答も意味を失ふ。つまり洒落は „*Genommen ein Bad*” と云ふ字にひつかゝつて居る。だが、こんな事を云つて居ては見當はづれた。洒落は問の内にあるのではなく、答の „*Wieso? Fehlt eins?*” のなかに含まれて居るのだ。そして答の文句は洒落の價值を失はずに幾分の敷衍や變更が出来る。要するに第二の猶太人は „*Bad*”



と云ふ字を見落してしまつたために、誤解したのだ。

も一つ第三の例をつけ足して研究して見よう。これも猶太人の話だが、人間なら誰だつてありさうな事だ。此洒落は少し複雑で此點都合が悪い様だが、此複雑さは私達の理解の邪魔にはならない。「一人の貧乏人が、見知り越しの金持に、困つてゐる事を様々に訴へて、二十五フロリンを恵んで貰つた。其日料理屋で鮭にマヨネーズをかけて食べて居ると、恩人が運悪くやつて來た。恩人は、お前はおれから恵みをうけたくせに鮭の料理なんか注文して居る。おれに勘定をさせるつもりか、と叱つた。叱られた貧乏人は、私は旦那のおつしやる事が無理だと思ひます。金のない時には鮭にマヨネーズをかけて食べるなどは思ひもありませんし、やつとお金があると思へば、それでも鮭を食べてはならないとおつしやる。一體私はいつマヨネーズをかけた鮭が食べられるのです。」

此場合は重複意など毛頭ない。唯マヨネーズソースと鮭をくりかへしたつて洒落の技巧とは云へない。同じ言葉を同じ事を意味させて、そのまゝ使つたゞけだ。私は今は此洒落の分析をするのは困るのだ。仕方ないから私達を笑はせる一つの逸話だと云つて逃げて置く事にする。

此貧乏人の答には何か注意すべき價值がありはしないだらうか。實にうまい云ひ廻して理窟がこねてある。だが此理窟は實を云へば理窟にならない。此貧乏人は恵まれた金で美食して居るのを専



ら辯護して「いつ鮭が食べられるか」と云つた様に理窟ぜめで反問して居るが、これは正しくない。金を恵んだ人は貧乏人が美食したのを叱つたのでなく、人に恵みをうける様な分際でそんな美食を思ひ付く権利のない事を注意したのだ。此尤も千萬の注意を貧乏な道樂者は何か他の事にはき違へて、無考へに答へたのである。

此非難の意味と答の意味との見當違ひが洒落の技巧ではなからうか。さうだとすれば、此理解のくひちがひは前の二つの例にもある事になる。

*Soulié* は *Heine* に十九世紀の人々がユダヤ人が荒野でやつた様に金の犢を拜んで居るのを注意したのだが、*Heine* がその時「人間が金を拜むのはいつになつても同じだよ。」と答へられて、賛意を表すればいゝのに、*Heine* は *Soulié* の言葉の意味を全く見當違ひしてしまつて金の犢と云ふ一つの熟字の持つ二つの意味を利用せずにその一部の犢を捕へて、其處に *Soulié* の考の中心がある様に思つて「もう犢でなく大牛だよ。」とやつてしまつたのである。

風呂の洒落では此見當違ひは一層ひどいもので、一人が風呂に入つたかときいたのに、一人はお前風呂桶をとらなかつたかときかれたと思つてしまつたのだ。一體 „Genommen ein Bad.“ は見當違ひを起し易い言葉で若し „Hast du gebadet?“ ときけばそんな事は絶對にならぬ。その代り答



も洒落でなくなつて、„Gebadet? Was meinst du? Ich weiss nicht, was das ist.“ (ゲバーデツト、何を云つてゐるのだ。そんなものは知らないよ) となるだらう。(譯註、Hast du gebadet ist bad 日—入浴すると云ふ動詞——を働かせたもので、お前は湯にはひつたか、の事だがそれを特に妙に解すれば、お前はゲバーデットを持つてゐるかい、になる。)

「鮭とマヨネーズ」は最もいい例だから一度研究して見よう。改めて種々な方面から研究する必要がある。先づ今發見した技巧に名をつけよう。私は、見當違ひ (Verschiebung) と云ふ名を提出しよう。と云ふのは、その技巧の本態は、考へ方の相違であり、初めの主題を別のものに重きを置く見當違ひであるからだ。かうなると洒落のしやべり方と「見當ちがひ」の技巧との關係を研究するのが私達の義務になる。

「マヨネーズ」の例では技巧が全く言葉と關係のないもので、唯考へる「見當はづれ」であるのが明瞭だ。此洒落を云ふより外に、答の意味をはつきり分らせる代りの言葉は、見つけられない。若しその答の考を變更させて、美食家の貧乏人に、彼自身洒落で吹きとばしてしまつた非難の言葉に對して正當に答へさせる事が出来れば初めて分析が出来る。即ち、「私の食べて居るものは、食べすには居られないものなのです。何處からその金を手に入れようともそんな事は私には問題にならな



いのです。あなたは今日私に金をめぐんで下さつたのですから、私が鮭にマヨネーズをかけて食べて居る理由がお分りになるでせう。」これは一向に洒落でなく無恥な言葉だ。

此洒落を次に書く、大變意味の似通つた洒落と比較すると習ふ所が多い。一人の飲んだくれが、或町で先生をして居た。悪い癖がだん／＼知れ渡つたので學生の大部分をなくなしてしまつた。ある友人が熱心に忠告を試みて、君は禁酒さへすれば此町で堂々たる講義が出来るんだから、是非禁酒し給へ、と云つた。所が憤慨した答はかうなのだ。„Wie kommen Sie mir vor? Ich geb' Lektionen, damit ich trinken kann; soll ich das Trinken antgeben, damit ich Lektionen bekennen!" (君は僕をどう思つてるのだ、僕が講義するのは、酒をのむためだよ。講義するために酒をやめるなんて理窟があるものか。)

此洒落は、あのマヨネーズと鮭の洒落の時に経験した通り、一通り理窟が通つて様だから、見當違ひの洒落ではない。答が間にちやんと適合して居る。マヨネーズの例ではかくされて居た無恥の言葉が今度は表れて居る。「酒を飲むのがおれの目的なのだ。」

57  
此洒落の技巧は誠に貧弱なもので、説明を要しない。同じ言葉の順序を變へて云つたゞけの事で嚴格に云へば、飲む事、講ずる事、その報酬を得る事、の手段と目的の關係を逆にしたゞけた。私



は此以上この洒落を説明しまい。そして洒落でなくなしてしまつて次の様に云はう。「何と云ふ馬鹿な要求なのだ。僕には講義より飲む方が大事なんだ。講義は僕にとつては飲むための手段なのだ。」かう分解して見ると、此洒落は表現の方法にひつかゝつて居る。風呂の洒落の方は洒落は明かに文章の内容に係りを持つて居る。だから此文章を變れば、洒落でなくなつてしまふのだ。だから風呂の洒落の技巧は、複雑な重複意と見當違ひの二つが結合したものであつて、問の文句に重複意があつたので、答へる方は問者の思つたのと違ふもう一つの意味に解釋して答へたので洒落になつたのだ。だから次の様な分解が出来る。見當違ひさへ訂正すれば、重複意はあつたつても洒落でなくなす事が出来る。

„Hast du genommen ein Bad ?“ „Was soll ich genommen ?“ „Ein Bad ? Was ist das ?“

(お前は Bad をとりはしないか。何をおれがとつたつて云ふのだ、Ein Bad だつて、そりやなんだよ。)

かうなるともうこれは洒落でなくなつて、嫌味たつぷりの茶化しになつてしまふ。

Heine の「金の犢」の洒落でも、重複意が同じ様な働きをして居る。



Heine<sup>ハイン</sup>の「金の犢」の洒落でも、重複意が同様な働きをして居る。この重複意のために、問として提出された考と、少しはづれた答が造り出されたのだ。

「鮭とマヨネーズ」の洒落では、答へた人はあまり間の内容に拘泥しなかつたので、これ程ひどい見當違ひにはならなかつた。分解して見れば、Soulie<sup>スーリエ</sup>と Heine<sup>ハイン</sup>の談話は次の意味だつたらう。

「此男が金持だからつて、うちや／＼人がとりまいて居るのを見ると、僕は昔金の犢を拜んで居た人達の事をまざ／＼と目に見る様な氣がするよ。」「僕は金持だからと云つて、人が取り巻いてる事には、別にいやな氣持ちはしないんだが、あいつは金はあるつても、から馬鹿な奴だと云ふ事を君に注意したいね。」

かう云ふ様に、重複意をそのまゝ生かして置けば、見當違ひの洒落は姿をかくしてしまひさうだ。

だか同一種に入れていゝ洒落を、むづかしく分類する事に私は賛成しない。重複意が常に一つの考から他の考へはづれて行く、——つまり見當ちがひを起すものではないし、又重複意と見當ちがひとは、洒落の技巧として全く違つた二つの代表者だとは私には考へられない。重複意と見當違ひとは、無關係ではないなど云つたつて、それは洒落の技巧の分類上には、何の役にも立たない。



洒落に於ては重複意は、それをきく人に、一つの考から他の考への中間物を考へさせる様な、いろいろの意味を表し得る言葉であり、少しこちつけらしくも思はれるが、マア見當違ひと同じものにとれる。見當違ひの洒落では、考へ方それ自身に洒落の性質が含まれて居て、その考へ方に因つて次の様な見當違ひが行はれる。即ち見當違ひでは、洒落を造り出す作業の方に關係があり、それを了解する作業には關係がないのだ。今云つた此差違が分らないといけないから、やり來りの方法つまり分析試験をして、了解出来る様に、導いて行かう。

私は先に重複意と見當違ひとをあまり神経質に區別するのに、異議をはさんで置いたが、此異議の價值についてはあまり茲に論ずるのは止めて置く。がこの異議によつて洒落の作業 (Die Witzarbeit) と了解作業 (Die Verständnissarbeit) とを混同してはならない事に注意する結果を來す。此洒落の作業が私達の目下の研究題目なのだ。

さて此外にまだ見當ちがひの技巧を持つ例があるだらうか。なか／＼それは見つからない。私達の重きを置く理窟とは少し違ふ所があるが、もつて來いの例が一つある。或る博勞が買手に乗馬をすゝめて云ふには「もし此馬をおもとめになつて、朝の四時にお乗りなれば、六時半にはプレスブルグにおつきになりますよ。」「朝の六時半にプレスブルグに着いてどうするんだ。」



此例での見當違ひは誠に美事のものだ。博勞は唯馬の體力を具體的に説明するために、小さな町に朝早く着く事を云つたのだが、買手は別に馬の體力を疑ひはしなかつたが、試乗に選ばれた時間の方に重きを置いてしまつたのだ。だから此例の分解は一向めんだうでない。

次の例は其技巧は一寸見當がつかないが、重複意と見當違ひとを以てすれば解く事が出来る。猶太人の結婚媒介者の遁辭の中に述べられた洒落は、此種のもので、かう云ふものに就いては、これから度々研究しようと思つて居る。

「結婚媒介者は、求婚者に新婦の父親が „Nicht mehr am Leben ist.“ (もうさう永く生きて居ない) と斷言した。式後此父親が生きて居るところか、禁錮刑から放免される事が分つた。求婚者は仲人を非難した。仲人は „Nun, was habe ich Ihnen gesagt? Ist denn das ein Leben? (おや、私はあなたに何と云つたんですか。一體あれが——禁錮されてる事が)——生活と云へるでせうか。) と答へた。

重複意は „Leben“ と云ふ文字に含まれて居る。見當違ひは仲人が、此言葉の普通の使ひ道になつてゐる、死に對する生と云ふ意味から故意にすべらせてよく話に出て来る „Das ist kein Leben“ (あれなんか生活のうちに入らない。) の場合の „Leben“ の含む意味にしてしまつた點にある。



初め仲人が求婚者に云つた時には、この二通りの意味など全然なかつたのだが、仲人は一時のがれに第二の意味を追加したのだ。この點では此技巧は「金の犢」や「風呂の洒落」と似て居る様だ。が此仲人の場合は少し違ふ別な要素が入り込んで來て技巧を理解する上に邪魔になつて居る。かう云ふ洒落を特徴を示す (charakterisierende) 洒落だと云つていゝかと思ふ。この洒落が仲人の噓つきで圖々しい點と洒落のうまさとを一緒にして初めて説明出来るからだ。がこれは洒落の外觀上の事で、洒落の意味、即ち目的は別のものと云ひ得る。私達は此洒落の分析は暫く後廻しにする。かう云ふ複雑な、なか／＼分析のし難い例の後に、理論と完全に一致して居て、すぐに理解の出来る例を一つもち出すと、私達は満足出来るだらう。

「或る猶太の乞食が、オステンドに旅行したくて、聴き届けてもらへさうな或男爵にたのんだ。醫者が健康を恢復するためには、海水浴に限ると云つたと話した。金持は „Gut, ich will Ihnen etwas dazu geben, aber müssen Sie gerade nach Ostende gehen, dem teuersten aller Seebäder?“ (分つた。幾分恵んでやらう。だがお前は海水浴場の中で一番高いオステンドへ行かなくちゃならないのか。) と云つた。所が不服滿々の答だつた。 „Herr Baron, für meine Gesundheit ist mir nichts zu teuer.“ (閣下、健康のためならば何物も高過ぎはしません。)



確かにこれは正當な見解ではあるが、物乞ひとしては實は正當でない。此答は金持にして初めて云へるものだ。乞食は健康のために使ふ金がまるで自分の金でゝもある様に考へたのだ。つまり健康同様金も自分のものゝ様に考へたのだ。

×

×

×

改めて有益な「鮭とマヨネーズ」の例を論じよう。此例は洒落の中に理窟を云はうとする努力がひそんで居るのを知る事にもなつた。然もこの理窟は私達の分析した所によると、思考上の錯誤、つまり考へ方の見當違ひでの上に成り立つて居る。此點から云へば、私達のとつて居る分析による研究方法は矛盾とか不合理とか或は愚かさなどを考への中に入れて、觀察する事の出来る他の洒落に注意を向けさせる様になる。勿論分析法は對照にこだはり過ぎる嫌がないではない。

一體此種の洒落の技巧はどこにあるか、一寸私共は好奇心をそゝられる。

私は此種の洒落の代表者として最も特徴に富む純粹な例をあげよう。又しても猶太人の洒落だ。「イツチツヒは砲兵隊に徵集された。彼はなか／＼智慧のある青年だつたが、そのくせあまのいやくで、兵隊には一向興味を持たなかつた。彼に好意を持つてゐる上官が或日彼をよび出して云つた。貴様は何の役にも立たない。だから貴様に忠告するぞ。——„Kauf dir eine Kanon' und mach



dich selbst.”（カノン砲を貴様は自分で買へ、そして勝手にやれ）

此の滑稽千萬な忠告は云ふ迄もなく不合理だ。カノン砲が買へるものでない。又只一人でそれを使つて敵を防ぐ事も出来はしない。此忠告は單純な不合理ばかりではない、疑ふ迄もなくすぐれた洒落なのだ。

どうして一體不合理が洒落になるのか。この事を長々と説明するには及ぶまい。不合理のうちに常識がかくされて居て、その不合理のなかの常識が不合理を洒落にしてしまふのを推察出来るだらう。砲兵のイツチツヒに向つて不合理な忠告を試みた士官は、イツチツヒが士官から見ると、どれ程馬鹿に見えるかを、イツチツヒに示すために、士官自身馬鹿になつた様なふりをしたのだ。士官はイツチツヒの眞似をしたのだ。「おれは貴様並みに馬鹿な忠告をしよう。」と云ふ事なのだ。

私は一時此の例の分析をやめて、簡単なあまり上等でない例——同じ意味の不合理を持つ洒落（Unsinnswitz）に移らう。

„Niemals geboren zu werden, wäre das beste für sterblichen Menschenkinder.”

（死すべき宿命にある人の子のためには、生れて來なかつたのが一番いい事だ。）

„Fliegende Blätter”を見ると右に付け加へてある。



„Aber unter 100.000 Menschen passiert dies kaum einem.”

(けれども、十萬人人が居ても、これにあてはまる人は殆んど一人もない。)

古い諺に附け加へられた新しい言葉はたしかに不合理だ。この附け足しは、すこし控目に見える。  
„Kaum” と云ふ字がつかつてあるので餘計に馬鹿らしく思へる。然も此追加文は最初の文に疑ひの餘地のない程、はつきり含まれて居るのであるが、此嚴肅な諺も一つの不合理に過ぎないのが分る。「産れ出ないものは人の子ではない」と云つてしまへば、毒にも藥にもならない。それ故此不合理は、砲兵のイツチツヒの例の不合理とはちがつた不合理を示して居る。

茲で第三の例をつけ加へる。この例は冗長な説明をしても、あまり得る處はないが、この洒落の中の不合理的用ひ方が、他の不合理の表現法をはつきりさせて呉れる。

「旅に出るので家をあけなければならなかつた男が、留守中娘の事をたのんで、特に娘の貞操上の事を注意する様に願つた。數ヶ月して歸つて見ると娘は妊娠して居る。勿論その男は友達をなじつた。その友人は此不幸に就て自發的に云ひ譯が出来なかつた。でその男は訊ねた。「娘は何處に寝たか。」「自分の部屋で私の息子と一緒に。」「何故君は僕の娘と君の息子とを同じ部屋にねせたのか。」「僕があれ程娘の番をする事をたのんだぢやないか。」「然し彼等の間には屏風が立てゝあつた。そち



らに君の娘さんのベッドがあり、こちらに僕の息子のベッドがあつて、其間に屏風があつたのだ。」  
「だが、君の息子が屏風を廻つて行つたら。」「あゝ、さうだ。さう云ふ事もあり得るね。」と友人は熟考の後云つた。

何も他に意味のない此洒落はすぐに分析出来る。友人はかう云ふべきだつたのだ。

「お前さんは私を非難する資格がない。娘さんをいつも若い男と、一緒の家に暮させなければならぬ様にしたお前さんは、よつほどの馬鹿だよ。」

かう云ふ状態に置かれた娘の貞操は第三者から見れば、保たれる様に思はれるが、實際はなか／＼六ヶ敷い。友人が愚鈍の様に見えるが、實は娘の方が愚鈍なのだ。かう分析すると洒落の中にある愚鈍を發見する事も出来るし、洒落もよく分つて来る。愚鈍と云ふ要素を吾々は見のがしてはならない。分析した文章と比較して見ると、本文には愚鈍が全く影をかくして居るのが分る。

さて、茲で再び「カノン砲」の洒落を分析して見よう。士官の云つた言葉は次の様な事なのだ。

「イツチツヒ、貴様は事務家としての智慧はある。軍隊と云ふものは人をおしのけて一人進んで行かなければならない社會とは違つてゐるのだ。それに氣がつかないならば貴様は大馬鹿だ。軍隊は服従し共同して働かなくてはならぬ處だ。」



今迄あげた不合理の洒落は、たしかに愚鈍や不合理を備へて居る。即ちその愚鈍さや不合理で、相手のそのの實物を示し教へると云ふ意味だ。

洒落に不合理を應用する場合は、常にかう云ふ意味があるものだらうか。この間を肯定する一例がある。

Phokion<sup>フオキオン</sup>がある時話をすると、拍手喝采された。その時彼は友を顧みて訊ねた。——僕は何か馬鹿な事をしやべつたか知ら。

此間は一寸考へると不合理の様であるが、私達はこの意味をすぐに領解する。「私のしやべつた事は、此馬鹿共に氣に入つたのかなア、恥かしい事だ。馬鹿者の氣に入つたのはあまり惻巧じやない事になるがなア。」

然し不合理は、不合理を表現する目的以外にも、洒落の技巧として使はれる事のあるのを、他の例で學ぶ事が出来る。

專攻の學問が殺風景なので、いつも洒落を云つてはまぎれて居た有名な大學教授が、もう大分年をとつてから授つた子供の誕生を人から祝はれた時「人間の手でこねあげるものは随分奇妙ですな」と人達に云つた。此言葉は全く不合理だし又不適當だ。子供は神からの授りもので、人の手で造り



あげたものではない、と普通に云はれて居る。此の言葉は一つの意味、然も猥褻な意味を持つて居るのに、すぐに氣がつく。何か他の事——或は他の人々の馬鹿らしさを諷示するために、此幸福な父親が、自分から馬鹿者の様に、ふるまはうとしたことは確かだ。此見かけ上は意味のない言葉も私達を吃驚仰天させる働はある。この點に就ては大家達の言葉に賛成する。——洒落の全作用は「人をまごつかせて、落ちをつける」事によつて導かれるものだと思はきいて居るのだ。この事に就いては又後で批判する。私は此種の洒落の技巧が「まごつかせる」事と不合理を引き出す事にあるのを念頭に置くだけで今は満足して置かう。

Lichtenberg<sup>リヒテンベルグ</sup>の次の洒落は、愚昧の洒落 (Dummheitswitz) の中でも特別な位置にあるものだ。毛皮になつた猫を見ると、いつも猫の目があつた所に、毛のない穴が二つちやんとあいて居るのが、どうも合點が行かない。

きまりきつた事を怪しんだり、元來同じ事の二様の説明に過ぎない事を怪んだりするのは愚な事だ。Michelet<sup>ミシェレ</sup>と云ふ女の眞剣な叫びを私は思ひ出した。それはかうなのだ。「子供が此世に生れ出るとすぐにその世話をしようと待ちかまへて居る母が居るのは、なんとまア自然の仕組みはうまく出来てるのでせう。」この文句は實に愚な文句だ。だが Lichtenberg<sup>リヒテンベルグ</sup>の方は、愚昧の中に何かかくさ



れた目的を持つて居る洒落だ。それは何だらう。その疑問は此處ではまた説く機會が來ない。

X

X

X

これで私達は洒落の二つの部類を學んだ。即ち洒落の作業で、通常の考が偏つたもの、つまり見當違ひ(Verschiebung)と不合理(Widersinn)を洒落の表現の技巧として用ひるのを知つたのだ。で、これ以外の考へ方の間違ひが又洒落に應用されるだらうと期待するのが當然になつて來る。實例を二三擧げよう。

「一人の紳士が喫茶店にはたつた。タートを買つたが、すぐそれを返して、その代りに一杯のリキユールを望んだ。彼はそれを飲み乾して金も拂はずに出て行かうとした。店主が彼を引きとめた。「リキユールの代を頂戴します。」「その代りにタートを君にやつたぢやないか。」「そのタートの金もまだ戴きません。」「そのタートは食べないぢやないか。」

此話は見かけは理窟が通つて居る。私達はこれを考へ方の誤にふさはしい一つの外觀だと思ふ。此間違ひは猾い買手が、タートを返した事と、その代りにリキユールを飲んだ事とに、ありもしない關係をつけようとした事に存在するのが事實だ。(譯註、かう云ふ話は日本にもある。緣日で甘栗を一圓買ふ。勿論金は拂ふのだ。數分後その店へ行つて、前の甘栗を返して、さつき一圓金をやつたらう、今此甘



栗を返すから、二圓の甘栗をくれ給へ。此事件は二つの現象に分れる。それは相互に買手とは無關係で、唯代償と云ふ事に就いての、彼自身の計畫に關係がある。彼は初めタートを取つてすぐに返した。それに對しては支拂の義務はない。しかしそれからリキュールを飲んだ。それに對しては拂ふ義務がある。買手は「その代りに」と云ふ字を二重の意味に使つたと云ふべきだ。彼は確かに重複意によつて物的には何等根據のない連絡を考へ出したのだ。

今になつて私は重大な告白をしなくてはならなくなつた。私達は今多數の例に就て、洒落の技巧を研究して居るのだから、私達の選り出した例は、正しい例でなくてはならない。然し私達はある場合には、引き合に出した例を洒落と名づけていゝかどうか迷ふのだ。

洒落の標準はなか／＼決められない。ある文句が洒落かどうかをきめるには言葉の使用法などと云ふものは由來曖昧千萬のものだから、出来るならば此洒落の標準の根據となるものをつきとめた上でなくてはならなくなる。だから洒落かさうでないかをきめるには、私達は先づ感じ(Emfindung)に頼るしかない。感じて決めると云ふのはつまり、我々の知識ではまだはつきりして居らない標準によつて判斷すると云ふ事だ。此標準さへ研究の結果きまつて來れば、洒落かどうかを判斷する事は容易だ。今最後に述べた例は、それを洒落としても詭辯的な洒落とすべきか、或は單純な



詭辯ではないかを疑はざるを得ない。だから私達はまだ、洒落性しやらくせい (Witzcharakter) がどう云ふ處にあるかと、はつきり分つて居ないのだ。

これに反して次の例は疑もなく洒落だ。又も結婚媒介者の例だ。仲人が彼の選んだ少女を青年が非難するのに對して辯護した。「姑が氣に入らない。意地の悪い馬鹿な女だ」と青年は云つた。「君は姑と結婚するのでなく娘と結婚するのでせう。」「さうさ、けれどもあの女はあんまり若くもないし、それに顔も餘り美しくない。」「それが何です、若くもなく綺麗でなくても、あなたに親切な方がいゝでせう。」「それに金もあまりない。」「金を問題にするなんて事がありますか、金と結婚するのじやあるまいし、女と結婚するんでせう。」「然し彼の女は背虫だ。」「貴君は何をのぞむのです。

あの女は何も缺點がない筈です。』

これはあまり若くない不美人で、持參金がなく、嫌なお母さんを持つて居て、其上不具者の女を問題にして居る。確かに結婚する上には有利でない。媒介者は誰でもまア辛抱の出来る程度の缺點に就いては大體承認して居るくせに、とてもたまらない背虫に就いて却つて誰もしのばなくてはならない缺點の様に云つて居る。これにも見かけ上の理窟はある。それは詭辯に特殊なもので、其の中に考へ違ひがひそんで居る筈だ。少女は明かに大目に見得る多くの缺點と、免すことの出来ない



一つの缺點とを持つて居る。結婚すべきでない。仲人は彼の逃口上で、すべての缺點が、すっかりなくなるかの様に説明したのだ。仲人は各々の缺點をかためた上で少し宛でも否定すれば、それが合計では相當の云ひ譯の量になるのを知らずに、一つ一つの缺點を一々に就いて否定して、すべての缺點を一つに集めて云ひ譯けしなかつたのだ。

同じ様な失敗が、次のべら棒な詭辯の中心になつて居る。然しこれは洒落の資格がない。AがBに銅の鍋を借りて返した處が、Bが鍋に大きな穴があいて居て、役に立たないと訴へて來た。Aは辯解した。「第一私はBから鍋を借りはしない。第二に私はBから鍋を請取つた時、既に大きな穴があいて居た。第三に私は鍋を無きすのまゝ返した。」此の三つの云ひ譯は一つ一つでは別に變ではないが、三つの云ひ譯を一緒にして考へれば、お互同志が否定し合ふ事になる。Aは一緒に考へなければならぬ事を別々に考へたのだ。恰度仲人が嫁の缺點を取扱つた態度と同じなのだ。だからAは „Und“ (そして) と云ふ言葉を „entweder—oder“ (——か、又は) と云ふ言葉しか使つてならない所に用ひてしまつたのだ。

次の仲人の話は又味の違つた詭辯だ。求婚者が、花嫁の足が短く跛なのを非難した。仲人が反對した。「あなたは間違つて居ますよ。假りにあなたが跛の完全なまつすぐな女と結婚したつても、ど



んな利益がありますか。あなたがさう云ふ女と結婚したつても、女がころべば肢をいためて跛になる日はきつときますよ。その時は痛みや、心使ひや、醫者の拂など、とても大變なものですよ。若しあなたがもう跛になつて居る彼の女を貰へば、そんな事がないだけ大安心ですよ。」

此話では見かけの上の理窟も誠に薄弱だ。これから起るかも知れない不幸より、もう目に見えて居る不幸を喜ぶ人は、一人だつてありはしない。もつと容易に考へ方に含まれて居る誤の分る例を示さう。これは一つの物語だが、その下手な云ひ廻しを、すつかりあばくのは止めたいものだ。

Krakau<sup>クラカウ</sup>の寺にNと云ふ大先生が居て、弟子達と御禱をして居た。突然彼が大きな叫聲をあげたので、弟子達は心配してきいた。「今恰度レンベルグのL先生が昇天された。」教會は死人に對して哀悼の意を表した。その日にレンベルグから來た人達は、どうしてL先生は死んだのか、何か間違ひでもあつたのかと訊かれた。併し彼等はそれに就ても知らなかつた。彼等はL先生がピン／＼して居るのを見て出發して來たのだつたから。併し結局L先生がまだ生きて居るのが分つたので、N先生が彼の死を千里眼で知り得た瞬間に死んだのでない事が確かめられた。或る外國人が此事に就いて或日聞き出した。「あの時レンベルグのL先生の死を見た時、君達の先生が云つたのは、先生の大きな恥曝しぢやないか。L先生はまだ生きてるよ。」「そんな事はかまひません。クラカウからレ



ンベルグは遠くて見すかしは出来ませんからね。」と弟子が云つた。

此二つの例に共通な考へ違ひがそのまゝ現れて居る。幻覺を表現する事は實在に對しては價值が少い、あるかも知れない事を實際の位置に置くからだ。クラカウからレンベルグ迄の遠距離透視は實際の事をほんの少ししか知らせないにしても、驚くべき遠距離精神作用だ。弟子達は此精神作用の内容が分つて居ないのだ。クラカウの博士がL先生の死を知つた時に、實際先生が死ぬ事があるかも知れないのだ。弟子達は先生の精神作用を、比較的に感服するよりも、絶對的に感服する事に重きを置いて居るのだ。この例でも分る様に實在と云ふ事を問題にしないのは「あり得べき」と云ふ事にとつては、誠に都合がいい。だから前に云つた様に、仲人は求婚者に、どんな細君でも椿事のために跛になる「可能性」のある事をもつとおしひろげて考へろ、さうすれば、細君が跛になるかならないかと云ふ疑問は吹きとんでしまふからと要求したのだ。

此詭辯の中には、まだ／＼面白い事が澤山かくされて居る。その中の考へ違ひは、云はゞ自動的 (automatisch) とでも云ふべきものだ。かう云ふ例は恐らく偶然の事件にぶつかつた時、むしやくしや腹で云つた事なのだらう。相變らず仲人の物語を引用してこの新しい部類の例を示さう。

或る仲人が花嫁の調査の報告をするのに、彼の報告を保證させる目的で、一人の助手をつれて行



つた。「彼女は縦の樹の様に育つて居ます」「縦の様に！」と助手がくり返した。「目は十人並だし」「十人並の目だ！」彼の女の様に精練された女は一寸ありません」「ほんとに精練されてます！」然し正直に云へば、彼女は小さな瘤を持つて居ます」と仲人が云ふと、助手は「さうだ！ 瘤がある！」と保證してしまつた。

新郎が新婦を紹介された時、花嫁が氣に食はないので、仲人を引つぱつて、耳に口をあてゝ苦情を囁いた。「どうして私を此處へつれて來たんだ。年はとつてるし、藪睨みだし、齒並びは悪いし、眼はたゞれ眼だし……」「あなたは大聲で話さなくてはいけませんよ」と仲人が口を入れた。「……此女はそれに聾なんだから。」

新郎が仲人と一緒に花嫁の家を初めて訪ねた時の事、客間で家族が出て來るのを待つて居る間に、仲人は銀製の器具がこれ見よがしに並べてあるガラス戸棚をじろ／＼見て云つた。「あれを御覽なさい。あれを見ても此家がどんな金持か分るでせう」「しかし……」と青年は疑ひ深く質問した。「……金のある様に見せかけるために、美しい器具を一寸の間、借り集める事も出來ますね。」「あんたは何と云ふ事を思ひつくんです」と仲人が否定する様に答へた。「……しかし一體だれかこんな家に物を借すものですか。」と附け足した。



此の三例は、みんな同じ事を示して居る。次ぎ／＼と同じ事をやつて來た男が、同じやり口をつぎつぎの機會に應用して、此場に適合しない事と、自分の意志に反した結果を生み出してしまつたのだ。

彼は其習慣から自動的に動いて、四圍の狀況が何を要求して居るかを忘れてしまつたのだ。

最初の例では、助手が選ばれた花嫁の候補者を、求婚者に都合よく紹介する位置に居ながら、それを忘れて、花嫁の長所を裏書するのに忠實であつた餘勢で、實物よりは小さく感じさせなくてはならなかつた、恥かしい瘤の事を、大いに力説してしまつた。

第二の例では、花嫁の身體上の缺點を次々と數へあげられたので、仲人の心がすつかりかき亂されてしまつて、彼の意志でもなく、役目でもないのに、彼自身だけ知り得た知識までさらけ出してしまつた。

第三の例では、彼は腹立ちまぎれに、青年に嫁の家が金持であることを説服しようとして、一つの證據を見せるつもりで、彼の全努力を水泡に歸せしめる様な事をしやべつてしまつたのだ。要するに自動的作用が思考と表現のプログラムを破つてしまつたのだ。

此三つの話は洒落としても又滑稽な話としても、三つ共に同じ程度の特徴を持つて居る。精神の



自動作用を見つけ出す事は、假面をはがす事や、自己を裏ぎらせる事と同じく「滑稽」の技巧だ。

突然私は此處で、洒落の滑稽に對する關係を持ち出してしまつたが、これは此處ではなるべく深入りしたくない。唯次の疑問だけ出して置く。之等の物語は滑稽だけで洒落でないのか。洒落の様に滑稽も同じ方法で働きかけるものか。そしてくどい様だが、洒落の特徴はどこにあるのか。

今研究した例の技巧は「考ひ違ひ」を變形した形に過ぎないと云ふ事を、よく領解して置かなくてはならない。又その研究も今迄はほんやりしか私達に分つて居なかつたものだと云ふ事を、承認する必要がある。特に洒落の技巧だけを研究したのでは、いくらその研究が十分であつても、一層深い理解の基となる様な收穫を得る事は期待出来はしないのだ。

×

×

×

引き續いて研究するために、簡単な例をあげる。此例の技巧は一番よく私達の知つて居るものだ。

„Der Januarius ist der Monat, da man seinen guten Freunden Wünsche darbringt, und die übrigen die, warin sie nicht erfüllt werden.“

（正月には親しい友達に希望が遂げられる様にいのるが、他の月になると此希望は遂げられはしな



此洒落は「強し」と云ふよりも「やさし」洒落で、其手段も甚だ控目のものだから、もう一つの例をあげて印象を強くしよう。

„Das menschliche Leben zerfällt in zwei Hälften, in der ersten wünscht man die zweite herbei, und in der zweiten wünscht man die erste zurück.“

(人の一生は二つに分けられる。初めの半世では後の半世が近づくの希望したものだったが、後の半世になると、初めの半世が又歸つて來て呉れゝばと願ふ。)

„Die Erfahrung besteht darin, dass man erfährt, was man nicht zu erfahren wünscht.“

(經驗したくない事も、經驗するのが經驗なのだ。)

之等の例を見ると、私達は前に取扱つた「同じ材料を色々に使ふ」例を思ひ出す。特に最後の例などは何故前の方に並べないで、今になつて改めて持ち出したのかと不思議にさへ思はれる。經驗と云ふものが恰度前の例の嫉妬の時の様に其言葉自身で説明されて居る。

然し他の二つの例は其性質は之と似て居るが「同じ言葉を色々に使ふ」よりも、もつとすぐれて意味の深い要素、即ち此場合には重複意に近いものから分岐した、或る要素が含まれて居る様に思はれる。私は茲で一つの新しい考へから別種の統一性を組立てゝ見たい。それは表現相互間の關係



や、種々の定義の間の關係や、又第三者に對する關係などを一つに統一したと云ふ事だ。私は此過程を綜合 (Unifizierung) と呼びたい。「同じ言葉に凝縮短縮する事」と同じ意味なのだ。だから人生の二つの部分は其間に發見される對立關係によつて説明されて「第一の部では第二の部を望み、第二の部では第一の部を顧る。」もつと詳しく云へば、お互に大變似た關係が説明に使はれて居るのだ。此關係の相似は即ち言葉の相似となつて「同じ材料を色々に使ふ事」を思ひ起させるのだ。

「正月」の例では正月とそれに對立する月とが二度説明に使はれたので、もう一つの特徴を造りあげた。それは正月の新年おめでたう (Wünsche) であつてお正月には祝辭をうけるが他の月には祝辭はうけられない。(譯註、此例はだから重複意様の例にもなる)「同じ材料を種々に用ひる」方法、つまり重複意によく似た方法そのものとは明瞭な區別がある。次に「綜合」の説明を要しない程いゝ例をのべる。

フランスの讚美詩人の J. B. Rousseau が à la posterité (後世へ) と云ふ題で讚美歌を作つたが、<sup>ヴォルテール</sup>Voltaire が此詩は後世へ傳へるべき程のものでないのを洒落た「此詩はこの名宛では届くまい」。これは所謂當意即妙な洒落に基く眞の「綜合」であるのが分る。此の當意即妙と云ふ事は「防禦から攻撃へ移る」事であり、「戈を逆さに」する事であり「もらつた銅貨で支拂ひをする」事であり、



結局攻撃と逆襲との間に一つ統一を組立てる事だ。例へば、パン屋が下宿屋の主人の指が膿んでるのを見て「指がビールの中へでもはいつたのですか」と云ふと「いや、君の卷パンが爪の間に入つたんだ」と答へた例や、或る王様が領内巡視の途上、彼に瓜二つの男を群集の中で見つけて、その男をよび出して、「お前の母親は宮中に仕へた事があるか」(譯註、御落胤)ときくと「いゝえ、ですが父親は仕へた事がありました」と答へた話や、W公爵が遠乗りの時ふと仕事をして居る染物屋を見つけて、「お前はわしの白馬をそめる事が出来るか」ときくと「閣下、拜承致しました。お馬さへ煮られるのを我慢して下されば」と答へた例などがそれだ。

此所謂竹筵返<sup>しつべがへ</sup>し——不合理な問に對して同じ様な不可能な事で答へる——に於ては尙も一つ別な技巧が働いて居る。その技巧は「いえ、お馬は煮られる事を我慢しないと思ひます」と云つてしまつては臺なしになつてしまふ。

「綜合」は尙他に特に愉快な技巧で——接續詞の「そして」, "Und" をならべると意のまゝになる。「そして」を並べるのは、關係を意味する事より外に意味がないものだ。Heine<sup>ハイン</sup>はハルツの旅でゲツチンゲンの町の事を「一般にゲツチンゲンの住人は學生、教授、町人、それから畜生にわけられる」と書いてるが、かう書かれると「此四階級はあまり嚴密には區別出来ない」と云つてゐる様にと



れる。又彼が學校で「ふんだんなラテン語、答、それに（und）地理學に堪へしのばなければならなかつた」と書いて居るのを見ると、此並べられた二學課の間に「答」を挟んだために、餘計にはつきりと、生徒達が答までも理解しなくてはならないのを意味して居るのが分るだらう。

Lipps の「枚舉による洒落」又は「並列」（Witzige Aufzählung oder Koordination）の例では「學生、教授、町人並びに畜生」と云ふ句によく似て居る。

„Mit einer Gabel und mit Mühe“ zog ihn die Mutter aus der Brüh.“

（お母さんはフォークでスプークからやつとこさそれを取り出した）この文句に、Mühe（苦勞）がまるで Gabel（フォーク）と同様に一つの道具でゝもある様だと Lipps は説明して居る。然しこれは洒落と云ふよりは滑稽さの方の印象を餘計にうける。Heine の並列はたしかに洒落だ。この例は後で洒落と滑稽の關係を論ずる時にも一度思ひ出したい。

× × ×

公爵と染物屋の例で、若し染物屋の答が、「白馬は恐らく煮られるのを堪へられないでせう」であつたならば、それは唯「綜合」に因る洒落に過ぎない。然し彼の答は、「馬が煮られるのを我慢してくれれば」（„Ja, durchlaucht, wenn er das Sieden vertragen kann.“）であつた。もと／＼くつ



ついで居るべき「*Sie*」(*Nein*)を「*Ja*」(*Ja*)で置き換へると、新しい洒落の技巧が出来て来る。その用ひ方を次の例で示さう。フリードリヒ大帝が、シュレジエン州の交霊術を知つてると云ふ噂の坊主にきいた。坊主を歓迎してすぐに「お前は靈魂を呼び出す事が出来るか」ところが答はかうなのだ。「御意の通り、陛下。ですが魂は参りません。」(*Zu Befehl, Majestät, aber sie kommen nicht.*) 此場合の技巧は「*Sie*」(*Nein*)と云ふべき所を反対な肯定の「御意の通り」を使つた事に外ならないのが明瞭だ。此入れ替への目的を達するには「*Ja*」と「*aber*」とを結び付けて「*Nein*」の意味にしなければならぬ。

「反語による表現」(*Darstellung durch Gegenteil*)とも名付けたい此方法は洒落の作業にとつて色々の役に立つ。次の例ははつきりして居る。ハイネ「此女はいろんな點でメロスのヴィナスの像に似て居る。非常に時代を食つてゐるし、同じ様に齒抜けだし、黄色い肌に白いぶちがある」これは汚いものを最も美しいものと調和させて表現したのだ。此調和は二重の意味にとれる性質のものと、も一つは何か附加へられて居る場合とがある。後の場合は次の例だ。リヒテンベルグの「偉人」に——彼は色々な偉人の性質を備へて居る。アレキサンダーの様に頸を曲げシーザーの様に髪を結び、ライプニッツの様な珈琲の飲み方をし、若しきちんと腰かけて居ると、ニュートンの様に飲食を



忘れ、彼を立たせるにはニュートンを立たせる様にしなければならない。彼は又ジョンソン博士の様に鬘をかぶりセルヴァンテスの様に、いつもツボンのボタンを一つ外して居る。

これこそ特にすぐれた「反語による表現」の例だ。これでは二重の意味のある言葉は使はれてを  
らなう。

J. V. Falke<sup>ファルク</sup>が旅からアイルランドに歸つた。マダム・タスソウドと云ふ小さな蠟細工の像を見せる小さな店があつた。此處で案内人が像から像へと人を案内して居た。「これはウェリントン公爵とそのお馬です」。すると小娘が「どちらが馬でどちらが公爵です」ときいた。「どちらでも、お嬢さん——お金さへお出しになればどちらでもいい方をとれます」と答へられた。此洒落を分解すればかうなる。「圖々しいにも程がある、一體蠟人形など社會にとつてどんな效能があるのだ。馬と乗手との區別もつかない様な。(冗談半分の誇張だ!)」そんなものに金を拂ふとは?」この立腹は小事件ながらお芝居になつちやつた。人中から一人の婦人が出しやばつて乗手の人形を獨りで決めちやつた。ウェリントン公爵はアイルランドではとても有名な人なのだから。

他人の財布から金を取りあげて、何もしない店主や、案内人の圖々しさは、反語で表現された一つの物語になつて居るのだ。此話の中では彼等は、金を拂はせる以上、その人のためにそれだけの



事をしなければならぬと考へて居る正直な事務家らしく自慢して居るのだ。此洒落の技巧はそんなに簡単ではない。だが此洒落の中には山師に良心のあるのを證明する様な手段（どちらでもお嬢さん云々）があるから、「反語による表現」の一例にはなる。一方又買手が、もつと似た人形を望んで居るのだとすれば、商賣上の手堅さをもつて答へて居ると思へるから「見當違ひ」の例ともとれる。要するに此洒落はこの兩者の結合なのだ。

「誇張の洒落」(Überbietungswitz) と名付けられる小部數は此例に近いものだ。此種の洒落を分解して見ると、「Ja」と云ふ言葉は不適當で、「Nein」と云ふ字を使はなければならぬのだ。然しその文句の内容によつては、その「Nein」が強められた「Ja」と同じ意味になつて、全く逆になつてしまふのだ。反對の氣勢が言葉の不相應のために却つて保證の位置に立つて來るのだ。例へばレツシングの警句に次の様ながある。「Die gute galathee! Man sagt, sie schwärz' ihr Haar; da doch ihr Haar schon schwarz als sie es kaufte, war。」

(可愛いガロッテ！ お前は毛を染めてると人は云つてゐるが、お前の毛は染料を買ふ前から黒かつた筈だが。)

髪を染めたのを否定するために、染粉を買つたのを肯定して居る。



机上の空論に對するリヒテンベルグの見かけだけの辯護に——「天地の間にはお前たちが机上で夢想するよりは遙かにいろ／＼の事相があるのだ」とハムレットが侮蔑して居るのに對して、リヒテンベルグは、此批評が机上の空論をやつつけるにしては、まだすべてを盡して居なくて辛辣さが缺けてると思つて、補足した。「机上の空論には天にも地にも存在しない色々のもの迄現れて居る」(Aber es gibt auch Vieles in der Schulweisheit, das sich weder im Himmel noch auf Erde findet.) 彼の言葉は主にハムレットのまだ罵り足りない所を補充して居るのではあるが、此補充の中にはハムレットの言葉よりも一層大きな非難が含まれて居るのだ。

(譯註、食道癌にかゝつて居る患者が、心中醫者のへボなのを憤慨して轉醫しようと考へて居た。そこへ又例の醫者が來た。「どうです、重湯位のめる様になりましたでせう」と醫者が云ふと「重湯をのめる様になるとおつしやつたその藥さへ通らないのです」とやつた)。

次の二つのユダヤ人の洒落は考へ違ひの跡がはつきりして居るから一目で了解出来る。とにかくあら削りのものだ。

二人のユダヤ人が風呂の話をして居た。「入りたくても入りたくなくても一年に一度は入るよ」と云つて自分の綺麗好きなのを法螺まじりに斷言して、却つて不潔なのを白狀して居る。又一人の鬚



に食物の残りがついてるのを見つけて「お前昨日何を食つたかあてゝ見ようか」「うんあてゝ見ろ」「さうだな。えんどう豆だらう」「駄目だ、えんどう豆は一昨日食べたのだ。」

立派な誇張の洒落の例で逆の表現にすぐに還元出来る次の例がある。王様が平民的の氣分から外科病院を慰問した。手術を見ながら大聲で「あつぱれ、あつぱれ」と賞めた。手術がすんでから博士は王様の前に恭しく頭を下げた。「陛下、また他の肢をお云ひつけになりますか。」

王様がほめて居る間に、博士の考へたと思はれる事を、云ひ方を代へればかうなる。「私が貧乏人の腐つた肢を切斷するのは、王様のお云ひつけで、王様の御満足を得るための様にお思ひになるかも知れないが、私は全然別な動機で手術をして居るのです。」然し王様の前では「私は陛下の御命令でなくては手術は致しません。私に賜つたおほめの言葉は非常にうれしうございました。又健康な方の肢をきる様にと、御下命を待つて居ます。」

だから博士は自分の考へて居る事、又は遠慮すべき事と全く反對の言葉をしやべつて、自分の考を明かにして居る。この逆の表現は豫想しない程のすばらしい働きを持つて居る。

逆を使つた表現は、此例の示す通り、時々用ひられて洒落の技巧として効果の大きなものだ。が然し、これのみでは決して洒落でないと云ふ事を見のがしてはならない。



マルクス・アントニウスが廣場で長話をしたので、王様の死骸をとりまく民衆の感情が變つて來たのに氣づいたので「ブルタスは實に尊敬に値する人間だ……」と云つた。その時アントニウスは人民が彼が實は云はうとした實際の言葉「尊敬すべき人々よ。君たちは反逆者だ！」と云ひ出しさうに感じた。

「おどけ雜誌」が珍奇な野卑な恥知らずの言行を集めて「情けの人」とでも名付けければ、それも又逆を使つた表現法だ。かう云ふのは洒落よりも皮肉 (Tongue) だ。皮肉は元來逆を使つた表現法に外ならない。

かう云ふ様に皮肉な洒落を外にも随分よんだり聞いたりする。だから洒落の特徴を説くには其技巧ばかりを研究したつて駄目なのだ。それに何か附け加はらなければならぬのだが、それはまだ發見されなかつたのだ。又一方洒落は其技巧を代へて見れば領解出来るのも否定出来ない。暫くの間は洒落の解釋をして學んだこの二つのはつきりした點——技巧に何か加はらなければ洒落でない事と、洒落の技巧を變化して見れば洒落の意味が分つて來る事——を一つに統一して考へる事は困難かも知れない。

X

X

X



若し逆を使ふ表現法が洒落の技巧の一つになるのならば、その逆である似たもの、又それに近いものも、洒落の技巧として使はれはしないかと云ふ期待が湧いて来る。

研究を続けると、これは新しい特に廣汎な部數をなす「考への洒落」(Gedankenwitz)に屬する技巧であるのが分つて来る。(譯註、Witz 云ふ字を洒落と譯すのは本當はよくない、むしろ廣い意味の頓智と譯して、Wortwitz (言葉の頓智)を洒落と譯す方がいゝのだ)「それに近いもの」の代りに同種のもの、又は連絡あるものを持つて來て表現すれば、この技巧の特色は更に適切に説明出来る。

私は先づ最後に云つた「連絡あるもの」の例をあげて説き進めよう。

あるアメリカの逸話に、二人の大膽な商人が、慎重に請負事業をやつて莫大な財産を造つた。そのお蔭で上流社會にわり込む苦勞はなくなつてしまつた。其處でその町で名聲のある高貴の畫家に自分達の肖像を畫いてもらつて何かの役に立てようと考へた。その畫家の畫はすばらしいものだと云はれて居る。

大夜會で其畫が初めて展覽された。二人の主人公は、達眼の鑑定家でもあり又批評家でもある男を、自ら客間の壁へ案内した。その壁に二人の肖像が並んでかけられてあつた。恐らくすばらしい歎美の言葉が出るだらうとまちかまへて居た。批評家はしばらく畫を見つめて居たが、何かなくし



物でもした様に頭をふつた。そして二つの肖像の間の隙間を指さしながら率直に尋ねた。「キリストはどこに居ます？」

此物語の意味は、間接でなければ云ひ現せない或物の表現が扱つてあるのだ。どう云ふ方法で此「間接表現法」がなり立つて居るのだらう。すぐに出て来る聯想と推定で、私は洒落の表現法を洗つて見よう。

「キリストの像はどこです」と云ふ疑問は次の様な事が想像される。此質問者は此並んで居る二つの肖像の情景で、彼にも我々にも親しいある情景を思ひ出したのだ。即ち救世主の姿が此二つの姿の間になかつたので此間が發せられたのだ。それは即ちキリストが二人の盜賊の間に挟まれて、はりつけになつて居る情景なのだ。あるべくしてなかつたものが、洒落で目に見えて来る。つまりキリストさへ眞中にあれば、いかにもあの情景に似てゐるんだが、の意味なのだ。此洒落は二つ並べてあつた像が盜賊としか思へぬものだつたので成立して居る。で此批評家が云ひたくて云ひ得なかつたのは「あなた方の肖像なんてどうだつていゝのだ。どうせあの盜賊の様な無賴漢だから。」と云ふ事だ。つまり彼は聯想と推定とを一種の方法で發表したのだ。其方法は、諷示(あてこすり)(Anspielung)と名付けるものだ。既に私達は一度諷示に出會つた。即ち重複意の時に、一つの言葉の二つ



の意味のうち、第一の意味の方がしばしば使用されるもので、第二の意味はその中にかくされた形で居る時に、諷示を含む重複意 (Doppelsinn mit Anspielung) と名づけたのだ。

今迄檢べた例で洒落の技巧はなか／＼複雑であり、特に諷示は一層複雑なのが分る。

アメリカの逸話を述べると、諷示と重複意とは全く別種なもので、諷示の方は、一つのまともな考として置き換へられるものなのが發見されたのだ。重複意は必ずしもまともな考としてよく文字そのものに關係して居る。

話が大部錯雜して來たから、思ひ違ひのない様に特徴を持つた例を夫々あげて検討して見よう。

連絡があるからとの理由で代りに持ち出されて來るものうちには單純な同韻 (Anklang) のもある。これは洒落の中の地口と同じものだ。が然しこれは文字の韻の話ではなく、一つの文章全體——特徴のある言葉の結合の間の韻の事だ。例へばリヒテンベルグは、次の様な格言を造り上げた。

„Neue Bäden heilen gut.“ (沸き立ての風呂はよく效く)、此格言をきくと直ちに次の諺を思ひ出す。„Neue Besen kehren gut.“ (買ひたての帚はよく掃ける) (譯註、どんより正午——論より證據)

此の二つの諺は最初と最後の言葉が似て居る上に、又全體の構造が似て居る。頓才のある思想家には格言の模造品がちゃんと頭に入つて居る様だ。リヒテンベルグの諺は、帚の格言のあてこすりに



なるし、又率直に云へなかつた事——風呂はいつも温度が同じでなくてはいけない事——が加つて洒落としての効果が十分になつて居るのが、帯の諺への諷示によつていくらか暗示されてる様だ。

もう一つリヒテンベルグのがある。„Ein Mädchen, kann zwölf Moden alt.“ (やつと十二の流行だけ年とつた少女) これは時を示す „zwölf Moden.“ (十二ヶ月) と云ふ言葉と似た響を持つて居る。恐らく後者の書き違ひであつたのが詩として許されたのだつたらう。しかしそれはうまい思付で、女の人の年を云ふのに、月の移り行く代りに流行の變化を使つて居る。(譯註、あの女は十九のこしつきを兩親の家で過した——あの女は十九のこしつきを兩親の家で過した)。

連絡と云ふものは、僅かもちつてあるだけならばなり立つものだ。だから此技巧は言葉の技巧と並行する。だから「少しもちつた連絡」と言葉の上の技巧とは、略同じ印象を與へるが、この二つは洒落の作業の過程から見るとすぐに區別出来る。こんな言葉の洒落の例は偉いとは云はれるが、唯彼女の聲量だけで有名だつたマリー・ウキルトが次の様に侮辱された。„Die Reise um die Welt 80 Tage.“ (ウキルトの周りを廻るには八十日かかる) Wilt は彼女の姓だが „Welt“ と云へば世界の事だ。恐らく彼女がぶく／＼肥つてたからだらう。

「一尺は王様のねうちがある」と云ふ有名なシェークスピアの言葉を「一尋は女王のねうちがあ



る」と變化させて王様の句と高貴の婦人の等身像とをあてこすつて居る例がある。誰かこれは代償語作製(Ersatzbildung)と云ふよりも、むしろ短縮だと云ふ者があれば餘り反對は出來ない。大膽ではあるが目的に進むにあたつては小心な或る男の事を、彼の友人が „Er hat ein Ideal vor dem Kopf.“ (彼奴は頭のとつ先に理想をくつつけて居る)と云つたが、元來は „Ein Bratt vor dem Kopf haben.“ (木の葉を頭の先にくつつけて居る)と云ふ言葉があるのだ。(譯註、前句は彼は理想的な男だの意味で、後句は目の見えない馬鹿者の意味だ)。前の句は後の句を諷示して居て、その意味を現さうとして居るのだ。此場合も變形した短縮と云へる。

「變形による諷示」と「代償語作製」を持つ短縮とを比較する時、若し變形が綴字だけに制限された場合は、非常に區別し悪い。例へば „Dichteritis.“ と云ふ言葉はデフテリヤ (Diphtheritis) を諷示しながら „Dichter“ (詩人) のうちで天賦のない人の詩が社會を害するのを表現して居る。

否定詞はほんの僅かの變形を支拂ふだけで、實にうまい諷示を造りあげる。

Mein Un-glaubensgenosse Spinoza”

(不信神仲間のスピノザ)とハイネは云つたし、Lichtenberg は „Wir von Gottes Un-gnaden Tagelöhner, Leibeigene, Neger, Fronknechte,“



(吾等神様、から不興をかうむつて、日傭取、身賣人、黒んぼ、奉公人どもは)と云つて此不幸な人達をこれ以上のない徹底さで呼んで居る。此„Von Gottes ungnad”と云ふ特別な形容は、變形されない原の子„gnad”が皇帝やお歴々の方々に適切である以上に、此不幸な人達にしつくりあてはまつて居る。

諷示の形式は、つまり代償の言葉を持たない短縮 (Verdichtung ohne Ersatzbildung) にも比すべき省略 (Auslassung) なのだ。元來諷示と云ふものは、必ずや何物かと諷示に達する迄の考へ方に省略されて居るものだ。要するに、諷示の文句の中に不足してるものがすぐ目につくか、又はその不足してるものがいくらか代償の言葉で補つてあるかどうか問題なのだ。

再び私達は本質的の諷示に立ちもどつて、著しい省略の例を並べよう。代償語を持たない省略は次の例に見られる。ウキーンに頓才のある喧嘩好きの記者が棲んで居た。彼はあまり毒舌なので、被害者から度々暴行をうけた。或る時、記者の喧嘩相手の悪事が噂に立つた時、第三者がかう云つた。「あの記者がそれをきゝ込むと、又なぐられるぞ。」この洒落の技巧は表面上の不合理で人をまごつかせる (Verblüffung) 所にある。悪事をきゝ込んだ事と、なぐられる事とは、少しも直接の連絡がないのは確かだ。だから此文句の間に、「きつと記者は又相手に對する辛辣な記事をかくだらう



から……」と云ふ文句を挿入すれば不合理はなくなるのだ。だから此洒落では省略と不合理が技巧になつて居る。

ハイネが云ふ、「あいつがあまり自慢したので香蠟燭の値が上つた」。この洒落の隙間はすぐに充たされる。その省略された文句が諷示の役をして居るのだ。「自讃と云ふものはぶんと臭ふものだ。」と云ふ文句だ。

も一度銭湯の前に二人ユダヤ人が登場する。「もう一年たちやつた。」(一年に一度しか湯に入らないのだ)と歎息した。これも省略されたものが諷刺なのだ。

次の洒落は本當の諷示の洒落だが一層甚だしい間隙がある。ウキーンである藝術家の宴會があつた後、滑稽本が出版された。それに次の様な奇妙な警句がのせられてあつた。「女つて云ふものは雨傘見たいなものだ。だがそれでもとにかく便利なものではある。」傘はどつちにしたつて雨よけには十分ぢやない。乗物が雨の時には便利だ。この洒落には一つの譬喩が使つてあるのだから、これの研究を尙進めるのはもう少し後にしよう。

Heine<sup>ハイネ</sup>の書いた「ルカの湯治」は諷示の棘で、まるで蜂の巢に入り込んだ様なものだが、洒落の形式でプラトン伯に對する攻撃の目的にうまく應用して居る。讀者が此の使用法に感付く迄は、テ



「マに不適當な表現が種々の材料による諷示で取扱はれてゐると思はれるのだ。例へば、Hirsch-Hyacinth<sup>ハヤシ</sup>の曲解の様に「あなたは肥つて居るのに私は痩せて居る。貴方は空想を澤山抱いて居るのに、私は商賣氣ばかり出す。私は實際家であるのに貴君は理論家だ。要するにあなたは私と正反對の人だ」の文句がさうだ。そんな風にハイネが表現して居る事件はみんなハイネの意地悪なきまぐれで出て来る云ひ廻しであつて、程なくその攻撃の目的物即ちプラトン伯に對する象徴的な關係がはつきりして來て、同時に諷示なのが分つて來る様になる。然る後にプラトン伯に對する攻撃が姿をかくして、伯爵の人間性が、既知のテーマとなつて來て、それに對する諷示が、相手の才能や性質を舒する文章のあらゆる處から湧き出して來る。「たとひ詩神の恵はうけない迄も、彼は言葉の天使を思ふまゝに使驅する。いや寧ろ言葉の天使を虐待する位だ。此の天使の恵が彼になくなる時には、彼は此毛の生えた若者——天使——を追ひ廻す程なのだ。その天使の美しい丸みは(詩)捕へる事が出来なくても、外形だけは捕へる事を知つてゐるからだ。」「彼は頭を砂にかくして尻が見えて居ても、すつかりかくれて居ると思つてゐる駝鳥見たいだ。」「私達の高貴な鳥は尻を砂にうづめて、頭を出して居た方がましだらう。」と云つた調子だ。

諷示は洒落のうち、最も普通に又最も簡單に取扱はれる方法で、私達の會話の中にいつも組入れ



られて居て、すぐに忘れてしまふ洒落の根本をなして居る。諷示と云ふものは、その母體から離れて獨立して存在する事は出来ないものだ。かう云ふと諷示が洒落の技巧として價値の少いものゝ様に思ひ違へるかも知れないが、諷示それ自身は決して頓智的でなくとも、間違ひのない諷示の洒落はたしかにある。頓智のある諷示ならばそれは常に洒落なのだ。かう説くと私達は今迄洒落の技巧として諷示を研究したのだから、此技巧は直ちに洒落の特徴だとは云へなくなつてしまつた。

私は諷示を「間接の表現」(Indirekte Darstellung)だと勝手にきめて、いろ／＼な種類の諷示や、反語による表現、その他まだ述べて居ない技巧などを一緒にかためて、洒落の技巧の一つの部類にまとめる事が出来る事を注意して置いた。之等が皆間接の表現なのだからその範圍はなか／＼廣い。

考ひ違ひも、綜合も、又間接の表現も、皆考へる洒落の技巧を新しく説くための立脚點になつたのだ。

尙研究を續行すると、間接の洒落の新しい小部類を見つけ出した様に思ふ。それははつきりした特徴を持つては居るから僅少の例で説明出来る。これは一小部分又は最小部分に關係ある表現で、云はゞ一班を以て全豹を知らしめる表現法だ。そして此部類と諷示とは、共に表現された一班の連



絡から、その結果が導かれるものであるのを考へると、此二つは關係がある様に思はれ、

ガリシヤのユダヤ人が汽車で旅行した。彼が上衣のボタンを外し、足を脚掛けの上にのせて寛いだ時に、一人のモダンな紳士が乗つて來た。ユダヤ人はすぐに禮儀正しく坐り直した。此人は本頁を勘定して居た様だつたが、突然吾に歸つた様に、ユダヤ人に聞いた、「一寸伺ひますが贖罪祭(ユダヤ人の最も神聖視する祭日)はいつでせうか。」ユダヤ人は *agosti* と云つただけで、ろくに答へもせず足をそのまま腰掛に乗せた。(譯註、錢と答へたのだ。お仲間だと思つたのだ)

此の例は一寸した事を云ふ點で省略の傾向に縁をもつて居る。此省略の傾向を、私達は言葉の洒落の技巧の最後に残る共通の性質として今迄とつて置いた。次の例はよく此例に似て居る。

男爵婦人のお産に立會をたのまれた醫者が、まだお産の初まらないのを話して、男爵と隣室でカルタ遊びをやらうと申込んだ。しばらくして夫人の陣痛の叫が二人に聞えた。「あゝ、くるしい。」(Oh, mon Dieu, que je souffre ! ) 男爵が立ち上がりかけた時、醫者は「まだですよ、もつとやりませう。」と云つた。しばらくするとまたお産のくるしみが聞え出した。「あゝ、何と云ふ痛み方です。」(Mein Gott, mein Gott, was für Schmerzen!) 先生入つて見ませうかと男爵が云つた。まだまだ、その時期ぢやありません、と醫者が云つた。さうして遂に隣室からはつきり「あいた、ツ



ツ、ツ、殺せ！」(Ai, Waih, waih Geschichten)と聞いた。其處で醫者が、カルタを投げつけた。恰度今です！(譯註、最初は貴族らしく佛語で、次はお國言葉だ。最後は捨鉢だ。)

痛みが段々と身だしなみを忘れさせて、本來の性質をさらけ出させる事と、みかけはつまらない叫聲にも大事な區別がつけられる事などが、此うまい洒落で、お産をする貴婦人の段々變る叫聲で現されて居る。

X

X

X

洒落に應用される間接の表現の一つの種類である譬喩を今迄のばして置いたのは、それを批判する際に、ある新しい困難にぶつかるからであつた。

私達は今迄色々の例を研究する時、その例が果して洒落なのかどうかと定められなかつたり、又それがきめられないために、私達の研究の根本まで、ぐらついて來るのを承認しなければならなかつた。譬喩の洒落となると此不確實さがますます度々であり又甚だしくなるのを感じる。此感じは私にいつもかう告げる。——それは洒落なのだ。洒落と云つてもいい、まだ洒落の本質はかくれて居るのだ、それが發見されないのだ。

私はいつも一つの洒落に對して比較研究を何等の躊躇なくやつたが、すぐその後で、此比較研究



によつて得た満足は、洒落そのものから得た満足とは、どうも少し違つてゐるのに氣がついた。いゝ洒落から起る爆發的な笑を、此比較研究の方では非常に稀にしか起さして呉れない。そのためにいつも疑惑があつて、なるべく最良の好果をあげる例だけですます様になる。

洒落の印象の少しもない譬喩の特別上等の例はすぐに見つかる。有名な Othiliens Tagebuch の中の Zärtlichkeit と、英國海軍の rote Faden との比較は此種のものだ。もう一つ此處に引用したのは、私がいつも嘆美してあきないし、又その印象がいつも私にこびりついて居るものだが、Ferd. Lassale<sup>フエド・ラスサーレ</sup> が彼の有名な辯護演説 „Die Wissenschaft und die Arbeit.“ の結句に用ひた譬喩だ。——私が今迄あなた方に説いた様に、その一生を Die Wissenschaft und die Arbeit と云ふ標語に捧げつくした男は、彼の人生の行路中にうけた有罪の判決も、云はゞ科學の研究に没頭して居る一化學者が、蒸溜器の破裂から受けるが如き印象しか受けはしない。研究材料の障礙に對しては一時額に皺をよせるが、又その障害がとりのけらるゝや否や、靜かにその研究をつゞけて行く。リヒテンベルグの著作には、洒落になつてゐる譬喩が澤山選んでのせられて居るから、そこから私は研究材料をとつて來よう。

99 「群集の間を、誰の髭も焼かない様に眞理の炬火をもちあるく事は、殆んど不可能だ。」これは確か



に洒落の様だが近づいて見ると、洒落らしい働きは此譬喩自身にはなくて、その附隨した性質から出發してゐる様だ。「眞理の炬火」と云ふ言葉は決して新しい譬喩ではなく、前から使はれたきまり文句になつて居る言葉だ。譬喩さへ成功すればどんな言葉でも慣用語となつてしまふものなのだ。眞理の炬火と云ふ表現に私達は一向譬喩を認めないのに、リヒテンベルグはその譬喩を擴大しそれを演繹して、その譬喩に本來の全力を再び與へたのだ。かう云ふ様に一度すたれてしまつた云ひ方に、新しい息を吹き込む方法は、既に洒落の技巧として私達の學んだ所であり、同じ材料を種々に使用する方法に屬するものだ。

此文章が洒落の味を感じしめるのは、それが洒落の技巧に倣つた事に起因して居るのだとはいかにも考へ易い事だらう。

此批判は同著者の他の洒落味のある譬喩にもたしかに應用出来る。„Ein grosses Licht war der Mann eben nicht; aber ein grosser Leuchter.... Er war Professor der Philosophie.“ (大きな灯火は偉人ではないが、大きな輝き……それこそ哲學界の碩學だ。) 學者を大いなる光明 (Lumen mundi) とよぶ事は、洒落として働かうが働くまいが、以前からあまり有効な譬喩ではない。然しそれに息を吹き込んで、同時に一つの變形を導き出して、そしてかう云ふ第二の新しい譬喩を造り



上げたのだ。

第二の譬喩を造り上げる方法は洒落への條件を含んで居る様だが、譬喩自身の中には洒落は含んで居ないのだから此の例も炬火の例と同じだ。

これと同様な批判的根據から見れば次の例も洒落の様に見える。

「評論は小兒病の一種と見るべきだ。新しく生れた著書を多かれ少かれ襲ふものだ。最も丈夫なものが、それにかゝつて死んでしまふ事もあるれば、弱いものがそれに堪へぬける例もある。大部分のものはそれからおそはれずにすむ。序文をかいいたり、捧呈文をかいいたりして、それを豫防したり、又は自己診断でそれをとつちめようとしたりするが、必ずしも役に立つものでない。」

評論と小兒病との譬喩は、此世に生れ出たものが、どちらもおそかれ早かれ襲はれる事に基いて居る。この譬喩が洒落かどうかを私は決定する勇氣がない。だがこれを次の様に導いて、新しい本のその後の運命も同じ譬喩又は、それに倣つた譬喩で表現する様に出来れば、疑もなく洒落になる。然しその技巧の力で、それが洒落に見えて来るのだと云ふ事を私達は知つて居る。それは「統一」の場合であり、それは思ひ儲けぬ事なのだ。勿論「統一」と云ふ性質そのものは、此場合第一の譬喩と並べられても變りはしない。



譬喩の又別のやり方があるが、その方法は洒落らしい性質が、譬喩の性質とは全く関係ない或る要素から造りあげられるものだ。奇妙な譬喩や不合理に聞える結合を含んだり、或は譬喩の結果として、不合理を生み出す様な方法なのだ。リヒテンベルグの例の多くはこの種類に屬する。「著述家が何を食つたかを研究するのに」、「die gelehrten Fingeweide」(習つた臍もつ)を見る事が出来ないのは残念だ。」「die gelehrten Ein geweide」と云ふ言葉は譬喩によつて初めて領解されるが、本來人をまどはす様な不合理な表徴法だ。この譬喩の洒落らしさはこの譬喩の人をまどはす性質に歸すべきものだらうか。若しさうならば、これは私達の既に知つて居る洒落の技巧の一つである不合理 (Widersinn) による表現と云ふべきだ。

リヒテンベルグは又書物の消化を精神上の食物の消化にたとへて洒落を云つて居る。「Er hielt sehr viel vom Lernen auf der Stube und war also gänzlich für gelehrte Stallfütterung。」(彼は勉強をどつさり部屋に貯め込んで居た。だから恰度學問させられた厩飼なのだ。)

此の同様な不合理な、少くとも奇怪な象徴法が元來洒落を持つて居るのを私達は氣がついて居る。§ 110 „Das ist die Wetterseite meiner moralischen Konstitution, da kann ich etwas aus halten.” (私の道徳的性格の北側で私は何でも我慢してゐるのだ。), „Jeder Mensch hat auch seine



morulische Backseite, die er nicht ohne Not zeigt und die er solange als möglich mit den Hosen des guten Anstandes zudeckt." (誰でも道徳上の臀を持つて居るものだ。それはせつぱうまつた時でなくては見せてはならないし、又出来るだけ長く禮儀のズボンでかくして置くものだ。) 此譬喩に出て来る「道徳上の臀部」は誠に奇怪な象徵法だ。それに本式なひっかけ言葉の „Not“ (譯註、困難、必要の二義があるから、„ohne Not“ は必要なければの意と苦しくない時の二様の意がある) が使つてあつたり、餘り用ひられない「禮儀のズボン」などがつけ加へられて居る。「ズボン」はそれ自身洒落だ。ズボンは元來禮儀にはかせるものなのだから。だから全體から洒落の臭のする譬喩と云ふ印象をうけても不思議はない。かう云ふ譯だから私達は或一部の持つて居る性質を全部を評價するために利用する傾向を持つて居るのに氣が付き出したのである。「禮儀のズボン」がハイネの人を惑はす詩を思ひ出させる。「とうたう私の忍耐のズボン (Hose der Geduld) に穴があいて、いろんなものが芽を吹いた。」

此の最後の二つの譬喩は、上等なしつくりした譬喩には見られない或る共通な性質を持つて居る。それは「自ら卑下する」事で、つまり非常に高尙なカテゴリー——即ち禮儀忍耐と云つた様な抽象名詞——を非常に具體的の性質を持ち且下品なもの——ズボン——と比較した點にある。これ



が洒落にいくらか関係があるかどうかはまだ熟考しなくてはならぬ事情がある。

此「自ら卑下する」性質の特にはつきりして居る例に就て分析を試みよう。ワインベルと云ふ店員が Nestoy の諧謔 „Einen Jux will er sich machen” の中で云つて居る文句がある。その文句は彼が信用ある老商店主として若年時代の事を追想して居る様に想像される。

„Wenn so traulichen Gespräch das Eis aufg' hacket wird vor dem Magazin der Erinnerung, wann die g'woltur der Vorzeit wieder aufg' spert und die Pudel der Phantasie voll ang' raunt wird mit Waren von Ehemals.” (譯註) この文は譬喩だから且又意味深長過ぎるので、譯すに無理が出る。原文をよく味つて戴きたい。想像を交へて外國語を自國語に表現するのは、愉快でない。試みに譯出する。往時を思ひながら店先で信用をうらぎらぬ言葉で、どなり合ひもなく商買が出来る様になれば、以前の問屋も藏をひらいて呉れる、そして今迄夢想して居たあらゆる事が、婚禮の道具と共に店一杯になる。

——„trauliches Gespräch” は睦言ともとれる。„Das Eis aufgehaken” は高調子をやめる事だ。„Magazin der Erinnerung” は思出の店だから、女性の局所かも知れない。„Gewoltur” は圓天井の入口だ。„Pudel” はみづたまりの事だ。これだけのヒントを聞いたらば、此文句が何を譬へて居るか想像がつくだらう。いさかひの後ヒソ／＼と水だまり。その頃の行李一つが仲に入り。以上)



これは明かに抽象的のもとに、非常にありふれた具體的なものとの譬喩だ。然し洒落はその全部又は一部が、店員の毎日の仕事から出て居る譬喩に關係して居る。彼の生活の全部を抽象的にして居るのは「統一」の役目なのだ。

又リヒテンベルグの譬喩に立ち戻らう。「人間の何かしようとする動機は三十二の風向に向けられて居る。そしてその名も風向に似て居るものだ。例へばパン——パン——名譽だとか、名譽——名譽——パンと云つた様に。」（譯註、南南東、東東南の如し）彼の洒落にはよく見られる事だが此場合も、實に秀逸且機智に富んで居り、加ふるに實に鋭利なものだから、洒落かどうかと却つて分らなくなる。文句の物語る内容があまり優れて居ると、洒落としても又すぐれたものだと思ひ違ひをし易いものだから私はその錯誤を避けるために、此洒落の洒落らしさは、實はパン——パン——名譽と云ふ不思議な結合にあるのを注意して、この洒落は不合理による表現法の洒落だと云つて置かう。リヒテンベルグの言葉 „Eine Zweischläfrige Frau—ein einschläfriger Kirschenstuhl.”（譯註、こゝつは譯しやうがない。“Zweischläfrig” などゝ云ふ字はない。二つの睡たきの女とでも云ふか、ダブルベットを一寸思ひ出す。そして „einschläfrig” は眠り込むと云ふ形容詞だ——二つの睡たきの女一人……眠り込む教會の椅子一つ。とても云つて置くか）此言葉の後には、ベッドとの比較がかくされて居るので、「ま



ごつかせる」上に又暗示が働いて居る。一方ではお説教のねむたさを示し、他方では情事と云ふ汲み盡せないテーマを暗示して居る。

私達は以上で次の事を發見した。一つの譬喩がしばしば洒落に見えたので、その印象から私達は、譬喩それ自身が洒落の技巧だと信じた。その結果他の譬喩迄もそれ自身洒落であり得ると證明し得た様に見えて来るのだ。

或る頌詩中のリヒテンベルグの特徴をあげる。「それ等はヤコブ・ベームスの散文に於ける不朽の仕事と同様に、詩に於ける不朽の仕事だ。つまり著者が言葉を持ちより、讀者が意味を持ちよる一種のピクニツクだ。」「彼が哲學的思索に耽つて居る時はあの快い月光を投げかける。だが月光は或る一つの物をはつきりと照すものではなく、何でもかんでも一樣に照すものだ。」

もつと甚だしい強度の「卑下」を傾向として持つ譬喩は「ルカの湯治」の中にある。「カトリツクの坊主は、大きな問屋に雇はれて居る番頭だ。法王を頭首とする教會は大きな店で、その店は彼に一定の責務を與へ、それに對して一定の俸給を與へて居る。彼は一本立ちでない人相當に、だらしなく勤務し澤山の仲間を持つて、大きな商賣では氣のつかない事ではあるが、店の信用は實は彼の一身にかゝつて居り、又萬一破産する時には、彼は食へなくなるから、その店を維持するのが大切



な事になるのだ。所が新教の坊主は、一般に自分が主人であつて宗教店を自分の金で張つて居る、彼は小賣ばかりだ。彼は支配者だから、だらしくはやれない。彼は自分の信用のためには、仲間の信用を蹴飛ばし、眞の小賣人として店先に立ち、大商店の商賣上の嫉妬に對抗し、特にローマの大商店——それは數千の簿記係や荷造人を雇つて、世界各國に支店を持つて居る——その大商店と對抗しなければならないのだ。」

多くの他の例同様に、此例を見ると、洒落らしい印象をうけるのは、既知の洒落のテクニクをもつて居るからだと云ふ事を別にして、譬喩それ自身が洒落らしい感じをもつて居る事是否定出来ない。譬喩の洒落らしさは、思考の表現法として、又は比較の方法としては譬喩自身にくつついては居ないのだから、それを決定する或物が全く見逃されて居るのだ。だから今はまだ譬喩を洒落の技巧に用ひられる「間接の表現法」の中に入れて置くより仕方ない。つまり前に取扱つた洒落の手段よりも、もつと譬喩の場合にはつきりして居る問題迄も未決のまゝにして置くしかないのだ。私達が洒落だかどうかをきめる場合に、譬喩の場合の方が、他の表現法の場合よりも、一層困難だと云ふ事は、其處に何か特別な根據がなくてはならない。

然し此の根據を見出す事も今迄の研究では悲しいかな失敗に終つて居るのだ。私達は恐らく洒落



の種々な性質を研究しながら、その性質があまりに洒落と洒落でないものを見分ける根據に近い關係にあつた場合は、うつかりしてその根據を注意しないで過ぎてしまつたらう。又私達は一つの問題の一方面ばかりに説明をこだはらせて、残る反面を全く見ないで居たかも知れない。今私達は此處で問題の別な半面をつかまなければならぬのだ。

洒落の技巧となり得るものを、私達はもう見逃しては居ないのは確かだらうか。いや見逃して居るのだ。が然し私達は新しい例を研究しながら次の事を確信した。即ち洒落の技巧中最も頻發するもので且重要なものを學んだと云ふ事だ。少くともかう云ふ精神現象の性質に就て、判斷を造りあげるに十分な程度の學問をしたのだ。此の判斷はまだ滯つては居るが、私達は今後どの方面から問題を解決したならばいゝかと云ふ重大な告知をうけて居るのだ。「代償語形成による壓縮」と云ふ興味ある過程が、言葉の洒落の技巧の中心をなして居るのを、私達はかつて學んだが、それと殆んど同じ過程が、夢造り(Traumbildung)のメカニズムの中に發見されるのを暗示して呉れた。

右と同じ様に、思考の洒落の技巧、即ち「はきちがひ」考へちがひ「不合理」「間接の表現」逆による表現」なども残らず「夢の作業」の技巧に外ならない。

夢は「はきちがひ」のために、その外形が不思議なのだ。私達の覺醒時の思考の續きを認める事



を、夢の外観が妨げるのだ。不合理を夢の中に使ふ事が、夢に精神の産物として價值を與へ、また大家達をまどはして、精神活動の錯裂、批判道德理論の停止を夢造りの條件と假定させるのだ。夢の「逆による表現」はありふれたものだから、俗な誤謬だらけの夢判斷の本にさへ、それがあつてある。「間接の表現」即ち夢の思考を諷示により、又はその一部分を譬喩と同意義の象徴によつて代へる事は、夢の表現法と、私達の覺醒時の思考との相違點だ。

洒落の作業の方法と、夢の作業の方法とが非常に似て居るのは偶然とは云へない。この相似を證明し、その根據を見究める事は後章に譲らう。



## 洒落の傾向

前節の終に私は、Heineがカトリックの僧を問屋の使用人に譬へ、又新教の僧を小賣商人に譬へたことを書いたが、其際、かう云ふ譬喩はやるものでない事を私に斷定せしめる様なある遠慮があつた。私は讀者の中に、宗教界や、政界で人々から尊敬をうけてゐる人も少しはあると思ふ。その人々はその譬喩を憤り、腹立ちまぎれに、その譬喩が自身にむけられたものであるか、或は他人のお附合に利用されたものが區別がつかなくなることもあるかも知れない。他の譬喩に於て、たとへば「いろ／＼の物に哲學的な光をなげかける月光」の様な、譬喩の場合は、かう云ふ一部の讀者が私達の研究を妨げる様な悪影響は心配するには及ぶまい。最も敬虔な人こそ、吾々の問題を批判しようと關心を持つ人々なのだ。

洒落をきく人に起るさまざまの感じは自分と關係のある洒落ならば、その洒落の性質は容易に推測出来るものだ。洒落は、或場合は他に何等目的をもたない自己目的であり、他の場合は次の様な目的に使用されるものだ。即ち傾向的 (Tendenzios) になるのだ。特に傾向を持つてゐる洒落はそ



れを注意して聴かうとしない人を、傷つける虞れがある。

傾向をもたない洒落は Th. Fischer によつて概念的な洒落 (abstrakter Witz) と名づけられてゐる。私はそれよりもむしろ無邪氣な洒落 (harmloser Witz) と云ひたす。

私達は今迄、洒落をその技巧となつて居る材料によつて、言葉の洒落と考への洒落の二つにわけてゐたので、こゝでは新しくそれをまた分類して見なくてはならなくなつた。

言葉の洒落及考への洒落といふ分類と、概念的な洒落と傾向をもつてゐる洒落といふ二つの分類は、お互には何の關係もない。それは出来あがつてしまつた洒落の全く無關係な二つの分類なのだ。

複雑な「考への洒落」の技巧は主として著明な傾向を表すために用ひられるもので、だれでも、

「無邪氣な洒落」は主として「言葉の洒落」であるやうな印象をすぐ受け易い。「無邪氣な洒落」といふものはたゞ「ひっかけ言葉や」(Wortspiel) または「韻をふむ洒落」でもあるが、又同様に此手段は「考への洒落」のすべての手段として用ひられるものだ。「傾向をもつ洒落」が、たゞ單に「言葉の洒落」だけの技巧でも作られるといふことを示すのは何んでもない。だから「遊び」(spielen) といふ固有な呼び方をする洒落が、往々無禮千萬にも、人を傷ける様な傾向をもつ事があるが、しかしその洒落は無論言葉の洒落なのだ。



すべて洒落のうち最も惡意のないのはやはり言葉の洒落だ。たとへばよく引き出す例であるが、同じ材料を一種特別の變形によつていろんな風に使用する *Schüttelreime* シュッテルライム を示す。

„Und weil er Gerd in Menge hatte,—lag stets er in der Hängematte”

(彼は金を澤山もつてゐたので、いつもハンモックにねてゐた。)

かう云ふ罪のない謙遜な詩句に出會つた時の喜びは、私達が洒落に對して認める様な喜びと同じであることを否定しないで貰ひたい。

「無邪氣」な「考への洒落」の好例は、私達が既に二三學んだ *Lichtenberg* の譬喩の中に、澤山ある。それを下に附加へて見よう。

„Sie hatten ein Oktavbändchen nach Göttingen geschickt und an Leib und Seele einen Quartanten wieder bekommen.” (彼はゲツチンゲンにハツ折の本を送つて、身體と魂に四つ折の本を貰つた。)

„Um dieses Gebäude gehörig aufzuführen, muss vor allen Dingen ein guter Grund gelegt werden, und da weiss ich keinen festeren, als wenn man über jede Schicht pro gleich eine Schicht kontra aufträgt.” (この建物を都合よく造り上げるには、何よりも先づいゝ土臺を置かな



ければならない。それには一層の上に更に一層と重ねて土を盛るのが一番堅固だ。）

„Einer zeugt den Gedanken, der andere hebt ihn aus der Taufe, der dritte zeugt Kinder mit ihm, der vierte besucht ihn auf dem Sterbebette und der fünfte begräbt ihn.“

（第一のものが思想を産み第二番目の人が其洗禮に立ち合ひ、第三番目の人が子供をうませ、第四番目の人が、其の死の床を訪れ、第五番目の人がそれを埋葬する。）（綜合をもつ譬喩）

„Er glaubte nicht allein keine Gespenster, sondern er fürchtete sich nicht einmal davor“  
（彼は單に幽靈を信じなかつたばかりでなく、それが出ても一度もそれを恐れたことがない。）この最後の洒落はたゞ不合理を表現しただけだ。その表現法はごく些細にしかみとめられないものを持ち出して、其内容を肯定させる時には比較級であらしてゐる。だから其洒落の装ひを捨てゝしまへば、次の様に言へるだらう。「幽靈を恐れない様になる方が幽靈の現れる機會をなくするより容易だ」これはもはや全然しやれでなくなる。しかし正しい云ひ方だ。今迄あまり低く評價され過ぎてゐた精神病學的な知識だ。それを Lessing<sup>レッシング</sup> が有名な言葉で言つてゐる。

„Es sind nicht alle frei, die ihrer Ketten spotten.“（束縛を嘲つてゐるものはまだ自由では



私はこの機會を擲んで、いつも起りやすい間違を一掃してしまはう。「無邪氣な」又は「抽象的な」洒落は決して内容のない洒落ではない。

唯「傾向」の方面からの區別なのだ。

今迄の例の示してゐる様に「無邪氣な洒落」即ち傾向をもたない洒落も非常に充實した内容を持つて居るもので、存在價值が十分あり得る。

洒落の内容は思想の内容であつて、洒落そのものとは別のものだ。たゞ、その思想の内容が特別の形をとつて洒落として表現されるのだ。

たとへば時計工が精巧な機械をいつも高價な容れ物で飾る様に、洒落の場合に於ても、洒落の素晴らしい働きがそのまゝ内容に富む思想の飾に利用されても不思議はない。

「考への洒落」に於て考への内容と、洒落の外装とののはつきりした區別を認める事が出来れば、私達の洒落に對する判斷の不確實さを取り除く事が出来る。

一寸妙に聞えるかも知れないが次の事は本當だ。即ち私達が洒落の内容とその働きとを一緒にうけ入れると愉快だが、また一つの因子と他の因子との間の區別がつかないで困ることもある。かう云ふときは洒落の分解がその區別を明かにして呉れる力がある。



「言葉の洒落」に於ても同じことに會す。

„Die Erfahrung beteht darin, dass man erfährt, was man nicht wünscht erfahren zu haben” (經驗したくない事も經驗しなくてはならないのが經驗だ)といふことを聞けば、私達は錯覺に陥つて、一つの眞理を覺つたと思ひ込む。そして其錯覺は、この假裝の中に「人は障害によつて伶俐になる」(K. Fischer)といふ平凡な言葉を發見するまでは續くだらう。„Erfahrung”といふことをたゞ erfahren といふ言葉だけで定義してあるので、此優れた洒落の働きで我々は錯覺に陥り、文章の内容を高く見積りすぎるのだ。

同じ様なことが Lichtenberg の綜合の洒落(Unifizierungswitz) „Januaris”にも明かだ。その洒落は「正月の希望は他の希望と同様に極くまれにしか充たされないことは、吾々は以前から知つてゐる」といふことより他には何も言ひ表してゐない。

之と全く反對のことを私達は他の洒落で經驗した。それ等の洒落では明かに、考への優秀なものと正しいことが私達を迷はしたのだ。だから私達はその文章を光彩ある(glänzend)洒落と名づける。時には考へばかり光つてゐて、その洒落の働きはまるで弱い事もある。Lichtenberg の洒落は、その考への中心はしばしばその洒落の装ひよりも高價だ。その洒落の装ひを私達は第一の例で



既に重く見積り過ぎた。

たとへば「真理の炬火」(Fackel der Wahrheit)に就ての記述は殆ど洒落でなく、たゞ、その記述があまりすぐれたものであるのをそれを特別な洒落であるやうに重大視したのかも知れない。

Lichtenberg の洒落は何よりも其考への内容及びその命中確實な點ですぐれてゐる。Goethe<sup>ゲーテ</sup>がこの大家に就て云つてゐるのは正當だ。——彼の頓智や戲談の中には何か問題が隠されて居る。もつと正當に言へば問題に對する答に觸れてゐるのだ。たとへばその頓智をあげて見れば、

„Er las immer Agamemnon anstatt angenommen, so sehr hatte er den Homer gelesen.“

(彼はそれ迄に何度となくホーマーを讀んだのだが、いつも „Angenommen” を „Agamemnon” と讀んで居た)「馬鹿らしさ」と「言葉の同音」(Dummheit + Wortgleichklang) を使つて彼は彼の誤讀の祕密そのものをあばいたのだ。技巧が私達を満足させない、も一つの洒落がある。

毛皮で見ると猫の眼のあつた所に毛のない二つの穴があいてゐるのを彼は不思議がつた。(前出)この觀察が一寸見かけは馬鹿なことに見えるが、その實、この馬鹿々々しい記述の後には、動物の構造の目的論といふ大きな問題が隠されてある。

眼瞼の開いてゐる所にどうして角膜が出来るのかといふことを發生學が教へて呉れる迄は、決し



て明かにならないのだ。

私達は考への内容と洒落の働きとを區分せず、一つのまとまつた印象を洒落の文句からうける。この事は記憶して居なくてはならない。多分と同じ様なことが、もつとあとで出て来るであらうから。

X

X

X

洒落の本態に關する私達の理論的研究には「無邪氣な洒落」は「傾向的な洒落」よりも價值があり、又同様に内容のないものゝ方が深い意味のあるものよりも理論的研究には都合がいゝ。「無邪氣な」ひつかけ言葉と、内容のないひつかけ言葉とは、洒落の問題をもつとも純粹に飾りなく私達に捧げてゐる。傾向や深い意味は洒落を判斷する上の錯誤が起り易くて間違ひをおこす虞れがある。

私は出来るだけ正直な言葉の洒落の例を選ぼう。お化粧最中に訪問者の知らせをうけた少女が叫んだ。„Ach wie schade, gerade wenn man am anziehendsten ist, darf man sich nicht sehen lassen.“ (譯註, „Anziehend“ は着物を着つゝあるの意と人に刺戟を與へるの意とがある。で全文は——お氣の毒様、最も „Anziehend“ の時ですから見ちゃいけませんよ。)

この洒落を、傾向のない洒落と云つていゝかどうかといふ疑念が起るから、その代りに、心から



馬鹿げた、そんな疑念の起る筈のない他の例をあげよう。

私の招かれたある家で食事の終りに Roulard と稱する菓子が出された。その菓子を作るには料理女の技術が必要であつた。「家でおつくりになつたのですか？」と客の一人が尋ねた。「さうです、Home-Roulard (Home-Rule) (譯註、家庭の法則)です」と主人が答へた。

私はこの場合、洒落の技巧を研究しないで、その代りに最も主要な要素にだけ注意を拂はう。この即興の洒落を聴くことは、その場にある者に——私にははつきり思ひ出される——満足を與へ、皆を笑はせた。

これに似た無數の例に於ては聴く人の興味は傾向や考への内容では呼びおこすことは出来ない。このやうな興味は、洒落の技巧のみに關係がある。今迄吾々の述べた洒落の技巧——短縮、見當違ひ、間接の表現等は皆、聴く人に興味を呼び起させる能力があるのだ。然しどうしてさういふ能力が出来て来るのかは、まだはつきり感知出来ない。

簡単に我々は洒落の説明に對する二つの定理を得られる。第一は、洒落の性質はその表現の形に關係があるといふことである。第二の定理に就てはまだ何も學んでゐない。これは私達が今迄に得た經驗にふくまれてゐるものとは無關係なのだ。私達が洒落の分解をしながら、その意味を注意ぶ



かく保ちながら、その表現を他のもので代へた場合には洒落の性質が失はれるのみならず、人を笑はせる力まで、つまり洒落に對する喜びまで消えてしまつたことを私達は思ひ出す。

此處で私達は何よりも先づ哲學的な文獻を分析しなければ、研究をすゝめることは出来なくなつた。洒落を滑稽の中に算入し、その滑稽を美學の中に論じてゐる哲學は、美學の概念の特徴を次の様に述べてゐる。——吾々の生活上の大きな要求をみたすためにはあるものからまたあるものに就て何物も望まず、そのものを使はずにそのものを觀察し、或は又そのものゝ表現のもつ興味に満足しなくてはならない。この興味この表現の種類は純粹に美學的であつて、たゞそれ自身に根據を持ち、自身の中にその目的を有ち、他の生活上の目的をみたすことはなう。(K. Fischer)

私はこの K. Fischer の言葉に殆んど反對しない。聽く者に興味を呼びおこさせるといふ目的が洒落の働きの中には明かに隠されて居るから、洒落の働きは目的がないとは云へない。かう主張すれば、彼の考へを私は私自身の言ひ方で表したことになるだらう。

どう云ふ場合でも私達は何かする意志がなくてその事が出来るかどうか疑はしい。私達は自分の腦を、必要な満足を得るために使はない場合は、快樂のために働かせ、又その働きの中に快樂を見出さうと試みる。このことはすべての美學的觀念の中に横はつてゐる約束であると想ふ。しかし私



はこの問題をおし通さうとする程美學に就てはあまり知らない。しかし私は、今迄得た二つの洞察から出發して洒落に就て次の様に主張することが出来る。即ち洒落は、智的又はその他の精神現象から快樂を得ようと企てゐる一つの仕事なのだ。勿論まだ他にも同じ目的をもつてゐる仕事はある。かう云ふ色々の仕事は精神作用のどの領域から快樂を汲み取らうとするものかは、その際用ひられた手段によつて區別されるであらう。我々はそれを現在はまだ區別することは出来ない。

だが快樂を生みだすためには、どうしても洒落の技巧があつて、その技巧の力で傾向の方が一部分は節約されるのだ。省略された傾向と云ふ關係をはつきり心にとめて置いていゝ。私達は洒落の働きをうみ出す技巧と同時に、聽く人の興味をよびおこす「謎」をとかうとしたので、事を簡單にし、また理解し易くする目的で、傾向をもつた洒落をしばらく顧みなかつた。

今茲で私達は洒落の傾向は如何なるものであるか、また如何なる方法でこの傾向が利用されてゐるかを説明して見なければならぬ。

洒落をその快樂の由來に依つて研究しようとする場合には傾向のある洒落を決して度外視してはならない事を、私達は既に觀察によつてよく覺えて置いた。「無邪氣な」洒落の快樂を喚起す働きは程のよいものだ。大きな喜と軽い笑が、その聽く者に與へることの出来る全部であつて、この效果



によつて、その「考へ」の内容の審査が幾分なり出来る事は前にのべた適當した例で認めた通りだ。傾向のない洒落は、決して笑の爆發は得られない。傾向のある洒落ならば爆發性の笑を得る事は六ヶ敷くないものだ。この兩者の技巧は同じなのだから、傾向のある洒落はその傾向に依つて無邪氣な洒落の達し得ない快樂の源に達する事が出来るのだといふ想像が起つて来るのは當然だらう。

さて洒落の傾向は容易くつきとめられる。洒落が自己目的であつて、無邪氣にその本性を出してゐる場合は、二種類の傾向がある。此の二つの傾向はある立場から見れば同一とも云へる。それは、*feindseliger Witz* (惡意ある洒落、即ち攻撃、諷刺、防禦等に用ひられる洒落) かまたは *obszöner Witz* (猥褻な洒落)(即ち暴露に用ひられる洒落) の二つだ。勿論洒落の技巧の種類——言葉の洒落かまたは考への洒落かといふ——とこの二つの傾向とは關係はないのである。

次に私は更に進んで、どんな方法で洒落に傾向が與へられるかといふことを説明しなければならぬ。私はこの研究では敵意のあるものでなく、暴露(*Entblössung*)の洒落を示した方がいゝ様だ。然し此暴露の洒落を材料としても、此種の洒落を有形の事物から無形の事柄の方へ移して行くと、私達の研究には都合が悪くなるが、然しそのために浮腰になつてはいけない。すぐに洒落の境界にぶつかるが、その境界こそ私達の研究の暗點を照らす事になるのだから。



„Note“ (猥談) といふ言葉のもつ意味は誰にも分る。つまり「性的な事實や情事を物語によつて故意に重大視することなのだ。何んといつてもこの定義がいちばん角が立たない。生殖器の解剖學や生理學の講義は少しもこの定義に牴觸してゐない。それから又、猥談といふものは性的に興奮しやすいやうな人達に向けられるものだ。猥談を聞いて刺戟をうけ、その結果獨りで性的興奮を起すやうな人に猥談は向けられるものだ。又この興奮の代りに羞恥と、狼狽を起すこともある。それ等のものはたゞ興奮に換へられる一つの反應にすぎないもので、また遠廻しに、その興奮を自白したことになる。だから猥談といふものは元來婦人に對して向けられたものであり、又それを誘惑しようとする試みでもある。もし或る男が男仲間で猥談を話したり、聞いたたりすることを喜ぶ様なききは、社會的な妨害によつて現れる事が出来なかつた元來の境遇が、そこにも現れて來たのである。猥談を聞いて笑ふものは、性的暴行 (sexuellen Agression) を傍觀した人の様に笑ふものだ。

猥談の内容をなしてゐる性的なものといふのは、兩性の間の珍しい現象の外、尙羞恥それ自身がかくされてある性的の結合や、其雰圍氣にまきちらされる排泄物までを含んでゐるのだ。その雰圍氣は小兒時代の性的生活と同じであり、そこには性を表現するための、一つの排泄口が存在してゐて、その内部のものは、性的なものであるかまたは排泄物 (譯註、分泌物と云ふ言葉が醫學にある。精液



はそれだであるかは正しくは區別出来ないのだ。精神病學の領域では 性の中に排泄物を包括してゐる。それは、子供でも老人でも同様に考へられる。

猥談はそれを話すに都合のいい様な、性的に少し違つた人をさらけ出す事がある。

又猥褻な言葉をならべることによつて、猥談はその材料になつた人の身體の一部分とか、又はその機能を表現させることを強ひて置いて、話す人は自分自身でさういふことを隠してゐるやうに思はせる。これを要するに、性的な事實を裸にして見せるといふことが、猥談の元來の動機であることは疑ひない。

また根本にたちかへつて説明をつけよう。性の神祕を發かうとする傾向は我々の *Tibido* (快感追求) の本來の成分をなしてゐる。この傾向は一次的には想像だけしかしなかつた性其物に觸れる興味に立ちかへらうとする試みである様だ。

かういふ場合にしばしば「見る事」から「觸ること」が離れて出て来る。

*Schaubido* (視覺による快感追求) と *Tastibido* (觸覺による快感追求) とは誰れに於ても二つの種類、自動的と受動的、男性的と女性的とにわかれる。さうしていつもそのどちらか一方が優勢になることで、性の特徴が形成されるのだ。小さな子供では自己露出を認め易い。この性質の



芽が餘り勝手に育つか、または抑へつけられて、普通の運命を辿らないときは生殖器露出癖 (Exhibitionismus) といはれて性の倒錯として成長する。女性にあつては性の羞恥心が非常に強く働くので、受動的な露出の傾向が殆んど規則正しく伸びてゆくものだ。女性に於て認められた一定の露出症の標準は、いくらでも延長する事が出来、又習慣や状況によつて形の變へられることを私は只茲に暗示だけして置かう。

男性に於てはこの高度の傾向は Libido の一部分として存在し、性的行爲の入門となつてゐる。この傾向を女性に對して働きかけさせるために談話を利用するには二つの理由がある。第一は女性に自分を知らせるため、第二は談話の中の表現によつて女性を刺激してそれに相當した興奮を起させ、受動的な露出の傾向を惹起させるやうにするためだ。

このやうな目的のある談話はまだ猥談ではないが、いつともなく猥談に變つてしまふものだ。女性の方で用意が整つてゐるときには猥褻な言葉はたちまち生命を失ひ、直ちに性的行爲に落ちてしまふ。時としては女性の用意が速かに整へられなくて、其代りに其防禦反應が現れることがある。さうなれば性的の刺激をもつ話は猥談として自己目的となる。性的な攻撃が行爲にまで進んでゆくのを止められたときは、興奮をよびおこすことに時を費し、女性に於てはその性的攻撃の表徴しめしを樂



しむばかりである。そんなときは攻撃は *Libido* の興奮と同じ様な意味にその性質を變化する。

攻撃は明かに敵意を有し、慘酷であるからその障害に對し、性慾のサディスズの傾向の助けをかりるのだ。

女性の後に引かない性質はまた、猥談をつくりあげる一つの條件となる。此性質は最も重要で且他の勞力は全く不用の様に見える。女性の此種の矛盾が定型的に現れる場合はその場に他の男、又は第三者がゐたときである。そのときは女性は仲々素直に話をきかない。この第三者が猥談の發展には重大な意味をもつもので、特に女性のゐる場合は一層猥談は發展する。田舎や、貧乏人の宿屋では、女給や、女主人が出て來ると、すぐ猥談が始まることをよく見うける。

上流階級では之と反對に女性が現れて來ると、猥談が終つてしまふ。さういふ時男たちは、女が羞恥心を起すだらうと考へて、男だけになるまでその談話を延ばす。かういふ風にして段々と婦人の代理に立つ傍觀者——いや傍聽者が出來、あだかも猥談を決定する法廷のやうなものになつて來て、そのもの達がいつともなく洒落の性質に親しんでゆくのだ。

かう云ふ場合には第三者即ち傍聽者の役目と猥談そのものゝ内容とに私達は注意の的を向ける。傾向のある洒落は一般に三人の人を必要とする。即ち第一は洒落を構成する人、第二は敵意又は



性的攻撃の的となる人、第三は洒落の目的である興味をよろこぶ人である。かう言ふ關係に就いての深い根據はもう少し後で研究するとして、さし當り、洒落を笑ひ、その面白味を楽しむのは洒落をつくつた人でなく、活動しない傍聴者であるといふ事實を忘れない様にしておかう。同じ譯で猥談にも三人の人間がある。その顛末は次の様に言へる。第一の人に *Libido* の衝動が起り、その人の女性に因つて起るべき満足が妨げられると同時に、第二番目の人に向けられた惡意のある傾向が、第三番目の人まで巻きこんでしまふのだ。第一番目の人の猥談は第三番目の人の前に女性といふものをさらけだし、この第三番目の人は、彼自身の *Libido* を苦もなく満足させることによつて誘惑されて、傍聴者となるのである。

注目すべきは、かう云ふ猥談の取引が一般の人々に喜ばれ、快活な氣分をまちがひなく起すことだ。傾向のある洒落は此複雑な過程を性質上持つて居るものではあるが、猥談自身の中には洒落の特徴となるべき形式的なものはないことを見のがしてはならない。勿論露骨な猥談を述べることは第一番目の人に満足を與へ、第三番目の人に笑を與へる。

私達がもし上流社會に仲間入りすれば、その時はじめて洒落の形式的な條件も仲間入りをする。猥談が洒落味を帯びてゐてしかもちつと隱忍してをれば猥談が洒落になる。かう云ふ場合主として



猥談の手段となるものは諷刺だ。即ち少しほめかしたり或は遠廻しに匂はせて、聴く人が自分の心の中で再び完全な猥談にくみたてられる様な手段が用ひられる。

猥談の中に直接示されたものと、聴く人が猥談によつて故意におこす刺戟とが平均しなければしない程洒落はすぐれたものとなり、ます／＼高尚に、上流社會にとびあがる事が出来る。大ざっぱな又は細かい諷刺の他に洒落味を帯びた猥談の手段としては、言葉及び考への洒落のその外の色な方法が自由に使はれてゐる。茲に於て遂に、洒落がその傾向によつて何の役目をしてゐるかを知ることか出来るだらう。洒落は慾望（性的ならびに鬭争的）を、其障害をのぞいて満足させることが出来、又この障害をよけて、障害のために得られなかつた快樂の源から快樂を汲みとらせるのだ。この障害といふのはつまり、高等な教育や社會の階級に相當して、女性が性に關する事を露骨に暴露出来なくなつて居る事を指さして居る。

最後までゐるだらうと思はれた女性は居なくなつてもいつまでもゐるものと思ひつゞけられる。だから彼女の影響は彼女が居なくなつても男たちにまだ尻込みをさせるのだ。上流の男たちが下層階級の女たちと仲間になれば、その洒落氣のある猥談はたちまち簡單なものに墮ちてしまふ。

女性にも男性にも僅かではあるが、露骨な猥談を楽しむことを妨げ、又それを阻止する様にする



力が働いて居る。これを吾々は壓迫 (Verdrängung) と名づける。それに因つて私達は重篤な病氣の場合に、苦痛の全部と、意識に及ぼす其影響とを遠ざけ、またいはゆる精神心經症 (Psychoneurose) をおこす主因である精神作用と同じ様なものを認める。吾々は文化や高等教育がこの壓迫の構成の上に大いなる影響を及ぼすことを認め、又同じ様な條件で、精神統制の上に變化が起り、嘗て愉快と感じたことを現在不愉快と感じ、あらゆる精神力を否定することになると思ふ。文化による壓迫作用のために原始的な今では私達の批評の對照であつた快樂の可能性は失はれてしまふのだ。人間の心にとつては斷念といふことはなかなかむづかしい。だから傾向のある洒落がそれに對する一つの手段となつて、斷念を取消し、失はれたものを再び手に入れる様にするのだ。もし私達がある細かい猥褻な洒落で笑へば、私達は百姓が大ざつばな猥談で笑つたと同じものに就てわらつたことになる。どちらの場合も興味は同じ源から發してゐる。

しかし、吾々が大ざつばな猥談に就て笑を催せば、それは何んのたしにもならず、たと耻かしい思ひをし、それが不快に感ぜられるだけだ。私達は、洒落の助けを借りて始めて笑ひ得るのだ。

吾々が始めに想像した通り、傾向のある洒落は、すべての興味が其技巧とむすびついてゐる無邪氣な洒落よりも、別な快樂の源を私達に制定して呉れたのだ。



私達は傾向のある洒落に於て、どの興味が技巧の源から、どの興味が傾向の源から發したのかを私達の感で區別することは出来ない。このことは新しい重大な問題だ。つまりどちらによつて笑ふのか嚴密にはわからない事になる。すべての猥褻な洒落に於てはその洒落の價值が形式と關係ある限り、私達はその洒落の價值に對する判斷の錯誤に陷つてしまふ。これ等の洒落の技巧は甚だ貧弱であるが其笑の効果は素晴らしいものだ。

X

X

X

偕、私達は洒落の役目が、鬭争的傾向をもつて居る場合にも、上にのべたと同じであるかどうかを研究しよう。

勿論この場合にも同じ條件にぶつつかる。私達の隣人に對する鬭争的衝動は、各個人の幼年時代並びに人類文化の幼年時代から、吾々の性的追求 (Libido) に於けると同様な束縛、並びに排斥の支配をうけてゐる。私達はまだ、敵を愛し、右の頬を打たれた後で左の頬を出す程進歩してゐない。嫌はれてゐる修身の本は今でも、昔の通り同じ小さな種族が一致するためのものであつた特徴をもつてゐる。私達が私達全部を一つの種族に屬するものだと思へなければならぬと同様に、異種族に對する制限をとり去つてもいゝわけである。私達の獨立した團體の内部には争鬭を禁止するもの



が支配してゐる。それを Lichtenberg がきびしく言つてゐる。「今御許し下さいといつたかと思ふともう、人の耳を擲つてゐる。」法律で禁ぜられてゐる暴行は、言葉による罵詈で鬱憤を晴らされ、人間の激情の間の連絡をよく知つてゐれば „Tout comprendre c'est tout pardonner” (すべてを理解すればすべては許される) になつて、私達の邪魔をする同胞を怒らせる様なことは出来ない。子供には敵對行爲の強い素質があるが、後年の人格的修養が火の様なことを教へて呉れる。即ち野卑な言葉を用ひる事がふさはしくなくなり、喧嘩腰の人にも、喧嘩の手段として使へない様ないんなものが段々殖えて來るのである。さうなれば私達は、敵意を行動にうつすことを斷念しなければならぬ。またそれには冷靜な第三者の妨害もある。この第三者の興味はたゞ個人の治安の守護といふことにある。全く同じ様に私達は性的衝動の際にも罵詈の新しい技巧を、この第三者を呼び集めて敵に對する目的でつくり出した。私達は敵を小さくし低くし輕蔑し、滑稽に思ひながら、第三者が何の苦勞もなく、其笑で生んでくれた勝利の快感を遠廻しに樂むのだ。

さて私達は鬭爭衝動に於ける洒落の役目に就て準備しなければならぬ。洒落は私達の敵に滑稽味を用ひることを許して呉れる。私達が妨害のために公然とまた意識的に言ふことの出来ない事を間接にほめかし、束縛をのがれ、達し難くなつてゐる快樂の源をひらかうとする事なのだ。この



洒落は更にその快感をうることによつて敵を籠絡するもので、無邪氣な洒落がいつも私達にその内容を買ひかぶらせ過ぎたとは全く違つて居る。笑ふ門には福來る (Die Lacher auf seine Seite ziehen) といふのはこの場合最も適當した言葉なのだ。

前節に於て、N氏の洒落を處々に見うけた。それらは残らず惡口である。即ちN氏の叫ぼうとしたことは、「しかし、農務大臣自身牡牛だ!」「自慢してゐる奴と休まして呉れ」「私はこの歴史家が書いたオーストリーのナポレオンに關する論說よりくどくしいものを讀んだことがない。」であつたらう。

然し彼のお上品な個性が、これ等の批判のかういふ風に表現することを邪魔したので、その判斷は洒落の助けを借りたのである。その洒落は聽く人に歓迎された。洒落でない形式ならば眞理の内容はむしろ或は多かつたかも知れないが、その形式ではこんな歓迎は見られなかつたらう。これ等の洒落は参考になる點が多い。そのうちの二つ即ち „Poter Fadian“, は最もすぐれたものであらう。何が私達に笑を強ひるのか、また貧乏文士に不正でもあつたかどうかといふ問題から完全に私達の興味を他にむけさせるものは何であるか? たしかにそれは洒落の形式、即ち洒落そのものだ。然し、其際何を我々は笑ふのであらう? 疑もなく赤毛だと示された人自身であり、特にその赤毛



に關してある。教養は身體の缺陷を嘲笑する惡習を止めさせ、又赤毛は笑ふべき身體の缺陷でないことを教へる。

しかし此洒落は學童や、一般人やそれから尙市町村議員または國會議員の中のある教育程度のものにまで又面白い問題である。そんなわけでN氏のこの洒落は十分大人になり、又敏感な私達を歴史家X氏の赤毛を小學兒童と同じ様に笑はせることが出来る程うまかつたのである。しかしこれはたしかにN氏の目的ではない。洒落の自由自在な人でも果してその確實な目的を知つてゐるかどうか疑はしい。

もし此等の例に於て、洒落によつて取除くことが出来る衝動に對する障害が内部の——惡口に對する美學的反抗性質であれば次の場合では、外部の性質である。

公國の君主が、彼に非常によく似てゐる見なれぬ男に尋ねた。「お前の母は宮中に仕へたことがあるか！」それに對する即座の答「いえ、しかし私の父親が」

尋ねられたものはたしかに、かゝるあてこすりて愛する母の思ひ出に敢て侮辱を加へたこの厚顏しさを和げ抑へた。しかしこの鐵面皮は殿下であり、頭を下げた事のない、又一度も侮辱されたことのない人だ。それに復讐を企てるにはだれでも一身を犠牲にしなければだめだ。だから侮辱を黙



殺したとでも言ふべきだらう。幸にも洒落は安全に報復する道を見つけて呉れたので、綜合（Defizierung）の技巧をもつてあてこすりを侮辱したものに向けることが出来た。この洒落の印象は傾向によつて甚だしく影響されてゐるので、洒落を含んだ答へにばかり向つてゐて、ともすると、侮辱した人の問自身が諷示によつて洒落になつてゐることは忘れ勝である。

罵詈や侮辱的な答等が外部の事情によつて妨げられることはしばしばあることなので、特に好んで傾向のある洒落が、かう云ふ場合、權力を漁る高官達を攻撃し批判することに使用される。洒落はそのとき、かゝる權力への反抗壓迫からの解放を示すのだ。かう云ふ際にはカリカチュアへの刺戟も起る。そのカリカチュアは、出来はわるくとも單にその權力に對する反抗を表すのに功勞があるといふ理由だけで十分笑へるものである。

傾向のある洒落が、内部の制止のため、または外部の事情によつて、あからさまに輕蔑出来ない偉大なもの、價值あるもの、權力あるものを攻撃することに適してゐることが領解出来たので、今度は價值のない又氣力の失せた人間と關係のある洒落の特殊の部類を理解したくなつて來た。

私は「考へる洒落」（Gedankenwitz）の種々な技巧を研究する際、一つ一つに就て學んだ結婚媒介業者の話を思ひ出す。その二三の例即ち「彼女はまた聾でもある。」「だれが何をこの家へ貸し



たのだらう」といふ例では媒介業者は輕率な、無考へな人間として笑はれ、彼のもつ眞實が自動的に吹き消されて滑稽になつてゐる。然し私達が傾向のある洒落の性質に就て經驗したことは、此男の低脳さから來る私達の満足 of 程度と一致してゐるのではなからうか。此の低脳さを洒落は嘲つてゐるのではなからうか。これはむしろもつと重要な事を云はせんとして、洒落が仲人を前へつきとばしたのではなかつたらうか。實際さうだつたのだ。此考へは確かに否定出來ない。

上に述べた媒介業者の話の意味は續けて説かなければならない。だが私はこれ等の話を今更ら解釋する必要はないのだ。たゞこれ等の話に滑稽 (Schwänke) を見出し、それを洒落の性質だとすればよいのだ。かうして初めて洒落の主觀的制限がなりたつ。私達はこゝでは單にそれを注意しておくだけで、その研究は後廻しにしなければならぬ。此主觀的制限の許すものゝみが洒落なのだ。

此主觀的制限から見て洒落と認められるものも、時として他の標準から見れば單純な滑稽話と見られるかも知れない。かう云ふ點で洒落に疑點があるならば、かう云へばよいのだ。洒落には一つの觀察面——私達には滑稽面だ——正面があつて、それを見て、ある人はすぐに満足するが、他の人はその面の奥迄ものぞき込まうと試みる。

この疑點があるためにかう云ふ物語のうしろにかくれて居る或物を一目見たゞけでは分らせない



様にしてゐる。言葉を代へて云ふと、かう云ふ物語のうしろにかくされてあるものに對する探索の目を、この正面觀が眩ましてゐるのではないかといふことが益々疑はしくなる。とにかく、この媒介業者の物語が洒落であるとして、その物語は單に言ふべきものゝみならず、言つてはならない物をもその正面觀によつてかくしてあるので、非常にいゝ洒落になつてゐる。説明をつゞけてかくしてあるものを發き、またこの様な滑稽面をもつ物語を傾向のある洒落としてしまふのは次の様なことになるだらう。即ちかくさなければならぬ眞實を、不注意からなくしたものは假裝しなくともすむ氣輕さを却つてよろこぶものだ。これは正しい且つ深い心理學の見解だ。かゝる内部の賛成がなければ、だれも、かくすべき眞實を明るみにもち出さうとする自動性(Automatismus)に打勝つことは出来ない。

かういふわけで媒介者の笑ふべき人物も憐れな同情に値するものに變るのだ。もしその男が心にもつてゐる眞實を残らず一度にしゃべりつくしてしまつたと同時に、假面をなげすてゝ重荷を下した時は、どんなに幸福だらう。彼はその一件が駄目になり、花嫁が青年の氣に入らないことに氣が付くと同時に、青年の氣に入りさうもない尙一つのかくされた缺點をも、喜んでしゃべつた。また彼はあの機會に細かい點まで證明して、最後に彼が骨折つてやつてゐる花嫁を輕蔑した言葉をしや



べつてしまった。「だれがこゝの人に物を貸さう、そんなことが！」世間にありふれた事だが、娘を縁づけたいばかりに詐欺の様なことを正しい行だと信ずる両親、こんな準備によつて結婚させられる哀れな娘のかう云ふ出發點をもつ不當な結婚等に關しては全く笑ふべきだ。媒介業者は當然かう云ふ批判をしやべつてもいい人間なのだ。何故かと云へば、彼はかゝるものを悪用してはならないことを知つてゐるからだ！しかし彼はそれによつて生活してゐる貧乏人だから、そんなことを大聲で觸れ歩いたつて仕方ない。この話や之と似た話の中にはもつれた民族精神がある。彼は縁結びの進行を示すことによつて結ばれた縁の神聖が犯されるといふことを自身知つてゐるからである。

吾々は洒落の技巧の研究に於て先に洒落の中の不合理が嘲弄や批判をしぼ／＼洒落の後にかくれてゐる考へにかへることが多いと注意して置いた筈だ。この點は「洒落の仕事」と「夢の仕事」と同じことだ。この關係をこゝでまた新しく證明しよう。

嘲弄や批判がその媒介者の人格に向けられたのではなく、前の例では單に彼は犠牲者として洒落に現れたに過ぎないことを他の洒落の例が示して呉れる。その例では媒介業者は反對に全くすぐれた人物の様に示されてゐる。尤もその討論方法はいろんな抗議がはさまれる。それは滑稽の代りに理論的な表面觀を有つて居て、詭辯的な考への洒落なのだ。その一例に於ては媒介者は花嫁が跛だと



いふ缺陷を否定し去つてゐる。跛であるといふことはもうすんでしまつたことであり、之に反して、完全な脚をもつた他の婦人は、倒れて足をいためる危険に直面し、さうして病氣、苦痛、醫藥代など、もう跛になつてゐるものでは必要のないものが襲つて来るから、と。又他の話では花嫁の候補者の非難を並べたてられたのに對し、一々うまい證據で否定し、さうして最後の言ひつくるひに、いものに對し、あだかも前に申立てた異論がことごとく無駄であつた様に「貴方は何をのぞむんです？ 彼女には一點の非もあらう筈がない。」と抗辯してゐる。この二つの例に於て抗辯の證據の弱點を指摘することはなんでもない。すでにそれは技巧の研究の所でしたことだ。しかしこゝではそれとちがつた興味がある。注意してしらねば媒介業者の話は伴りだといふことがわかるが、その談話を理窟でうまくぼろを出さない様にしようとしてゐる場合は、洒落で自分を辯護してゐる。その洒落の中にほんたうのことがかくれてゐるのだ。考へは自分を辯護する程勇敢ではないが、それを洒落で作りあげた見せかけで代らせてゐる。しかし戲談はこの場合しばしばこの努力をうらぎるのだ。

私達は理論的な外觀をもつた物語は認めても、それが何か心あつてまちがつた根據から主張してゐるものを眞實と思ふやうに迷つてはならない。この眞實を内密に處理することに詭辯を應用する



ことを、彼に洒落の性質が教へた。だからその洒落の性質は特に傾向と關係がある。この一つの話で暗示されたものは次の様なことだ。彼は花嫁のすぐれてゐる點を拾ひあつめたけれど、それがみな貧弱なものであつたので、嫁の候補者が笑ひものになり、また同時に避けがたい缺點をもつてゐる女をその妻にすれば、色々と用意をしなければなくなるのを忘れ、また多少缺點のある女を結婚させるたゞ一つの條件、即ち相愛が愛情の深い結婚への道だといふことを忘れてしまつて、すべての努力もお話にならなくなつたのだ。

これ等の例に含まれた媒介者が、何とか役目を果さうとしてゐる結婚の候補者の惡口は、他の物語でもつとはつきり表れて居る。これ等の物語がはつきりしてゐればゐる程、その洒落の技巧は少ない。それ等は洒落の領分から極端に足をふみはずしかけた場合であつて、その技巧で、單に表面をかざつてゐるにすぎない。今迄の洒落と同じく傾向を持ち、その内にかくされてあるものによつて洒落の全効果が造られてゐる。

かういふ種類の多くの洒落は、洒落の技巧と同じ様な作用のある「隱語符牒」(Jargon)と云ふ滑稽味のある要素をもつて居るが、技巧が貧弱であるから唯これを缺いたゞけでも大きな損害であることが領解出来る。



次の例は洒落の傾向の効果は十分あるが、その技巧に就ては認めることの出来ないものだ。

媒介業者が訊ねた「貴方は花嫁に何をのぞみますか？」「綺麗で、金持で教養がなければならぬ」さう、私はそれだけで三組はまとめますよ。」

これに於ては直接に洒落の装ひがなく而も仲人が非難されてゐる。

今迄の例では露骨な非難が人物——媒介業者の洒落では縁結びに關係のある人々——花嫁花婿及びその両親にむけられた。洒落が、非難の的となし得るものはその他に、制度、それを保持する人間、道德律、宗教等だ。以上に對する異議は、洒落の假面で初めて口外出来るのを樂んで居る人々が可成りある。傾向をもつ洒落が狙つてゐるテーマは少くても、その形式と外觀は極めて多様だ。傾向をもつ洒落のこの種族に特別な名稱を與へるのが至當だと私は考へる。如何なる名稱を與ふべきかといふことはこの種の例を尙二三舉げた後にしよう。

「マヨネーズをかけた鮭」の例でぶつかつた美食家と、詭辯的な「はきちがひ」の洒落の例で出會つたのんべえの先生の話は思ひ出した。其説明をつゞけよう。

私たちは今迄、ある物語の表面は理窟つぽくつくろつてある様な場合でも考へは案外生眞面目であることがあると聞いてゐた。誰でも自分の言葉がいくら正しくても、それに抗議がむけられると



自分の不正な點だけをすぐにさとつて、他の點では自分は正しいのだとするだけの勇氣はなくなり易いものだ。

すぐれた「落ち」は彼の不正と正との正しい妥協にある。しかしその區別は仲々つきにくく、我の内心の葛藤になつてゐる。この二つの物語は單に快樂主義的で、その言つてゐる事は次の事だ。「人間は權利をもつてゐる。享樂よりも高價なものは何もない。だからどんな方法でそれを得ようともその價値は同じだ。」

それは恐しい程不道德にきこえる。そしてあまりいゝことではない。しかし根本的にはそれは詩人の „Carpe diem” 身はその日だけより他のものではない。その詩人は人生は朝露の如き事と道德の拋棄は實を結ばない事を説いて居るのだ。「マヨネーズをかけた鮭」の洒落の中の男が正當と思ふ事が、私達に氣に食はないのは、低級な種類の享樂に對する眞實の觀察に基いての事だ。そんな種類の享樂はなくてもすむものゝ様に私達には思はれる。實際私達は誰でも過去にかう云ふ人生哲學を正しいと信じて、道德學を保持してゐた瞬間と年齢があつた。そして此人生哲學に要求ばかりして之を補正する事を知らなかつたのだ。

さう思ふとあきらめに満足を覺えるといふ來世へのみちびきは我々には決して信じられない。――



—あきらめを信仰の特徴とすることはあまり価値のないことだ。——さう思ふと“Carpe diem”といふことがまじめな忠告になる。私は満足をよくこんで延ばさう。しかし私は明日もこんな風に考へられるかどうかを知らない。

„Di doman' non c'è certezza”

(明日の事を誰が知らう)

私はよろこんで社會が禁じたすべての満足をあきらめよう。しかし社會はそのあきらめに對して報酬を與へて呉れるだらうか——たとひおくればせでも——何か差障りのない方法でむくいてくれるのはたしかだらうか。かう云ふ事に就いて洒落の叫いてゐることは次の様なことだ。人間の希望や渴望が慾張りな無反省な彼等の道德と同棲して居る——のは不思議でない。さうして今の時代ではかう云ふ道德は、金も力もないものゝ利己的な制度であり、その金も力もない人たちは現在ではたちどころに希望を満足せしめ得るといふことが力強く書かれてゐる。治療術が私達の生命を保證して呉れず、社會的制裁がそれを改善する様に作られない限りは、私達の心の中で所謂道德の要求に反抗する氣分を抑壓することは不可能だ。尊敬すべき人間といふのは少くともこの妥協をなしとげた人だ。かういふ妥協の中に於て決斷をなすことが、新しい認識への迂路を可能ならしめる。人



間はだれでも自分の生命と他人の生命とを結びつけ、自他の生命を密接に一致することが出来なければならぬ。さうなれば個人の生命の短いことに絶望せずともよくなる。又各個人だけの必要から出て来た要求を不公平に満足させることは許されなくなる。これは却つてみたされない方がいゝのだ。何故かと云ふにこのみたされない要求が澤山あつまつて社會の秩序を改善する様な力をはぐくんでゆくことが出来るからだ。しかし個人的な必要のすべてを、さういふ風にほかの方に轉換させろといふのではない。この葛藤の共通した最後の解決といふのはまだついて居ないのだ。

吾々はこの最後に説明した洒落を、なんと名付けたらいいか知つてゐる。それは「野鄙な洒落」(Zynische Witz)であり、それが露骨に言ひ現してゐるのは「野鄙な言行」(Zynismen)と云ふべきだ。

「野鄙な洒落」がいつも攻撃の的としてゐるものゝうちで、道德によつて守られてゐる結婚媒介所程攻撃心をそゝり、且その必要が多いものはない。だから「野鄙な洒落」は主としてそれを狙つてゐる。性的解放に對する要求は最も個人的な要求だ。又一方教育は性の領分に對して最も甚しい壓迫を加へて居る。

この意味を表す適例はたつた一つで十分である。それは前にのべたカルネバル親王のノートに記



入してあることだ。

「女は傘見た様なものだ。誠に便利なものゝ一つと云へる」

(Eine Frau ist wie ein Regenschirm-man nimmt sich dann doch einen Komfortabel)

この例の複雑な技巧は前に説明して置いた。私達の理解する處では此洒落は一寸見たゞけでは分らない譬喩であつて、それ自身は上手な洒落でないが、一つの諷示（便利―公共運輸機關）であり一つの力強い技巧として言葉の難解の度を高めてゐる。此譬喩は次の様に説明されるべきだらう。「結婚といふものは外界からの誘惑を防ぐためにするものであり、強い要求を絶對的に満足させるものではない。恰度雨を防ぐために傘を用ひるがそれでも雨に濡れる様なものだ。」傘でも女でもものと完全な保護を探せば前者では公共運輸機關、後者では金で物のわかる女が探せるだらう。さうなれば洒落は殆んど完全に「野鄙な言行」となつてしまふ。結婚が男の性慾を満足させる準備でないといふことは、眞理を愛したり、又は Christian v. Ehrenfels の改革運動に強ひられなければ大聲に、且公に叫ぶことは出来ないだらう。これ等の洒落の強味はすべてのものを廻り路して表現することにある。反抗的の批判が、自己の人格―慎重に云ひば自己と相通する人格―や、全人格の綜合―民族―に向けられる様な場合は、傾向のある洒落の特に定型的な例が出来る。



この自己批判の條件は、ユダヤ民族の生活した所に今迄私達が澤山問題にして來た様な多數のうまい洒落がどうして生長したかを考へればはつきりわかる。ユダヤ人につくられて彼等の特徴を捕へた話は澤山ある。他國人がユダヤ人に向けた洒落は最もひどい無恥な惡戯だ。その洒落の中にはユダヤ人が他國人には滑稽に見えるといふ事實が省かれてゐる。ユダヤ人自身によつてつくられた洒落にもさういふがある。しかしその場合は彼等の眞の缺點と同時にそれに關聯した美點をも知つてゐる。自己の性格の非難すべき點をもつてゐる點が「洒落の仕事」の主觀的條件を説明し難くして居る。私は一つの民族が自己の本態をそんな風に笑ひ草にすることがその他に頻繁にあるかどうかを知らない。

私はこの様な例として先にのべた物語を示さう。その話はユダヤ人が汽車の中で Coupe からの乗客を、宗旨仲間だと知つてから急に舉動を仲間相當にしたことが述べてある。私は此洒落が微細な所までユダヤ人の性格を實物教授して呉れたものだと思ふ。つまりユダヤ人は主人と下男の區別をみとめないデモクラティックな考へ方をして居るのだ。しかし悲しいことにはその考へ方は教育や協力の妨げになつてゐる。

その他に貧乏人と金持のユダヤ人との相互の間の關係を描いた、特別興味ある洒落がいくつかあ



る。その中の立役者は Schnorer (ユダヤ人の乞食) と施し好きの家主又は男爵だ。

ある乞食が、毎日曜日いつも客として待遇せられる同じ家に、ある日見知らぬ青年を伴つてやつて来て、その青年と一緒に食卓に坐らうとしたので、主人が尋ねた。「その人はだれだね？」その答へはかうだつた。「あれは先週婚に來た男です。私は最初の一年間彼を賄ふ約束をしました。」

これらの物語の傾向は、いつも同じ様なものだ。その傾向は、次の話に一番はつきり現れてゐる。乞食が男爵にオステンドへの轉地の費用を乞うた。醫者が彼の病苦を取除くために海水浴をすゝめたからと云ふのだ。男爵は、オステンドに滞在するのは贅澤だと思つても、少し安價な處にしようとした。しかし乞食は次の言葉を以て反對した。「男爵様、私の健康にとつては何物もぜいたくすぎはしません」

是は立派な履きちがひの洒落で、その種類の手本だと思つてもいい様だ。男爵は明かに自分の金を惜む心があつた。しかし乞食は男爵の金が自分のものであり、その金とはにかく彼の健康に比べては軽く考へていいものゝ様に答へた。この場合、だれでも要求の厚がましさに笑を催させられる。しかしこれ等の洒落は一つの例外で、理解を迷はす様な外觀で飾られてゐない。その後には隠されてある事實はかうだ。——金持の金を自分のものゝ様にとりあつた乞食は、ユダヤ人の神聖



な規則に従つて、この錯誤を殆んど正當だと認めたのだ。勿論この洒落の描いた反抗は、自分の利益を強く迫害する様な制度に食つてかゝつて居る。

かういふ話もある。ある乞食が金持の家の階段で仲間の商賣してゐるのに出逢つた。その仲間は彼に乞食をやめさせようとした。「今日は登つて行くなよ。男爵様は御機嫌がわるくて、一グルテンだつて出ないよ。」「そんなら尙の事だ。おれが一グルテンを勘辨してやる理由が何處にある。向うがおれに何も勘辨して呉れもしないのに。」

この洒落は「不合理」をその技巧に應用してゐる。即ちその洒落では乞食が施し物を乞はうとしてゐると同じ趣旨で、金持が彼に金を呉れてゐるのだと認めて居る。だが此不合理は見かけの事だ。實際は金持が乞食に金を恵まないと云ふ事はあんまり正しくないのだ。金持が乞食に恵んでやるのは云はゞ義務なのだ。そして乞食は金を貰ふ事で、金持に慈善をさせる機會を造つてやる様なものだから。施し物に對する一般の考へと宗教的の考へとはこの場合相反目してゐる。その考へは次の話では明かに宗教的の考へに對して謀叛を企てゐる。

ある男爵が、乞食の可哀想な話にいたく心をうたれて鈴ベルを鳴して下男を呼んでかう言つた。「あいつを逐ひ出して呉れ、私の胸が破れさうだ。」



この話に明かに示されて居る傾向は、洒落の極端な場合を表してゐる。この最後の話と、次の洒落味の無い叫び——「ユダヤ人の仲間で金をもつてゐることは、ほんたうにつまらない。赤の他人の困窮が自分の富を楽しませない」といふ事とは單に、各個人の境遇を實例で示さない點だけの違ひだ。深い厭世的な無恥な言行が次の様な話をつくつた。その技巧はやはり、洒落の極端な場合を表してゐる。

ある耳の遠い人が醫者の診察をうけた。醫者は患者が多分火酒をのみすぎそのために聾になつたんだらうと正しい診断をつけた。醫者は患者にそれをやめる様に話したので彼は忠告を肝に銘じて置くことを約束した。暫くの後醫者が彼に街で會つて「どうです」と尋ねた。「ありがたう、先生そんなに大きな聲をなさる必要はありません、私は酒をやめてまた耳がよくきこえる様になりました。」といふ答だつた。また暫くして二人が會つた。醫者は普通の聲音で彼の健康状態をきいたが彼にはきこえないことに氣がついた。「どうしたんです、私には貴方がまた火酒をのみはじめた様に思はれる、それでまた何もきこえなくなつたんだ」と醫者が彼の耳の傍で呶鳴つた。「貴方のおつしやることは正しい、」と聾がこたへた。「私はまた火酒をのみはじめました、しかしその理由を申しませう。私が飲むことをやめてゐる間はよく耳がきこえました。しかし私がきいたすべてのもの



は、火酒ほどうれしくはありませんでした。」

技巧的に見るとこの洒落は實地教示に過ぎない。「隱悟」(Jargon)及び「話術」といふものは笑をよびおこすために役立たなければならぬ。しかしその後になしき疑問がかくれてゐる。「人間が勝手に選んだものは不正なものではあるまいか」

ユダヤ人の希望のない色々な悲惨な境遇を諷刺した話を、私は、傾向のある洒落との關係上、ここに並べなければならない。同じ様な意味の無恥な洒落は、單にユダヤ人の話のみならず、宗教上の信條とか信仰自身を攻撃したものにもある。

幻想と實在とを同一視した「考へ違ひ」の技巧をもつてゐる、「Kück von Rabbi」の話はさういふ風な、無恥な批判的な洒落であり、(その話の解釋もはきちがひである)奇蹟を行ふ人並びに奇蹟を信ずることに向けられたものだ。眞直ぐに神聖を冒す様な洒落を Heine が頻死の人の状態に對して言つてゐる様だ。親切な牧師が彼に神の恩寵を説き、神が彼の罪を赦し給ふであらうと希望を與へた處その返事はかうであつたさうだ。

„Bien sûr, gu'il me pardonnera; c'est son métier," (そりやなしかに神様は私を許して下さいでせうよ。それがお仕事ですもの)



それは輕蔑した譬喩であつて、技巧はたゞ諷示の價值だけである。„Métier” 即ち職業はおそらく職人や醫師がもつてゐるものであり、且、彼等は各々ただ一つの „Métier” しかもつてゐない。この洒落の強味はその傾向にある。それは次の様に表はされねばならない。「たしかに神様は私を赦して呉れるでせう。彼はそのためにあるのだ、他の目的で私はこれを仕立てたのではない。」（恰度醫者や辯護士と同じ様に考へてゐる。）さうして力なく横たはつてゐる頻死の人に、自分が働いて神を仕立て上げて機があれば自分のためにつくすやうな力を、神に與へておいたのだといふ考へが起きたのだ。彼の自稱創造物が、死の直前に明かに神として現れたのである。

X

X

X

今迄とりあつた傾向のある洒落は次の様な種類になる。

(イ) 暴露されたもの、または猥褻なもの

(ロ) 攻撃的なもの（惡意あるもの）

(ハ) 無恥なもの（批判的、冒瀆的）

私は之に第四の最も稀な新しいものを竝べよう。その性質は次の様な例で明かになる筈だ。

二人のユダヤ人がガリシヤの停車場で汽車の中で出逢つた。「どこへゆくんだ」と一人がたづねた。



「クラカウへ」とまた一人がこたへた。「なんつてうそをつくのだ。クラカウへゆくと云ひながら、レンベルヒへゆく様に見せかけてるぢやないか。お前が本當はクラカウへゆくことをおれは知つてゐるのだ。だのになぜうそをつくのだ。」と一人が怒つた。

明々白々な詭辯の印象を與へるこのうまい話は、明かに「不合理」の技巧だ。第二のユダヤ人は彼の本當の目的地であるクラカウへゆくと言つてゐるのに、それをうそだと云つて非難されてゐる様だ。この強い技巧即ち「不合理」はこの場合反對説による表現を伴つてゐる。といふのは第一の男の證據を握つてゐる様な主張によると、第二の男は眞實を言つてゐるのに嘘をついて居る事になる。

即ち嘘をつきながら眞實を言つてゐるのだ。だからこの洒落の眞面目な内容は眞實のもつ條件に對する疑問なのだ。即ちこの洒落は一つの問題を解釋して吾々の日常の概念を利用し盡してゐる。

一つの事件があるがまゝに話されたとき、それを、きく人がどう解釋しやうとかまはぬといふことは正當だらうか？ またこれは詐の眞實であらうか？ また眞の眞實は聽く人の解釋を忖度して、彼に眞の知識をそのまゝ傳へてやらうとすることに他ならないのだらうか。私はかういふ洒落を他のものと十分區別して考へ、特別な位置を指定する。その狙つてゐるものは人間でも建物でもなくたゞ吾々の知識の確實さ自身であり、我々の思索的な賜物の一つなのだ。だから懷疑的(Ske-



plisch”)な洒落といふ名がそれにふさはしいだらう。

X

X

X

吾々は傾向のある洒落の説明をつづけてゆくうちに、いろ／＼な解釋をした様に思はれる。更に進んだ研究への刺戟も大分得た様だ。しかしこの章で得た成績は前の章のそれと同じく大分むづかしい問題を與へて呉れる。洒落のもたらす快樂は一方では技巧に、他方では傾向に關係があることを正しいとして、どんな共通な見地からこの全く違つた洒落の二つの快樂の源を一致させられる事が出来るだらう。







二、合成の部







## 洒落の享樂機轉竝に洒落の精神的發生

洒落がもたらす特殊の喜びはどこから流れ出るかに就いて、今迄得た確かな知識をまづ述べよう。私達は文句の中の思考の内容に對する喜びと、洒落自身の持つ特殊の興味とを混同する様な、錯覺にうちかつことが出来たし、また、洒落の興味は、技巧と傾向との二つの源から發してゐるといふことを知つた。今私達が學ぼうとしてゐるものは、どんな機巧でこれ等の源から興味が起つて來るかといふこと、即ちこの興味をおこすからくりなのだ。

私共には傾向のある洒落に就て試みた解釋の方が無邪氣な洒落の場合よりも容易であつたやうに思はれる。だから傾向のある洒落に就て研究を始めよう。

傾向のある洒落で起る面白さは、その傾向が目的を果げる所にある。傾向があつてこそ初めて傾向の目的が遂げられるのだ。傾向がその目的を果して初めて洒落の面白さが湧いて來るといふことは詳論を要しない。洒落が満足をもたらす方法は特別の條件と結び付いてゐる。その條件を知ればもつと進んだ洒落の説明が得らるべきだ。此處で二つの場合が區別される。最簡單なのは、傾向が



外部の障礙にぶつつかつた場合である。その障礙は洒落を造る事によつて避けられる。次の様な例で私達はそれを發見する。

公國の君主が或る男の母が宮仕へをしたことがあるかどうかと尋ねた質問に對して受取つた答の例や、二人の山師から彼等の肖像を示された鑑定家の「救世主はどこです」といふ言葉の例などだ。

第一の場合の傾向は、侮辱に對するに侮辱を以つて答へたことであり、次の場合では、鑑定を要求された立場からした侮辱である。傾向に反抗してゐるのは單に外部の要因、即ち侮辱に關係した人間の勢力の均衡状態だつたのだ。これ等の洒落やその他同じ様な傾向を持つ洒落は私達を満足させても、笑ひへの強い効果をもたらす状況になつて來ないのは不思議千萬な事と思はれるかも知れない。

外部の障礙なく内部の障礙が傾向の進行の邪魔をして居る場合と、内部の興奮が傾向にぶつつかつてゐる場合とは別な事だ。この條件は吾々の推定によればN氏の攻撃的な洒落では實際に見られる。N氏の人格はよく發達した美學的教養から出發した惡口をいふ強い性癖から常に刺戟されてゐた。洒落の力で、かう云ふ特別の場合の抵抗力が打ちまかされ、障礙がとりのぞかれるのだ。かうして初めて外部の障礙の場合と同じく傾向の目的が遂げられて、壓迫及びそれとむすびついてゐる精神



の停滯 (Psychische Stauung) から免れることが出来る。興味の湧いて来る機轉はこの二つの例に關しては同じものである。

私達は此處で、内部の障礙と外部の障礙との心理學上の位置の相違に深く入り込んで見たい様な氣分になつて來た。何故かと云ふに外部の障礙を取りのけた場合より、内部の障礙を取りのけた場合の方が、遙かに大きな面白さを感じるからだ。しかし私は此處迄で満足して、私達は正しいと信する事を一言云ふだけに止りたく思ふ。外部の障礙と内部の障礙とは次の點で區別される。即ち内部の障礙の場合はすでに存在する障礙がとりのぞかれ、外部の場合には新しく障礙のおこることが防がれるのだ。私達が精神的な制止を新しく組立てることゝ、元來保持して居ることが同じ様に「精神浪費」を要求すると斷言する以上此事はこれ以上の思索を要求しないだらう。傾向のある洒落の二つの應用が専ら面白さをめざして居るものであるならば、此享樂は精神浪費の節約に該當するものだと認めても誤なからう。

そこで私達は再び、初め言葉の洒落の技巧の處で出逢つた節約 (Ersparung) の原理にぶつつかつた様だ。私達は始め物を使ふ時の節約は、出来るだけ少ない言葉、或は出来るだけ同じ言葉を使ふ事によつて行はれると信じてゐたのに、こゝでは精神の浪費に對する節約といふ包括的な意味まであ



るのに氣がついた。そして私達はまだ明かになつてゐない「精神浪費」(Psychischer Aufwand)といふ觀念にわかりやすい定義を下しさへすれば、洒落の本態に近づくことが出来る様に思はれて來た。私達は傾向をもつ洒落の享樂機轉(Lustmechanismus)を研究しながら、説明し切れないあるものを持つて居るが、それは吾々が簡單なものより複雑なもの、無邪氣な洒落よりも傾向あるものを研究しようとしたために得た小さな刑罰なのだ。私達には「障碍浪費の節約或は抑壓浪費の節約」(Ersparung an Hemmungs-oder Unterdrückungsaufwand)が傾向のある洒落の興味をおこす本態である様に思はれる。それが私達の注意を無邪氣な洒落の面白さの機轉の方にむける。

傾向や内容のために私達の判斷を妨げる虞のない無邪氣な洒落の恰好な例に於ては、吾々は洒落の技巧自身が喜びの源だと決論しなければならなかつたが、さて、これから、この喜びが精神浪費の節約にも歸し得られるかどうかを研究しよう。かう云ふ無邪氣な洒落のある部類(ひつかけ言葉)の技巧では、私達の精神上の立脚點が言葉の意味よりも言葉の發音の上に置かれて、そのために音響上の言葉の概念(Wortvorstellung)が事物の概念(Dingvorstellung)によつて與へられた意味に代へられて居る。その結果精神の働きが非常に容易になり得る事は想像に難くない。言葉をきまじめに使はうとすれば、この便利な方法からつとめて遠ざからなければならぬ事にもなるだらう。



精神上の浪費をある一點に集中する事のあまり出来ない病的な思考作用に於ては、事實言葉の意味よりも言葉の發音の觀念に重きが置かれてゐる。さうしてかう云ふ患者はその話を、言葉の觀念の内部の聯想よりも外部の聯想によつて、たとへば極り文句の様に話をすゝめるものだ。言葉を物のやうにとりあつかふ習癖のある子供に於ては、同じかまたは似た様な言葉のひときの中に同じ意味をふくませる傾向がある。それがいろいろな間違ひの本になつて大人を笑はせる。同じ言葉を使つたり、または、似た言葉を使つたりして、ある概念界から、他の遠くはなれた概念界に到達することが洒落の喜びであるとすれば、(たとへば、„Hone-Rouland”の場合臺所といふ概念から政治といふ概念に)その喜びは正しく精神の費用を節約することに歸せられる。同じ言葉によつて結合された二つの概念界が、違つたものであればある程、また遠く離れてゐればある程——従つて、考へ方に於ける省略が大きければ大きい程、かう云ふ「短結」(Kurzschluss)による洒落の興味は大きい。この場合洒落は結合の手段に便はれたものであつて、此結合は生眞面目な思想を説く場合には用捨する所なく避くべきものだ。

洒落の技巧の第二の部類——綜合、同じ響き、多種の使用、在來の話し方のもちり、故事に對する諷刺等——に共通の性質として、目立つてゐる點は、何か初めての物がとび出すかと期待をかけ



てる時に、ヒョツクリ知りきつてゐる物がとび出して來る事だ。この知りきつてゐるものをヒョツクリ見せられることは、面白いことであり、私達を氣輕くして、その面白さは節約による面白さと思はれ、延いては精神の費用を節約することになる。

知りきつて居るものを再發見すること、即ち再認 (Wiedererkennen) が興味深いことは一般に認められてゐる様だ。Groos は言つてゐる。「再認といふことはそれが餘り甚だしく機械化されてゐなければ、(着物をきる様に) 快感と結び付いてゐる。元來知りきつて居るものゝ赤裸々な性質を知ることが案外穩かな快適さを與へるものだ。丁度、<sup>ファウスト</sup> Faust がおそろしいものに出會つた後、彼の研究室に入つて感じた様なものだ。もし再認の働が快樂をもたらしものであれば次の様なことを期待してもいいだらう。「人間は、その傾向を自身のために練り、それを樂みながら實行することに氣がつく様になる。」事實 Aristoteles は再認の喜びを藝術の快樂の根本であると認めた。而してこの主張はたとひ Aristoteles が認めた程度の意味しかもつてゐないにしても看過されるべきでない。

Groos はまた演劇 (Die Spiele) をかう説明してゐる。即ちその特徴は再認の喜びを大きくするために、それを妨害し、精神的停滯 (Psychische Stauung) を起させ、然る後に此精神的停滯を認識に因つて取り除く點にあるのだと。彼の解説を以つてすれば、認識それ自身は楽しいものでは



なく、認識より起る満足感は、力の満足、即ち困難に打ち勝つたために起る満足だと云ふのだ。

この最後にのべた要因は私には第二次的のものと思はれる。私には認識すること自身が精神的費用を軽減することゝなつて、其處に喜びがあり、この喜びに立脚した演劇が精神停滯の機轉 (Stagnationsmechanismus) を利用する事によつて自身の價值を高めるのだと解釋するのが一番簡單であると思はれる。

脚韻法 (Reim) 頭韻法 (Alliteration) 繰返へし (Refrain) 及び其他詩の中に於て同じ様な響きをもつ言葉を繰返へして使ふことが、同じ様な喜びの源、即ち知られたものを再發見することに役立つてゐるといふことは、今のべた事と同じことだと一般に認められてゐる。かういふ、洒落の場合の種々の使用法 (Mehrfache Verwendung) に非常によく似てゐる技巧に於ては、「力量感」 (Machtgefühl) は別に大した役目はしてゐない。

認識と想起とが近い關係にあることを思へば、同じ所に想起の喜び (Erinnerungslust) がありさうだ。即ち想起起す動作は快感と同じ様な由來から出て來るのではないかといふ推測は決して大膽すぎはしない。Groosはこのやうな推測をせずに、想起の喜びをやはり「力量感」 (Machtgefühl) に導かうとしてゐる。此の「力量感」 (Machtgefühl) に彼があらゆる演劇の快樂の根本を求めてゐる。



るのは私の考へでは正しくない。

今迄問題にしなかつた洒落の他のある手段も、この「知りぬいて居るものを再び見出す事」(Wie derfinden des Bekannten) に基いてゐる。私は洒落の「時代性」(Aktualität) という要因を主張する。それは多くの洒落に於て豊かな喜びの源を作り、また洒落の生活史に、種々の特徴を明かにするものだ。またかういふ條件から全く解放されてゐるやうなしやれもある。洒落を研究するにはかういふ例を専ら取扱ふ必要がある。私達は命の永い洒落よりも、他の洒落に餘計笑つて來たことを忘れることは出来ない。しかしこのやうな洒落を今取扱ふことはむづかしい。それには長い解釋が必要であり、またその助けをかりても、更に進んだ効果は得られさうにもない。かういふ洒落はその當時實在してゐる人間とか事件に對する諷刺を包括したもので、一般の興味をよびおこし、期待をもたせたものである。この興味が消失し、その事件の解決した後は、かういふ洒落はその興味をおこす事最も著しい一部分一部分を失つてしまふのだ。たとへば、私を招待した人が出した麥粉で作つた菓子や Home-Roulard となづけた洒落は新聞の政治通信に Home-Rule という見出しのあつたその當時程今日ではうまいと思はれない。もし私達がこの洒落の効果を、一つの言葉が、臺所といふ概念界から政治といふ非常に遠ざかつたそれに達する、まはりくどい考へ方を省いて呉



れるためだといふ風に今書いて認めようとすれば、その書き方をあの時次の様に書きかへるべきではないだらうか。「この言葉(Home-Rouland)は、臺所といふ概念界から吾々をそれから非常に遠い政治といふ概念界に、みちびいて呉れる。その政治といふものは、元來たえず吾々の注意を惹いてゐることであるから吾々の旺んな興味であることは確だ。」他の洒落例へば「此娘は Dreyfus を思ひ出させる。軍隊も彼女の Unschuld (無罪——無邪氣) をみとめないだらう。」といふ洒落はその技巧は元通であるにちがひないけれども、今日では前の例と同じ様に死んでしまつてゐる。しかし「Unschuld」といふ言葉を比較することの眩惑や、その曖昧さなどは、其當時こそ新しい刺戟をよびおこす諷刺になつたが、今日では單純な興味しか與へないといふことで、無價值にはなるまい。次の様な時代的(Aktuell)な洒落がある。

皇太子妃 Louise が Gotha の火葬場に向つて料金を問合せた。管理者はそれに對して、次の様な答へをした。「一般に 5000 マルクであるが、妃は一度火傷を負つたことがあるので 3000 マルクでよろしい。」

かう云ふ洒落は今日では成立しない。現在でもそれを吾々はあまり高く評價しないが、更に時代がたつた後、皇太子妃 Louise とは誰か、またその「火傷」がどんなに有名であつたかと註釋しな



ければならない様になつた時には、それは技巧こそすぐれてはゐるけれども、効果はなくなつてしまふ。

世の中にある澤山の洒落は人の一生——よく考へて見れば青春と老衰を組み合わせ、それが全くなつてしまふ人生、——にまで及んでゐる。

思想の傾向から楽しみを獲ようとする人間の慾望は毎日の新しい興味によつて新しい洒落をいつも創つてゐる。時代的な洒落 (Aktueller Witz) の生存力といふものはそれ自身に固有なものでなく、Anspielung といふ方法で違つた興味を借りて來るのだ。洒落の運命といふものはその興味の結果で決定する。時代 (Aktualität) といふ要素は、興味の過去の源ではあるが、洒落固有の興味の根源にかなり重要なものとして加はつてゐて、たゞ簡単に、有名なものを再認することであるとは片附けられない。其上に新鮮最新又は忘却されないといふ風な感じを興へなければならぬ様な有名なものに對するある特殊の解釋をすることが大切だ。夢造り (Traumbildung) に於ても、最新といふことは特に重要であるが、最新の事實に對する聯想には快樂といふ賞與があり、それがために安樂さを感じる様になるのだと思はざるを得ない。

思考の材料でなく考へ方を繰返すことを意味した綜合 (Unifizierung) を G. Th. Fechner は



洒落の興味の源だと特殊の觀察をしてゐる。Fechner(*Vorschule der Ästhetik* I. XVII). は次の様に云つて居る。

「吾々の今研究しつゝある領域では、種々なものを一つの單位に結びつけるといふ原理が大切だ。しかし、かういふ場合におこり得る、特殊な性質をもつ満足を領域外へ放逐してしまふためにいゝんな附帶條件が必要だ。」

かういふ風に同じ言葉を繰返すこと、言葉のもつ同じ事情(*Zusammenhang*)を繰返す事、または有名なもの、最近の事實を再認することは、精神の費用を省くことによつて興味を導き出すものだ。さう云ふ場合には此種の見解が洒落の一つ一つを説明し、その間に共通性を認めることに役立つ事は確實だ。私達は此處で省略の方法や「精神浪費」(*Psychischer Aufwand*)といふ言葉の意味をもつとはつきりさせなければならぬ。

洒落の技巧の第三群主として考へる洒落——考へ違ひ、はきちがひ(*Verschiebungen*)不合理、逆による表現等を含む、——は特殊の性質をもつてゐる様であり、有名なものを再び見出すことや、對象の聯想を言葉の聯想で代へる技巧とは少しも似た所がないことが一見してわかる。それにもかかはらず、省略、または精神の支出輕減といふ見地を利用すれば説明することは容易である。



普通の考へ方と違つた考へ方をする事は、普通の考へ方を保守するよりも便利で且容易だ。差別を無視することははつきり區別することよりも便利だ。理論上否定された論法を是認することや更に言葉を組立てる際、または種々の條件を考へる際に、それ等が必ず何か意味をもたなければならぬのを無視する事はほんとに便利なことである。これは正しい事實で、また洒落の技巧を説明してゐる。然し上述の作業が洒落以外の精神活動に行はれる時には不快な防禦感だけしか起つて來ないのに、洒落に於てはそれが快樂の源をひらくのは不思議な事だ。短く云つて「不合理を楽しむ」(„Lust am Unsin“) ことは眞面目な生活では、隠されてゐて見えないものだ。それが見られるのは二つの場合だ。即ち少し物を覺えた子供と、大人が毒々しい感情をもつたときの態度にいつでも見られる。子供が母親の様な言葉を使ふことを覺える時代には「實驗するのを楽しむ」(„spielen zu experimentieren“) (Groos) といふ方法で十分満足して、言葉をたゞ韻律や、唄の様な文句で面白がるだけで、何の意味を與へることなく組立てる。この満足は意味の深い言葉だけが許される様になるときまでに、段々抑制される様になる。更に歳をとつて來ると、言葉の使用法の制限を越え様とする傾向が強くなり、その制限をいろんな附屬物で醜いものにし、その形のある變態(繰返し、震動語) (Reduplikationen, Zittersprache) に變へ、または遊び仲間だけに使ふ言葉を造る様に



なり、またある種の精神病者に於て現れる様な努力が強くなつて來るものである。

子供がそんなことを遊び半分にする動機は何んだらう。段々成長して來ると、子供は不合理なことでたと自覺しながらも、それに夢中になり、理性で禁ぜられたことをしてその刺戟によつて満足する。つまり批判的な理性の壓迫から遠ざかるために遊びが利用されるのだ。正しい思想を目的とする修養や、正しい考と、不正な考とを區別する際に現れなければならない拘束は更に力強いものであり、そのために思想や實在の束縛に對する反抗は深いものになり永い間保有される。幻想の活動といふ現象は、かういふ見地から起つて來るものだ。批判の力といふものは小兒時代の後期及び春機發動期を越えて修業期になれば可成強くなり、「許容された不合理」に對する喜びさへもごく稀にしか直接外に表さうとしない。不合理を發言するといふことは仲々出來ない。しかし、いたづら小僧に特有な不合理な、不適當な、行爲をしようとする傾向は、私には「不合理に對する興味」から直接誘ひ出されたものゝ様に思はれる。少し病的な場合にはこの傾向が進んで、學生の答辯を支配する程にまでなる。私の診察した神經病に陥つた高等學校の學生の二三の場合に於ては、彼等の間違つた行爲は、彼等の無智よりも、むしろ彼等が作り出した不合理に對する無意識な興味の方が大きい影響を及ぼしてゐると確信して居る。



學生といふものは思想や、實在の束縛に對し示威運動を平氣でやつて居る。然もます／＼此束縛が苛酷となり、止め度がなくなるのをよく知つて居るのだ。學生の無邪氣な惡戯はこれが反應したものである。人間は正に「疲勞を感じない快樂の探究者」である。——こんなうまい表現をした學者があつたかしら——然も一度覺えた快樂は仲々あきらめ難くなるものだ。

學生は、思想の自由から來る喜びをあつて *Bierschwefel* の愉快な不合理で救はうと試みてゐるが、此思想の自由は大學の修業に依つて段々失はれて行く。更に後年になつて、彼が大人となり、學問的な會議で友人と出逢つて再び學生氣分に立ちもどつて、會議が終つた後では、必ずたつた今得た不合理に對する見解を放り投げて、酒宴にふさはしい噂 (*Kneipzeitung*) をしながら今起つたばかりの思想の障礙からのがれ出すだらう。

„*Bierschwefel*” とか „*Kneipzeitung*” とかはその名前がよく證明して居る通り、彼等は既に不合理に興味を感じる事を排撃する批判がもう十分に出來て居るから、中毒的の應援隊でも頼まなくては、その批判を忘れる事が出來ないのだ。

アルコールが人間に與ふる最も價值あるものは情緒の變化だ。だからこの「毒藥」がなくてはすまない人もある。内部に起つたにせよ或は毒物によつて生れたにせよ、愉快な氣分は、自制力と判



斷力を低下し、さうして今迄壓迫されてゐた快樂の根源に近づき易くするものである。洒落を欲する欲求が、氣分を高めることによつて少くされるといふ事は、非常に參考になる。洒落といふものは丁度いゝ工合に氣分を補ふものだ。その補ひで今迄邪魔されて居た不合理を初めて楽しむ事が出来るのだ。

“Mit wenig Witz und viel Behagen.”

「チヨイと洒落てタント喜ぶ」

アルコールの影響をうければ大人も又理論の力に制限されず、勝手なことを考へて楽しむ子供に歸つてしまふものだ。

私達は洒落の不合理を用ひる技巧が興味の源だと證明した事と、精神の支出を節約することや批判の壓迫を軽くすることから洒落の興味が起るといふことをこゝで再び繰返して置く必要がある。

更にも一度、三つの群にわけられた洒落の技巧を顧みて氣付くことがある。即ち其第一群及第三群——事物の聯想を言葉の聯想で置換へる方法及び不合理を使ふ方法は、往時の自由さを再現したものであつて、又智的教育の力から免れる事になると總括することが出来る。それ等は精神の氣輕さであつて、第二群のものに依つて作られる「節約」(Ersparung)と對照することが出来る。



既にあるものを輕減すること、これから行はれる精神の支出を節約すること、この二つの原理に、洒落のすべての技巧、及びその技巧から来る面白味が歸せられ、技巧及び興味獲得の二つの方法は一般に洒落の二つの區別即ち言葉の洒落と考への洒落との二つの區別に相當する。

X

X

X

前に述べた解釋は明かに洒落の發生史またはその精神發生史を説明して呉れたものだが、此處では更に一層詳細に研究したいと思ふ。私達は洒落の初歩を學んだ。それが傾向のある洒落に發展すれば洒落の種々な性質の間に何か新しい關係が発見されるかも知れない。

洒落のことはしばらく問題外として、私達が „Spiel” (あそび) または „Scherz” (諧謔) と名づけてゐるものがある。

„Spiel” —— 私はこの名前をしばらく使ふことにするが——は子供が、言葉を使ひ、考へを繼ぎ合はすことを覺える間に、現れて来る。この „Spiel” は子供にその能力を實行させようと強ひる衝動のあるものに從屬して居るものだ。(Groos) その „Spiel” もまた面白味をおこす働らきから出發したもので、その面白味は、同じ様なものを繰返すこと、知つてゐるものを再認すること、同じ様な發音から得られ、精神の支出を豫期せずに節約する所にある。この面白味を感ずる結果が、子供を



あそびにふけらせる様に刺戟し、言葉の意味や文章の聯絡等を顧みることなく「あそび」を続けさせる様なことにするのは怪しむに足らないことだ。言葉や考へをもてあそぶことは省略から来る面白さに依つて證明されるからやはり洒落の初歩であらう。

このあそびは批判、または理性ともいふべき一つの要素が強くなつて來れば終結してしまふものだ。さうなるとあそびといふことは誠に無意義なものになり、また明かに不合理なものとして顧みられなくなる。批判力が十分になればその結果、*"Spiel"* は不可能なことになるのだ。

大人でもかう云ふ喜びに満ちた氣分が起つて來るのでなければ、知つてゐるものを再認することから喜びを意識的に得ることは出來ないわけだ。その大人の喜びに満ちた氣分は子供の快活さと同じく批判的な自制が起つて來れば、消失してしまふ。かういふ喜びに満ちた氣分が大人に起りさへすれば往時のあそびから喜びを得ることが出来る。しかし、さういふ時を人は豫期して待つことは出來ないし、またその一度味つた喜びを斷念することも亦出來ない。だから人は喜びに満ちた氣分から獨立する様な手段を探す。洒落こそ批判から逃れ、氣分をとりかへようとする二つの努力に依つて發達してゆくものだ。

洒落の初歩の第二段は「諧謔」(Scherz) と云ふものだ。この場合には「あそび」から喜びを得



ると同時に、喜悅感の湧出を邪魔する批判の抗議をやりこめることが肝要だ。この目的にはたつた一つの道がある。言葉を意味なく結合したり、不合理な考へを並べることに、またある意味があるに違ひない。この條件を満足させる言葉と思考の配列とを發見するために、洒落の作業の全技術は費されるのだ。「諧謔」の場合にはすべての洒落の技巧が應用される。實際は諧謔と洒落との間には根本的な區別はないのだ。諧謔が洒落と區別されるのは、批判を放逐した言葉が、價值があり、新鮮である必要がなく、たゞ快ければそれでよいといふ點にある。かう云ふ區別は立てゝも何の役にも立たず又餘計なことでもあるが事實に於て諧謔は此區別を甘んじて受けなければならぬ。諧謔では、批判によつて禁ぜられたものから得られる満足が著しく目立つてゐる。

むきだしの諧謔は、*Schleiermacher* が „Eifersucht” を „Leidenschaft” であると定義した言葉だ。(Eifersucht ist eine Leidenschaft, die mit Eifer sucht, was Leidenschaft) もう一つ諧謔の例をあげる。十八世紀にゲッチンゲンで物理學を教へ、洒落をよく言つてゐた *Kästner* 教授が、*Kriegk* といふ名前の生徒に年齢を尋ねて、三十年だといふ答へを聞いた時かう言つた。

„Ei, so habe ich ja die Ehre, den 30 jährige Krieg zu sehen.” (おや、僕は三十年戦争を見る光榮に浴したぞ) また *Rokitansky* が、彼の四人の息子をどういふ職業に向けるかと尋ねられて



かう答へた。

二人は „Heilen” (治療) するに、二人は „Heulen” (嘆える) に。(二人は醫者に、二人は聲樂家に)

この註は正しくて、何等抗議の餘地がない。しかし、それは、括弧の中の言葉以外に何等の附加へをしてゐない。この二つの言葉の同じ様な發音及び綜合といふことから喜びを得るためにこの答へはさういふちがつた形式を使用したのだといふことが明白だ。

私達は遂に明白な事實を悟つた様に思ふ。かういふ技巧が單に洒落のみに特有なことでないといふ考へから洒落の技巧の評價は今迄妨げられてゐた。しかも、それを分解してしまへば、洒落の性質や、その興味を失つてしまふことを考へて見れば、洒落の本態にも技巧は關係がありさうだ。そこで、今迄「洒落の技巧」として説いて來たもの——これからも考へる處あつてさういふ名前をつづけるが——は、洒落が興味をひき出す源であるといふことを認め、また、同じ様な目的を持つ他の方法(諧謔)も興味を同じ源から汲みとるといふことは次して怪しむに及ばない。

洒落に固有であり、たゞそのみにふさはしい技巧の本質は、興味をなくしてしまふ批判の邪魔を豫防するために、興味をよびおこす手段を使用するといふ方法なのだ。この方法には共通性は殆



んだない。

洒落の作業が批判の試験に堪へて、昔の言葉や考へのあそびをさせて言葉の材料や思想の配列を選択することにたずさはることは今云つた通りだ。この目的に對しては、言葉の性質や思想の關係事情等がすつかり利用し盡されなければならない。恐らくもつと後で吾々は、洒落の作業のある性質を擧げる場合があるだらう。それよりも差當り、洒落に最も都合のいい言葉や思想の配列の選擇はどんな風にしたら出来るかといふことがまだ不明だ。洒落の傾向、その働き並びに面白味を持つ言葉や思想の結合等を、批判から保護することは諧謔の本質的な特徴でもあることは先に云つた。諧謔の働きは最初から内部の壓迫をすてさせ、その壓迫によつて達し難かつた喜びの源から收穫を多くすることにある。又私達は諧謔はどんなに發達してもこの性質だけは失はないでゐることが今にわかるだらう。

さて、こゝで私達は、大家達によつて洒落の特性に重大な意味をもつてをり、洒落の興味をよびおこす説明になるとせられてゐる「不合理の合理化」(Sim in Unsim)といふことに就て正しい地位を示さう。洒落を條件づける二つの點即ち、面白味のあるあそびを遂げようとする傾向と理性の批判から保護しようとする努力とは、結局何故洒落が一見不合理に見え、再三觀察するときは正



しく、または少くとも許さるべく見えるかといふ間に説明を與へない。此初め不合理に見えたものが觀察の結果遂に正しく見える點が實は洒落の重要な點なのだ。もしそれがうまく成功しない場合は、洒落はいはゆる *Unsinn* (不合理) に終つて臺なしになる。洒落の喜びは直接にしろまたはその間に「まどつき」と「落ち」(*Verblüffung und Erleuchtung*) といふことを挟んだにしろ、洒落の道理であり同時に不合理であるといふことから得られるのだ。だが私達は此喜びを感情に反抗して迄、洒落から汲むには及ばない。どうして洒落の不合理の内容が合理的な認識に變ることが面白いのかは感情上の事で、今此處で問題にする必要はない。

洒落の「精神的發生」(*Psychogenese*) に依つて吾々が學んだのは洒落の面白味は言葉を弄ぶこと、または不合理から解放されることに由來し、また洒落の興味はたゞこの面白味が批判に依つて破棄されることを防ぐことによつて決定するといふことである。

洒落の重要な本質は諧謔に依つても説明される。私達は諧謔を更に深く進んで、傾向のある洒落に向つてゆくことにしよう。諧謔は私達を満足させようとする傾向を初から持つてをり、従つて、その述べられたことが不合理でなく、内容さへあれば満足を買へる。もしこの述べられたことが内容豊富で價值十分の場合は、諧謔は洒落に代つて來る。かうなるとその一つの思考が私達の興味に



値し、しかも最も單純に表現されて、私達自身に、また彼自身のために快感を起さしめるに違ひない様な形式を具へたのだ。たしかにかゝる組織は、ある目的なくしては成立しない。私達は、よく考へて洒落を構成するといふ目的を覺る様に骨折らなければならない。先刻、なにかの序にのべた觀察が吾々をその道に導いて呉れるだらう。私達は既に、いゝ洒落は吾々に快感のいゝあらゆる印象を與へたといふことに氣がついてゐる。しかし、快感のどの部分が洒落の形式から來り、どの部分がその考への内容から來るのであるかは直接區別することはまだ出來ない様だつた。吾々は相變らずこの區別に迷ひ、あるときは洒落にふくまれた思想に驚嘆する結果、其價值を過重視し、あるときは、洒落の装ひによつておこる満足感のために思想の價值を顛倒してゐる。

何が私達に満足を與へ、何を私達は笑つてゐるのかわからないのだ。この事實と認められた吾々の判斷の不確實が、ある特殊の意味に於て、洒落の構成に對する「動機」(Motive)を與へたのだ。思想は洒落の假裝を探し、その假裝に依つて私達の注意を喚起し、私達に意義深く、且又價值がある様に思はせようとして居るのだ。その裝が最も強く私達の批判を籠絡し、そして私達をまごつかせる。

吾々は洒落の形式が吾々に與へて呉れるものをその思想のせいにしてしまふ癖がある。けれども喜びの源を培ふ事によつて私達を満足させるものを不正とは認めない。若し洒落が私達に笑をもた



らした場合はとにかく一時は批判にとつて都合の悪い素質が吾々の中につくられたのだ。だから、私達がかつて「遊び」を喜んだ頃の氣分に私達は強ひられる事になり、洒落は又あらゆる手段を用ひてその氣分を深くしようと骨折るのだ。

或一つの洒落を捕へて、此洒落は無邪氣の洒落で、傾向を持つて居ない、と云ふと、そんなそれは洒落ではない。諧謔なのだと抗議してはいけない。傾向のないもの必ずしも諧謔とは限らないし又、無邪氣と云つたからつて必ずしも興味の目的だけで造られてるとは云へないから。

洒落は——たとひその内容の思考が、傾向をもたず、即ち單に理論的思考興味しか與へないでも洒落と名がつく以上は元來決して傾向をもたないものではない。即ち、洒落は思考を誇張によつて助成し、批判に向つて確實にしようとする第二の目的を遂げんとしてゐるのだ。こゝに到つて洒落はその本來の性質を現はし、壓迫的な且束縛的な力、即ち批判的判断に對抗するのだ。

興味を産み出すことを遙かに超越してゐる洒落の此應用は、其他の應用に就て道標べをする。洒落は今にして見れば天秤がどちらへ傾くかを決定する精神上の力の因子なのだ。精神生活上の大きな傾向及欲望は洒落をその目的に對して役に立てようとしてゐる。あそびとして始まつた原始的な傾向のない洒落は、二次的に精神生活の上に作りあげられた傾向をもつものとなる。私達は既に洒



落が、暴露的、挑戦的、犬儒的、懷疑的な傾向に役立つ能力のあることを知つてゐる。猥談から生れる野卑な洒落は性的な状況を本來は邪魔して居る第三者の中から仲間を作り、女を恥かしがらせ、又その仲間を話の興味で籠絡するのだ。攻撃的な傾向をもつてゐるものは、始めは無頓着な傍聴者をも共に憎み、共に輕蔑する人に變へてしまひ、始めはたゞ一人であつた反對者を大勢にしてしまふのだ。前の場合ではその作り出した興味といふ賞與で羞恥心並びに作法といふ束縛にうちかち、後者の場合では嘗つて問題として吟味された批判的な世評をひつくりかへしてしまふ。第三及第四の場合即ち、犬儒的及び懷疑的な傾向に用ひられる場合は、聽く人のもつてゐる眞理及制度に對する尊敬をゆりうごかし、且一方ではその論證を強固にし、他方では攻撃の新しい方法を營むのだ。論證が聽く人の批判を自分の方にひき入れようと試みれば、洒落はこの批判を排斥しようと努力する。要するに洒落が心理學上最も有利な方法を選択するといふことは疑ひないことだ。

傾向のある洒落の働きを、かういふ風に觀察すれば容易に理解出来るが、最も目立つて見えるのは、洒落がきく人へ向つて動きかける作用だ。

最も面白いのは洒落を創作する人、もつとうまく正しく言へばそれを思ひつく人の精神生活で行はれる洒落の働らきだ。私は以前に洒落の精神現象を二人の人間に分配することに關して研究し



ようと約束したが、今其機會を見出した。

差當り洒落をきく人のそれに依つて起された精神現象は多くの場合、洒落を作る人の精神現象を模倣したものだと云ふ想像を發表して置きたい。聽く人が打克たねばならない外部の障碍は洒落る人の内部の障碍に相當してゐる。少くとも洒落る人にあつては外部の障害を豫想することは、制止的な思想として存在して居る。どんな場合でも、傾向のある洒落によつて打克つべき内部の障碍はきつとある。例へばN氏の洒落から、私達は、その洒落が單に聽く人に侮辱による攻撃の快感を與へるばかりでなく、その快感によつて聽く人自身が新しくつくりだしたのも加へて與へることを認めることが出来る。

內的な制止、または壓迫の下にかくれて居る「排除」(Verdrängung) と呼ばれるものは、私達にとつては、最も意味の深いもので、その影響も多い。此の「排除」が、自分に襲ひかゝつて來る興奮やその副産物を意識から追つぱらつてしまふものだ。私達はいづれ、傾向のある洒落が、此「排除」の下に隠されて居る源から喜びを遊離する力があるのを聞くだらう。上に暗示した様に、外部の障碍に打克つことが、内部の制止と「排除」の力であると認められるならば、傾向のある洒落は洒落の作業の主な性質を持つて居るもので、此性質が、洒落のすべての階梯に共通して、制止を排



除して喜びを解放するものだと言ひ得る。洒落は壓迫されたまゝになつてゐる興奮の助けを借りてそのもつてゐる傾向を強調するものだ。言ひかへれば洒落は壓迫された傾向を持つて居る事になる。これが即ち傾向的な洒落の作用だと認めることが出来るのは誠にうれしい。しかし、またどういふ方法でその作用が出て来るのかは分つて居ない。洒落の力は言葉のあそび並びに解放された不合理といふ源から喜びを得る所にある。而してまた傾向のない諧謔から得た印象に従つて判斷すれば諧謔から得る喜びの價值は、制止とか排除とか云ふ事が問題となつて起つて来る喜び程であるべきでないのを信じられるだらう。

この場合には事實單に力の作用のみならず、錯綜した解放事情 (Anlösungs-verhältnis) と云ふものが存在して居る。この事情を洞察することに成功した私の永い廻路を示す代りに、私は、それを簡単な合成的な方法で試みに示して見よう。

G. Th Fechner は美學入門 (Vorschule der Ästhetik) で「美學的助力或は美學的強調の原理」(Princip der ästhetischen Hilfe oder Steigerung) を樹つ、次の言葉で詳論してゐる。『そのものとしてはあまり働きのない喜悅條件 (Lust bedingung) も各自矛盾なく合致すれば各の條件がそれ自身の Lust の價值に相當するよりもつと大きな、しばしば非常に大きな喜悅の効果が



現れ、また、各の作用の總額と見なし得るものよりもつと大きな効果が現れるものである。たしかに、かういふ風に各の條件が不十分に弱すぎる場合でも、條件の合致に依つて、喜悅の陽性の結果が得られ、喜悅の閾が越えられる。たゞそれは一つ宛しか條件のない時に比較して僅かに満足といふ長所だけしか認められない。』

私の思ふ所では、洒落といふテーマは、他の多くの藝術にはあてはめられるこの説の正しさを證明する機會を與へない。洒落に於ては吾々はこの説に少くとも近くはあるが少しちがつたことを學んだ。即ち、喜びを生み出す多くの條件が一緒に働く場合には、その各に、その結果として實際にもらふべき配當をわりあてることが出来ないといふことだ。しかしこの「助力」(Hilfe)の説に假定された事情も變化することが出来る。また新しい條件が加はる時、それに對し解かねばならぬ二二三の疑問がある。もしある状態に於て「喜悅條件」と「不快條件」とがぶつつかれば、一般にどうなるであらうか。またその前兆や結果は何にるのであらうか。傾向のある洒落の場合はいかう云ふ事のありさうな場合の特殊なものだ。喜びをある源から解放しようとし、差支のない保證の下に解放される衝動や傾向もあるが、またその他に、喜びの發展を阻止する、即ちそれを制止し壓迫する一つの傾向も存在する。壓迫する傾向は、その結果の示す通り、壓迫されるものより一定の程



度だけ強いに相違ないが、壓迫されるものは決してそのために消滅しはしない。

こゝで第二の傾向が加はつて來た。此傾向は他の源からではあるが同じ様な事情から喜びを解放しようとするもので、やはり、壓迫されたものと同じ意味に作用する。そんな場合はどう云ふ結果になるか。これを説くために一つの例をあげよう。今假りにある人間に對する誹謗の念が續いてあるとする。これは地位を考へる感情や、美的教養が妨害してゐるので、惡口が抑へられて居る。もしそれが例へば蟲の居所がわるくて爆發すれば、この誹謗の傾向の爆發したことが後になつて不快を感じしめる。だから惡口は抑へられてゐるのだ。惡口に用ひられる言葉や考へからいゝ洒落をつくり出して、壓迫の妨げをうけない他の源から來る喜びを解放することの出来る場合がある。かう云ふ第二の喜びの發生は、惡口がそのまゝ赤裸々に云はれた場合は遂げられないに違ひない。もし惡口が閉されゝば、直ちにそれは新しい喜びの解放の源となる。傾向的な洒落に就ての經驗によれば、かゝる狀況では、壓迫された傾向は洒落の喜びの助力によつて尙一層強い制止に打ち克つ力を得ることが出來、嘲る事によつて洒落が出来るから嘲けり得るのだ。しかし狙つた快感は單に洒落の快感のみを生み出すものではない。その快感は洒落の喜びには比較出来ない程、はるかに大きいものだ。今迄壓迫されて居た傾向が少しの割引もなく大道を濶歩するのだ。かう云ふ事情の下に於



て傾向のある洒落は最も面白く笑へるものだ。

笑の條件を研究する間に多分私達は、壓迫に打ち克つために、洒落の助けを借りるといふ現象のより具體的な概念をつくる機會に出會するだらう。私達は、傾向的な洒落の場合は、此の助けを借りる一種特別の場合であることを領解した。喜びの發展する一つの可能性が、喜びの可能性を妨げてゐる他の事情の仲間入りをして、それ自身喜びを得られなくなつてしまふ事がある。その結界はやはり喜びの發展であるが、その喜びは仲間入りをしたその一つの可能性よりも遙かに大きなものである。これはやはり「誘惑の賜」(Verlockungspiraenie)として働く。

新たに附け加はつた僅かばかりの喜びの價格の助けをかりればその附加がない場合とは比較にならない程、莫大な價格が得られる。私は此處で、喜び (Lust) を前喜悅 (Vorlust) と考へる、前喜悅の原理 (Vorlust prinzip) を提供する根據を握つて居る。此原理はお互にかけ離れて居る精神生活上の多くの領域を説明する組織を、領解する助けとなり、偉大な「喜び」の解放を領解するための目的に叶つたものだ。

私達は今此處に、傾向的な洒落の働き方の公式を發表することが出来る。洒落の喜びは前喜悅であつて、此前喜悅が媒介者となつて壓迫と排除とを取り去つて、新しい喜びを産み出させる。これが



即ち傾向の公式なのだ。洒落の發達を概観する時は洒落は終始常にその完成に忠實であると言へる。洒落は言葉や思考を思ひのまゝに使用することから喜びをひき出すために、最初はおそびの形として始まつてゐる。理性が強くなつて、言葉のおそびは馬鹿々々しいものであり、思考のおそびは不合理なものであるとして、禁ぜられると、この源を確實に保ち、不合理を救ふことから新しい喜びを得るために今度は諧謔に變つて來る。

本來傾向のない洒落となるに及んで、思想の助けを借りて批判的判斷の抗議に反抗しながら思想を鼓舞し、其際喜びの源の變換の原理が利用される。而して遂には前喜悅の原理に従つて内部の制止を抑へるために、偉大な壓迫と戦ふ傾向が之に與して來るのである。理性——批判的判斷——壓迫——かういふ權力に對して、洒落は戦ふのだ。原始的な言葉の喜びの源を洒落は確實に保ち、諧謔に移る階段の前では制止を抑へることによつて新しい喜びの源をひらくものだ。洒落のうみ出す喜びは、遊びの喜びであれ、または「揚棄の喜び」(Aufhebungs lust) (註、此 „Aufhebung” と云ふ字は今迄 „Aufhebung und Hemmung und Verdrängung” 「制止と排除をとりける事」として頻發して居る)であれ、我々が精神支出を節約する度に誘ひ出し得るものだ。さういふ風に理解することが洒落の本態に矛盾せず、また他の方面にも有效なことなのだ。



## 洒落の動機・社會現象としての洒落

洒落の動機 (Motive) を語ることは喜びを得ようとする意向が、洒落の作業の十分な動機だから無用なことの様に見える。しかし一方から言へば、尙他の動機が洒落を作ることに関與してゐるかも知れないし、また他方では既知の經驗から見れば、洒落を主觀的に條件づける問題が残されて居る様だ。

洒落はたとひ、精神現象から喜びを得る優れた方法であるとはいへ、すべての人間にこの方法が同じ様に出来るわけではない。洒落の作業は誰にも自由になる譯でない。非常に少い人數即ち洒落の上手な特別な人々にだけ非常に有効に使へるものだ。洒落はこの場合「精神能力」(Seelenvermögen)といふ領域の中の特殊な能力の様に見える。而して此能力の出現は才智、幻想、記憶、等と全く無關係だ。洒落氣のある頭腦には、洒落の作業を許し、それを補助する特別の素質または精神的條件が想像される。

私はこの問題を探究しても別に大きな收穫はないだらうと恐れる。たゞ折々、個々の洒落を領解



しながら、洒落を創作する人の精神の主觀的條件に就いての知識をすゝめることが出来るだけだ。全く偶然だが、洒落の技術の研究を始めた例が、丁度洒落の主觀的條件の内部を洞察することを許す様なことになった。私は之を Heymanss と Lipps に依つて著眼された Heine の洒落を指して言つてゐる。「私はサロモン・ロートシルドと並んで坐つて居たのです、あの人は私を彼同様の身分に、全然 „Famillionär” に扱つたのです」。この言葉を Heine は、ハンプルヒの集金人で、魚の眼手術者で、税金査定者で、且貴族の Cristoforo Gumpelino (以前は Gumpel) 男爵の従僕である Hirsch-Hyacinth といふ滑稽な人間が言つたことにしてゐる。ハイネはこの彼の創作に明かに大きな快感を覺えてゐて、Hirsch-Hyacinth に、誇大な言葉を言はせ、彼に最も面白い腹藏のない言葉を述べさせてゐる。

彼は、Sancho Pansa の實際的の知識を借りてゐる。Heine がこんな芝居氣のある存在を愛さないで、この貴い人物を早く見捨てゝしまつたことは残念千萬だ。Hirsch-Hyacinth といふ人間から薄い假面を被つた詩人があらはれてゐることはよくわかり、確かに、この人間は詩人の自作した役者であることは直に氣がつく。Hirsch といふ名に就いては根據がある。何のために彼が彼の前名をすてゝこゝに Hyacinth と稱してゐるかといふことの根據は Hirsch といふ名前が語つてゐる。



る。彼は言つてゐる「それには、私の印章にHといふ字があるので、非常に便利だ。だから私には新しく印を刻ませる必要はない」と。この節約を Heine 自身が、彼の洗禮の際自分の通稱の „Harry” を正名の „Heinrich” と取り代へて行つて居る。Heine の傳記に詳しい人には思ひ出されるであらうが、Hirsch-Hyacinth が住んでゐたと示されてゐる Hamburg に、同じ名前の叔父を Heine がもつてをり、その叔父が富豪として彼の一族中で重要な人物となつてゐる。その叔父も Salomon と呼ばれ、貧乏な Hirsch が非常に Famillionär に扱つてもらつた老 Rothschild と全く同じ名前である。

Hirsch-Hyacinth の口にしたことは單なる諧謔であるが、もしそれを甥の Harry-Heinrich が言つたことにすれば、その後にある皮肉が現れて来る。人の知る通り彼はその一家ではあつたし、その叔父の娘との結婚を彼は熱望して居た。しかし従妹は彼を拒絶した。それで叔父は彼を貧乏な親族といふよりはいくらか Famillionär に取扱かつた。Hamburg の富有な遠縁の親類は決して彼を満足にとりあつかはなかつた。私は、Heine の一族に嫁して來て彼の伯母になつた老人の話を思ひ出す。彼女はまだわかい美人であつた頃の或日、親族の宴會で隣に坐つた、あまり蟲の好かない男を見出した。彼に對して他の者は輕蔑した様な振舞をしてゐた。彼女自身も彼に愛想よくする様



な機會を見出さなかつた。多年の後、その等閑に附された親類のものが詩人の Heinrich Heine であつたことに氣がついた。Heine が金持の親族から青年時代及後年も嫌はれたことは、いろんな證明に依つてわかる。かゝる主觀的な感動の畑から „Famillionär” といふ洒落が成長したのである。

偉大な諷刺家の其他の多くの洒落に於ても同じ様な主觀的な條件を感じられるであらう。しかし私は同じ様なことを説得的に説明するやうな例はもはや知らない。であるから、かういふ個人的な條件に就て更に細目に互つて言ひ盡さうとすることは危険だ。勿論すべての洒落に、そんな複雑な成立條件のために、時間を奪はれることは好ましくないことだ。他の有名な人の洒落でも、研究し觀察すればきつと近づき難くなる。洒落の作業の主觀的な條件は、精神病の場合のそれにあまり遠くないといふ風な印象をうける。たとへば、Tichtenberg は非常に重い憂鬱症の患者であり、あらゆる點で一風變つた人間であつた。大多數の洒落、殊に毎日の様に新しくつくられてゐるものは、世の中に有名にならない。そんな洒落を一體どんな人間がつくつたかと、もの好きな疑問が起るだらう。別にすぐれてもゐないのに、其洒落がうまいとか、多くの流布せられる洒落の作者だとかで、其周圍に知られてゐるやうな人間に、醫者は出會ふことがある。そんな場合、かういふ頓才のある



人間が分裂した、また精神病の素質のある人格をもつてゐることを發見して驚かされる。この説明は不十分ではあるが、かういふ精神病的な體質が、洒落を創作する主觀的な、いかなる場合にも缺くべからざる條件であるといふことを十分に物語つてゐる。

更に解り易い例は、例のユダヤ人の洒落だ。それは前にも述べた通り、全くユダヤ人自身によつて作られたものだ。然るに他の方面から書かれたユダヤ人の歴史は決して同じ程度の滑稽な茶番や、ひどい侮辱をして自分達仲間を眼下に見下すことは決してないのである。此場合は Heine の *Famillionär* といふ洒落と同じく、自己の關係するといふ條件が表れてゐる様に見える。而して其意味は、批判や攻撃はその個人には直接は妨げられるが、たゞ廻路によつて出來るといふことである様に思はれる。

洒落の作業その他の主觀的な條件、又はその補助はそれよりいくらかはつきりしてゐる。傾向のない洒落の動機もしばしば、其精神を示さうとする衝動であり、性の世界に於ける暴露と同じ衝動の現れである。多くの制止せられた衝動——それを壓迫することは或程度の不安定を防ぐ——の存在することは、傾向的な洒落を創作することに都合のいい組織を與へるものだ。だから人間の性的組織の各個の分子は洒落の創作の動機として現れ得るものなのだ。



猥褻な洒落はすべて、それを創作した人のかくれてゐる暴露傾向の門戸をひらくものだ。攻撃的な傾向をもつ洒落が、それを最もうまく成功してゐる。そんな洒落には、人生に於て多かれ少かれ制止されてゐる處の、慘虐的な分子が證明される。

洒落の主觀的な條件を研究する際に要求される第二の事實は一般に知られてゐる事だが、洒落を自分獨りで創作してよろこぶ人はいないといふことだ。洒落の作業には洒落を傳達するといふ慾望が離すことの出来ない様に結合してゐる。この慾望はたしかに強いものであり、しばしば必要な思慮をも無視する程度にまでなる。滑稽でも、それを他の一人に傳達することが喜びを與へて呉れる。然しそれを傳達することは強制的ではない。滑稽にぶつつかつたときは獨りで楽しむ事が出来る。之に反し、洒落は傳達する必要がある。洒落を創作する精神現象は、洒落を思ひ付いた時で終つて了ふものではない様だ。その思ひ付きを他に傳達して、洒落を創作する未知の精神現象を完了してしまはうとするものが残つてゐる様だ。

差當り、私達は、洒落を傳達しようとする慾望は何に基いてゐるのか推測することが出来ない。しかし私達は、洒落に就て、それと滑稽とを區別する特徴を知つてゐる。私がもし滑稽に出會へば獨りで心から笑ふことが出来る。もしそれを他人に傳へて、その人を笑はせることが出来たらそれ



もうれしい。私の念頭に浮んだ洒落を私が創作して、たとひその洒落に明かな快感を覚えても、自分獨りでは笑ふことは出来ない。私は洒落を他人に話すのを止める事が出来るが、他人はその洒落をきいて十分に笑ふ事があつても一向差支がないのではあるまいか。

何故私は自分自身の洒落によつて笑へないのか？ またその際、他人の役目は何であらうか？

何よりも先づ私は後の方の疑問に注意を拂はう。滑稽に於ては一般に二人の人格が考へられる。

即ち「私」の他に、その人に就いて私が滑稽を見出す人格が考へられる。私に或る事物が滑稽に見えるのは、吾々の思考生活に於て珍らしくない「擬人法」のためである。この二人の人間即ち「私」とその対象人物さへあれば、滑稽な現象は十分である。これに第三者が加はることもあるが、しかしそれは必ずしも要求されない。洒落は、自身の言葉又は考をもてあそぶことであるから、対象人物はなくても済む。しかし最早諧謔の初步では、もし出来るなら、あそびや不合理に對する理性の抗議を防ぐために、その結果を傳達する人間を求める。洒落に於けるこの第二の人物は、しかしながら対象人物には相當しないで、滑稽に於ける第三の人物即ち他の人に相當する。

諧謔では、この他の人に、洒落の作業がその任務をつくしたかどうかを決定することがまかされてある。これは恰度「私」が彼のそれに對する判斷を確かに知らない様なものだ。傾向のない即ち



思考を強調する様な洒落でも亦其目的が達せられたかどうかを試みるために、他の人を要求する。洒落が暴露的な、または敵意ある傾向に用ひられれば、それは三人の人間の間の精神現象であると説明せられる。それは恰度滑稽の場合と同じである。が第三の人物の役目は滑稽の場合と異つてゐる。洒落の精神現象は第一の人間即ち「私」と第三の人間即ち、他人との間で完了し、滑稽の場合の様に「私」と対象の人物だけでは終了しないものだ。

洒落の第三の人物に於ても洒落はやはり主観的な條件にぶつつかる。その條件が喜びを刺戟しようとする目的を達し難くする。

Shakespeare が注意した様に (Love's Labour's lost, V. 2.)

„A jest's prosperity lies in the ear of him that hears it, never in the tongue of him that makes it“.....

「冗談の成功はそれを聞く人の耳にあり、それを作る人の舌にはない」

眞面目な思想に結びついた氣分に支配されて居る人は諧謔に言葉の面白味のあるといふことを確認するには不適當だ。もつと快活な少くとも無頓着な感情をもつてゐる人でなければ、諧謔を第三の人物に渡す事は出来ない。洒落にも傾向の有無を論ぜず、同じ様な障害がある。傾向のある洒落な



らばその狙つた傾向に反對する新しい障害が現れて来る。

すぐれた猥褻な洒落によつて笑はせようとする仕組みもその暴露の重點が第三者の尊敬して居る物に該當するときは効果がなくなる。牧師の集會に於ては誰も、Heine のなした様に、カトリックや新教の坊主を、小賣商人や問屋の使用人に比較する勇氣は出ないだらう。もし私が自分の反對者の信賴してゐる友達仲間に、洒落を含んだ惡口を言つた場合、それは洒落としてよりも惡口としての効を奏し、喜びよりもむしろ憤激を買ふだらう。第三の人物が洒落の進行の完成に關與する必要がある場合には、ある程度の好意、ある程度の無關心のあること、またはその傾向に反對する強い感情を呼びおこす可能性のあるあらゆる要素がない事が必要條件だ。

かう云ふ障碍が洒落の働きに對して見られない場合は、私達が研究すべき新現象が起つて来る。即ち、洒落のもたらす喜びが洒落の作者よりも第三者の方にはつきり感ぜられる事だ。然し此事は次の様に云つて置くしかない。

「聽く人の面白味が、作者の面白味よりも強くはないかどうかといふ疑問を、私達が起しやすいのは明白なことだ。なんとすれば、それを測定し比較する方法が私達にないから。」私達はよく見るとだが、第一の人が往々眞面目な緊張した顔付で洒落を言つた後、第三の人が爆發的な笑でもつて



面白味を表すことがある。私がもし、自身で聞いたことのある洒落を吹聴する際には、その効果を傷はないために、それを作った人と同じ様に振舞つて話さなければならぬ。しかし私達は果して洒落を笑ふことに對する、これ等の條件から、洒落の作られる過程に對して、結果から原因を見出すことが出来るかどうかは疑はしい。

笑ひの性質を明かにし何故笑へるのかを、すべて考へることは私達の今の意向ではない。かういふ考へは、Ribot<sup>リボト</sup>の門人である Dugas<sup>ドガ</sup> が彼の著 “Psychologie du rire” (笑ひの心理學)の冒頭に書いてゐる文章を見れば私達には怖しくて、止めた方がいゝやうだ。

「笑ひ位あり來りの事で、よく研究されたものはない。又笑ひ程、俗人や哲學者の好奇心を刺戟したのものもない。笑ひ程多くの觀察を與へ、多くの定理を樹立させたものはない。然もその觀察も定理も未だ笑ひを完全に解釋して居らない。唯私達は懷疑的にかう云つて見るしかない。——私達は笑ふだけで、何故笑ふかは研究しないで置くしかない。考察は笑を殺してしまふもので、考察は笑の原因を發見するのに反對するものだ、」と。

然し私達は、笑のメカニズムの檢閲を止める譯にはならない。笑のメカニズムを研究する事は、今の私達自身には考察上最も適當したものだ。私は H. Spencer が彼の論文 “Psychology of



Laughter' (笑ひの心理) に於て試みた説明方法を讀んで見よう。

Spencer に依れば「笑ひは魂の興奮を搬出する現象であつて、この興奮が精神上に現れた際、ある障礙に衝突した證據だ。」笑ひに現れ出た精神状態を Spencer は又次の様な言葉で描いてゐる。「笑ひは元來意識が無意識裡に大きなものから小さなものへうつりゆく際に起るものである。——即ち、私達の中に Descending in congruity (大きなものから小さなものへ移りゆく際の不調和) とも言ふべきものが存在する場合にのみ起るものである。」

同じ様な意味でフランスの大家 (Dugas) が笑を „Détente” 即ち緊張のとれる現象として表してゐる。而してまた „A. Bains の式” „Laughter a relief from restraint” (笑ひは抑制の軽減) といふことも、他の多くの大家が私達に信じさせようとしたことと同じく、Spencer の説に近い様に思はれる。

しかし、とに角私達は Spencer の考を修正し、その中に含まれてゐる概念を一部はそのまま確保して置き一部は變化する必要を感じる。即ち笑ひは、精神のエネルギーのある額が豫め他の精神徑路に配置されて使ふ餘地がなくなつてゐる場合に成立し、さうしてエネルギーの額が自由に搬出されるのであると云ひ得る。かう主張しながら、私達がどんな不愉快な振りをしてゐるかはつき



りわかるだらう。しかし私達は Lipps が滑稽及びユーモア (Komik und Humor) に就て書いたものから、——それは單に滑稽とユーモアに關する説明だけでなく、もつと他のものゝ説明も得られるが——私達を辯護するにふさはしい文章を敢て引用する。

「心理學上の細かな問題は、結局心理學といふものにいつも可成深く根ざしたものであるから、細かな問題もきり離して取扱はるべきものではない。」「精神的エネルギー」(„Psychische Energie“)とか、「搬出」(Abfuhr)とかいふ觀念や、精神上のエネルギーを一つの量として取扱ふことは、私の思索上の習慣となつてしまつた。それは私が精神病學上の現象を哲學的に解釋することを始めて以來のことである。而して既に私は私の「夢の解釋」に於て、Lipps と同じく、自身に氣のつかない精神現象を「本來精神的の作用能力のもの」(„eigentliche psychisch Wirkungsfähige“)とし、意識の内容はさうでないと主張して見た。たゞ私が「精神徑路の配置」(Besetzung psychischer Wege) に就て語る際は、Lipps が用ひた譬喩と私とが少しかけはなれてゐる様に思はれる。精神のエネルギーが聯想の徑路に添つて推移する實驗や、または精神現象の軌跡を堅固に保持する實驗は、私に未知のものを具體化する試みを事實暗示して呉れたのである。こゝに誤解を避けるために私は一言つけ加へなければならぬ。即ち、私は細胞や纖維または、今日其位置を示されてゐる



Neuron  
ノイロン

系統をこれ等の精神の徑路であると發表する試みはしない。唯かゝる徑路は將來神經系統のある有機的分子に依つて示されるに相違ない。

吾々の假定にしたがへば、今迄配置されてゐた精神のエネルギーの總額を自由な搬出にまかせるためには、或る條件を與へなければならない。すべての笑ひではないが洒落に對する笑ひには、確かに面白味の徴候があるから、私達はこの面白味が今迄の配置を中止することに關係があると思ひたい。洒落を聽く人が笑ふのに、その作者が笑へないといふ様な場合を私達が經驗したときは、それを次の様に解釋することが出来る。即ち聽く人にあつては配置に用ひられた支出が中止され搬出されるが、洒落を創作する方では、その中止か搬出に邪魔が生ずる。聽く人即ち洒落に於ける第三者の精神現象は「彼は洒落の面白味を非常に少ない自分の支出によつて購ふ」といふことに重きを置くより他に適切に表現することは出来ない。面白味は恰も彼に贈られた様なものである。彼の聽く言葉は、彼の内部に餘儀なく、概念や思考の結合をおこさせる。それを自分で起すとすれば、元來大きな内部の障礙に對抗しなければならないのだ。彼が自發的に第一の人間の様にそれを成就するためには、自分の努力を拂はなければならない筈であつた。少くとも、制止や、壓迫排除等の強さに相當する精神上の支出を賭けなければならない筈だつた。この精神上の支出を省いたのだ。私達



の前にした説明に依れば、彼の喜びは、この節約に相當すると言へるだらう。笑ひのメカニズムに就て、私達が今悟つた事は又かうも言へるだらう。即ち、制止に向けて配置されたエネルギーが、その必要がないと云ふ概念が起るので、そのエネルギーが聴覺による認識の系路に溢れ出し、エネルギーの配置が中止され、笑ひによつて其搬出が行はれるのであると。本質的に見てこの二つの表現は同じ結果となる。なんとなれば、節約された支出は精密に溢れ出た制止に相當するからである。後の説明によれば、洒落を聴く人は、制止の配置を中止することによつて解放された精神のエネルギーの額によつて笑ひ、その額と同程度に笑ひつくすと言へる。此説明の方が解り易い。

洒落を自分で創作する人が笑ふことが出来ないのは、制止の配置並に搬出の可能性等が問題となる第三者の精神現象の一つの除外例だと云へる。然し上に述べた二つの説明のうち第一のものはまちがひであることがすぐ悟られる。制止の配置は第一の人間でも中止されなくてはならないのだ。さうでなければ洒落にならないし、又洒落をつくるにはさういふ種類の反對に打克たなければならぬ。若し又第一の人間で、制止の配置が中止されないとすれば、制止を中止することによつて導き出さなければならぬ洒落の面白味も、第一の人間に感じられる筈がない。だから一つの可能性が残つてゐるだけだ。即ち「第一の人間はたとひ面白味を感じても笑ふことは出来ない。つまり搬



出の可能性が妨げられてゐると云ふ説明だ。笑ひの條件である搬出を可能ならしむるといふことに對する障礙は、解放された配置エネルギーが直ちに精神内部の他方面に用ひられることに依つて生ずる。私達がこの可能性に注意したといふことは誠に都合がよい事だつた。直ちにそれに對して更に興味を向けよう。洒落に於ける第一の人物に於ては更にも一つの條件、同じ結果を導き出す條件が實現され得る。即ち制止の配置が中止されても、そのエネルギーが外部に現れる程の價は恐らく解放されないと云ふ事だ。洒落に於ける第一の人間にあつては、新しい精神の支出のある額に相當する筈の洒落の作業が起る。

だから第一の人間は自分で努力して、制止を中止する。その努力の報酬としてその中から確實に面白味の賜物が出て来る。傾向のある洒落の場合には、洒落の作業に依つて得られた前喜悅自身がその上に又制止を中止することを引受けて呉れるから一層面白味は著しい。そして洒落の作業の必要する支出は常に、制止を中止することに依つて得られる賜物から引つぱり出されるのだ。尤も此支出は洒落を聽く人に於てはその必要はない。

上述したことを尙一層確實にするために、次のことを引用することが出来る。洒落に於ける第三の人間に、若し思索作業の費用が必要であれば、洒落はその人間に於ては笑ひの効果を失つてしま



ふだらうと云ふ事だ。洒落の諷示は明白でなければならぬし遺漏は直ちに補はれなければならない。意識した思索の興味が眼醒れば洒落の働きは駄目になる。こゝに洒落と謎との重大な區別があるのだ。多分、洒落の作業をしてゐる間の精神状態は、得たものを自由に搬出するには不便であらう。この場合は、深い洞察を得るのに都合がよくない。私達は何故第三の人間が笑ふかを何故第一の人間が笑はないかよりもうまく説明することが出来る筈である。

さて私達は、笑ひの條件や、第三者の精神現象に就て確かな觀察を得たから、洒落に於いて知られて居ながら、まだ説明のついてゐないあらゆる特徴を十分に説明する位置に移つてもかまはないだらう。

第三者に於て、搬出出来る配置のエネルギーの額が自由になつて然るべき場合には、多くの條件が満足され、且又次の數項が補助條件となる。

- (1) 第三の人物がかう云ふ配置にあるエネルギーの支出を正直に且確實にする事。
- (2) その支出が自由になつた場合に、運動的な搬出に使はれる代りに、何か他の精神上の使用法を見出すことを避けなければならぬ。

- (3) 第三者の解放された配置が、豫め強められ、其價を騰貴させることが便利である。是等の目



的には洒落の作業のある方法が役に立つ。それを吾々は第二のまたは「補助技巧」として總括することが出来る。

補助技巧の第一の條件は洒落を聴く人として第三の人物の資格を制限する。その人物は第一の人物が洒落の作業で打克つた内部の障碍と同じ様な内部の障碍を處分するだけの能力ある人物で、第一の人間と精神上の一致をもたなければならない。猥談ばかりして居る連中は、却つて機智に富んだ暴露的な洒落から面白味を味はふことは出来ない。N氏の攻撃の洒落では、罵倒の面白味といふことには氣がつかないのが常である。無教育の人間には領解出来ない程度のあらゆる洒落が、公衆にゆきわたり、同じ洒落に笑ふ様になれば、精神の一致が廣くゆきわたつた證據だ。此處で私達は第三の人物の精神現象を一層精細に推量する事の出来る重要な點を手に入れた。第三の人物は第一の人物に於て洒落が打克つたと同じ内部の障碍を、習慣的に自己の内に組立てることが出来なければならない。つまり其人物は洒落を聴くや否や、其内部に、この障碍の準備が強制的に又は自發的に眼醒める。此準備は恰も軍隊の動員と同じ意味の實際の支出で整ふのと溢出とが間一髪を入れないうものだ。かうして立所に笑ひを通じて搬出される。

自由搬出の組立に對する條件、即ち自由になつたエナジーを他方面に使用することが避けられ



なくてはならないことは、更に重要なものゝ様に思はれる。この條件は、洒落の内容の思想から来る強い刺戟が聴く人の觀念を覺醒する際に見られる、まだ不明に屬する洒落の作用の重要點を理論的に説明して呉れる。此際にそれをすぐにその儘受け入れるか、或は洒落だなど氣づかせるかは洒落の傾向と聴く人を支配する思考とが調和するかまたは矛盾するかできまるのだ。

聴く人をして洒落だ云と事ふを氣づかせずに、洒落を自動的に進行させる目的に役立つ補助技巧がある。私は故意に「自動的」(Automatisch)と言つて「無意識」(Unbewusst)と言はない。それは無意識と言ふと間違ひの本になるかも知れないからだ。此處では次の様なことが肝要だ。即ち洒落を聴取する際の精神現象から、今迄多大に拂はれて居た注意を離して置くことだ。(譯註、又洒落かなといふも注意させて置いては、洒落の効果は割引される。續けざまに洒落られると癢に障つて來るものだ。)

そしてこの補助技巧の有効な事から考へると、注意にエネルギーを配置する事は、自由になつた配置エネルギーを監督し、その結果これを新しく使用する事になるのに重大な役目をして居る様だ。

内精神的の使用 (endopsychische Verwendung) に缺くべからざるものとなつてゐる配置を避けるといふことは一般に容易でない様に思はれる。私達は思索過程に於て、かう云ふ配置を、ある系路から他の系路へ、エネルギーを少しも失ふことなく移す練習を絶えずしてゐるからだ。之に對



して洒落は次の様な方法を利用する。

先づ第一に、限局した攻撃點に對し注意を拂はせるために、出来るだけ短い表現法をとらうと努める。第二に洒落は簡単に理解されるべきことを嚴重に守る。さうでなければ洒落が思考の作業を必要とするや否や、いろんな考へ方の上に選擇が要求されて、洒落はその働きを避け難い思考の支出によつてのみでなく、注意を喚起することによつても効果を失つてしまふ。

その他洒落は一方では、注意を他へ轉じさせ様として策略を廻らし、他方では注意を束縛するものを洒落の表現に使用し、其間に制止の配置や其搬出を妨げず、その搬出によつて洒落を完成する。洒落の言葉に遺漏があるのは此目的のためであつて、その間隙をふさぐことによつて聽手を刺戟し洒落の現象を、注意から解放することに成功する。この場合には注意を引きつける謎といふものゝ技巧が幾分か洒落の仕事の役に立つ。それよりも尙役に立つのは「外觀」(Fassade) を作ることである。それは傾向のある洒落の多くの種類に就て既に見出したものだ。三段論法の外觀のある洒落では、その論法の方ばかりに注意が向けられて、洒落の現象の方への注意は全く禁錮されてしまふものだ。

かうして私達の注意が奇襲をうけ、解放された制止の配置が搬出されてしまふ。滑稽を洒落の補



助技巧として使ふ事があるが、滑稽の外観をもつてゐる洒落にも、上に云つた同じことが行はれる。一つの滑稽な外観は、一つの方法としてよりもつと多分に洒落の作用を助成し、單に注意を外すことに依つて洒落の進行の自動を可能ならしむるだけでなく、滑稽の搬出を前提として、洒落の搬出をも容易ならしめる。この場合滑稽は全然、人を襲ふ前喜悅として作用する。而して私達は洒落がたゞ滑稽だけを前喜悅として利用することを領解するだらう。本來の洒落の技巧のうちで、はきちがひ (Verschiebung) と不合理による表現だけは特別のもので、洒落の進行の自動的な經過に誠に好都合な「注意の方向轉換」(Ablenkung der Aufmerksamkeit) を引き受けて居る。

私達が前から想像し、またこれからも一層深く洞察することが出来る事ではあるが、私達は今迄注意の方向轉換といふ條件では、洒落をきく人の精神現象の些細な「動き」(Zug) さへも發見しなかつた。此點に就いては又新しい色々の事を領解することが出来る。第一には分析的には完全に分る可笑しさでありながら、洒落で何を笑ふのかゝまだちつとも分つて居ない。此笑ひは私達の意識した注意を隔離して置くことによつて可能な洒落の自動現象の結果だと云ふ事だ。第二には、もし洒落が聽く人に突然不意打ちにやつて來る場合は、その全作用を現すのが洒落の特徴だと云ふ事だ。この性質は洒落の短命の一條件であり、常に新しい洒落の創作が要求される理由になつて居



る。これは明かにその本態が不意打であり、奇襲であり、二度目には成功しないことが原因になつて居る。この點から、一度聽いた洒落を、まだ聽いたことのない他の人へ話さうとする衝動が明瞭に領解出来る。恐らくは、初めて洒落を聽いた時の印象から出發して、珍奇なものゝ缺乏に飢えて居る享樂の傾向の一片を、他人によつても一度反復するためだらう。同じ意味の動機が洒落の作者を動かすのだ。

たとひ、洒落の現象の條件とまではゆかなくとも其補助として、私が第三に擧げたいのは、洒落のもう一つの補助技巧だ。それは、搬出に用ひられる額をたかめる様にする方法で、此方法は一方では洒落に向けられた注意を高める事もあるが、しかしまた、同時に注意を束縛し、其動搖を妨害して、其影響を再び無害にするものだ。興味と同時に「まごつき」(Verblüffung)をよびおこすすべてのものは、この二方面に作用するもので、それ故「不合理」同じ様な「逆」また多くの大家が洒落の本質的な性質であるとなさうとしてゐる「觀念の對照」などが何よりもさうである。私はこれは唯洒落の作用をつよめる手段より他のものではないと思つてゐる。

すべて眩惑するものは、聽く人に Lipps の所謂「精神停滯」(psychische Stauung)としてエナジー分布の特別な状態をひきおこす。而して又聽くものにとつては、既存の停滯が高度であれ



ばある程、「解放」(Entladung)は強く行はれるといふことを明かに認めなければならぬ。Lippsの表現は、實は特に洒落に就いては、なくむしろ滑稽全般に就いての事だ。だが制止の配置を解除する洒落の場合の搬出でも、同じ方法で停滯に依つて搬出の度が高められるといふことは本當の様に思はれる。

私達に次の様なことがわかつて來た。洒落の技巧は二つの傾向によつて決定せられる。即ち洒落の創作を第一の人になさしむることゝ、も一つは洒落の作用を第三の人に出来るだけ大きくする様に工夫すべき事だ。本來の面白味を、批判的な理性の異議に對して確實に防禦する洒落の兩面觀竝に前喜悅のメカニズムは、第一の傾向に屬する。この章に詳論した條件に依つて、技巧は非常に複雑になるが、これは第三の人物を顧慮するからだ。洒落はそれ自身二枚舌を使ふ無賴漢であり、同時にまた二人の紳士の役目をする。洒落を面白くするためには、第三者を計算に入れなくてはならない。それは恰度第一の人物にも内部の強力な障礙の邪魔がくつついて廻るのと同じ事だ。だから洒落の現象が完全に終了するのにこの第三の人間を缺くことが出来ない様な、強い印象をうける。この第三の人物のこの現象の性質は割にうまく洞察出来るのに、第一の人間に於てはそれに相當する現象がまだ闇に包まれてゐることを感ずる。



「何故、吾々は自分のつくつた洒落を笑ふことが出来ないのか？」

「何のために吾々は自分の洒落を他人に話したくてたまらないのか？」

この二つの疑問のうち第一のものは吾々に答辯が今迄出来なかつた。吾々の想像し得る處ではこの二つの説明されるべき事實の間には密接な關係がある。實は自分獨りでは洒落を笑ふことが出来ないために、私達は洒落を他人に報告する必要があるのだ。第三者に於ける面白味の獲得並びに搬出に對する條件に就て、私達の悟つた處から、第一の人間に對する條件をも、判斷することが出来る。即ち第一の人間では搬出に對する條件が缺けており、面白味を得ることに對する條件は、恐らく不完全ながらも充たされてゐるのだ。私達が自分には不可能な笑ひを、他人を笑はせて、その人の笑ふ印象を廻り路して、面白味を補ふといふことは否めない。我々は *Dugas* が表現した様に、間接に (*par ricochet*) 笑ふのである。

笑ひは、高度に刺戟された精神状態の發露に屬する。もし私が自分の洒落を他人に傳へて笑はせる場合は、私自身の笑ひをよびおこすために、彼を利用するのだ。始め眞面目な顔付で洒落を話した人が、やがて他人の哄笑に合せて、適度の笑ひを洩らすことを、實際觀察することが出来る。私達が洒落を他人に傳達するのは多くの目的がなくてはならぬ。第一に、洒落を成就することに關する



客觀的の確信 (Objective Gewissheit) を自分に與へること、第二に私自身の面白味を他人に反應させて補ふこと、第三に他人の作つた洒落をくりかへす場合には、新味のないために起る面白味の損失を救はうとすることだ。

二人の人物の間に演ぜられる洒落の現象を説明する最後に、私達は「節約」 (Ersparung) といふ要素を顧みたい。その要素は洒落の心理學的知見に對して非常に意義あるらしく思はれ、其技巧の説明を始めた頃から私達の念頭を去らなかつた事だ。思想の結合の表現や言葉の使用に對する極端な束縛には必ず精神的支出が伴ふから、節約には精神的支出を避けることが重要だ。此節約の最も簡単な解釋には私達は永い間迷つてゐた。吾々は其際に言つた。「窮屈や寡言は洒落ではない」と。洒落の簡單さは特別のものだ。平たく言へば洒落氣のある簡潔である。言葉や思索のあそびがもたらす、本來の面白味は、支出を單に節約することから生じて來るものだ。あそびが洒落に發達して來ると節約の傾向はその目的を置き忘れるらしい。何故と云ふに、私達の思索活動に對する法外な支出に比較すれば、同じ言葉を使ふことや、新しい思想の結合を避けることによつて節約される支出は確かに問題にならないからだ。私に精神經濟を、物資取引に比較することを許して貰ひたい。取引に於て、賣買が非常に少なければ、全體として消費が少くなり、國費が非常に制限れさる。緊



縮と云ふ事は支出の絶對的な額に就いて云はれるもので、後に取引が旺んになれば、國費にもそれが現れて来る。取引や所得が十分大きく膨脹さへすれば、支出の額は左程問題でなくなつて来る。

取引の状態が支出を制御する力が弱くては、直接の損害をもたらす。しかも絶對的に大きな支出を要する場合は、節約の傾向は餘地がないと認められるが、實はこれは不當だ。かう云ふ場合でも支配人の意向が節約に傾いて居れば、個人も亦節約に向つて進み、その結果今迄大きい費用のかゝるのを常としてゐたものが少しの額で行はれる様になり、たとひ、總支出の額に對する節約は少くても、満足を感じるものだ。全く同じ様な方法で吾々の複雑な精神の取引では、毎日の出來事に就いて示すことが出来る様に、細目に互つた節約が面白味の源を残すのである。初め部屋にガスランプをつけてゐて、それから電燈をつけた人は、電氣のスイッチを捻つた時、明瞭な快感を感じるだらう。然しそれはガスランプをつけることに必要であつた面倒な仕事を彼がスイッチを捻りながらまざまざと思ひ出す間だけの事だ。同様に、精神の總支出に比較すれば洒落のために起される制止に對する支出の節約は、極く僅かな節約には過ぎないが、尙私達に面白味の源を残すものだ。此節約がなければ、私達は今迄いつも此支出をしたのだし、又今の場合には尙更ら豫め準備して支出するのが當然なのだ。支出が豫期され又準備された支出なのは、はつきり分つて居る。

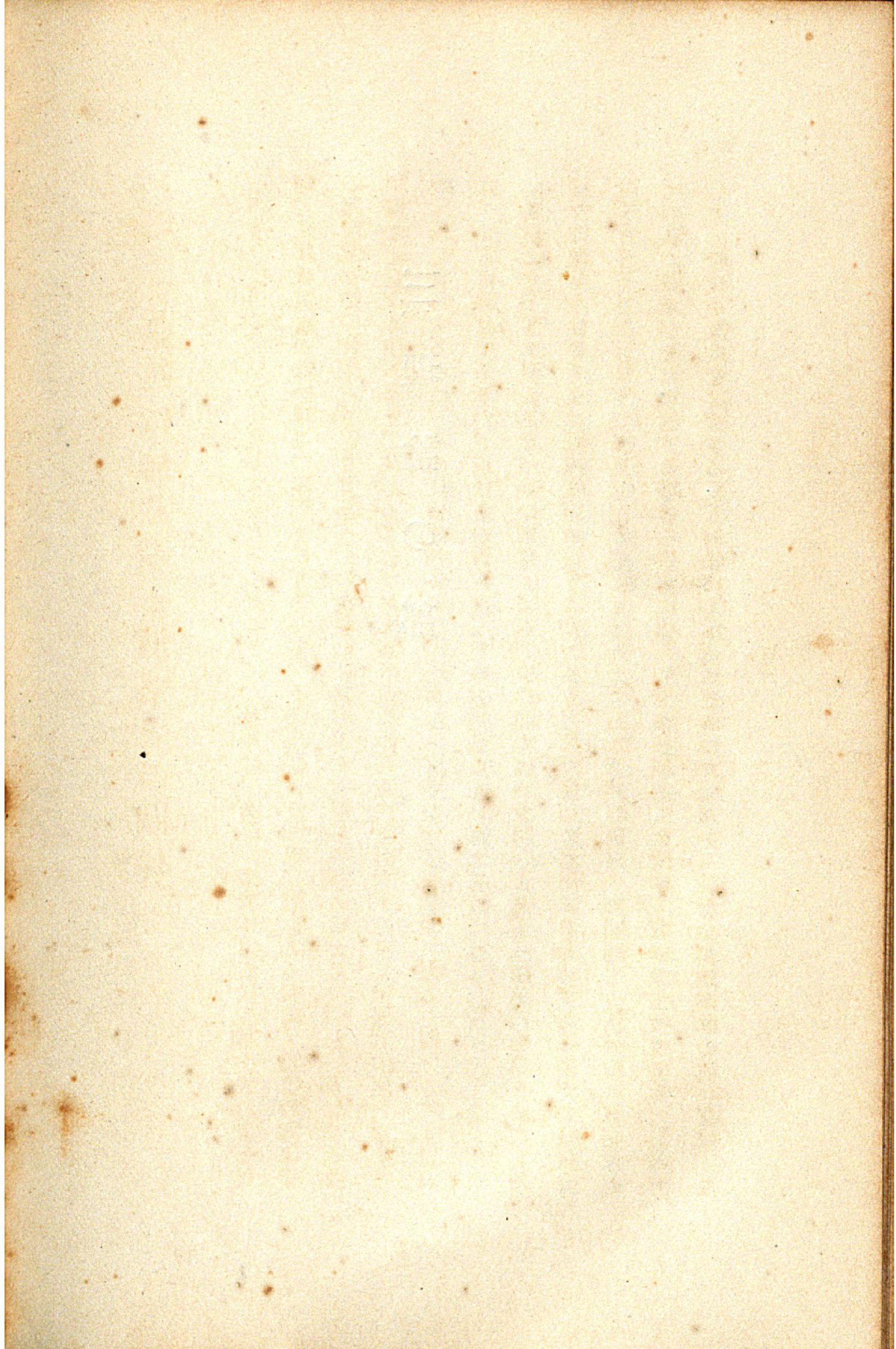


上に觀察した様に、部分的な節約は、私達に瞬間的な面白味を間違ひなく與へる。がしかし永續的な氣輕さはそれに依つては誘ひ出されない。その理由は節約されたものが他の場所で使用されるからだ。かう云ふ他方面の處分が避けられて始めて、特殊の節約が再び精神支出の一般的な輕減に變化する。だから洒落の精神現象をもつとよく洞察すれば、私達に對して輕減といふ要素が節約の代りになる。輕減は明かに大きな快感を起す。洒落の第一の人物に於ける現象は、制止の中止、局所の支出を少なくすることによつて面白味を産み出す。此の面白味は狭みこまれた第三の人物の媒介により、一般的な輕減が搬出によつて果されるまでは續いて居る様だ。



三  
理  
論  
の  
部







## 夢竝に無意識と洒落との關係

洒落の技巧の發見に従事してゐた章の終に於て、私達は、洒落の構成に與る代償語作製による壓縮、又は代償語のない單純の壓縮、はきちがひ、不合理による表現、逆による表現、間接の表現等の諸現象が夢の作業 (Traumarbeit) の現象に非常によく一致してゐることを説いた。而してその相似を注意深く學ぶ事と、又かくされてゐる洒落と夢の共通性を研究する事を留保して置いた。この比較を實行するには、その比較されるものゝ一方即ち、夢の仕事を知つてゐると假定してよければ、非常に容易であるが、或はその假定はしない方が恐らくいいだらう。

私が 1900 年に發表した「夢の解釋」は専門家仲間では「説明」よりも「困惑」をひきおこした様な印象をうける。また更に廣い讀書界は覺え易く、且、便利に濫用され易い標語「領望の成就」 (Wunscherfüllung) で満足したことを私は知つてゐる。其際取扱つた問題——精神病の醫師としての私の職業がそれに對する機會を豊富に與へて呉れたが——を續けて取扱つて行つても、私の考へ方に變化や改良を要求する様な何物にも出會はなかつた。だから讀者の領解が私の説に従ひ、ま



たは、炯眼な批判が、私の説の根本の誤謬を示して呉れるまでは、そのまゝにして置かう。洒落と比較する目的のために、夢及び夢の作業に對する、最も必要なことを、こゝに簡単に反復して置かう。

私達は夢を、覺醒後に生ずる斷片的な回想によつて知るのだ。だからそれは、主として、視覺に訴へる感覺の印象の結合したものだ。その感覺の印象は私達の經驗を亂し、その下にあつては思索現象（夢に於ける知識）も感情の發露も混合されてしまふだらう。かういふ風に夢として思ひ出すものを、私は「顯在的な夢の内容」(Manifestar Trauminhalt)と名づける。

これはしばしば非常に不合理で且混亂してゐることがあるが、或時は一つ一つの區別がはつきりする事もある。然しながらそれが多くの恐怖の夢(Angstraum)に於ける如く凝聚してゐる場合にはその由來に就いて説明を與へることの出来ない様な、ある不可思議なものとして私達の内的生活に對立する。夢のかう云ふ性質に對する説明は今迄、それを神經質な要素の無秩序な、分離した、いはゆる「寢呆けた」活動の徴候であるといふ風に試みられたのだ。

これと違つて私は、かう云ふ珍らしい顯在的な夢の内容を、ある正しい心象を破壊し變更して書き直したものの即ち「潜在的な夢の思考」(Latente Traumgedanken)と名づけられるものとして、



何時も領解出来るといふことを示した。顯在的な夢の内容を、そのいかにもありさうな意味を無視して、其成分に分解すれば、それに關する知識が得られ、さうすればまた、分解された要素から出發してゐる聯想の経路を追跡することが出来る。この系路が纏れ合つて遂には思考の結合に導いて呉れる。其思考の結合は、十分正確であるばかりでなく、既に知られてゐる私達の精神現象の間に編みこまれてゆく。この「分析」の途上に於て、夢の内容はそのすべての未知な物珍らしさを私達に暴露して呉れる。私達が分析に成功するには、媒をしてゐる色々の聯想に對して、絶えず起る批判的な抗議を斷然拒否しなければならない。

想ひ起された顯在的な夢の内容を、さういふ風にして見出された潜在的な夢の思考と (Latente Traumbgedanke) 比較することから夢の作業 (Traumarbeit) という觀念が起つて来る。潜在的な夢の思考が顯在的な夢の内容に導かれる變形的な現象を夢の作業と云ふのだ。夢の作業には、今迄夢が吾々の内に起した怪訝なものがくつついてゐる。

夢の作業の働きは次の様に述べられる。晝の間に組立てられてまだ解決しない、主として非常に複雑な思想の結合—— „Tagerest“ (晝間の残り)——が、夜間にそれに要求されたエネルギーの額——興味——をしつかり保つてゐて、眠を脅かすのだ。この「晝間の残り」が夢の作業に



依つて、夢に變化され、睡眠に對して無害のものにされてしまふ。夢の作業に一つの攻撃點を與へるために、晝間の残りはいかなか満足されない條件を、何とかして満足するだけの力がなくてはならない。夢の思考から起つた願望が、夢の第一段をつくり、後になつては夢の中心を形づくる。夢の理論でなく、分析から生れた經驗は私達に次の事を教へて呉れる。子供に於ては眼のさめてゐる間に忘れられてゐた勝手な希望が夢を引きおこすのに十分である。而して其夢はばらばらでなく、意味の深いものであるが、概して簡単に終了し、容易に「願望の成就」(Wunscherfüllung)であることが認められる。大人に於ては、この願望が意識された思考とは無關係であり、從つて排除された願望である事と、またその上に意識と關係なく此願望を強くする力をもつ事との二つが、夢をつくる願望の一般的な條件である様に見える。茲に述べた様な無意識の假定がなければ、私は夢の理論を更に進め、夢の分析に對する經驗上の材料を理解する術を知らないだらう。夢の思考の意識上正しい材料に對して、この無意識な願望が働きかけて夢が出来るのだ。その際は夢の思考も無意識界に引っぱり下されて、無意識の思索過程相當な取扱ひをうけ、又此階級に一種獨得な取扱をうけるのだ。私達は夢の作業の出來事に因つてでなくては無意識な思索の特質や、その特質と意識めく前意識(Bewusstseinfähige Vorbewusstsein)との區別を知る事は出来なう。



この新しい複雑な且又思索の習慣に矛盾する學問は簡単な説明では明にならない。だから私はこんな説明では別に何も望まない。たゞ私の「夢の解釋」に於ける「無意識」(Unbewusst)の取扱ひと、私には最も意義ある様に思はれる Lipps の業績を参照されることを望んで置かう。正當な哲學の教育に心を奪はれたもの、またはいはゆる哲學的體系 (philosophische System) から遠く離れてゐるものは、Lipps や私の「無意識精神的」(Unbewusst psychisch) といふ假定に反抗し、その不可能なことを精神的 (Psychisch) といふ定義から證明するかも知れないことを私は知つてゐる。しかし定義といふものは因襲的なもので、變化するものだ。無意識を不合理であり不可能なものだと異論を稱へる人は、少くとも私には無意識を認める必要の出て来る源までその印象を取りにゆかない人であることを度々經驗した。

「無意識」に對して反對する此等の人は、催眠術後の (Posthypnotisch) 暗示の結果を決して注視することなく、私が彼等に、私の分析の實驗を、催眠術をかけない神経病者に就て示しても彼等は非常に怪訝に思ふばかりなのだ。彼等は無意識とは眞實に知られないものであるといふ考へを、強制的な決論によつて完全にする必要があるので、それを決して實行しない。

却つて無意識を意識出来るものに考へて、唯今迄は考へられなかつたものであるとか、注意の焦



點に立つたことのないものであるとか考へてゐたのだ。又彼等は、かゝる意識しない思想が彼等自身の精神生活の中にあるといふことを自分の夢を分析することによつて決して確めようと試みたこととはない。さうしても私が彼等に就て分析を試みれば、彼等は自分のそんな破目に落込んだことを怪しく思ひ困惑する。私はまた次の様な印象をうけた。即ち「無意識」(„Unbewusst“)といふ假定に反感をもつのは、誰れも自分の無意識に對する知識を得ようとしらないのだ。兎に角無意識のあり得るといふことを否定するのは都合のいいことであるからだらう。

話が少し脱線したが、こんなわけで夢の作業は全く特別の改作によつて願望法(Optativ)に現された思考材料(Gedankennaterial)を提示する。次に進んで願望法から現在になる。即ち „O mächte doch“ (ふうかやうなればー)を Es ist (やうである)に代へる。この „Es ist“ と云ふことは錯覺的な表現であると定義せられる。これを私は夢の作業の「退歩」(Regression)だと記した。

またそれは、思想から認識像 (Wahrnehmungsbild) へゆく道程で、もし、今日尙未知に屬する——解剖學上の意味でない——精神機官の局所に就て言へば、思想形成の方面から感覺的な認識への道程だ。精神的輻輳の發達の進路と相反する道程に於て、夢の思考は具體的になる。結局ある有形な状態が顯在的な「夢の像」(Traumbild)の中心となることがわかる。かう云ふ感覺的な表



現法を達するためには、夢の思考は、その表現を徹底的に變へなければならぬ。思想が感覺像 (Sinnbild) に還元する間に、一層甚だしい變化が思想に現れ、その變化の一部は必要なものと思はれるが、他の部分は意外なものだ。退歩の附隨現象として當然、思想の整頓に關係ある思想内部の連絡は、顯在的な夢となれば全く失はれてしまふのだ。夢の作業は、言はゞ觀念の素材を表現することを受持つてゐて、觀念相互間を束縛する思索連結には關與しないのだ。少くとも夢の作業は觀念を思索連結から引さ離すだけの自由を保持して居る。そのみならず夢の作業は此退歩即ち感覺像への還元作用以外にもある。

恰も、それが洒落の作製と同意義なものとして私達には重要なものだ。夢の思考の材料は夢の作業の間に全く極端な壓縮をうける。此壓縮の出發點は或は偶然に、又はその内容なみに夢の思考の内部に發見される事がどの夢にも共通だ。夢の思考は著しい短縮には一般に恰好のものでないから、夢の作業の間に新しい人工的な、一時的な共通性が作られる。而して其目的には、好んで同じ發音で種々な意味をもつ言葉自身が用ひられる。新しく作られ壓縮された共通性は、夢の思考の代表者となつて、顯在的な夢の内容を取調べる。だから夢の一つの要素は夢の思考の結合點、または交點に相當し、夢の思考から見れば、その要素は「餘りに決定的」 (überdeterminiert)



と稱すべきだ。壓縮といふ事實は夢の作業のうち最も簡単に認められるもので、夢のかきあげられた言葉と、分析に依つて得た、夢の思考を比較すれば、十分に夢の壓縮が果げられてるのが分る。

夢の作業が、夢の思考に働くために起る第二の大きな變化、即ち私が「夢の見當違ひ」(Traumverschiebung)と名づけた現象を確めるといふことはさう容易ではない。此の夢の見當違ひのために、夢の思考では末梢にあり、附隨的なものであつたものが、顯在夢の中央に現れ、強い感覺を以て現れて来る。またその逆もある。夢は此見當違ひのために、夢の思考とすれちがひを來し、又覺醒時の精神生活に於ては全く見た事もなく、又理解出来ないものになるのだ。主要な觀念に關して配置されたエナジーが、そのまゝ重要でないものに移りゆくこと——それはあり得るに相違ない——に依つて見當違ひは成立する。その爲に普通の意識的思索から見れば「錯誤」(Denkfehler)の印象ばかり起つて來るのだ。

表現法の變化、壓縮及び見當違ひは、夢の作業に認められる三つの大きな作用だ。「夢の解釋」では簡単にしか書いて置かなかつたが、第四のものは此場合は私達の目的に對しては別に問題に觸れて居ない。「精神機官の局所」とか「退歩」とかいふ觀念に對して矛盾のない説を述べるには、かうす



るのがこの研究に對する假説を尊くするものだ。——退歩のどの停車場で夢の思考の種々な變化が行はれるのであらうかといふことを決定する試みがされなければならないだらう。この試みは未だ今迄眞面目に企てられた事がなかつた。見當違ひは無意識裡に行はれるとしても、思考の素材に従はなければならぬものだ、と確實に云へる。壓縮といふことは認識領域に迄達する全經過に擴つた現象として、全經過に互つて認めなくてはならないが、一般に夢作りに關與したすべての力が同時に壓縮を引きおとしたと認めて満足すべきだ。かう云ふ問題を取扱ふ場合には、どうしても或程度の遠慮をしなければならぬし、又かう云ふ問題を提出する時の根本的の不安は持つて居るが、然し私は夢の作業といふ夢に關する現象を無意識の領域の内に置くことを主張したい。

以上を總合すると、夢の構成には略々三つの時期が區別される。第一は、豫め意識された「晝の残り」を無意識に移すこと——これには睡眠状態といふ條件が共働する——次に固有の夢の作業が無意識中に起り、第三に、かくて改作された夢の材料が認識に退歩し、その認識を私達は夢と感ずる。

夢の構成に與るすべての力は次の様に知られてゐる。願望が眠ること、晝の残りを、睡眠状態で低下した後も尙固執してゐるエネルギーの配置、夢を作る無意識の中の願望並びに、覺醒時に作ら



れ、しかも睡眠中に全然なくならない「檢閲」の反抗力、これだけだ。夢の構成のなすべきことは何よりも、檢閲の壓迫に打克つことであり、またこの任務は、夢の思考の材料内に於ける精神エナジーの推移によつて解決される。

こゝで私達は、洒落を研究する際、どんな機會から夢のことを考へたかを思ひ起さう。洒落の性質及び其作用はある表現法即ち技巧にむすびついて居り、而して其内では壓縮、見當違ひ、間接の表現等が目立つてゐることを知つた。同じ様な結果即ち、壓縮、見當ちがひ、間接の表現等に導く過程は、夢の作業の特徴として私達に知られてゐる。この一致によつて、直ちに洒落の作業と夢の作業とは少くともある本質的な點では同一ではあるまいかといふ決論に近づけないだらうか。私の思ふ所では、夢の作業は、私達の前に洒落の作業に關係する最も重要な性質を示してゐる。洒落の心理過程の中、私達にまだ分らない所は私達が夢の作業と比較することの出来る部分即ち第一の人物が洒落を造る過程だ。この過程を私達は夢作りと同じ様に組立てゝゐないだらうか。夢の姿には洒落と違つてゐる所があるから、夢の作業の洒落に相當した部分をそのまゝ洒落の構成に持つてゆくことは出来ない。認識に退歩する思考道程は洒落では確かに缺けてゐる。しかしながら夢作りの他の二つの時期、即ち前から意識にあつた思考が無意識に墜ちること、並びに無意識中の修正は、



何れも洒落の構成に對しても假定出来るから、私達が洒落に於て觀察することの出来ると恰度同じ結果をもたらすものと思はれる。第一の人物に於ける洒落の構成の経過は次の様に決定して差支あるまい。「前から意識にあつた思考が、一瞬間無意識中で修正され、その結果が即座に意識した知覺に依つて認識せられる。」

この主張を各の場合に試みる前に、一つの異論を考へて見よう。それは吾々の假定がそも／＼間違つてると云ふ異議だ。吾々は、夢の作業の特徴であると考へてゐるそれと同じ過程を洒落の技巧が暗示してゐるといふ事實から出發してゐる。私達が洒落の技巧を壓縮、見當違ひ等であると認めず、又洒落と夢の表現法には非常に範圍の廣い共通點があると云はず、又夢の作業に就ての前からの經驗が洒落の技巧に對する私達の解釋を誘惑しないでも、私達は夢と洒落と近いものだといふ期待を洒落の根柢に確知する。かゝる共通性の起源も、吾々の先入觀を除いて見れば、確かな保證は持てないかも知れない。壓縮とか、はきちがひ、間接の表現とか言ふ見地を、洒落の表現の形式であると思做した學者は事實だれもない。それはあり得る異議であるが必しも此異議が正當だとは云へない。眞の共通性を認めるためには、夢の作業に關する知識によつて私達の理解を鋭くすることが必要であるだらう。此異議が正しいか、それとも私達の考が正しいかを決定するには、此二つの反對



の説を批判してその中の一つの所見を捕へて、其所見を容易に解釋の出来るものにあてはめて、或は一層複雑した事にあてはめて見たりして、どうしても此所見でなくてはならないと云ふ事を確信を持つ必要がある。此場合では、夢から洒落を豫想して差支ないかどうかをきめればいいのだ。私の考へる所では此異議は恐るゝに及ばない。私達が特に還元操作を、洒落の技巧の研究に利用した結果得た所見は上に述べた意味で正しい所見だと確信して居る。だから私が洒落の技巧と夢の作業とに相似の命名を持つものを與へた事は私達の正しい權利であつたし、又直ちに正當と認めらるべき單純化より他のものでなかつたのだ。

も一つの異議は吾々の研究にとつてはそんなに困るものではないし、またそんなに根本的の反駁に値するものではない様だ。私達の目的にうまく適合する洒落の技巧は認めてもいいが、その他に私達の目的に適合しない技巧をもつた洒落があるかも知れず、又實際さう云ふ種類の洒落がある」と云ふ異議だ。私達は實際夢の作業の前知識に影響されて、夢に適合する様な洒落の技巧を選んで研究して居て、その反面に於て夢以外のものと似た洒落の技巧のあるのを見逃して、さう云ふ技巧は洒落にない様に思つてしまつた様でもある。まさか私は私達の周圍に見出される洒落のすべてに就て、その技巧を全部説明することが出来たと主張する勇氣はない。だから、私は洒落の技巧を數



へあげながら種々の不備があるかも知れないことを白状する。がしかし私は私の見透す限りではもう洒落の技巧の種類はこれより他には持つてゐない。又故意に説明から省いたものもない。さうして却つて私は、最も度々出逢ひ、最も重要であり、特徴を表してゐる洒落の技巧は私の注意から外れはしなかつたことを主張する。

洒落は私達の「夢」から發生した洒落の作業に對する説に適合する様な性質を尙も一つもつてゐる。洒落は「*Machen*」(造る)すると云はれてゐるが、判斷をしたり抗議をしたりするときとは別な感じがある。洒落は努力しない「思ひ付き」の性質を著しく持つてゐる。洒落を言葉にふくめて表はす要約は決して知られてゐない。それはむしろ定義すべからざるものであると思はれてゐる。それを前から *Absenz*(うつかりする)即ち、精神的緊張の突然的な脱落に比較したく思つてゐたのであるが、そんな場合に洒落が突然に心に浮び同時に表現されるのだ。洒落の多くの手段は、その他に「思考の表現」(*Gedankenausdruck*) たとえば、譬喩とか諷示とかにその應用を持つてゐる。私は故意に諷示をすることが出来る。先づ私は私の考への直接の表現を心に置き、その時の状態に應じた顧慮に依つてそれを表現することを見合せて置いて、直接の表現を間接の表現の形式に置きかへようと試みる。さうすればこゝに諷示が出來上るのだ。しかし、かういふ風にして出來た私の



連續したコントロールの下に出来あがつた諷示は決して洒落にはならない。之に反して洒落味のあつた諷示は思考のうちにかゝる準備期が認め得られない。私はかういふ事情にはあまり重きを置き度くない。洒落の構成する時には思考の過程が一時途切れてしまひ、さうしてその途切れが俄かに洒落として浮びあがつて来る事は決定的ではないが、吾々の説を非常にうまく肯定して呉れる。

洒落は、又聯想上に特別の態度を示してゐる。洒落は吾々が欲する際でも吾々の記憶の命令に従はないことがある。さうかと思ふと欲しない時でも現れて来る。一體洒落は私達の思考の過程のどこに編みこまれてゐるものなのだらう。これはほんの一寸したことであるが、しかし洒落が無意識から由來したものであることを常に示して呉れる。

さて茲で、無意識の中に作りあげられるものとしての洒落の性質を研究してゆかう。何よりもその特殊な簡潔といふことは缺くべからざるものではないが、誠に珍らしい特徴だ。始めその簡潔に吾々が出會つた時、省略の傾向がその中にある様に思はれたが、簡潔は必しも省略の結果ではないから、これは間違ひだつた。簡潔は現在では洒落の思考の上に働きかけた無意識的の改作の徴である様に思はれて來た。

此簡潔は夢ならば壓縮に該當するものだが、壓縮は無意識裡だけで行はれる過程であつて、無意



識の思考過程では、前意識には存在しない條件が此壓縮に與へられるのを私達は承認しなくてはならない。壓縮の過程中に、壓縮に負ける二三の要素は失はれ、失はれたものにあつた配置エネルギーが残つたものに移行するから、此要素は壓縮によつて強められ、または強すぎる位につくりあげられるのだと豫想される。だから洒落の簡潔は夢のそれと同じく、壓縮の必要な附帶現象であり、夢でも洒落でも簡潔は壓縮過程の產物なのだ。洒落の簡潔は實に特別なもので、これ以上は説明の出来ない特質と云ふべきだ。

私達はすでに壓縮の產物、即ち同じ材料の種々な使ひわけ、ひつかけ言葉、同じひとき、さういふものを部分的な節約であるとし、無邪氣な洒落のつくる面白味は、かゝる節約から生れるものだとした。少し後になつて、同じ様な面白味を言葉に得ることが洒落の本來の目的であることを發見した。その面白味はあそびの階梯ではゆるされるが、精神の發達するに従つて理性の批判によつて抑制せられるものだとも云つた。洒落の技巧に用ひられると同じ様な壓縮が夢の場合にも無意識中の思索の過程の間に成立つものだといふ説に私達はこゝで決定した。そこに二つの互に融合しにくい説があるのではあるまいか。私はさう信じない。とに角二つの説があることはあるが、それは一緒にされることが必要であり、決して矛盾はしないのだ。一つの説は他の説と全然別である。さうし



て、もし其間に一脈の關係を表せば、たしかに吾々の知識を増すであらう。かゝる壓縮が面白味の源であるといふことは、それが無意識の中に成立するといふ説とよく一致する。むしろ私達は洒落の要求する面白味をもたらずやうな壓縮がやす／＼と生れるやうな状態に於て、無意識に陥る動機を見出すことが出来る。第二の説、それは第一の考へと全く違つており、偶然にもぶつつかつてゐるが、深く考へればお互に密接な關係があり、同一のものであると思はれる。私は茲でその二つの考へをのべる。即ち洒落は一方ではあそびの階梯即ち理性の大きくならない間にかゝる面白味をもたらず壓縮をつくり、一方では理性が強くなれば、無意識に考へを潜めて、同じ様な仕事をするのだ。

「小兒らしさ」(Das Infantile) が即ち無意識 (Unbewusst) の源であり、無意識中の思索過程は小兒時代の思索過程としてのみ表はされる。洒落の構成の目的で無意識にひそんだ思考は、嘗つて言葉をもてあそんだ故里をそこに探すのである。思考は、子供らしい面白味の源を再び手に入れるために暫くの間小兒時代にかへる。神経症精神病学の研究でこれを學ばなくとも、不思議な無意識裡の改作は、思考作業の小兒型に他ならないことを、洒落に就いて知る事が出来るだらう。かう云ふ小兒型の思考を、大人の無意識にふくまれてゐる特徴によつて、小供の中に擱むのはそんなに容易ではない。此小兒型の思考はいはゆる „Statu nascendi“ (立所) に矯正されるからだ。しか



し乍らある場合にはそれが成功し、その度毎に「子供の馬鹿らしさ」(Kinder-dummheit)を笑ふ。かう云ふ無意識を發見することが吾々に滑稽に働くのだ。かゝる無識中の思考過程といふ現象は、多くの精神病者の行動に容易に見られる。精神病患者の譫語を理解し内容を報告するには、意識的な考察によらずに、あだかも私達が夢の解釋に用ひた様な研究方法を以てすれば成功するだらう。

私達は夢の研究をした頃、夢を「精神生活の胎生期に歸つた」ものとした。

私達は壓縮の過程に就いて洒落と夢との同意義であることを可成深く説明したから、次にそれを簡単にまとめなければならない。夢の作業の際の見當ちがひは、意識した思考の檢閲の影響を暗示してゐる。同様に私達が洒落の技巧に於て見當違ひにぶつつかつた場合、やはり洒落の構成にもある制止力が働いてゐることを認める必要がある。

これがすべての場合に共通なことを私は知つてゐる。不合理から往時の面白味を、又は往時の言葉の面白味を得ようとする洒落の努力は、普通の氣分では、批判的な理性の抗議によつて制止をうけるから、それに必ず打克たなければならない。

この問題を解決する手段及び方法に、洒落と夢との徹底的な差別が存在する。夢の作業では必ずこの問題は、檢閲から逃がれるためになるべく故障の少ない觀念を選択すること、即ち見當違ひに



よつて解決される。だから見當ちがひはどの夢にもあり、さうして仲々範圍の廣いものだ。即ち單に考へ方の方角違ひばかりでなく、間接の表現はみな見當ちがひに含まれ、特に、重要なしかしながら侮辱的な要素をお座なりではあるが、とにかく檢閲に對して惡意のない要素、即ち遠廻しに諷示してゐる要素で置き換へる。また象徴や譬喩又は小部分で置きかへることなどは、みなこれにくまれてゐる。これ等間接表現要素が夢の前意識の思考に既に出來てゐるといふことは否めない。若しさうでないとするれば、此思考は到底前意識の表現として出て來る筈がない。

かう云ふ種類の間接の表現及び諷示は、その特徴は容易に見出せるもので、私達の意識中の思索に於ても許されてをり、且度々用ひられる表現方法だ。しかし夢の作業では間接の表現法の使ひ方は非常に無制限であつて、いろんな事件が檢閲の壓迫の下に適當に諷示によつて置きかへられ、一つの要素の見當ちがひから又他の要素が生じて來る。夢の作業に於て、最も著明に且特殊であることは内部の聯想（相似、起源的連絡等）がいはいゆる外部聯想（同時、接近、同音）によつて置きかへられることだ。

斯様な見當ちがひといふ方法は、又洒落の技巧としても現れるがその場合には、いつも意識中の思考の中だけで行はれる。時として洒落が必ず制止の問題を解決しなければならぬ場合でも、見



當違ひはなくてすむ事がある。洒落に此見當違ひの技巧がなくてすむ理由は、洒落にはいつも此技巧以外に、制止に打ちかつ技巧が必ずあるのであつて、その技巧程洒落に特有なものはないのだ。洒落は決して夢の様に妥協をしないし、制止から逃避することもなく、言葉や、不合理のあそびをそのまゝ保守して居る。しかし洒落といふものは言葉の意味の多いことや、思考關聯 (Denkrelationen) の多種なことによつて、かう云ふあそびや不合理がゆるされ (諧謔) または意味深長に (洒落) 見える様な場合に限られてゐる。洒落が他の精神現象と最もよく區別されるのはその二枚舌のある事、表裏のある事であり、この方面から大家達は「不合理の合理化」 (Sinn im Unsinn) を強調して洒落の知見に最も近づいたのだ。

この洒落に特有である技巧が、その障礙に打克つに最も優勢である點は否足出来ないが、時として又洒落が見當違ひの技巧を利用する理由も十分ある。一方ではこの技巧のある種類、たとへば不合理の性質の一部をなしてゐる本來の見當違ひ (思考の方向轉換) の如きものが、洒落の目的並びに面白味の源として重要であり、又他方では洒落の高級なもの、即ち傾向のある洒落では、洒落自身に對し又その傾向に對しての二重の障礙にうちかたなければならぬ事と、諷示や見當違ひが、此二重の障礙にうち勝つのに最も工合がいゝ事を忘れてはならない。



夢の作業に於ける間接の表現法、見當ちがひ、さうして特に諷示の言ひ切れない程多數の使用法が、私を遂に洒落の問題に従事させる結果となつた。それはその本來の意味によつてとなく主觀的な動機からさうなつてしまつたのであつたらう。夢の作業に利用される諷示や見當違ひを夢の分析では不思議な覺醒時の考へと矛盾する方法で説明してあるが、それを精通せず、又は聞き慣れない人に告げたならば、讀者は不安な印象に壓倒されながらも、この説明を「洒落様」(witzig)なものだと解釋する。しかし此夢の説明の中には成功した洒落は認められず、却つて、牽強附會な洒落の規則に反する様な洒落を認めるだけだ。この印象は次の様に容易に説明せられる。即ち、夢の作業は洒落と同じ手段によつて仕事するが、此手段を使ふ時には、洒落をとちこめてゐる垣根を越えたもの迄出来るのだといふことから如上の印象は生ずるのだ。洒落は第三者が働くためにある條件と結合してゐるが、夢ではそれが無いといふことが此事に重大な關係を持つて居る。

洒落と夢とに共通な技巧、即ち逆による表現、不合理を使ふことはまた或る興味を與へる。逆による表現は洒落の強い手段であることは掛値を云ふ洒落(Überbietungswitz) (譯註、タートを返してリキニルーを飲んだ話)の例の手段で認めることが出来た。逆による表現は意識した注意を失はしめない點で他の技巧と違つて居る。洒落の作業のメカニズムを自分で出来るだけ故意に働かせるこ



とを試みるもの、即ち習慣的な駄洒落屋がしばしばやる事だが、ある主張の逆をしつかり保持して、その逆にとつて不都合な反対や故障を、新しい解釋によつて片付けてしまふことを思ひつくまゝにやれば、ある主張に對して易々と洒落で反對することが出来る。多分、逆による表現のすぐれてゐる點は、恐らくそれが他の快樂をもたらし思考の表現法の中心をなしてをり、それを理解するには別に Unbewusst を煩はす必要がない所にあるだらう。私は皮肉 (Ironie) が非常に洒落に似て居り、滑稽の細目に入れられるものだと思つてゐる。その本態は、人が他人に告げようと企てたことの逆を發表することであり、さうしてこの場合には次の手段によつて故障が節約される。それを音の抑揚で、またはそれに伴ふしぐさで、もし亦、文章ならばその文章の形でそれをわからせ、自身は言ふことゝ反對の意見をもつてゐるのだ。皮肉はたゞ他人が逆を聞く様に準備してゐる場合にのみ用ひらるべきである。だからその性質は決して異議が缺けてゐるわけではない。かゝる條件から皮肉は、領解されないといふ危険に特にさらされ易い。しかしそれは、直接の表現のむづかしいやうな場合、たとへば惡口などのときは、その困難をさげさせる様な利益を皮肉を云ふ人に與へる。さうして聞く人に滑稽な面白味を與へる。それは恐らく聞く人の異議の支出を動かし、それが直ちに溢れ出るからであらう。



洒落と、滑稽との種族とをかういふ風に比較すれば、力強い次の假説が産れて来る。無意識に對する關係は、洒落にとつて特殊なもので、恐らくその點によつて滑稽と區別されるものだ。

夢の作業では逆による表現は、洒落の場合よりも、もつと重大な役目をする事になつてゐる。夢は好んで二つの逆のものを一つにし、その混合型を作るばかりでなく、ある事物をしばしば夢の思考からその逆に變化してしまふ。逆をつくることの出来る要素が「夢の思考」のなかに陽性(positiv)にあるか、または陰性(negativ)にあるかといふことに就てはまだ知られてゐないと云ふ事で、これを説明する事はなかなか困難だ。

私はこの事實がどうしても解らないことを重大視してゐる。此事實は又無意識思考の重要な性質を暗示する様に思はれる。無意識思考は判斷に類する過程を以ては到底領解さるべきものでない。で、判斷を拒絶する事で、無意識の中の「排除」(Verdrängung)は行はれるのだ。排除は、防禦反應と有罪の判決との中間の階級にあるものだといへば正しい。

夢にしばしば現れ、さうして夢を餘計に輕蔑させる様な破目に陥らせる不合理は、決して偶然に觀念の要素を混ぜ合することによつては成り立ないで、いつも夢の作業によつてゆるされた様な型で示され、怒つた批判を表現し、夢の思考中の辛辣な異議によつて決定される。夢の内容の中の不合



理は、夢の思考の中の「それは不合理である」といふ判断を示す。私は私の「夢判断」の中でこの証明を力説して置いた。それは夢がとにかく精神現象でないと云ふ誤謬、竝に無意識の知見を得る道の邪魔になる誤謬をこの方法で痛切にやつつける事が出来ると考へたからだ。私達は既に（ある傾向的な洒落の解説の際）洒落の不合理が同じ目的の下に表現に使はれることを知つた。又これも吾々の知つてゐることであるが、不合理といふ外観は、聴く人の精神的支出を高め、さうして、笑ひによつて搬出が自由になつた額を高めることに全くうまく適合してゐる。またその他に 洒落の中の不合理は、自己目的であることを忘れたくない。不合理から往時の喜びを再び得ようとする企は洒落の作業の動機に屬するからである。不合理から再び喜びを得ようとする方法は他にもある。カリカチュア、誇張、(Übertreibung) 狂文 (Parodie) 戯文 (Travestie) (眞面目な題材をふざけてかくこと)——はその目的に用ひられ「滑稽な不合理」の役をつとめる。これ等の表現法に對して、洒落と同じ様な分析を施しても、我々のいはゆる無意識の滑稽は解釋出来ないのに 又カリカチュア、誇張、狂文等に「洒落らしさ」といふ性質が附帶して居る點は妙な事だ。それは精神的觀察點に相違があるからだ。洒落の作業を無意識のシステムに入れることは、あらゆる點に於て重要な事で、さうして洒落に必ず結合してゐる技巧は、決してその獨占的な財産ではないといふ事實を



私達は遂に領解した。吾々が技巧の研究の際に於て後に残して置かなければならなかつた多くの疑問は、こゝで簡単に解決された。私達は今迄種々の洒落の種類及びその發達の階梯にあてはめて見たが、無意識に對する洒落の關係は、傾向のある洒落のある範圍のものには最も正しくあてはまると云ひ得る。此事は私達の批判には非常に役に立つものであるから、これに對する異論の研究は、決してゆるがせには出来ない。

洒落に於て無意識な傾向、又は無意識によつて強められた傾向が問題となつてゐる様な場合、例へば主として犬儒的 (Zynisch) な洒落の場合は無意識の洒落の構成の確かな例だと主張出来る。即ち前意識思考を無意識な傾向が無意識にひきおろし、そこでそれを神經精神病學の研究に於て數多見出すことの出来ると同意義の過程に變形するのだ。これに反して他の種類の傾向的な洒落、無邪氣な洒落及び諧謔ではこのひきおろす力は缺けてゐる様だ。だからこの場合は洒落の無意識に對する關係は疑問だ。

さて私達は多くの思索過程上に浮び上る重要な思考の、洒落味のある表現といふ事に就いて觀察しよう。かういふ思考を洒落にするには、多くの表現法のうちから恰度言葉の喜び (Wortlust) をもつて來る様な形式を選ぶ必要がある。私の觀るところでは意識した注意はかういふ選擇には不適



當なのを知つてゐる。即ち前意識の思考の配置が無意識に低下する事は、たしかにそれに役立つ。

何故と云ふに無意識の中では、言葉から發した結合方法も事物の結合方法も、夢の作業で知つた様に同様に取扱はれるからだ。無意識の配置は表現法の選擇に更に都合のいゝ條件を提供する。言葉の喜びを含む表現方法は、眞先に無意識的傾向となつて尙ぐらついてゐる表現法に對して低下的 (Herabziehend) に働くものだ。諧謔のより簡単な例では、言葉の喜びを得ようとする止めどのない望みが、前意識の配置を造りあげ、それが或る機會を得て、再び無意識に陷るのだと考へられる。

私はこの洒落に關する説の決定的な點を一方ではより明かに説明し、他方ではたしかな證據によつて裏書する事を熱望してゐる。しかし私の説に對する證明を私はもう持つてゐないからこれよりはつきりした説明は出来ないのだ。この説は私の技巧に關する研究及び夢との比較から生れ出たものだ。そして私はこれが洒落の特徴には全くうまくあてはまることを知り得た。この説は全く開拓的なものであり、かゝる論據によつて、まだ知られないといふよりもむしろ不思議に思はれる思索の新しい領域に達せられる。だがこの論據は單に假説 (Hypothese) と名づけられるべきで、その假説とそれを生み出した材料との間の正しい論據があるとは云はれない。他の方面からこの關係に達し、その關係を他の關係の結合點だと示し得た場合に初めて論據となるのだ。かゝる論據はまだ



やつと初步の知見しか持たない無意識過程ではまだ得られないのだ。私達はまだ踏み込んでゐない基礎にたつてゐる事を知つてゐるから私達はたつた一つの狭い不安定な舞臺を、底知れない所に置くだけで満足してゐよう。

私達はかういふ基礎にいろんなものを組立てようとするのではない。唯私達は洒落のいろんな階梯を、それに都合のいい様に精神内に排列して見て、次の様に言はう。——諧謔は快活な氣分からとび出る。さうして又精神の配置を輕減する性質を本來もつてゐる様だと。

諧謔はすべての洒落の技巧を利用し、その根本條件は、喜びを得るといふ目的を持つ事と、批判によつて領解されるやうな言葉の批判を選択することにある。思考の配置が無意識に墜ること即ち快活な氣分によつて配置が輕減せられることは諧謔には恰度適合したことなのに過ぎない。

無邪氣なしかしながら重要な考へにその表現が結合してゐる洒落では思考の配置を無意識におとす事は氣分の關係から必ずしも必要ではない。唯こゝで一つの人物的素質(*Persönliche Eignung*)を想像する必要がある。それは表現を容易にし、前意識の配置を無意識におとし一瞬間無意識と交換するためだ。洒落が持つ本來の面白味を新しくする傾向は、平常は潜伏して居るが、此處では尙動搖してゐる思考の前意識的表現の上に低下的に働く。快活な氣分だと大抵の人が諧謔をつくるも



のである。洒落の素質は、ごく僅かの人間のみに於て氣分と無關係なものだ。次に、無意識にまで到達する強い傾向が、遂に洒落の作業に最も強い刺戟として働く。この傾向は洒落の産物にとつて特別の資格を表してをり、且神經質な人間に於てしばしば洒落の主觀的條件がみたされるといふことを私達に説明することが出来る。此傾向が甚だしく強い時には、かつては不適當であつた内容も洒落となることが出来る。

この最後にかいたことはたとひ第一の人間に於ける洒落の作業の説明の假説に止つてゐるものであるとはいへ、嚴密にいへば私達の洒落に對する興味を落着けるものである。私達には尙、洒落と夢との簡単な比較が残つてゐる。この二つの非常に異つてゐる精神現象の間に、重要なものだとみとめられた共通性の他に、尙若干の差別がある事だ。最も重要な區別は、それ等の社會的關係にある。夢は全く非社會的な精神産物である。それは他人に傳達すべき何物も持つてゐない。夢は一人の人間の内部に、其の鬭争的精神力の妥協として現れ、その人間自身にも領解されずに留まる。だから他の人間には全く興味がない。夢は何等理解すべき價值がないばかりでなく、故意に炸裂的なものとなつて、領解されない様に、自衛しなければならぬのだ。夢は變裝 (Vermummung) に於てのみ成立する。夢は意識中の思索過程に於て、それ以上施す餘地のない變形に至るまでのメカ



ニズムを利用することが出来る。

洒落は之に反して面白味を狙ふあらゆる精神作用のうち、最も社會的なものである。洒落は度々三人の人間を必要とし、他の一人の人間が洒落によつてよびおこされる精神活動に關與して、その完成が達せられる。だから洒落は理解され易い條件とむすび付いてをり、第三の人物が領解し整理し得る範圍に於て、洒落は無意識の中で出来るだけの變形を壓縮や見當違ひによつて要求するのだ。

その他の點ではこの洒落及び夢は精神生活の全く異つた領域に成長し、心理學的なシステムでは遠く距つてゐる。夢はいつも、たとひ判別しにくいとはいへ、一つの願望である。洒落は發達したあそびである。夢は實際的にはすべてつまらないものであるが、大きな生活の興味をもつてゐる。

夢は眩覺 (Halluzination) の退歩的な廻路に對する要求をみたし、夜間興奮してゐる要求を眠らせることによつて承認されてゐる。洒落は之に反して、私達の精神の赤裸々な要求のない活動から、小さな面白味をひきださうと試み、後になればその面白味を、その活動中の副産物としてつかむ。而して第二次的には外界にむけられた重大な作用に達する。

夢は不愉快を省き、洒落は面白味を儲ける。私達のすべての精神活動は結局この二つの目的に於て一致するのだ。



## 洒落と滑稽の種類

私達が滑稽の問題に近づいて來た途は少し變つたものだつた。洒落は滑稽の一つの細目であると觀察されてゐるが、その概念を直接に得る點に於て洒落は、十分な特徴を提供してゐる様だ。だから出来るだけ私達は洒落を滑稽の廣いカテゴリーに入れて置いて、別に、途中で滑稽に對して役に立つ參考をも擧げなかつた。滑稽が洒落よりいくらか社會的だといふことを見出すのは難かしくない。滑稽は二人の人間で十分だ。一人が滑稽を發見し第二の人間は滑稽を發見されるのだ。

滑稽を傳へられた第三の人間は滑稽の過程を強くするが、それに對して何も新しい物を附け加へるわけではない。洒落に於てはこの第三の人間は喜びをもたらず過程の上に缺くべからざるものだつた。之に反し第二の人間はその洒落が傾向のある攻撃的な洒落でない限りなくてすむ。洒落はつくられるが、滑稽は先づ人間か又は範圍をおしひろめて物體狀況などに發見されるのだ。

洒落に於て私達は、見知らぬ人物でなく、自分自身の思考の過程が、求められる喜びの源をかくしてゐるといふことを知つた。洒落は又しばしば到達することの出来なくなつた滑稽の源を開くことを知つてをり、又滑稽はしばしば洒落にその外觀を提供し、既知の技巧によつて現される前喜悅



を補償することを私達は知つた。これ等の事はまだ、洒落と滑稽の間のきはめて簡単な關係を全部暗示してゐるといふわけではない。滑稽といふ問題は非常に複雑に説明してあり、哲學者の解決しようとした努力の効果もあるにはあつたが、役に立たないので、私達は大した期待を持つことは出來ないが、しかしもし私達が洒落の方面からそれに近づいてゆけば、恰も一つの奇襲によつて滑稽の支配者になれたらう。洒落の研究のために、まだ何ものにも使はれなかつた一つの道具、即ち夢の作業の知識を吾々はもつて來たが、滑稽の知識に對しては同じ様なうまい工合のものが無い。だから私達は期待をもつて、洒落が滑稽に屬し、洒落の中のあるものが變化されないで、又はその本質を失ふ程度には變形されないで、洒落に於て示されたことをそのまゝ滑稽の本態だとしていふかと思ふ。

洒落に最も近い位置にある、滑稽の一種屬は「稚氣」(Naïve)だ。稚氣といふものは、滑稽同様に一般に發見されるもので、洒落のやうにつくられはしない。たしかに稚氣といふものはつくられるものではない。しかし純粹の滑稽では、滑稽をつくること、即ち滑稽の喚起といふことが考へられる。稚氣は私達の干涉なしに他の人間の話や行動に現れなければならない。その人間は滑稽や洒落の場合には第二の人間に相當してゐる。稚氣はだれでも或る抑制から完全に脱れてゐる時、即



ちかゝる抑制の存在しないとき、またはその抑制にやす／＼とうち克つやうに思はれるとに成り立つものだ。稚氣の作用する條件は誰でも知つてゐる通り、かう云ふ障礙をその人がもつてゐないといふことだ。さうでなければ、吾々は彼を稚氣とは呼ばないで鐵面皮だと名づける。さうして彼のことにについては笑なはいで却つて憤る。稚氣の効果は反抗し難いもので且領解しやすく思はれる。私達が習慣的にやつてゐる制止の支出が稚氣のある話を聽くことによつて急に使用出來なくなり、それが笑によつて搬出される。しかしその際注意が轉換されてゐれば、笑をもたらさない。それは恐らく興奮作業によらないで、直接に制止が中止されるからだらう。私達はその際、洒落に於ける第三の人間、即ち制止を省くのに自分の勞力を費さないですむ人間と同じ様に振舞つてゐるのだ。

私達が「あそび」から洒落への發達の跡を追つてゆく間に得た制止の發生史を一覽して見れば、稚氣が主として子供に發見され、更に範圍をひろめられて、吾々がその智的教養に於て、子供らしいと思ふ様な無教育な大人にも、發見されることは怪しむに足らない。洒落と對照する場合には稚氣のある「話」の方が稚氣のある「動作」より都合がいい。話は洒落の習慣的な表現法であるが、動作はさうでないからだ。稚氣のある話及び勝手な子供の物語を同じ様に「稚氣のある洒落」と名づ



けられるのは面白い事だ。洒落と稚氣 (Naivität) との間の共通性と差異の根本とを二三の例によつて明瞭に示さう。三年六ヶ月の少女が彼女の兄弟を戒めた。

「お前あんまり食べすぎると病氣になつて Bubizin をのまなければならぬよ」

「„Bubizin?“ それは一體なんですか？」と母親が尋ねた。「あたいが病氣をしたとき Medizin (藥) をのまなければならなかつたでせう」と少女は辨明した。少女の意見はかうなのだ。お醫者様がいろんな藥を Medizin (Medizin) といつて呉れるが、それは Mädi (嬢や) がのむからさう呼ばれるので、Bubi (坊や) がのむのは Bubizin であらうと考へたのだ。これは同響の技巧をもつ言葉の洒落と同じ様につくられてある。もしそれが本當の洒落として生じたものなら、私達はいや／＼半分で、微笑をおくつたかも知れない。稚氣の例としては、それは全くすぐれたものであり、私達をたからかに笑はせる。しかしこゝで何が洒落と稚氣との區別を示してゐるのだらう？ その文章や技巧でない事は確かだ。それは二つの場合とも同一だ。それは一見して技巧や語音から遠く離れてゐる要素だ。その場合、話す人が、洒落を狙つたものだと思ふか、又は子供がその矯め正されない無智に基いた信仰から、まじめな結論をもちだしたかといふことが肝要の問題だ。後の場合だけが、稚氣の例なのだ。かう云ふ様に、いろんなものを産み出す人間の精神過程に、他の人間



が入りこむことを先づこゝで注意しなければならぬ。

次の例を研究すれば、この考へがはつきりする。十二歳の少女と十歳の男の子とが自分たちの手でつくつた脚本を、伯父伯母を見物にして演じてゐる。舞臺は海濱の小屋を表はしてゐる。第一の幕で二人の作者兼役者、即ち貧しい漁師とその勇敢な妻は、不景氣をかこち、暮しのうまくゆかないことをなげいてゐる。男は、彼の小舟で大海をわたり、大きな富を探すことを決心する。さうして、二人が名残をおしむ所で幕になる。第二幕は數年經過した後だ。漁師は百萬長者として巨萬の富をもたらして歸り、小屋の前で彼の歸りをまつてゐた女房に外國で成功したことをのべてゐる。女房は、横柄にそれを遮つて言ふ、「私だつてその間なまけてはゐませんでした」さうして、小屋を開いて、彼に内を見せる。床の上には一ダースの人形が、子供の姿で眠つてゐるのが見えた。ここで子供の役者は見物人の凄い笑ひで、芝居をやめさせられたが、それが彼等には説明出來なかつた。彼等は呆れて、伯父伯母をみつめ、みんなが眞面目にかへり續いて見物するのを待つた。

この笑ひを説明するのは、見物人の次の様な考へである。「このわかい作者たちは子供の出來方を知らないし、そのために、女房が主人の永い留守の間に、生んだ子供を自慢し、主人がそれを喜んでもいゝと信じてゐるにちがひない。」作者が、かう云ふ無智に基いてつくつたものは不合理又は背



理とも言ひ得る。

第三の例は私達が洒落の場合に學んだ技巧を、稚氣に使つてゐることを示してゐる。ある少女のためにフランス婦人が家庭教師に雇れた。しかしその婦人は少女の氣に入らなかつた。教師が彼女から見えなくなるや否や、少女は彼女の批判を叫んだ。

”Das soll eine Französin sein! Vielleicht heisst sie sich so, weil sie einmal bei einem Franzosen gelegen ist!” (あれは本當のフランス女よ。あの人はきつとさう云ふわ。だつてフランス男と重つてたんだもの) これは洒落として、「曖昧な重複意」または「曖昧な諷刺」とも思はれる。もし子供が重複意のあり得ることを考へたとすればなか／＼面白い洒落だ。實際は子供がその好かない外國人に對して、よくきいてゐた冗談まじりの「にせもの評」(Das soll echtes Gold sein? Das ist vielleicht einmal bei Gold gelegen)(これは本當の金だらうか。金と重ねてあつた事があるのだが)を移したのだ。

この話を傍聴して理解する人には根本的に變化されるが、この子供が無智なために、その話は、稚氣になつてゐる。しかしこの條件のために、實はおどけでないものをおどけだと思ふ事がある。子供は途方もない無智のものと思はれるが、自分達にゆるされなかつた自由を得ようとして、しば



しば稚氣を装ふものだ。

これ等の例によつて、洒落と滑稽との中間にある稚氣の位置が説明出来る。稚氣のある話は洒落の文章及び内容に融合する。さうして言葉の濫用が起り不合理や猥談が出来上る。しかし、第一の人間即ちうみ出す人間の精神過程は、洒落に於ては非常に興味深く、又なぞの様に思はれたが、ここではすつかり分る。稚氣のある人間は、その表現法や考へ方には普通の簡単な方法を利用すべきであると信じ、その副目的に就ては何等知らない。彼は稚氣の産物から別に面白味も覺えない。稚氣のすべての性質は、洒落に於ける第三の人物に該當して居る話をきく人の理解によつて成立つ。演ずる者はひきつゞき何の苦もなく稚氣をうみ出す。洒落に於て、理解によつて制止を麻痺させる様にした複雑な技巧は、彼には不用なのだ。彼はまだそんな制止をもつてゐないから不合理や猥談を直接に、即ち妥協しないで發表することが出来る。その點に於て稚氣は洒落の構成の公式に於てこの檢閲の大きさが零に低下した時つくられる、洒落の極端な場合なのだ。二人の人間が殆んど同じ抑制又は内部の障礙をもつてゐるといふことが、洒落の效目に對する條件であるとすれば、稚氣の場合には一人の人間が抑制をもつてをり、一人が缺いてゐるといふことが條件であると認められる。制止に支配される人間に稚氣が理解され、専ら彼に於てのみ稚氣のもたらす喜びが味はれ、さ



うしてこの喜びは抑制のとれるために出て来るのだと略々想像される。洒落の喜びも同じ様に出来るものだから——核は語音や不合理からの喜びであり、殻は制止を排斥した喜びや、「落ち」のついた喜びなのだ。——この抑制に對する同じ様な關係は、稚氣と洒落の密接な近親關係に基いてゐる。この兩者にあつては面白味は、内部の抑制のとれることによつて出て来る。感受する人間（それは稚氣に於ては吾々のいふ「私」にいつも一致し、洒落では、洒落を云ふ者の役をする）の精神過程は、稚氣の場合に於ては複雑であるが、演者の精神過程は稚氣の方がより單純だ。私達の例で説明すると、感受する人間にはきゝこまれた稚氣が洒落の様に働かなければならない。何故と云へばその人間には洒落の場合と同じく、檢閲を中止することが聴くといふ單なる努力によつて出来るからだ。稚氣のつくる喜びの一部しかこの説明では出来ない。しかしこの部分でさへも、他の稚氣の場合、たとへば無邪氣な猥談をきく時などは危い。無邪氣な猥談を聞いたものは、即座に眞の猥談をきいた時に覺えるやうな憤を感じるだらう。それを感じないのは他の要素があつて此憤りを省き、同時に稚氣の面白味といふ意義のある助力を提供するからであらう。

此處に云ふ他の要素といふのは、内部の抑制が完全に演者に缺けてゐるといふことが分つて居ると云ふ條件だ。これが確實ならば、私達は憤慨する代りに笑ふのだ。だから私達は演者の精神状態



を考へてその人に代り、その稚氣を私達の精神状態と比較して、それを領解しようと試みる。かういふ風に立ち入り比較することが、支出を省き、さうして吾々を笑ひにみちびくのだ。

もつと簡単に説明する方がよければ、次の様になる。即ちその演者が打ち克たなければならない様な制止をもつてゐないと考へることが、私達の憤りをなくしてしまふ。だから笑ひは省かれた憤りの代償として現れるのだ、と。これ等の一般から誤解されさうな解釋を、更に持ちつゞけてゆくために、上の説明では一緒になつてゐた二つの場合をはつきり區別しよう。私達の前に現れて來る稚氣は、私達の例の示す通り、洒落の性質からも生じ、又猥談或は一般に不愉快なもの、或はそれが話でなく動作によつてうまく表現されたものゝ性質からも生ずる。此の猥談や不快なものゝ場合はしばしば誤解されて、喜びが、省かれた憤りから生じて來ると考へられる。だが洒落の性質から出た稚氣の場合は、こんな誤解は招かない。稚氣のある話、たとへば „Bubizin” の話は、それ自身小さな洒落として働き、憤る様な機會は與へない。これはたしかにめづらしい、しかも純粹な、學ぶ所の多い例だ。子供は „Medizin” の „Medi” といふ綴をまじめに、且副目的なく、その自分の名前 „Mädi” (嬢や) だと考へ、洒落の喜びとは何の關係もないその言葉の喜びをたかめたのだ。私達はその言葉を二つの觀點から考へて見る。一つはそれを作つた子供の立場で、も一つは



作られた稚氣を見る私達の立場だ。かういふ風に比較して見れば、子供は一つの一致をみつけ、私達の持つて居る言葉の制限を越え、恰も吾々が次に獨語する様な點にまで行く。「もしお前が言葉を領解しようと欲するならば、この制限を守るに必要な費用を節約することが出来る。」子供の立場と私達の立場の比較によつて解放された費用が、稚氣の面白味の源となり、笑ひによつて搬出される。演者が有邪氣だつたり、又演者の言葉に無邪氣さがなければ、當然此費用は使用されてしまふのだ。稚氣のある洒落を、稚氣のある猥談の前象的なものであると考へれば、この場合は抑制の節約は、直接二つの立場の比較から生じ、始まるとまもなくなくなつてしまふ様な憤りを考へる必要はなく、この憤りの材料となるべき支出は、洒落の場合に説いて置いた多くの保護設備に關係ある使用方法を、うけるものとなるのだ。

この比較や、演者の精神過程に入りこむ事は、それだけで事が決せられるのだから稚氣にとつては重大な意義がある事で、事實洒落では思ひも及ばぬ事で、多分滑稽における精神過程の本質的な部分である様に想像される。かゝる方面——これはたしかに稚氣の重大な性質だ——から稚氣は滑稽の一種類である様に見える。稚氣のある話の例で洒落の喜びに近く思はれたのは、滑稽の喜びだつたのだ。この喜びは他人と自分の表現を比較する際に省かれる支出によつて出て来るものだ。私



達は此處で領解し易いと思ふから、稚氣の價值を決定しよう。

稚氣の面白味が、聽く人と話す人との支出の差違から出て來る點では、稚氣は滑稽の一種だ。又稚氣は、演ずる人と聽く人との精神過程の比較で省かれた支出が、即ち抑制の支出であると云ふ條件の點では洒落と非常に近い位置にある。

私達は最後に到達した觀念と、以前から滑稽の心理學に於て擧げられた觀念との間の區別點と共通點をすみやかに決定しよう。演者の精神過程に入りこむこと、(Sichhineinversetzen)それを領解しようとすることは明かに、滑稽の列に屬すべきで、Jean Paul 以來滑稽の分析に役立つて居たものだ。他人の精神過程と、自分のそれを「比較」することは「精神的對照」(psychologische Kontrast)に相當してゐる。洒落では此點は別に問題を提供して呉れなかつたが、こゝではじめて問題となつて來た。滑稽の面白味の説明では、喜びは對照して居る觀念の間に注意が動搖してゐることだと云つて居る大家達の意見と、私の意見とは少しちがふ。私達はかう云ふ喜びのメカニズムをつかむことを知らない。私達はたゞ、對照を比較することによつて支出の差が現れ、それが他に使ひ途のないときには搬出されることが出來、したがつて、それが喜びの源となることを示すだけだ。



滑稽自身の問題に關しては私達は一種の不安をもちながら近づいてゆく。多くのすぐれた思想家達の研究も、此滑稽については、各方面から満足出来る様な説明を與へなかつた。だから私達の努力がその解決に對して決定的なものを與へるだらうと豫期するのは、大膽過ぎる事であるかも知れぬ。私達が實際狙つてゐるのは、私達が洒落に對して價值があるものとして示した見地を、滑稽の領域にひろげてゆかうとすることに他ならない。

滑稽は、人間の社會的關係から偶然にひろはれるものだ。それは人物に發見され、その運動、形容、動作、性質、さうして始めは恐らくたゞ體質からであつて、後になると精神的の性質乃至は其言葉に見出されるものだ。非常にありふれた擬人法によつて動物や生命のない物體が滑稽になる。

滑稽は人格を分解し、その人格が滑稽に見える條件が出て来る事によつておこる。さうして滑稽は一つの「狀況」(Situation)が出来、さうしてかう云ふ知識によつて、ある人物の行爲が滑稽の條件とあてはまる様な狀況に、その人物をおきかへ、隨意にその人物を滑稽にすることが出来る。

もし、他人を滑稽にする力を、自分の力のなかに發見すれば、滑稽の喜びといふ思はざる賜物に達する道がひらかれ、高等な技巧の緒が與へられる。人間は自分自身と同じ様に他人を滑稽化することが出来る。滑稽化の役に立つ手段は次の様なものだ。滑稽な狀況におきかへること、模倣、扮



装、正體暴露、カリカチュア、狂文、及び戯文（まじめな題材をふざけてかくこと）等だ。自明の理であるが、これ等は敵意のある攻撃的な傾向に於ける技巧に現れ得るものだ。ある人間を輕蔑させるために、又尊嚴や權威を彼から奪ふために、その人間を滑稽化することが出来る。しかしかう云ふ目的が、通常その滑稽化の根本になつてゐる場合でも、これを自發的な滑稽の意味であるとして用ひないこともある。

かういふ風に滑稽の出現を無秩序に一瞥して見てもわかる通り、それには非常にひろい根本の領域がみとめられるべきで、稚氣の際の様に、そんなに特別な條件は、滑稽に於ては期待されない。滑稽に必要な條件の行衛を知るには、その出發相を選ぶことは最も意義のあることだ。私達は運動に關する滑稽を選ばう。その理由は、私達があゝの身振狂言師が私達を笑はせるために利用する原始的な上演をおもひ出すからだ。私達は何故道化役者の動作を笑ふかといふ問に對する答は、それ等の動作が途方のないものであり、實際的でないといふことにある。私達はあまり法外に大きい費用を笑ふのだ。私達は、人工的に作られた滑稽以外のもの、即ち故意でないものを探さう。子供がとんだり跳ねたりしても、その動作は別に私達に滑稽に見えない。之に反して、子供が文字を學ぶ際、舌をつき出して自分のペンのうごきを眞似るときは滑稽に見える。この二つの同じ様な動作、



(かくこと、口でまねること)に於てはうごきの費用が餘分に思はれる。この共働動作に於ける費用は、私達ならばもつと節約されるだらう。一般に餘計な共働動作は吾々に滑稽に思はれ、或は法外に誇張された動作の上の表情は、大人がやつても滑稽に思はれる。

うごきの滑稽のうちこの種の適例はゴルフが實行してゐる。彼が球を放つたのち残念がつて、球のゆく路を正しく出来るかの様に、身振りをする。さうすると感情のうごきの表現を誇張し、さうして Chorea St. Viti (聖者 Veit がかゝつた舞踏病) を病んでゐる人間が不隨意にする様な澁面も滑稽になる。同様に近代の音楽指揮者の熱情的な身振りもそれを理解する必要のない音楽趣味のないものには滑稽に見える。さうだ! かういふ運動の滑稽から、身體の形や顔の特徴に關する滑稽が分岐してゐる。それ等は恰度、誇張され且意味のない動作である様に考へられるからだ。大きく開いてゐる眼、口まで曲つた鈎のやうな鼻、遠くはなれた耳、瘤、またはそれに似たものはみな、これ等の特徴をつくりあげるのに必要な様な身振りが表現されてゐる場合は滑稽だ。鼻とか耳とか其他の身體の部分が、實際に動くかの様に見做されてゐる場合だ。

だけれが「耳をゆりうごかす」ことが出来たら、それは疑もなく滑稽だ。もし又鼻を上へ上げたり、下へさげたり出来れば、たしかにもつと滑稽だらう。動物が私達に與へる滑稽な作用は私達に



眞似の出来ない彼等の動作を観察することによるものだ。

私達が他人の動作を法外であり、實際的でないとみとめた際、どんな方法で笑ひに達するのか。私の考へでは、他人に於てみとめられる動作と自分自身がその他人の位置に立つてやるであらう動作の比較といふ方法だと思ふ。この二つの比較されるべきものは、同じ尺度の上におかれなければならない。この尺度といふのは、どんな場合でも、動作の概念と結合してゐる私の神経分布の費用だ。この主張は解釋を必要とし、更に詳論しなければなるまい。

私達がこゝで相互に關係させ様としたものは、一方は表現せんとする精神の費用で、他方では表現されてしまつたものの内容なのだ。私の主張は、前者が一般に且理論的に後者と獨立してゐること、特に大きな動作の概念は、小さな動作の概念に向つて、多くの費用を要求するといふことだ。種々な大きさの動作の概念を問題にしてゐれば、君々の主張の理論的根據、ならびにその證明は困難ではない。

一定の大きさの動作の概念は、私がそれを、實行しそれを模倣したら得られたのだ。此場合この身振りをしてゐる間に、私は運動に關する尺度を私の神経に感ずる。もし私がそれと同じか、又は稍大きい動作を他人に觀察した場合に、それを領解し、統覺する最も確實な方法は、それを模倣し



實行することであらう。さうすれば、私はどの動作に於て私の費用が最も大きいかを、比較によつて決定することが出来る。かう云ふ模倣の衝動は、動作を観察した時に現れるものだ。しかし私は運動の模倣を、私が文字をつづることによつて讀むことを學んだ際の様に、文字を分解する様にして演じおほせられはしない。私の筋肉によつて、動作をまねする代りに、同じ様な動作の際における費用を想ひ起すことによつて、その觀念が得られる。觀念や思考は非常に僅かな配置エネルギーのために見當ちがひになり易く、又その際主となる費用の流出を出来るだけ控目にする點が、行爲や動作と違つて居る所だ。どんな方法によつて觀察したならば動作の量的な要素——即エネルギーがより多く用ひられたか、又は少く用ひられたかと云ふ——を表現の觀念に持つてこられるのだらうか。又いつでも組立てられた觀念には量の表現は缺けてゐるものであらうか。さうして私はどうして種々な大きさの動作の觀念を夫々區別し、こゝに問題になつてゐる比較を企て得るのだらうか。

この場合の研究方法を心理學が教へて呉れる。心理學は觀念する間にも神経支配 (Innervation) は、筋肉に流れ去り、たしかにそれは、あてがはれた費用に相當するものと教へる。この觀念に伴ふ神経支配の費用は、觀念の量的因子を表現するに用ひられ、その費用はまた大きな動作が觀念されるときは、小さなものを問題にしてゐるときよりは、大きいと考へられるのは尤もなことだ。



より大きい動作の觀念はだからこゝでは實際に、大きな觀念、即ち大きな費用を伴ふ觀念であるやうだ。

人間はその觀念の内容に於ける大や小を、種々な程度の費用によつて、「觀念の表情」(Vorstellungsmimik)の一種に表現する習慣のある事が具體的に見られる。子供や、ある民族の一人の男、又はある種族の系統を持つものが、他人に報告し、または叙述する際には、はつきりした言葉を選んでその觀念を明瞭にすることだけでは満足せず、その觀念の内容を表情動作に表す事がある。つまり彼は科と言葉の表現法をむすびつける。彼は、量と強度を殊に形容する。「高い山」といふときはその手を頭の上にかざす。「小さな一寸法師」といふときは、手を地に近づける。手で量る惡習を捨てれば、彼はそれを語調とする。さうしてそれをも自制すれば、彼は、大きなものを叙述するには眼をみひらき、小さなものを表すときは眼を細くする様に思はれる。彼がさういふ風に表現するのは、彼の感情ではなくて、彼に觀念されたものゝ内容なのだ。

表情を要求することは、報告の欲望によつてはじめて起ることであるが、然しこの表現法の肝要な部分は、きく人には氣づかれないのではないだらうか。私はむしろかう信ずる。この表情は、たとひあまり生々したものでもないにしても、他の話し方とはちがつてをり、それは他の人が直覺的に



考へたことを、自分自身で觀念する場合に起るのだと。又かういふ人は、話の中の大きなものや小さなものをその身體によつて、少くとも彼の容貌又は感覺器官に神經支配を變へて表現するのだ。觀念せられた内容に與へられた身體の神經支配は、報告の目的に用ひられる表情の根本であり、緒であると共に考へられる。その表情は他人に氣づかれて、この目的を達するやうに誇張されたものであることを要する。「感情の動き」の表現を私達は、精神現象の身體的な副現象であるともみとめて居るのだが、これに此觀念の内容の表現が、附け加はへらるべきものだといふ意見を僅かに私が抱いたとすれば、私の上に述べた大及び小といふカテゴリーに關係のある説は、問題をまだすつかりは解決して居ない。一人の人間が注意の集中や、彼の考へに該當する抽象の高さを、身體的に示す手段である「緊張反應」(Spannungsphänomen)を論ずるに先立つて、私は尙他の多くの事を論じなければならぬ。私はその題目を實に主要なものだと思ふばかりでなく、美學の他の領域に於ても滑稽の解釋に對すると同じ様な觀念の表情の追求が有益ではあるまいかと思ふ。

さて、再び動作の滑稽に歸つて、私はある動作の認識と共に、ある費用の支出があつてその動作の觀念に對する衝動が與へられるといふ事をも一度主張する。だから此動作を理解しようとする際即ちこれ等の動作を統覺する時は、ある支出をして、恰も私とその觀察される人間の位置におきか



へられてゐるかの様な態度をとる。恐らく同時に私はこの動作の目的をみとめ、さうして以前の経験により、その目的の獲得に要求される費用の程度を、見積ることが出来る。私は其際觀察される人間を度外視し、恰も私がその目的に到達せんと欲してゐるかの様に振舞ふ。此二つの表徴の可能性は觀察される人と私自身の動作との比較から出て来る。他人の法外な實際的でない動作を見ると私の理解に對する過大の費用が右から左に (*In Statu nascendi*) 融通され、幾分なり支出の動員を軽くし、よけいなものであると合點させ、さうして他の使用法、即ち笑ひにむけることによつて放出する。かう云ふ方法で、他の好都合な條件が加はれば、滑稽な動作の面白味が成り立ち、自分の動作と比較した際に、神経支配の費用は餘計ものになるのだ。

私の説明は、二つの異つた目的に向つて続けられたことに氣がつく。一方は、過剰の搬出に對する條件を確定することであり、一方は他の滑稽の場合に於ても、動作の滑稽に於けるごとく、同じ様に領解されるかどうかを試みるためだ。

吾々は先づ後者の課題に向ひ、行爲や動作の滑稽を説いた方法で、他人の性格や、精神活動の中に發見される滑稽を考へて見よう。

私達はあの無智な受験生が試験中に生んだ滑稽な不合理を、この種の例に擧げることが出来る。



吾々は不合理や馬鹿らしいことに迷はされてはいけない。それ等はしばしば滑稽に見えるが、しかもいつも滑稽だとは思はれない。同じ様な性質のものを一度は滑稽だと思つて笑ひ二度目には輕蔑すべきものまたはにくむべきものに見える様な事もあるから。私達が注意して居なくてはならないこの事實は、尙次のことを暗示してゐる。即ち滑稽の效果に對しては、私達に知られてゐる比較よりも、尙他にも氣付かなくてはならない條件がある事だ。他人の心の性質にみとめられる滑稽は、明かに彼と私のいはゆる「私」との間の比較の結果だ。しかし、不思議にもその比較は滑稽な行動の場合と逆の結果を生ずる。行動の場合には私がつかつたと信するよりも餘計の費用を他人が使つた場合に、滑稽であつた。精神作用の場合には之と逆に、私が使つたと思ふ費用を他人が節約した場合に滑稽であつた。これは、不合理や馬鹿らしいことは確かに貧弱の費用ですむ。前者の場合ではむづかしいから笑ひ、後者では容易であるから笑ふのだ。だから一寸見た處では、滑稽の效果はたゞ二つの配置の費用——「感情移入」の費用と私の費用との——の間の差次第であり、何によつてこの差が發表されたかといふことは問題ではない。しかしこれ等、私達の判斷を間誤つかせる様な不思議も、吾々の個性の發展には、出来るだけ筋肉作業を制限し思考作業を高める高い教養の階段があることを熟考すれば、消失してしまふ。私達の思考の費用を高めることによつて、一つの作



業に對する私達の動作の費用は少くてすむ。それが教養の結果であることは吾々の説明方法がたしかに證明する。

だから私達と比較して、肉體的作業には餘計な費用を使ふ人と、精神作業にはより少ない費用しか使はない人間とが、私達に滑稽に見えるのは同じ理窟だ。この二つの場合に起る笑は私達が彼にむかつて感ずる優越の面白さの表現であるといふことは否定出来ない。もしこの兩者の場合の事情が逆になり他人の肉體的な費用が私達のより少く、精神的な費用が私達のより大きければ、私達は最早笑はないで、呆れ且怪しむばかりだ。

こゝに説明した様に、他人と自分との比較から出發する滑稽の面白味の源は、——感情移入の費用と自分の費用との差から來る喜び——は、恐らくその由來から見て最も重要なものだ。しかしその外にも面白味の源は勿論ある。他人と自分の間の比較を度外視すれば、感情移入と自己の精神過程とがないのだから、面白味をもたらす差は得られやうがない。従つて優越感は決して滑稽の面白味に對する本質的な條件でないといふ事が分る。然し面白味の成立にはどうしても何等かの比較は必要缺くべからざるものだ。例へば、二つの速かに斷續する同じ作業に關係のある配置の費用の間に行はれる比較だ。この費用は他人への感情移入によつて吾々のうちにつくられ、またはかゝる關



係なく、吾々自身の精神過程の中だけにも見出される。他人が尙役目を演じてゐる第一の場合は、他人と自己の比較でなく、面白味をもたらす配置の費用の差が、外部の影響をうけるのであつて其影響を「状況」(Situation) と私は認める。だからこの種の滑稽を「状況の滑稽」(Situations-komik) と呼ぶ。滑稽をうみ出す人間の性質はその際あまり考へに入れなくてもいい。何故かと云へば、誰だつても同じ様な状況では、さうしなければならぬと云ひながら私達は笑ふ事があるのだから。

私達はこゝで人間に對して、外界が優勢である點から滑稽をひき出して見よう。外界として人間の精神現象に現れるものは、社會の習慣や必要、又自分自身の肉體的な要求等だ。肉體的な要求の定型的な例は、精神力を要求するある活動の最中に、それがにはかに苦痛、又は排泄的要求などで妨げられる場合だ。かう云ふ場合、滑稽な差をうみ出す比較は、障碍前の大きな興味と、障害の起つた後もその精神活動にのこつて居る極小の興味との間にある。吾々にこの差を提供する人間を吾々は負けたものとして滑稽だと思ふ。その人間は前の私との比較に於て負けてをるのであつて、私達との比較に於てではない。何故と云ふに私達も同じ様な場合には他の方法がつかないのを知つてゐる筈だから。私達が人間の敗北を感情に移入する時、他人の事ならば滑稽であるのに、自分の時に



は、かう云ふ困窮を、苦痛と感ずるのは注意に値する事だ。恐らく自分の苦痛とは別物だから他人と自分との異なる配置の比較のために起る差を面白い事として感ずる事が出来るのだらう。

滑稽のも一つの源は、私達が自分の配置の變化の中に見出し得るもので、私達が豫想の觀念によつていつも取越してゐる未來に向つての私達の關心の中にある。

豫想の觀念には、いつもあるきまつた量の費用が根柢をなして居り、その費用は失望の際にはある程度だけ少くなるのだらう。私はこゝで觀念の表情をも一度説く。實際に動員された配置の費用を、豫想の場合にも證明することはより容易だ。ある場合には私達の肉體的準備が、豫想の表現を形づくることは確實だ。豫想された事件が続いて私達の行動を要求する場合にはいつでもさうである。之等の準備は即座に定量することが出来る。

もし私に向けて投げられたボールを、私が掴まうとするときは、私は球のはずみに對して、しつかりしてゐることが出来る様に、身體を緊張させる。若し掴んだ球が案外輕かつたことが分れば、私のやつた餘計な動作は、見物人には滑稽に見える。私は餘計な動作の費用を期待したのだ。たとへば重く思はれた果物を取りあげた際、それが臘で模造されたもので、私の失望を招く様な場合にも同じだ。私の手はその反撥で、私が目的に對して過大な神経支配を用意したことを知るので、私



は笑ふ事になる。動物に對する心理學的實驗が豫想の費用を直接量つて見せて呉れる様な例が一つは確かにある。Pawlow が犬の唾液分泌状態を實驗した例がそれだ。唾液瘻が造られ（唾液腺から口中へでなく、頸のあたりへ瘻孔によつて唾液を導きその唾液を計る）種々な食物が眼の前に示される。さうすると唾液の分泌量は、犬が欲するものと否とで違つて来る。又期待されたものが單に私の感覺器に對して要求し、私の運動に對しては、要求しないものであれば、期待が感覺の緊張に用ひられ、他の期待されない印象を中止するに用ひられる運動的の費用に當ると假定することが出来る、又注意を食ひとめる事が費用を要する運動的の給付であると説明することが出来る。期待の準備行動は期待された印象の大きさと密接な關係があるのみならず、期待の大小は表情的には、期待の支出の大小で現す事が出来るのを私は豫想する。

期待の費用といふものは、種々の分子からなりたつ。單にそれは實現されたものが期待したものより、感覺的により大きいか小さいかといふことだけでなく、期待につないだ大きな興味に、それが相當するかどうかといふことも關係する。かう云ふ様にして大小を表現する費用（觀念の表情）注意の緊張の費用、期待の費用、また時としては、其上に「解決の費用」(Abstraktionsaufwand)といふことをも考へてもらひたい。この他の費用もないではないが、それは容易く大とか小とかに



誘導する事が出来る。例へば興味のあるものとか、高尚なものとか、また抽象的なものでさへも、たゞ「大」といふものが特別に現された特殊の場合にすぎない。Tippa<sup>ツッパ</sup>及其他の人の説に依つて量的な、——質的でない——對照を先づ滑稽の面白味の源であると思なせば、私達が動作の滑稽を研究の出發點として選んだことは非常に都合のいいことであつた。カントの文章「滑稽は何物によつても打ちくだかれなかつた期待の一つである」を解釋するために Tippa は、彼の著書で滑稽の面白味を共通に期待からみちびき出さうと試みてゐる。この試みがもたらした結果は、非常に參考になり、價值のあるものであるが、私はむしろ他の學者たちによつて發表された批評——Tippa は滑稽の根本範圍を *um vieles zu eng* (多くのものに對してあまりに狭く) に考へ、そしてその現象を左程の無理もなく彼の公式にあてはめることが出来たのだ——に賛成したい。

X

X

X

人間はその人生に於てぶつつかつた滑稽を楽しむことだけに満足するだけでなく、それをわざと再び組立てゝ見るやうな努力をするものだ。だから「滑稽を造る事」に用ひられる方法を學べば、滑稽の本態を尙更らよく領解出来る。特に自分自身の滑稽が、他人を愉快にすることが出来るものだ。たとへば自分が馬鹿である様に装つて、人をよろこばすことが出来る。



費用の差を招くやうな比較の條件をみたすために、恰も實際さうであるやうにさへすれば、滑稽は十分につくられる。そのために嘲笑されたり、輕蔑されたりすることはなく、却つてしばしば感服されるものだ。伴つてゐるのだといふことを、他人が知つてゐれば優越感などが、他人におこることはない。この事實は滑稽が、優越感と全く無關係の事もあるといふ新しい良い證據を與へて呉れる。

他人を滑稽化するのに最も役に立つのは、その人物やその人格は顧慮する處なく、他の位置へ置きかへること、即ち「狀況の滑稽」(Situationskomik)の利用しつくされた場合だ。その位置に於ては外界の事情、殊に社會の事情と、人間が無關係になつてゐることが、滑稽に見えるのだ。この滑稽な位置に置き換へることは、人間がだれかを陥れようとする場合に、實用的なものになる様だ。それによつて彼は不具者のやうに倒れたり、馬鹿のやうに見られたり、又それによつて彼の信用が零となり、遂に彼は不合理な事を云つて、體裁をつくらなくてはなくなる。又その位置の轉換は、話やあそびで虚構することが出来る。滑稽の面白味と滑稽な地位の實在とは無關係であるといふことは、「滑稽を造る事」が、いつも心懸けてゐる攻撃のいゝ條件となる。だからだれでも、滑稽化されることに對しては防ぎ様がない。



特殊の價值をもつてをり、且部分的には、滑稽の面白味の新しい緒を示す滑稽化の方法がある。此に屬するものはたとへば人眞似だ。模倣はカリカチュアに見る誇張がないときでも第三者に法外な興味をもたらし、其對照を滑稽に感じさせる。カリカチュアの滑稽効果を發見するのは、單なる模倣の滑稽効果を發見するより遙かに容易だ。

カリカチュア、戲文並びにそれ等と實際的に對になるもの、例へば正體暴露(Entharvung)等は威嚴や尊敬を要求するもの、また何等かの意味ですぐれてゐる人間、又は、物體にむけられるものだ。それは獨逸語でうまく言ひ表される様に Herabsetzung (卑下) といふ方法だ。優れてゐるもの(Das Erhabene) といふのは轉化した精神的な意味の「大」だ。だから私は優れてゐるものは肉體的な「大」と同じ様に、過大費用によつて表現されるといふことを認めたい。

私が何かすぐれてゐるものについて話すときは、聲がいつもと違ひ、ちがつた顔付をし、身體全體の姿勢を、私の表徴するものゝ價值に調和するやうに、試みてゐるといふことは、そんなに觀察を要しないで認められる。私は、恰度すぐれた人間、君主、科學界の碩學の前に行つたときと同じ様な嚴肅さを、私自身に課すのだ。觀念の表情のこのちがつた神経支配が過大費用に相當するものだと信ずれば、これは誠に當然だらう。私がありふれた具體的な、形式的な觀念でなく、抽象



的な思考過程に耽れば、かう云ふ過大費用の第三の場合はすぐ見出せる。既にのべたすぐれたものゝ「卑下」といふ方法を用ひればすぐれたものに對して私は氣を張らなくてすむし、又軍隊で言ふ「konnod」（安直）にするのが一番あてはまるやうなありふれたものに對すると同じ様に、表徴させて呉れる場合は、嚴肅といふ重荷の過大費用は省かれる。さうして感情移入によつておこつた表徴方法と、在來の方法とを比較すると、そこに費用の差が生じ、それが笑によつて搬出される。

カリカチュアは衆知の如く「引き下し」（Herabsetzung）をつくりあげるものだ。即ちカリカチュアは、すぐれた對象の全體の表情から個々の見逃され易いそれ自身滑稽な性癖をひきだし、それを綜合像として認識させるものだ。かういふ風に性癖を分解する事によつて、吾々の記憶にあるものを、全體として現して、滑稽の効果が得られる。たゞその場合に、すぐれたものが、私達の恭敬の要素から幾分なりきり離されて居る事が必要條件になる。見逃され易い滑稽な性癖が實際になくとも、カリカチュアはそれ自身滑稽でない性癖を誇張することによつて、用捨なく滑稽なものにつくりあげてしまふ。カリカチュアの効果がかくのごとく事實の改竄によつて決して根本的に害されないといふことは、滑稽の面白味の起源にとつて、却つて目標となることだ。狂文並びに戲文はす



ぐれたもの、「ひき下し」を他の方法で得る。ある人間の私達に知られてゐる性質と、彼の話をたは行動との間の一致を破壊し、そのすぐれた人格、またはその言葉を卑しいものでおきかへることだ。その點でカリカチュアと區別されるが、滑稽の面白味を生産するメカニズムによつては區別されない。正體暴露も同じ様な方法だが、その場合には實際は褻奪されなければならない品位や權力を、不正によつて獲たものだといふことを考へさせるのだ。正體暴露による滑稽の効果は、洒落の二三の例で學んだことである。たとへば、「高貴な婦人が最初の陣痛の際に *Ah, mon dieu* (あゝ、神様と叫んだが醫者が助けようとしなかつたので *Ai, wail* (あゝ、いらゝ)と叫んだ」といふ話があつた。滑稽の性質を學んだ後になつて見れば、この話は元來滑稽な正體暴露の例であつて、洒落と呼ぶのは不當であるといふことに最早反對出來ない。この物語を洒落のやうに考へさせるのは單に「舞臺稽古」や、(*Inszenierung*)「最小のものによる表現法」(*Darstellung durch ein Kleinstes*)といふ技巧のためなのだ。此場合には、症狀の程度をたくみに言ひ表した叫び聲のためだつたのだ。しかし又これを洒落としかどうかを強ひて決定するならば、言語の感じから、かう云ふ物語を洒落であると稱してもいい事がある。之に對しては私達は、熟慮の結果ある説明を付することが出来る。言語の慣用法は、私達がこんなに苦勞して研究した結果得た洒落の本態に對する科學的洞察か



ら出發したものではないのだ。滑稽の面白味のかくれた源に達する努力は、つまり洒落の作用に屬することなのだから、顯かになつてゐない滑稽をさらけ出す祕術を、ほんやり同じ意味で洒落と名づけることが出来る。これは他の滑稽化の方法よりも、特に正體暴露に對して適合する。

私達のすでに學んだもの一つの滑稽化の方法が「正體暴露」に矢張り數へ挙げられる。即ちある人の、人間に共通な缺點、特に、その精神力と肉體的要求との獨立性に注意を集め、その人間を卑下する方法がそれだ。その場合には正體暴露は次のやうな警句と同じ意味になる。

「神の如き人なりと驚嘆された誰彼も、私やお前と同じ人間なのだ」

見かけだけの精神能力の自由な豊富さの中から、單調な精神の自動作用を發き出さうとする努力は、すべてこれに屬するものだ。此「正體暴露」の例は結婚媒介業者の洒落に於て學んだが、實際にまたそれ等の物語を、洒落だとして正しいかどうか疑はしく思つた。私達はこゝではもつと確實に、あの鸚鵡返ししの逸話（結婚媒介業者の主張を鸚鵡返しに強めてゐるうち、花嫁に瘡があるといふ讓歩すべき點までも、*Aber, was für einen Höcher!*——まア何と云ふすばらしい瘡でせう——といふ宣言で強調した話）は、本來滑稽な物語であり、精神の自動作用による正體暴露の例であると決定することが出来る。滑稽な物語はこゝでは單に外觀としてしか役に立つてゐない。結婚媒介



業者の逸話の中にかくれてゐる意味に注目しようとする人にとつては、全體として、すぐれた舞臺稽古風な洒落である。そんな點まで入り込まない人には、滑稽な物語にとゞまつてゐる。同じ様なことが結婚媒介業者の他の洒落に對してあてはまる。彼が異論を稱へるために、遂には「どうしてそんなことが、一體誰れがこゝのうちの人に物を貸すでせう」といふ宣言で、事實を認容した話は一つの洒落の外観としての滑稽な正體暴露だ。しかしこの場合にも、洒落の性質は十分に明白だ。媒介者の話は、同時に逆による表現であるからだ。彼はこの家の人が金持であるといふことを證明しようとして、同時に金持でないどころか却つてひどく貧乏なことを證明してゐる。滑稽と洒落とがこゝでは輻輳してゐる。だから同じ言葉が、同時に洒落になり、滑稽になり得ることを教へられる。

私達は、正體暴露の滑稽からやつと洒落に歸つてゆく機會を掴むことが出來た。洒落と滑稽との間の關係を、説明することが私達の重要な仕事であり、滑稽の本態を決定することはさうではない。そんなわけで私達は滑稽であるか、または洒落であるか、といふ感情をすてゝしまつた精神自動作用を發見する場合と、同じ様に洒落と滑稽のお互に纏れてゐる場合、即ち不合理の洒落の場合とを並べて見た。私達の研究は結局この第二の場合に於て、洒落と滑稽の一致が理論上推理されるとい



ふことを教へて呉れる様になるだらう。

私達は洒落の技巧の説明で、既に氣づいたが、「投げやりな考へ方」は、無意識中ではあり勝ちなもので、意識中では「考へちがひ」としか判斷出来ないが、それが非常に多くの洒落の技巧となつて居る。しかしそれを洒落の性質として考へると、疑を狭む餘地がある。だから私達はその考へ方を、簡単に滑稽な物語として分類しようとしたのだ。私達はその當時、洒落の性質を知らなかつたので、私達の疑にごく僅かしか決定を與へることが出来なかつた。その後私達は夢の作業と同意義だといふことから導いて、理性的批判の要求と昔の言葉や不合理の面白味を斷念したくない欲望との間を、洒落の作業が妥協しようとする作用の中に洒落の性質があることを發見した。もし思考の前意識的な附屬物が一瞬間無意識の改作に任された場合には、妥協として出来上つたものが、すべての場合に兩方の要求を充たし、批判に對して種々な形で面接し、遂に批判が落着くのだ。だから洒落は一度は無意味な、しかし乍ら常に許された文章の形式を盗みとり、次には價值のある思考の表現法に忍びこむことに成功する譯だ。しかしながら妥協のはたらく極端な場合では、洒落は批判を満足させることを諦め、その意のまゝになる面白味の源を恃んで、赤裸々な不合理として批判の前に現れ、さうして批判の反駁を呼びおこして恥ぢなかつた。これは聽く人が洒落の表現の醜さを



無意識の改作によつて作り直し、洒落にその意味を再び與へるだらうといふことを洒落が頼みにすることが出来たからだ。

さてどんな場合に洒落が批判に照して不合理に見えるのだらうか。特に洒落が無意識に於ては習慣的なものであつても、意識に於ける思考に於ては、禁ぜられてゐる思考の方法を採る場合、即ち「考へちがひ」の場合はどうだらうか。無意識中の考へ方のうちには、意識の中でも同じ様に保たれてゆくものがある。例へば、間接の表現法、諷刺等だ。しかしこれを意識して使用する場合には、勿論更に大きな束縛に壓迫されるものだ。これ等の技巧を使へば洒落は批判の感情を害はないか、もし害つたにしても僅かのものだ。だから此方法が、洒落として使はれるには、意識上の思考が最早知る事の出来ないやうな特別な方法を技巧として、利用しなくてはならない。洒落はまた、タートトリキュールの話、鮭とマヨネーズの話の様に用ひられた「考へちがひ」を、その外觀を理窟で装つて補ふ様にすれば、益々批判との衝突を避けることが出来る。もし洒落が考へちがひを包まないで用ふれば批判の反駁は觀面だ。

この場合にはまだ他の技巧が洒落の役に立つ。無意識の中の考へ方として、洒落がその技巧に利用する考へ違ひは、たとひそんなに規則的でないにもせよ、批判には滑稽に見えるものだ。無意識



中の思考の方法を、意識して放任すること、並に誤謬だとして棄てられてゐた考へ方は、滑稽の面白味を産出する一つの手段だ。これを領解することは容易い。前意識中の配置を組立てることは、無意識中の配置を放任することよりも大きな費用を必要とするものだからだ。無意識中につくりあげられた様な思考を聴く際に、その思考のための費用と、その校正のための費用とを比較すれば當然私達に費用の差が生じて來て、その差から滑稽の面白味が生れ出るのだ。かう云ふ考へちがひを技巧に利用し、そのために不合理に見える洒落は、そんなわけで同時に滑稽の働きをする。洒落の足跡をよく知つて置かなければ、只滑稽な物語、又は戲談丈しか残らない。

鍋の貸借の話（鍋が返却される時穴が開いてゐるのを發見された、借りた人がそれを辯明して言つた「第一に私はとにかく鍋を借りなかつた。第二に、その鍋には借りる時から穴が開いてゐた。第三に、完全な穴のない鍋を返したのだ」は、無意識中の思考の方法を放任することに依る純粹の滑稽効果のすぐれた例だ。この幾つかの思考を、正しく相互間に主張させる事は無意識中では問題にはならない。無意識の考へ方が顯在となつて出る夢は、從つて Entweder Oder (どなくとすれば、これ)を識別しないで、只時を同じうする Nebeneinander (並立)を識別するものだ。私の「夢判斷」の中に複雑ではあつたが判斷的研究の模範として選んだ夢の例に就いて私は或非難を軽くした



いと思つた。つまり私が或女患者の疼痛を心理的療法で消失せしめることが出来なかつたといふ非難なのだ。

(1) 彼女自身がその病氣には責任がある。なんとすれば、彼女は私の解決方法をみとめようとしなかつたから。

(2) 彼女の疼痛は有機的なものであつて、私が近づけなかつた。

(3) 彼女の疼痛は彼女が寡婦であることゝ關係があり、それは私の責任ではない。

(4) 彼女の疼痛は他人が彼女に施した、不潔な注射器による注射のためなのだ。

これ等あらゆる理由はうまく並立して、一つのものが他を否定する様なことはない。が然し不合理だといふ非難から逃げるためには、私は夢の „Und“ (そして) の代りに „Entweder-Oder“ (或は、或は) を挿まなければならない。

次の話と同じ様な滑稽な物語であらう。「ハンガリヤの或村で、鍛冶屋が死に値する様な罪を犯した。しかし領主は鍛冶屋に罰を加へない様に、さうして一人の仕立屋を代りに死刑にする様に裁決した。その理由はその村には仕立屋は二人定住してゐたが、鍛冶屋は一人しかゐなかつたためであつた。さうして刑罰もそれにあてはめてしななければならなかつた。」



責任のある人間から、他の人間へかういふ風に見當がちがつたといふことは、勿論意識した理窟のすべての法則に矛盾するものであるが、然し無意識中の思考の方法には決して矛盾しない。私はこれ等の物語を滑稽だと言ふことを好まない。がしかし私は鍋の話を洒落の中に引用した。私はここで白狀するが、後の方の話は實際洒落であるとするよりも、滑稽であるとする方が、むしろ正しいことなのだ。しかし私は今迄そんなに確かだつた感情が、どうして此等の物語が滑稽であるか、洒落であるかといふ疑惑に、私を陥れたかを領解する。これ等は無意識に専ら固有である考へ方の發見によつて、滑稽が成立する場合であり、私が感情で裁決する氣持にぶつつからない場合なのだ。すべてこれと同じ種類の物語は同時に滑稽であり、洒落であり得る。その話はそれが單なる滑稽である場合にも、私に洒落の印象を與へる。その理由は無意識中の考へちがひを用ふることは、私に洒落を思ひおこさせるからだ。恰も最前にかくされてゐる滑稽を發見する準備が洒落を思ひおこさせた様に。

私は、自分の説明の取扱ひ難いこれ等の點、即ち洒落の滑稽に對する關係を明かにすることに重きを置かなければならない。而してそのために今迄言つた事を否定的な文章で補ひ度い。此處でとり扱はれた、洒落と滑稽との一致の例は、以前のものと同じ意味でないといふことに先づ私は注意



することが出来る。これは實際細かい區別であるが、しかし確實にされなくてはならないものだ。以前の場合では精神の自働作用を發見することから、滑稽が生れ出た。今度の例は決して無意識のみに固有なものでなく、また洒落の技巧としても目立つた役目はしてゐない。

正體暴露は洒落の他の技巧、たとへば逆による表現を用ひてゐる場合に、偶然にも洒落との關係を生じて来る。無意識中の考へ方を放任する場合には、洒落と滑稽が一致することが必要である。その理由は、即ち洒落の第一の人物に於て、面白味を解く技巧に用ひられると同じ方法が、その性質に従つて第三の人物に滑稽の面白味を生ぜしめるためだ。

研究して行く間に、此の最後の例を一般化するやうなことにぶつつかるかも知れない。さうして第三の人物に對する洒落の効果が滑稽の面白味のメカニズムで得られるといふことの中に、洒落の滑稽に對する關係を求めることがあるかも知れない。しかし、滑稽との接近がすべての又は大抵な洒落にあるものではない、といふことに就ては異議がない。大抵な場合には洒落と滑稽とは純粹に區別される筈である。不合理といふ外觀を、洒落から取り去つたものか、又は重複意又は諷示の洒落に於ては、滑稽に似た働らきのものは、聽く人には發見されない。前に記した例、または私が引用し得る新しい二三の例に就いて試みて見給へ。



70 回目の誕生日をむかへたある俳優への祝電

„Trente et quarante” (諷刺をもつ分解)(30+40)

(譯註) 70 は佛語では soixante-dix 「60.10」と云ふ。此洒落は三十歳で一人前の役者になつてから四十年もまだ役者をやつてるのかと云ふ諷刺だらう)

Hevesi は煙草製造過程を嘗つて記述した。

„Die hellgelben Blätter……wurden da in eine Beize getunkt und in dieser Tünke gebeizt. (同じ材料の種々な使ひわけ) (淡黄色の葉……其處で腐蝕劑の中に浸漬され、その浸漬劑で腐蝕される)

Madame de Maintenon (マントノン夫人) は Mme. de Maintenant (マントナン夫人……今夫人) と呼ばれた。(姓名の變形)

Kästner 教授は實物教授の間に望遠鏡の前に立つた皇子に言つた。

„Mein Prinz, ich weiss wohl, dass Sie durchlächtig sind, aber Sie sind nicht durchsichtig” (皇子さま、私は殿下が尊い方であるが、透明でないのをよく存じて居ます)

Andrássy 伯は der Minister des schönen Äusseren (美裝の大臣) と呼ばれた。



少くともあらゆる洒落は不合理の外観をもち、そういう風に働かなければならないといふことに人々は將來氣のつくこともあらう。たゞ私一人はこゝで、かゝる洒落が極めて度々、聽く人に尙も一つの作用、即ち惑はしと拒絶の傾向をもつてゐることのあるのに氣がつく。だから洒落の不合理が滑稽に見えるか、或は普通の赤裸々な不合理に見えるかといふことが問題なのだ。それに對する條件はまだ研究して無かつた。従つて私達は、洒落がその性質に従つて滑稽と區別され、而して一方では只或特殊な場合に於て、又他方に於ては智能の源から面白味を得ようとする傾向に於ては、兩者が一致するといふ結論を固執してゐる。

洒落と滑稽との間の關係をかういふ風に研究して行くうちに、ある差異が露はになつて來た。その差異は私達が最も重要なものであると強調しなければならぬし、同時に、滑稽の心理學から言つて主な性質を暗示してゐるものだ。洒落の面白味の源を我々は無意識の中に限つて置かなければならなかつたが、滑稽に對してはさう考へる動機が見出されない。私達が今迄企てたすべての分析は、寧ろ滑稽の面白味の源が、私達が前意識で並べて置かなければならぬ二つの費用の比較であることを指示する。洒落と滑稽とは何よりも精神的存在位置(Lokalisation)が違ふ。洒落は、いゝ滑稽に對する無意識の領域からの補助である。



X

X

X

私達は大分脱線したが、それを氣にするには及ばない。洒落の滑稽に對する關係が、滑稽研究に突進する動機になるからだ。然しながら今は、私達の本問題にたち歸り、滑稽化に役立つ手段を取扱ふにいい時期だ。私達ちは先づカリカチュアと正體暴露の説明をした。その理由は、私達がそれ等二つのものから、模倣の滑稽の分析に對する二三の緣故を借りることが出来たからだ。模倣は主に、カリカチュアや、あまり目立たない性癖を誇張することによつて置き換へられ、「ひき下し」の性質をそれ自身にもつてゐるものだ。しかしながらその本態はこれだけでは汲み取れない様に思はれる。私達は模倣の忠實なことには特別に笑ふので、模倣それ自身が法外に豊富な滑稽の面白味の源を示してゐることは否定出来ない。Bergson<sup>ベルクソン</sup>の説に従はなければ、これに對して満足な説明を與へることは容易ではない。その説明によれば模倣の滑稽は、精神の自働作用を發見することによる滑稽に近くなつてゐる。Bergsonの意見では、一人の生きた人間に就て生命のないメカニズムを考へさせる様なものは、すべて滑稽に作用するといふのだ。彼の公式によれば、*Mécanisation de la vie* (生活の器械化)だ。彼は模倣の滑稽を説明するのに *Pascal*<sup>パスカル</sup> がその *„Pensées”* (繪畫) に於て述べてゐる問題、即ちそれ自身滑稽でない顔でも、似た顔を二つ並べて比較すると、人が何



故笑ふかといふ問題と結びつけてゐる。

「生命のあるものは我々の期待に従つて決して完全に似たものを反覆してはならない。かゝる反覆を我々が發見すれば、我々はその度毎に、生命のあるものゝ背後にかくれてゐるあるメカニズムを想像する。」

非常によく似た二つの顔を見たときは、一つの同じ形から二つの印象を考へ、又は一つの同じ様な機械的製造方法を考へる。簡潔に言へば、かゝる場合に笑の原因となるものは、生命あるものが生命のないものに近くなつてゐることだらう。私達はそれを「生物から無生物への左遷」(die Degradierung des Lebenden zum Leblosen) と言ふことが出来る。もしこの巧みな Bergson の説を認めれば、その意見を私達の公式にあてはめるのは六ヶ敷くない。經驗によつて學んだ通り、すべての生物は個々別々であり、私達の領解に對し、夫々別種の費用を要求するものであるが、もし完全な一致、又は本物ととりちがへる様な模倣のために、新しい費用が要求されなければ、私達は失望する。しかし私達は輕減の意味で、失望するのであり、溢れ出た期待の費用が笑によつて搬出される。同じ公式が Bergson によつて認められた、滑稽な硬直 (raidéur) 職業的習慣、固定した理想、及びいつも繰返へされる話し方等のあらゆる例に存在してゐる。これ等のあらゆる場合



には期待の費用と、似たものを領解する費用との比較が、必ず目標にされて居り、且其際の大きな期待は、個々の千差萬別なこと、及び生物の成形性 (*Plasizität des Lebenden*) にかゝつてゐる。だから模倣に於ては状況の滑稽でなく、期待の滑稽が、その面白味の根源をなしてゐるのだらう。

私達は一つの比較から共通な滑稽の面白味を引き出してゐるから、比較の滑稽自身を研究する義務がある。さうだ、この比較が同時に滑稽化の手段に用ひられるのだ。私達が譬諭の場合に、あるものを洒落であるとか、或は單に滑稽であるとか決定する「感情」を、今迄みのがして居た點に氣がつけば私達の此問題に對する興味は、ますます湧いて来る。

此のテーマは我々の興味から分配されるよりも、もつと餘計な綿密さに値するものだ。私達が譬諭の場合に疑問とする主な事實は、その譬諭が適切なものであるかどうか、即ちその譬諭が、二つのちがつた對照の間に實際存在する一致を注意させる様にするか、どうかといふことである。同一のものを再び發見するといふ原始的な面白味は比較を使用するに好都合な只一つの動機ではない。此外に、譬諭には別にある使ひ方がある。即ち未知のものを既知なものと、抽象的なものを具體的なものと比較し、此の比較によつて、未知なもの及び困難なものを、説明する様にすれば、譬諭は智的勞働の輕減をするものだ。かう云ふ比較、時に抽象的なものと具體的なものを比較する場合に



はそれに或る「引き下し」及び抽象の費用（觀念の表情の意味で）の節約が伴ふものだ。しかしその節約も、滑稽の性質をはつきりさせるには不十分だ。滑稽の性質といふものは、急に浮びあがるものではなく、徐々に、比較による輕減の面白味から出て來るものだ。滑稽に軽く觸れてはゐるが、それが滑稽の性質を示してゐるかどうか、疑はれる様な場合が澤山ある。二つの比較されるものゝ間の抽象の費用の差が大きい場合か、又は謹嚴なものや珍奇なもの——特に智的又は道德的な性質の——が卑しいもの、又は月竝なものと比較された場合には、疑もなくその比較は滑稽なものになる。以前の輕減の面白味や、觀念の表情の條件からの補助があれば、比較から滑稽への、量的關係によつてきめられる、一般に面白いゆるやかな推移の説明が出来る。私が譬諭に於ける滑稽の面白味を、二つの比較された物の對照からでなく兩方の抽象の費用の差から導くやうにすれば、いろんな誤解を私は避けることが出来る。掴みにくい珍奇なもの、抽象的なもの、元來精神的にすぐれてゐるものなどは、それを表徴するのに、抽象の費用を餘り要しない卑近なものと一致すると主張されることに依つて、それ自身が卑しいものであるやうに假面を脱がされる。比較の滑稽は、それ故左遷（Degradierung）の一つの場合と見做される。

比較といふものは、私達が前からわかつてゐる様に「ひき下し」を回避した場合には、滑稽と混



合した形跡もなく、洒落となり得る。だから眞理を炬火にたとへて、それを誰の髯も焼かない様に、群集の間をもちあるくことが出来ないと言つた比較は、純粹の洒落である。それは、その比較が、効力のなくなつた表現法（眞理の炬火）を十分價值あるものとして使つたからであり、それが全然滑稽でない理由は、炬火が具體的な對照であるとは言へ、ある上品さをもつてゐる物體として、缺くべからざるものだからだ。もし比較が洒落のある技巧、たとへば綜合又は暗示のやうなもの、一時逃れの手段になれば、その比較は容易に洒落にもなれば、滑稽にもなり、實際に兩者獨立することが出来る。だから Nestroy の商店（Magazin）による思ひ出の比較は、滑稽であると同時に洒落である。その理由は第一には心理學的觀念が商店との比較によつて途方もなく低下したことに、第二にはその比較を用ひたのが、番頭であることに原因する。従つてこの比較に於ては、心理學と番頭の商賣との間に、豫期しない綜合が組立てられたのだ。「遂に私の忍耐のズボンに穴が開いて、いろんな芽が吹き出した」といふ Heine の言葉は、第一印象は單に、滑稽的に引き下げられた比較の、すぐれた例の様に思はれる。しかしよく考へて見れば、それに洒落の性質を認容しなければならなくなる。その比較が猥褻の領域への諷刺を手段にとり入れて、猥褻の面白味を完全に解放してゐるからだ。同じ材料の中から、勿論全然偶然ではない廻り合せによつて、洒落と滑稽



との面白味の利得が同時に産れ出る。一方の要約が、他方の成立を促進する力をもつてゐるものとすれば、此場合洒落が勝つか滑稽が勝つかを教へて呉れる「感覺」が、かう云ふ合併がある時には錯誤に陥り易い。だが洒落の面白味を離れて、十分注意深く研究すれば、洒落と滑稽とが合併して居る事が斷定される。

滑稽の面白味に向つても、これ等私達に親しい、條件を附け加へる様に、非常に私は誘惑されるが、私のうけた準備教育や、日常の職業は、惜しいかな、此研究を更に洒落の世界を越えてまで擴げる力を持たない。それ故之れを差控へなければならぬ。敢て白狀するが、滑稽な比較といふテーマは私には權限外のことだと思はれる。

私は茲に一つの警告を與へたい。多くの著述家は洒落と滑稽との間のはつきりした抽象的な、さうして具體的な區別を認めなくて、洒落を簡単に物語又は言葉の滑稽だ、と主張してゐる。この説の正否を判するため、私はわざとらしい、強制的な物語の滑稽の一例を選んで洒落と比較して見たい。既にすつと前の方で認めた通り、私達は滑稽な話と、洒落味のある話とを、區別することが出来ると思つてゐる。

„Mit einer Gabel und mit Müß' zog ihn die Mutter aus der Brüh“ (お母さんは、匙



で苦勞しながら、スープの中からそれを取り出した)

これは單に滑稽だ。Heine が Göttingen の住民の四階級を表した言葉。

Professoren, Studenten, Philister und Vieh (教授、學生、町人それにけだもの)

といふのは、精選された洒落だ。故意に語られる滑稽の見本として、私は Stettenheim の Wippen を擧げる。Stettenheim が洒落が上手だと言はれるのは、彼が滑稽をひきおこす技倆を特別に持つてゐたからだ。「つくられる」洒落と反對に「所有されてゐる」洒落は實際かういふ能力とうまく合致してゐるものだ。Bernau<sup>ベナウ</sup>の通信員である Wippen の手紙はあらゆる種類の多くの洒落に所々眞面目なもの (Festlich entkleidet" von einer Parade bei Wilden) (野蕃人の觀兵式の「嚴格に脱衣して」) を挿んでゐる點に於ては洒落の味をもつてゐる。

しかしこれ等の産物に、その本來の性質を與へてゐるのは、此等個々の洒落ではなく、むしろその中にどんどん湧き出て來る物語の滑稽だ。„Wippen“ といふ人は、たしかに生れ付き辛辣だと思はれてゐる人物であり、國の教育費を商賣に使つたり濫費したりする無教育者の一人の Freytag の Schmuck の變形だが、著者は彼を表現するのに滑稽を演じさせて、いゝ氣持ちになつたので、終の方になると、いつの間にか、その辛辣さを陰にかくしてしまつた。



Wippenen のする事は大部分は「滑稽な不合理」だ。これの集合で起つて来る愉快な氣分を著者は利用して、今迄味ひつくされて、何の興味もなくなつたものに、又新しいもつともらしい興味を持たせたのだ。Wippenen の不合理は、その變つた技巧の結果、特殊なものに思はれる。これらの「洒落」をよく觀察すると、その著作全體を洒落だと思はせる様な二三の洒落が目につく。Wippenen は合成したり、(又は融合)有名な熟語や故事を變形したり、一つ／＼の赤裸々な分子をうまい表現法で變へて居る。此點は確かに洒落の技巧に近い。

融合の例(序文及びその第一頁から私はすつかり探し出した) „Die Türkei hat Geld wie Heu am Meere” (トルコには金が海岸の芥程ある。——トルコは大金持だ。)といふのは次の二つの熟語から補綴されたものだ。

„Geld wie Heu” (芥ほどある金)

„Geld wie Sand am Meere.” (濱の真砂ほどある金)

また „Ich bin nichts mehr als eine entlaubte Säule, die von entschwendener Pracht zeugt.” (私は昔の夢の豪奢を驕る裸柱に過ぎない)といふのは „entlaubter Stamm, (落葉した幹)と „ein Säule, die……” (一つの柱、それは……)といふのを壓縮したのだ。



又、 „Wo ist der Ariadnefaden, der aus der Skylla dieses Angiastalles herausleitet?“

(この弊害の難を救ふ頼みの綱はどこにあるか?) には三つの希臘の傳説が各分子を助けてゐる。  
 (譯註) Ariadne は英雄の Theseus を迷宮から救ひ出した女だ。従つて Ariadnefaden は「頼みの綱」となる。 Skylla はメシナ海峡にある難所だ。従つて災難の意味になる。 Angiastall は Angias 王の牛舎を英雄 Herkulas が掃除した事から出て、弊害の意に用ひられる)

變形と、補充とは簡單に一括することが出来る。これが次の Wippen 特有のいろ／＼な例に現れてゐる。大抵は主に赤裸々な、常套語に墜してゐる文句が透いて見える。

„Mir Papier und Tinte höher zu hängen,“ (紙もインキも十分與へられなう。)

困難な状況にあることを、象徴的に Einem den Brotkorb höher hängen. (パンの籃に手がとどかない。)

と言はれる。この象徴を他の材料の上にもつて行つてもいいだらう。

„Schlachten, in denen die Russen einmal Kürzeren, einmal den Längeren ziehen“ (ロシア人は戦争で一度は短い籤を引いたが(馬鹿を見たが)一度は永い籤を引いた。)この場合「短い籤」の熟語だけがよく使はれてゐる。その語源をつきとめれば、「長い籤」の方を流行させるのも無



理でない。

„Schon früh regte sich in mir der Pegasus.“（既に早くから私の中には天馬が活動して居た。）（譯註、世界せましとび廻りたかつたの意か）„Der Dichter.“（詩人）といふ言葉を以て之に代へれば（譯註、詩想が湧く）この文章は度々使はれて價值のなくなつた自傳的な使用になつてしまふ。„Pegasus.“（天馬）は實際は „Dichter“ の代りには不適當である。しかし思考關係から言へばそれを助けるものであり且つ高らかにひびく言葉である。

„So durchlebte ich dornenvolle Kinderschuhe.“（私は棘の澤山ある小兒の靴で暮らした。即ち小兒時代は不幸だつた。）これは簡単な言葉の代りの完全な象徴である。„Die Kinderschuhe austreten.“（子供の境遇を脱する）と云へば、小兒時代に關係のある象徴なのだ。

Wippen 其他の色々の話も亦、純粹の滑稽の例としてあげられる。例へば滑稽な失望の例としては „Stundenlang wogte das Gefecht, endlich blieb es unentschieden.“（一時間も小競合をもみ合つたが、たうとうどつちつかずに終つた）と云ふのがある。

私達の興味のあるのは、融合とか變形とかだ。それ等が、洒落の技巧となるからだ。之れ等の變形を、Er hat eine grosse Zukunft hinter sich（大きな將來を過去に持つ）とか Er hat ein



Ideal vor dem Kopf (理想を頭の先にもつてゐる)といふやうな洒落や、Lichtenbergのもぢつた洒落、Neue Bäder heilen gut (新湯はよくきく)等と比較して欲しい。これと同じ技巧を使つてゐる。Wippchenの作品は、洒落と云つていいか、もし洒落でないならば何によつて、それと區別したらばいいだらう。

それに答へるのはそんなに難かしくはない。洒落は聴く人に二つの顔を持ち、二つのちがつた解釋を要求することを想ひ起しさへすればいい。最後にのべた様な、不合理の洒落(Neue Bäder...)に於ては、それが不合理に見えるといふ解釋しか顧みられず、他方の解釋は、第一の解釋の暗示によつて聴く人の無意識の中の過程に及んで素晴らしい意味を發見する。洒落に似た Wippchen の作品に於ては、洒落の二つの容貌のうち一つは空虚であり、萎縮してゐるが、兩面のうち (註譯、Januskopf, —Janus は頭の前後に顔のある神) 他面だけが發達してゐる。これを聴いてもし無意識への道にさまよひ込めば、何物も掴めない。二つの融合されたものが實際に新しい意味を生じてしまふ様な場合は、洒落の融合とはならない。これ等は一度分析を試みれば全部崩壊してしまふ。變形と代償は洒落でも洒落でなくても、同じ様に普通の文句として表現されるが、變形や代償それ自身は、表現された以外のものは決して表現して居るのでない。だからこれ等はたゞ不合理といふ解釋



しか残らないのだ。たゞかう云ふ洒落の本質から離れてゐる作品を、惡洒落であるとか、洒落と言ひたくないとか、決めるのは勝手だ。

かう云ふいぢけた洒落も或滑稽的効果をつくり出すのは疑ひもない。この効果はいろんな方法で解釋することが出来る。例へば前に觀察したやうに此の滑稽が無意識の思考方法を發見することから成立するか、又は面白味の出て来る完全な洒落との比較かだ。この二つの滑稽の面白味の成立方法が、こゝでは一致したのだと認めるのも妨げはない。又不合理が洒落が出来損ねたので、滑稽な不合理になつたのだといふことも否定出来ないことだ。

即ち容易に領解せられる他の數例がある。それ等の例では出来損ねの洒落と上出来の洒落と比較することによつて不合理を無理に滑稽にしてゐる。かう云ふ場合には洒落とは反對の謎なのだ。たとへば一つの滑稽問答がある。「壁に掛つて居て、人がそれで手を乾かすことの出来るものはなんだ？」「それは手拭きだ」と答へればつまらない謎になる。

「いや、鯀だ」といふ答へは否定されるだらう。だが好意で「鯀は壁にかゝつてゐないぢやないか」といふ抗議が出ると、

「お前は鯀を壁にかけることが出来る。」



「しかし、誰が一體鯉で手を拭くだらう」「いや、お前はしなくてもよい」と宥める様に答へられる。この二つの型の見當違ひで分る通り、この問答はほんとの謎としても随分足りないものだ。そして此絶對的の不十分さのために、この問答は單に不合理なばかりしいことになるよりは、むしろ滑稽に思はれるのだ。かう云ふ方法で、つまり必要な理窟をわざと知らんふりをすれば、それ自身一向滑稽の面白味のない洒落や謎が滑稽の面白味の源となる。

話のこぼつけた滑稽を領解するのは尙容易だ。その例は *Friederike Kempner* の詩の中にお望み次第澤山見つかる。

Gegen die Vivisektion.

Ein unbekanntes Band der Seelen Kettet

Den Menschen an das arme Tier.

Das Tier hat einen Willen—ergo Seele—

Wenn auch 'ne kleinere als wir.

生體解剖に對して、

眼に見えない魂の糸が人間と可哀想な動物をむすぶ。



動物も意志即ち魂をもつてゐる。

私達の魂より小さくはあるけれど。

又、他愛ない夫婦の睦言が詩にしてある。

### Der Kontrast

„Wie glücklich bin ich“, ruft sie leise,

„Auch ich,“ sagt lauter ihr Gemahl,

„Es machtmich deine Art und weise

Sehr stolz auf meine gute Wahl!“

### 對 照

「私はなんて幸福なのでせう」と女がさゝやく、「僕も」と夫が稍たかく言つた、

「お前もさうだが、私もお前を選んだので鼻が高い。」

この場合には洒落を思はせる様な何物もない。これ等の詩を滑稽にしてゐる詩句が不十分だからだ。まるで木つ葉新聞からでも借りて來た様な叙述法の不體裁さ、思想のつまらなさ、詩想と叙述法の誤など、みんな此詩句の缺點なのだ。



私達は Kempner の詩をいつも滑稽だとは認めない。時々はあるに悪詩なので、却つて憤慨してしまふ。だから普通は詩に對する私達の要求と、その詩から來る感銘の差が餘り大きいので滑稽に思はれるのだ。この差が僅かであれば私達は笑ふよりも寧ろ批判しようとする。Kempner の詩の滑稽の効果は、これ以外の事情や女詩人の明々の善良な目的からも助けられる。又その助けをもとめない詩の背後に私達の悪口や憤慨に對して一向に無抵抗な感覺からも滑稽が湧き出して來る。茲で私達は嘗つて批判を猶豫して置いた或る問題を思ひ出させられる。

支出の差はたしかに滑稽の面白味の根本條件ではあるが、よく觀察して見れば、かゝる差からいつも面白味が出て來るとは限らない。滑稽の面白味を實際に支出の差から生み出し得るには、條件をも一つ附け加へなければならぬ。或は何か障礙が除かれなければならない。この疑問に答へる前に、私達は前述の説明の決算をしたく思ふ。即ち話の滑稽は洒落と一致しないものだ。従つて、洒落は話の滑稽と違つたものだ。

X

X

X

上に提出した疑問、即ち、滑稽の面白味が、支出の差から生ずるための成立條件に對する疑問の答辯の意味で、輕減といふことを先づ認めなければならぬ。その輕減が恰度私達にとつて、面白



味といふ結果になり得るものだ。この質問に正確に答へれば、滑稽の性質を十分説明することになる。だがそれは先にも云つた通り私達の能力や権限の及ばないことだ。だから滑稽といふ問題に就いては、洒落とはつきり區別される點を十分吟味すること丈で私達は改めて満足しよう。

滑稽のあらゆる理論は、その定義の中に滑稽にとつて最も重要なものを見のがしてゐるといふ駁論を評論家から受けてゐる。滑稽は觀念の對象 (Vorstellungskontrast) に基いてゐる。この對照が滑稽的にだけ作用し、他の作用がないならば確かにさうだ。滑稽の感情は期待が裏ぎられた時にも刺戟をうける。但し此失望はあまりみじめであつてはならない。かう考へると駁論は疑もなく正當だつた。しかしその駁論から直ちに滑稽の重要な特徴が今まで解釋から落ちてゐたと推論すると、駁論を買被り過ぎる。其定義の普遍性を妨害して居たものは、滑稽の面白味の成立に見のがしてはならぬものだが、然し滑稽の本態をその中に探し求むるには及ばない種々な條件だ。滑稽の本態に對する種々な駁論を否定し、抗議に對し釋明するには、私達が、二つの費用を比較してその差から滑稽の面白味を引き出せばそれで十分だ。滑稽の面白味並びに効果——笑——はこの差が使用出來なくなり、搬出されることが出来る場合に始めて成立する。もしこの差が、認められると同時に他方面に使用される場合は、笑は得られなくて、滑稽の性質の完全に現れて來ない、變化しやすい面



白味の感じを精々うけるだけだ。洒落の場合に溢れ出した費用が他方面に使用されることを防ぐには、特別の準備が必要であつた様に、滑稽の面白味も此條件を満す様な事情によつて成立する。私達の觀念生活に於て、かう云ふ費用の差の成立する場合は、非常に多いがその差から滑稽が生れ出る場合は比較的少ない。

滑稽が費用の差から成立することに對する條件を輕率に看過するやうな觀察者には、二つの考へが浮んで来る。第一は、滑稽が此差から必然的に生じて来る場合もあるが、又滑稽がその場の事情や、觀察者の立脚點と關係がある様な場合もあるといふ考だ。第二には、竝外れて大きな差はしばしば都合の悪い條件を突破し、従つて滑稽がそれ等の條件を物ともせず成立するといふ考へだ。かう考へると先づ二つの階級がある事になる。避くべからざる滑稽の階級と、隨意的な滑稽の階級との二つだ。だが第一の階級では滑稽が避くべからざるものとして、例外なく見出されるとするのは諦めなければならぬ。この二つの階級に對して、標準的な條件を追加することは興味のある事だ。

第二の階級に對しては次のやうな條件が重要だ。此の條件の一部分は滑稽の例の「分離」(„Iso-lierung“)として、總括したことがある。それを更に細かに解剖して見れば次の様な事情がはつきりして来る。



(イ) 滑稽の面白味の成立に對する最も好都合の條件は一般に人々が「笑ふ用意をしてゐる」愉快な氣分である。害意をふくむ愉快な氣分も、殆んどすべて滑稽に思はれる。それは多分普通の氣分に於ける費用との比較によるものであらう。洒落、滑稽及びその他、之に類する精神作用から面白味を得ようとする方法は、この愉快な氣分——Euphorie——が今迄存在しない場合にそれをあらゆる點から得ようとする道程に他ならない。

(ロ) 滑稽を期待すること、即ち滑稽の面白味に着眼することも同様に好都合である。それによれば、無心の生活から得た、ともすれば看過され易いく僅かの差からでも、他人から與へられた材料を滑稽化する事が出来る。滑稽な書籍をひらき劇場へ喜劇を見にゆく人は、この目的のお蔭で、彼の日常生活に於ては少しも滑稽を與へなかつたものでも、笑ふことが出来るのだ。彼は遂には笑つたことの記憶だけでも笑ひ出し、又滑稽の演技者が出て來るのを見ると同時に、まだ演技者が彼を笑はせようと試みないうちに、笑ひだすものだ。だから、劇場で何がおかしかつたのだらうと後で恥かしく思ふことがだれにでもあるものだ。

(ハ) 滑稽に對して不都合な條件は、個人をその場合一瞬間捕へて居る精神活動だ。眞面目な目的をもつてゐる觀念並びに思考の作業は配置の搬出能力を妨げる。此場合は思ひがけない大き



な支出の差が生じない限り滑稽の面白味は發現しない。觀察されるものから遠く離れて居る事を考へて居るのは特に、滑稽にとつては都合がわるい。そのために觀念の表情は消えてしまふものだ。抽象的な思索ではさういふ思考が急に中止される場合でなければ滑稽を感じる餘地がない。

(ニ) 滑稽を生ずる比較に、注意が向けられると、滑稽の面白味を遊離する機會がなくなる。かう云ふ状態だと、今迄最もたしかに滑稽に働いてゐたものも、滑稽的な力が失はれる。一つの動作又は、一つの精神作用は、それ等を、はつきりした尺度をもつて量ることに興味を覺える人にとつては、滑稽になることが出来ない。だから試される者が、彼の無智からつくりだした不合理を、試験官は滑稽だと認めない。試験官は試されるものに就て憤慨するが、一方、試されるものゝ仲間達、即ち彼の知識よりも彼の要領の方を兎角問題にしたがる仲間達は、その不合理を心から笑ふものだ。體操や舞踏の先生が、弟子の動作の滑稽を發見することはごく稀であるし、牧師には人間の性格の缺陷から來る滑稽が看過され易いが、さう云ふ滑稽を喜劇作者は巧に發見することを知つてゐる。滑稽の過程は注意に依つて、過重配置 (*Überbesetzung*) にはなるものではない。その過程は完全に注意されずに進行しなければならない。其點では兎に角洒落に非常によく似てゐる。私が「夢判斷」で、正當な意味で使つた意識過程 (*Bewusstseinsvorgänge*) とさう



言葉は不穩當だから、必然的な無意識 (Notwendigerweise Unbewusste) と改める。それはむしろ前意識に屬するものだ。意識と關係のある注意の配置を避けて、前意識に於て演ぜられる、此等の過程に (自動的) („Automatisch“) としふ適切な名前をつけることが出来る。費用の比較過程がそれから面白味を生み出さなければならぬ場合には、自動的であることを要する。

(ホ) 滑稽が生れて來なければならぬ出來事が、同時に激情をよびおこす様な場合は、滑稽に對して極端な妨害となる。効力のある差の搬出はその場合は必ず阻害される。いろんな場合に於ける各個人の激情、素質、及その精神的態度を参照すれば、滑稽は各個人の立脚點と共に浮び上り又は消失し、絶對的な滑稽はたゞ例外の場合にのみ存在することがわかるものだ。だから滑稽の從屬性又は相對性は洒落の場合よりも遙に大きい。洒落は生ずるものでなく作られるものであり、それが作られる際には洒落の採用する條件に豫め眼をつけることが出来るものだ。激情の發展は、滑稽を妨害する條件の中でも最も激しいもので、此點はどの方面からも反對されない。だから、滑稽な感じは、強い感情や興味の關與しない、半ば無頓着な場合に一番起り易いと言へる。しかし時として激情のほとばしる場合に、特に大きな費用の差が、搬出を自動的にひきおこすのを見る事がある。Butler としふ陸軍大佐が Octavio (八日祭) の諭告に「苦笑ひ」しながら



答へた。

„Dank vom Haus Österreich!“ (有難うオーストリー)

この場合には、彼の憤慨も笑を妨げない。彼が経験しなければならぬと思つてゐる失望を思ひ出させる笑なのだ。若し詩人が、解放された激情の嵐の中で笑が強要されたといふ風に記すことが出来れば、それがその失望の大きさを描く一番印象の深い方法だらう。喜びに充ち満ちた機會の笑、又は最大の苦痛と緊張の激情と笑とが合致した場合の笑には、いつも此説明があてはまると私は思ふ。

(一) 滑稽の面白味は一種の接觸作用 (Kontaktwirkung) を利用する様に、色々な面白い附録を利用して増大させる事が出来る。(傾向的な洒落の際の「前喜悅の律」に従がつて) 此一項をつけ加へて、私達は、滑稽の面白味の條件を、完全ではないにしても、私達の目的を達する程度には説明する事が出来たと信ずる。これ等の條件、滑稽の効果の變化性、並びに従屬性は、滑稽が費用の差——この差はあやふやな事情があれば搬出以外の方面に使用され易い。——の搬出から導かれるといふ假定以外の假定では容易には説明されない。

X

X

X



更に批判をすゝめると、性的並びに猥褻な滑稽があるが、それに就ては私はこゝであまり觸れたくない。その出發點はこの場合にはやはり暴露 (Entblössung) であらう。偶然な暴露が私達に滑稽にはたらくのだ。私達が一瞥で達する容易さと、暴露の目的を達するに要求される大きな費用とを比較するからだ。これは稚氣の滑稽に非常に近づいて来る。しかしそれよりも尙簡單だ。私達を第三者の立場からその傍觀者——猥談の場合には傍聽者——にするすべての暴露は、暴露された人間を滑稽化してしまふ。洒落の任務は、猥談を補足し滑稽の面白味の失はれてしまつた源を再び開くことだと私達は聞いた。之に反して暴露を立ち聽きすることは立ち聽きをする人にとつては滑稽ではない。立ち聽きの努力が滑稽の面白味の條件を棄てゝしまふからだ。その際には性的興味がその對象の方にあるばかりだ。他人の立ち聽きをした人の話は、その立ち聽きされた人にとつては却つて滑稽なものだ。何故かと言へば、自分の祕密を隠すに相當した費用をうつちやつていゝ事になるからだ。人間は肉體的要求に従屬してゐることを指示され (卑下) 神聖な戀愛の背後にある肉體的欲求を發見される (正體暴露) 譯となつて、深い快樂の性的興奮狀態以外にも、性的並びに猥褻の領域から滑稽の面白味の生ずる機會は非常に多い。

X

X

X



滑稽の精神的發生に關する理解の探究を意外にも Bergson<sup>ベルクソン</sup> の立派な、生々とした著書 (*Le rire*) が勧めてゐる。Bergson の説いた滑稽の性質を理解するための公式は、既に私達の知つてゐるところ、「生活の器械化」 (*Mécanisation de la vie*) 「自然より人工への置換」 (*, substitution quelconque l'artificiel au naturel*) であるが、彼は自動作用といふ考へに近い自動機械 (傀儡) に思ひ付き、又滑稽の効果を、小兒玩具に對するおぼろけな記憶に導きかへすことに思ひ付いてゐる。かういふ事情から、彼はある立脚點に立つたが、間もなくそれを見捨てゝしまった。彼は滑稽を小兒の喜びの後作用から導かうとしてゐる。

「恐らく私達はもつと遠い單純化に押しつけられて、最も古い私達の記憶を呼び起させられるのだらう。大人の笑を誘ふ複雑さの最初の模形とも云ふべき子供の楽しみ遊びを求めて居るのだ。……實に毎常私達は、自分の色々の快感の中に、まだ子供の快感があるのを忘れて居る。」

私達は分別のある批判の許さない言葉や考へを、小兒がもてあそぶことの一步手前まで、洒落の發生史を逆に追求して置いたことがあるから、Bergson によつて假定された滑稽のこの小兒的根源を追求することは望ましいことだ。

私達が滑稽の小兒に對する關係を研究すれば、非常に効果があるらしく思はれる澤山の連絡に實



際ぶつつかる。小兒の性質は、大人の性質と比較すれば滑稽な差を生みだす條件を十分に具へてはゐるけれども、小兒それ自身は、私達に決して滑稽には思はれない。——子供は過大な動作の費用を少しの精神費用で行ひ、作用の支配を肉體的動作及びその他の性癖で間に合はせて居る。子供が子供らしくせず、恰も變装でもした人の様に眞面目な大人のやうな振舞をするときだけ、私達は滑稽な感じを抱くものだ。然し小兒が小兒の本質をしつかりと持ち續けて居る間は、私達は子供を子供として認識して單純な滑稽と一味相通する興味を持つだけだ。小兒が私達にその制止のないことを示してゐる間は、彼に「稚氣がある」と言ひ、又私達が他の人間では猥褻だとか又は洒落氣があるとか判定したく思ふ様なその發露を、稚氣のある滑稽と稱する。

別方面から説くと小兒時代から滑稽に對する感情は出發して居る。此文句の主意は次のものに他ならない。滑稽の感情は、他の多くの感情と同じ様に、精神發達の經過中どこかで何時かは生ずるものだ。此事實は今更決して注意に値するものではない。特にその感情が小兒時代と稱すべき年齢に於て、既に明瞭に現れて來るものであることを認めなければならぬから。

しかし小兒には滑稽の感情が缺けてゐるといふ主張は、又その言葉の意味以外にもつと何か含んでゐることを標示して居る。それは、滑稽の感情が、他人を領解することによつて生ずる費用の差



から導かれるといふ、私達の解釋が正しいと云ふ事に外ならない。私達は改めて、動作の滑稽を例として選んで見よう。差を生ずる比較を既知の公式として言へば、*So macht es der*、(彼はさうやるのだ)と *So würde ich es machen, so habe ich es gemacht*。(私が今やりさうに思ふ通りに私はやつたのだ)小兒には第二の文章に含まれてゐる標準がない。小兒は單に模倣によつて理解し同じ様なことをするのだ。小兒の教育は小兒に對して *So sollst du es machen*(お前はさうしなくてはならない)といふ標準を贈つた。小兒がそれを比較に利用すれば、結論に近づける。即ち *Dei hat es nicht recht gemacht*、(あの人はやり損なつた)と *Ich kann es besser* (私ならもつとうまくやれる)である。この場合には、他人のことを小兒は笑ふ。小兒は彼の優越感によつて嘲笑する。この笑を費用の差から導くのに邪魔になるものはない。然しながら私達に生ずる嘲笑の場合に倣つて、小兒の優越感による笑に、滑稽の感情を認めることは出来ない。それは純粹な喜びの笑だ。私達に自己の優越の判斷が明瞭に生ずれば、私達は笑ふ代りに唯微笑する。又私達が笑ふ場合には、優越を意識することゝ、私達を笑はせる滑稽とをはつきり區別する事が出来る。

小兒は種々の状態に於ける純な喜びで笑ふのだと言つても正しい様に思はれる。その喜びを私達は滑稽だと感ずるが、さう感ずる動機を示すことは出来ない。それなのに小兒の動機は明瞭で、且



名ざすことが出来る。例へば、誰れかど街路で滑つて轉んだとする。さうすると私達は笑ふ。なんとなれば其印象がわけはわからないながらも滑稽だからである。小兒は同じ場合に優越感又は他人の不幸を悦ぶ氣持、（お前は轉んだが、俺は轉ばないぞ）から笑ふのだ。小兒の喜びの動機は私達大人には失はれてしまつた様に思はれる。其代りに同じ場合に失はれたものゝ代償として滑稽の感情を認める。

之を普遍的に言つて見れば探し求めた滑稽の特徴を小兒期的の覺醒に置き、滑稽を「失はれた小兒の笑を」再び得ることだとすることは、眞に都合のいいことの様に思はれる。もし私が他人の内部に「小兒」を再び發見した場合には、私はいつも、他人と私との間の費用の差によつて笑ふと言へるだらう。又更に明瞭に表現すれば、滑稽に導く完全な比較は次の様なものだらう。

So macht es der (彼はさうやつた) — Ich mache es anders — (私は違つてやる) —  
 Der macht es so, wie ich es als Kind gemacht habe (彼は、私が子供の時にやつた様に、やつた) だからかういふ笑は何時も、大人の「私」と小兒としての「私」との比較に關係がある滑稽な差の意味の異なること、即ち、ある時は費用が過大であることが滑稽に思はれ、ある時は過小であることが滑稽に思はれることさへも、「子供らしさ」の條件に依つて調子を合はされる。滑稽は實



際其際には、小兒期的と並んで居るのだ。

小兒そのものが比較の對象としては私には滑稽に思はれず、却つて純な喜びに充ちた印象を與へるといふこと、並びに費用差の他の使途が避けられる場合にのみ子供らしさとの比較が、滑稽に感じられるといふことは一向矛盾した事でない。その際には搬出といふ條件が考へられるからだ。或精神過程が一つの連鎖として包括される様な時は、いつも過剰になつた配置の搬出が阻止されて、此過剰になつた配置を他の使途に供給する精神活動を遊離して置く條件は、搬出を援助する。だから比較する人間として小兒を意識しながら目標とすることは、滑稽の面白味に必要な搬出を不可能にする。たゞ前意識中の配置に於てのみ小兒の精神過程で認めた遊離に接近した結果が生ずる。滑稽の働きが出發する小兒時代に、私達は矢張さうやつて居たのを思ひ出す事と、他の精神的連鎖が過剰な費用を使つてしまふ様な事のない時にだけ、中等度の差が初めて考へられると云ふ事との二つが、比較の補助となるのだ。

滑稽の本態を前意識的「子供らしさ」と結合して發見しようとする研究を尙永く續ければ、私達は Bergson <sup>フランクソン</sup> の考から一步進んで、承認しなければならぬことがある。即ち、滑稽を生み出す比較は、小兒の喜びやあそびを覺醒しなくてもいいが、その比較が兎に角、小兒の性質に、恐らく小



兒の悲哀にでも——一寸觸れてあれば、それで十分だらう。此點では私達は *Bersson* から遠ざかつて居る様だが、しかし滑稽の面白味を、追想した面白味に連絡させないで、常に比較と連絡させて居る點では、一致してゐる。多分追想した面白味に連絡させる場合は、規則的な、反抗の出来ない滑稽をいくらか押し隠してゐるのだらう。こゝで前に引用した滑稽の可能な場合の一覽表の助けを借りることにしよう。私は滑稽の源である費用の差が次の何れかの一つから出て來ると思ふのだ。

(イ) 他人と自我との比較

(ロ) 全然他人の内部に於ける比較

(ハ) 全然自我の内部に於ける比較

第一の場合には私にとつて他人は小兒の様に思はれ、第二の場合では彼自身を小兒にまで卑下し第三の場合には私自身の中に小兒を見出すことが出来る。動作、形態、精神作用、性質の滑稽が第一の場合に屬する。茲で云ふ「子供らしさ」は、小兒の動作に對する衝動か、又は精神的道德的の發達不全であらう。だから怠惰な小兒を私に思ひ出させる様な場合は、馬鹿者が滑稽に見え、不良な小兒を思ひ出させる場合には悪人が滑稽に見える。大人になくなつてしまつた小兒の喜びから來る滑稽は、小兒に特有な「動作をよるこぶ性質」が考へられる場合だけ問題にすることが出来るだ



らう。

滑稽が全く感情移入に基いてゐる第二の場合は、非常に多くの可能性がある。即ち状況の滑稽、誇張（カリカチュア）、模倣、卑下、及び正體暴露等だ。この場合に「子供らしさ」の觀察を引合にすると、大變役に立つ。状況の滑稽は、主として小兒の頼りなさを再認させる困窮に基いてゐるものだ。困窮のうち最も不快なものとして、自然の要求の強制的な命令によつて、他の活動を阻止することは、小兒の肉體的官能の支配の不十分な事に一致する。状況の滑稽が反復としてはたらく時には、その滑稽は反復を續ける（質問をし話をする）小兒特有の興味に基づいてゐるものだ。此の反復は大人には實に煩さい。誇張といふものは大人にとつては、批判に對する辯明を持つてゐれば面白味を感じるものだ。小兒は、後年になつて質的なものと覺るものまで、量的な關係の中にすべてまとめてしまふ程、個有の尺度をもつてゐない。誇張はこの小兒が個有の尺度を持つてゐないことゝ關係がある。許された活動の中庸を守ること、又それを制限することなどは教育による晩年の成果で、一つの聯絡にまとめられた精神活動の相反撃する制止によつて得られるものだ。かう云ふ連絡が、夢の無意識の内で弱くなり、又精神神經症の單想症（Monoidesmus）となれば小兒の無節度が再び出現する事になるのだ。



模倣の滑稽も、私達が「子供らしさ」の要素を顧慮しなければ比較的領解が困難だ。模倣は小兒の最良の技術であり、その主なるあそびを運轉する動機だ。小兒の野心は仲間の特徴を表はすことよりも、大人の模倣をよく企てる。卑下の滑稽は又小兒の大人に對する關係にも基く。即ち大人が小兒生活にひきおろされることが滑稽にあたるのだ。大人が小兒になり、その壓迫的な優越感を棄て、仲間の様な氣持で小兒と遊ぶ時程、小兒にとつて面白いことはない。小兒に純な喜びをもたらす軽減は、大人では卑下として滑稽化の一手段及び滑稽の面白味の一つの源となる。正體暴露が卑下に退歩することも私達は既に知つてゐる。

第三の場合即ち期待の滑稽の小兒性根據は一番難所に乗り上げる。この場合を滑稽の解釋の眞先に置いた大家達は、「子供らしさ」の要素を滑稽の中に考へる様な動機を見出し得なかつたことは明かだ。期待の滑稽は小兒には最も縁遠いもので、最も晩く現れて來るものだ。小兒は大人が滑稽だと思ふ様な出來事に就て、恐らく單に、失望のみを感じるものらしい。滑稽な失望に見舞はれた時、「子供らしく」滑稽に見えるやうにすることを研究するために、小兒が期待を喜ぶ事と瞞され易いことを研究しても差支ないだらう。

前に述べたことから滑稽の感情は、恐らく次の様に說かるべきだらう。「滑稽は大人にはしつ



りしないものだ。」私は、滑稽の問題に關するこの最後の言葉を、私の意見の全部をあげて、熱心に辯護しても、決して厚顔の嘲はうけないと思ふ。小兒に「引き下す」ことが、滑稽な卑下の特殊の場合であるかどうか、又あらゆる滑稽が小兒に卑下することに基いてゐるものかどうか。私は今はまだ決斷出来ない。

X

X

X

滑稽をどれ程輕卒に取扱つてゐる研究でも、少くともユーモアに對する記述を落す様な事があれば、不完全此上ないもので、これこそ言語道斷と云ふべきだ。この兩者の性質の似通つてゐる事は明かなことだから、滑稽の説明方法が少くともユーモアを領解する要素の役目をしなければならぬのは自明の理だ。此世の色々な出來事がユーモアのねうちを高くしたので、ユーモアは高等な精神作用の一つであるにしても、思想家たちから實質以上優遇されてゐる。だと云ふて私は、その本態を洒落又は滑稽に使つた形式に近いもので表現することを遠慮するには及ばないだらう。

私は先に苦痛な感情の放出は、滑稽の働きを阻止するものだと言つて置いた。目的のない動作が損失を惹き起し、愚なことが禍を呼び、失望が苦痛を招く様に、かう云ふ不愉快さを我慢することが出來ず、それに正面からぶつかつて却つて不愉快を助成する様な人には、滑稽の効果は消失して



しまふ。之れと反對に、不愉快に頭をつき込まない人は、抑壓の力で、其場の状況の中に、滑稽の効果を促進するすべての物が含まれてゐることを見つけ出す。ユーモアは、面白味を妨げる苦痛を打ちまかして、面白味を獲得する一つの手段であつて、苦痛の大きくなるのを掣肘し、その代理をつとめるものだ。私達が習慣にしたがつて苦痛を放出しようとする試みる様な状況に居る時に、この苦痛を即座に壓迫しようとする動機が私達に働きかけた場合には、ユーモアの條件が與へられる。だからかう云ふ場合は、損失や苦痛に直面した人は、ユーモアの面白味を得るにちがひないが、それ等に無關係な人は、滑稽の面白味によつて笑ふ事になる。ユーモアの面白味は、中止された激情の放出の費用から成立し、節約された激情の費用から出現すると説くよりほかない。

ユーモアは滑稽の種類の中でも最もつましやかなもので、其過程は只一人の人間の中に於て完成し、他人が關與しても、別にそれに新しいものが加はるわけではない。私の中に出來たユーモアの面白味を、私は他人に傳達したい衝動も感ずることなく私の内に保存して樂むことが出来る。ユーモアの面白味は、一人の人間に於てつくられるものだから、どう云ふ作用が起るかといふことは容易に言へないことだ。

しかし、遅れて感じたユーモアと、ユーモアを傳へて呉れた人を領解することに依つて、同じ面



白味を自分で感ずることは出来る。此二つの場合のユーモアを研究すればそれに對する見解が得られる。いはゆる「絞首臺のユーモア」(Galgen-humor)と稱せられる、最も荒削りのユーモアの例がそれを教へて呉れる。月曜日に死刑を執行される盜賊が言つた。

„Na, diese Woche hängt gut an.“ (さう、今週がうまくひつかつた)

これは元來洒落である。何故かと言ふに、思ひ付は非常に適切であるが、今週の事件は彼に關係のないことであるから、一方から言へば不合理で不適當である。今週の月曜を他の月曜より特別な日に思ふ事から超越してしまつて、此月曜日を死刑に處せられる日、特別な月曜と感ずる事を否定する一種の洒落として、此のユーモアは役に立つたのだ。此例で若し彼が、處刑場への途中で風邪をひかないために首巻を望んだとすれば、その用心は、他の時には褒める價值があるが、若し迫つたこの首の運命を前にしては、それは途方もなく無用であり、どうでもいふことなのだ。この法螺話で、彼の死を懼れる當然な性質を確保することの中に又、その性質をくつがへし、自暴自棄に陥る筈の場合に、氣を轉じさせるには、何か精神的偉大に似たものが隠されてゐると言はなければならぬ。かう云ふユーモアの偉大さは、他の多くの例に於て明かに認められるもので、そのユーモラスな人間の有様に私達は驚嘆して止まない。



<sup>スペイン・十一</sup>  
Victor Hugo の Hernani には盜賊の話が載つてゐる。その盜賊は自國スペインの王様 Karl 一世と、獨逸皇帝 Karl 五世に對して謀逆を企てたが、遂に彼の強敵の手に陥つてしまつた。彼は服罪した謀叛人として、斬首の刑にあふことを豫想した。だが彼は、自分をスペインのスペイン最高の貴族 (Grand) の正統であると認めさせ、自分はそんな特典を、棄てようと考へてゐることを明かにしようと前以て考へてゐた。此貴族は王様の前に出て、その頭に冠物をすることをゆるされて居た。そこで彼が言つた。

„Nos têtes ont le droit, de tomber couvertes devant de toi”

(俺達の頭は貴様の前で冠を落す権利があるのだ)

これは偉大なるユーモアだ。私達が其場に居合せても答はない。それはその筈だ。私達の驚嘆がユーモアの面白味を装ふからだ。絞首臺への途中で風邪をひきたくないと思つた盜賊の例では私達は腹を抱へて笑ふ。犯罪人が自暴自棄に陥らなければならぬ様な狀況が私達に強い同情を呼びおこすからだ。しかし此同情も無駄なものだ。その犯人が、その狀況をどうしやうもないから。かう考へれば、私達の中に豫め用意されてゐた同情への費用の使ひ途がなくなつて、それを放笑するのだと思はれる。盜賊の「どうでもいいこと」は彼にとつては精神活動の非常に大きな費用に値する



ものであることを私達は氣付いてゐるが、そのどうでもいゝことが却つて私達に云はゞ笑の點火となつたのだ。

同情が節約されると、屢々ユーモアの面白味の源となる。Mark Twain のユーモアは常にこのメカニズムによつて働らく。

彼が彼の兄弟の身の上話を書いてゐる。彼の兄弟は大きな土木請負業者の使用人であつて、或時鑛山の爆發で、空中に吹き飛され、仕事場から遙か離れた處へ落ちた。此を聞くとこの遭難者に對する避け難い同情が、私達の中に眼醒めて来る。私達は彼が災害に依つて何も損害をうけなかつたかどうか尋ねて見よう。「仕事場から離れたといふ理由で」半日の賃金をとりあげられた、といふ話の續きは、私達の同情を完全に失ひ、その請負業者と同じ様に冷酷になり、同時に彼の兄弟の身體の損傷などはどうでもよくなる。

またある機會に Mark Twain はコロンブスの仲間にまで遡つた彼の系圖を示したことがある。その祖先の性格が描寫され、先祖の一人々々が持ち歩いたといふ鞆の中に洗濯物が充滿してゐるものとがわかつて來ると、私達は尊敬の念を節約して得た費用によつて笑ふ他はない。私達はこの先祖物語が捏造されたものであり、さうしてこの虚構は、物語では、美辭をつらねてあるのがばれて來



るので、諷刺的な傾向を持つてゐることに氣がつくが、それは何もユーモアの面白味のメカニズムを邪魔しない。だから滑稽化と同じく、ユーモアは相對性とは無關係だ。Mark Twain の一つの話は、彼の弟が地下室を組立てることが書いてある。彼はベットや卓やランプを持ち込み屋根として真中に穴の開いた帆布を當てた。或晩仕事が済んでから、家の戀しくなつた牝牛が屋根の穴からテーブルの上に落ちてランプを消してしまつた。兄弟は根氣よく牝牛を上へ押し上げ建築にとりかゝらうと思つた。その翌晩も同じ様なことをくりかへして、毎晩それを續けた。

この話は反復によつて滑稽になるのだ。Mark Twain はこの話を次の様に言つて終らせた。「遂に弟は言つた。——そろ／＼つまらなくなつて來たぞ。」そこで私達はユーモアの面白味を抑壓することが出來なくなる。何故なれば私達はずつと前から、兄弟がこの頑固な災難をどんなに困つてゐるか聞きたいと思つて待つてゐたからだ。私達の生活に現れる小さなユーモアは何時も私達が怒る代りにその不平の費用を使つて産み出してゐる。

ユーモアの種類は、感情の種類に従つて非常に多い。それ等の感情、即ち同情、不満、苦痛、感動等はユーモアのために節約される。これ等の感情は、仲々まとめられない。ユーモアの範圍は藝術家や記者が頑強な感情をユーモア風に御する方法を會得し、前例のやうな骨でユーモアの源を廣



げて行くからだ。„Simplissimus”といふ滑稽雑誌の寄稿家たちはユーモアを、身の毛のよだつ様な恐怖と、嘔吐を催すやうなものの費用から得ようといふ奇妙なことをやつてゐる。

ユーモアの現れて来る形式は、兎に角二つの特徴によつて決定される。其特徴は勿論ユーモアの成立條件と関係がある。ユーモアは第一に洒落又は滑稽の他の種類と融合して現れて来る事が出来る。其際にはユーモアに、面白味の効果を殺ぐ激情の發達を防禦する任務が與へられる。第二には、ユーモアはこの激情の發展を全く阻止し、又多くの例では、單に部分的に阻止することが出来る。部分的に激情を阻止する事は、軽い効果を現したり、或は分裂したユーモアの色々な形を造り、涙を以て微笑するやうなユーモアを生ずるものだ。ユーモアは激情からそのエネルギーの一部を奪ひ、その代りに彼にユーモラスな調子を與へる。

事後に感ずるユーモアの面白味は上の例で認めることが出来た様に、或特殊の見當違ひに類する技巧から生ずる。その技巧によつて前から續いてゐた激情の放出のあてが外れ、さうして配置が他のもの、往々附帶物に廻される。ユモレスクな人間は、その過程を理解すれば、自身で激情の發展による見當ちがひからのがれることが出来るが、しかしそれでは何物も得られない。ユーモアを受取る人はその作者を自分の精神過程に於て模倣するが、其際然も作者に於けるこの過程を行なふ力



より以上のものは、何も認められないものだ。

もし誰かが、自分の苦痛を忘れるために、自己の小さいことの逆に、世界の興味の大さを考へて、成功したとする。その際私達は其内にユーモアの働らきは認めないで、哲學的な思索の働らきを認める。そして私達はその思考の過程に入りこんで見ても、面白味は得られない、と言ふ他はない。ユモレスクな見當違ひは、だから意識の注意に照されては、滑稽な比較と同様成立しない。つまり前意識又は自働作用だけに止るといふ條件に結び付いてゐるのだ。

ユモレスクな見當ちがひを特殊に解釋するには、それを防禦過程の光に照して見ればいい。防禦過程は、逃走反射の相對觀念で、不愉快が内部の源から成立することを防がうとする使命を續けて居るものだ。此使命を果すために、防禦過程は精神現象の自働的の調節となるが、結局はこんな調節は害あつて益なきものとなり、その結果意識した思考に屈伏されてしまふのだ。

かう云ふ防禦の一種、即ち排除の失敗を、私は精神神経症の成立に對し効果あるメカニズムだと既に證明して置いた。ユーモアはこの防禦作用の高等なものとして理解する事が出来る。ユーモアは恰も排除の様に、苦痛と結合してゐる觀念の内容を、意識の注意からひきはなさうとするのを拒んで、防禦の自働作用に打ち克つ。ユーモアは、ある手段を發見し、前以て用意されてある不愉快



の放出からそのエネルギーを奪ふことに成功し、そしてそれを搬出によつて面白味に使用する。有難いことには「子供らしさ」との関係が此働らきに對して一つの手段を提供して呉れる。小兒時代だけは強い苦しい激情が與へられるが大人になれば、その激情を、現在目前にある苦しい激情を、ユーモリストが笑ふ様に、今日ではほゝ笑む事が出来る。大人は、彼の現在の自我と彼の小兒時代の自我と比較して、彼の現在の自我を賞揚する。この自我の賞揚がユモレスクな見當違ひを引き起すものだが、之を翻譯して見れば、「私はこんな事で苦痛を感じさせられる様な人間よりもつと偉大な人間だ。」(Ich bin zu gross (artig), als dass diese Anlässe mich peinlich berühren sollten)と云ふ事になる。この解釋は、神経病的な排除過程で「子供らしさ」と見られるものゝ助けをいくらかうけて居る。

全體として、ユーモアは洒落よりも滑稽に近い。ユーモアの前意識内での精神的地位は滑稽と共通であるが、私の觀る所では、洒落は無意識と前意識との妥協で作られるが、ユーモアは洒落と滑稽とが共通に持つて居る特徴とは何等の関係がない。尤もその特徴を十分明瞭にする事は、まだ私達はやつて居らない。一つの觀念操作を二種の別々な觀念獲得法で同時に又は相繼いでかたづけようと私達が意圖する事が即ち滑稽の成立條件なのだ。かうして初めて「比較」が起り、滑稽を引き出



す費用の差が現れる。かう云ふ費用の差は他人と自己、通例のものと變つたもの、期待してゐるものと、偶然遭つたものとの間に成立する。

洒落を問題にすれば、聽く人の精神過程では、違つた費用を使つて行ふ同時に生ずる二つの理解方法の差を注目しなければならない。この二つの理解方法の一つは、洒落に含まれてゐる暗示のお蔭で、無識意内の思考徑路をたどつて行くが、も一つは表面に止まり、恰も前意識から意識に移される普通の語調同様に運ばれて、洒落を作りあげる。聽きこんだ洒落の面白味を二つの觀念獲得法の差から誘導しようとするのは、正當な説明ではない様だ。

洒落と滑稽との間の關係が尙未解決の様に思はれて居たので、私達は先には、洒落には兩面がある (Janusköpfigkeit) と書つて置いたが、今になつても同じ事を私は云ひたい。

ユーモアに於てはこゝに擧げた性質がぼんやりしてゐる。私達はユーモアの面白味を、その狀況としては當然習慣的に起つて來ると期待して居た感情が、避けられる場合だけに求めて居た。それだからユーモアは期待の滑稽の廣義に屬する事に思はれたのだ。が然しユーモアに於ては同じ内容をもつ二つのちがつた觀念獲得法といふことは問題にならない。不愉快な性質をもつてゐても、避ければ避けられる感情の興奮が、其場の狀況を支配するユーモアの性質は滑稽竝に洒落の性質とは



同一視は出来ない。ユーモラスな見當違ひは、元來滑稽の作用を起すためには危険千萬な解放された費用の別な使途なのだ。

X

X

X

私達はユーモアの面白味のメカニズムを、滑稽の面白味及び洒落に於て行つた様に、同じ公式に導いたので、これで私達の使命は終りを告げる。洒落の面白味は、私達には制止の費用が節約されて生ずる様に思はれ、滑稽の面白味は觀念の費用が節約されて生じ、ユーモアの夫れは感情の費用の節約から生ずる様に思はれた。私達の頭腦の此三つの作業方法中に、何れも節約による面白味が生れて来る。精神作用の發達によつて失はれてしまつた面白味を、精神作用の中から再び獲得する方法である點ではこの三の方法が一致してゐる。なんとすれば私達が此等の方法で得ようと努力してゐる享樂(Euphorie)は、私達が精神作業に對して、いつも僅少の費用を支辨してゐた生活時代の氣分から来るものであつて、生活を樂しむために、洒落をつくることも出來ず、ユーモアをも必要としなかつた小兒時代の氣分に他ならない。



洒落の精神分析

定價金壹圓五拾錢



昭和五年五月七日印刷  
昭和五年五月十日發行

譯者 正木不如丘

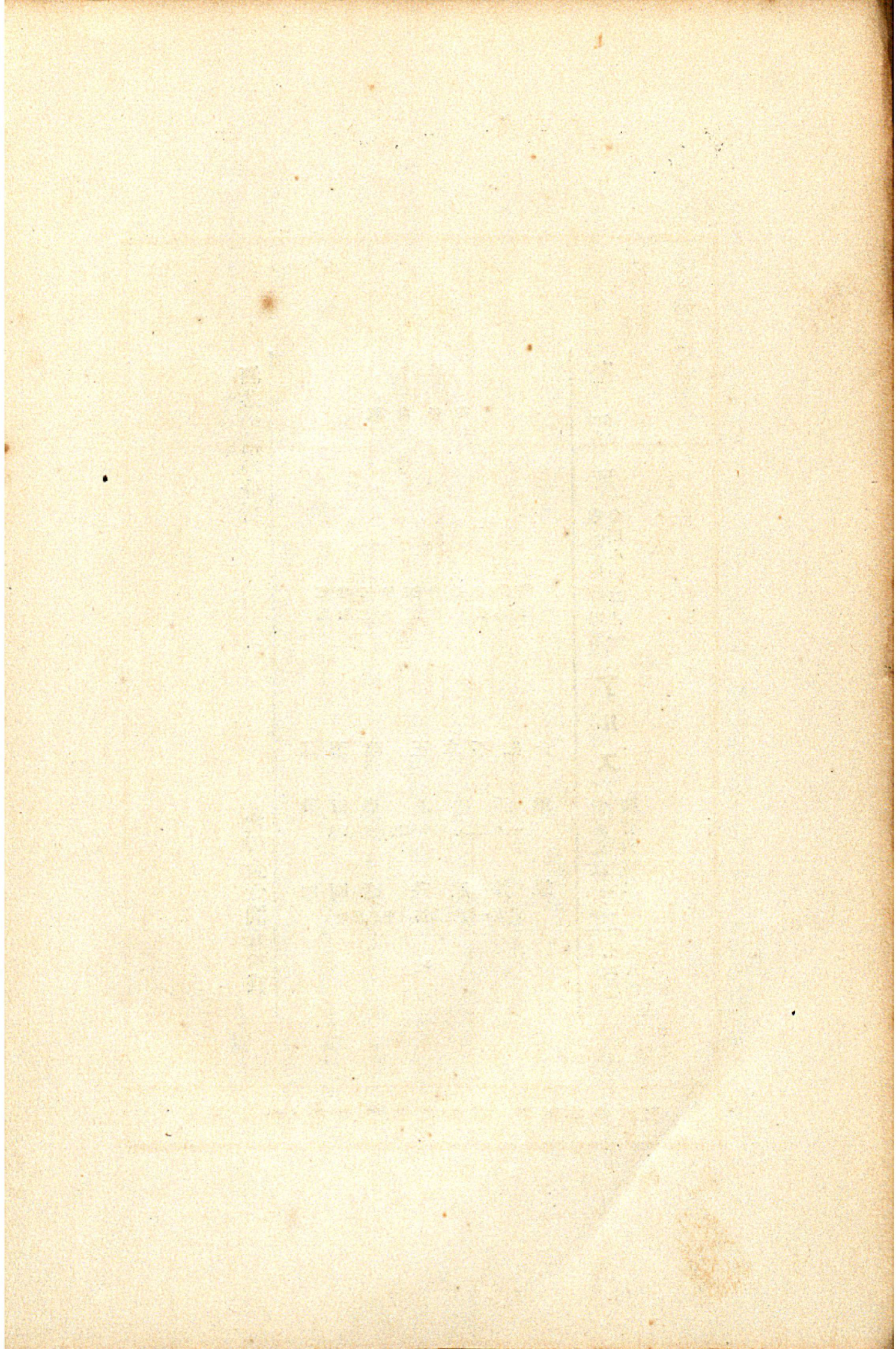
發行所 北原鐵雄  
東京市神田區今小路二ノ一

印刷者 萩原芳雄  
東京市牛込區山吹町一八九

發行所  
東京市神田區  
今小路二ノ一  
ア  
ル  
ス

電話九段二二二七番  
振替東京二四八八番







見よ・讀め  
全歐洲の學  
界を惡魔の  
如く攪亂し  
神の如く驚

こは：人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。こは：人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘發である。こは：神と惡魔とを同時に忌憚なく曝露し人間内奥世界の眞を示す新しき哲學である。こは：勃起恐怖、中絶性交、潜在的同性愛近親相姦錯綜等精神と性慾との關聯交錯を立證する實驗科學である。こは：恐怖假面、催眠情態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の奇怪性、罪惡意識等精神作用の神祕を

# 精神分析入門

フロイド原著  
安田德太郎譯

倒せしめた  
る大膽奇抜  
の新學說！  
精神分析  
とは何ぞや

解明せる新心理學である。こは：狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。こは：今後の文學、美術、哲學、凡そ人間精神を基調とする萬般の問題は、この精神分析の方法を用ふるに非ざれば眞に解決する事は不可能である。本書は本學說の始祖フロイド博士がその眞髓の最も平易に詳述した快心の名著にして安田氏の譯筆は流麗にして正確、一般學究書の難澁と乾燥とを打破し恰も探偵小説を讀むが如き怪奇と興味とを與へてゐる。



# アール・スルの最新刊

著原 トンラーユチ  
譯 俊正 松村

改譯  
増補

## 西洋哲學物語

上卷  
下卷

人生の背景は哲學である。生活の指標も哲學の上に置かれ一切の神祕も亦哲學に依つて解決される。哲學の人生に對する使命は如斯重大であり密接であり常識的であるべきに拘らず難解とされ一般より敬遠されて來たのは何故であつたか？之れ哲學そのものの罪ではなく寧ろ説く人の罪であつた。本書はその陰鬱なる講座より潑瀾たる生活の真中へ新使命を帯びて出現した快著である。行文平易、通俗的にして而も學究的なことは歐米の學者が舉つて奇蹟以上の奇蹟として激賞する處である。有史三千年來の眞理は本書に依つて初めて親しく萬人の把握する處となつた。久しく絶版中の處今回全々改譯増補の新版として更めて出現したものである。

定價各壹圓五錢・送料各拾錢



# 刊新最のスルア

著原クツベ・スムダア

譯 夫 芳 野 永

## 東洋哲學物語

上卷 出來  
下卷 近刊

有史五千年、神祕を藏せる東洋思想の探求は今や全世界を擧げて人類永遠の相をこゝにこそ發見すべく盡されてゐる。

西洋の物質文明は既に行き詰つた。世界思想の根源こそ實に「光は東方より」だ。ギリシヤに於けるプラトーンも、如何にインド思想の影響をうけたことか！近世ローマンチツクな哲學、文藝が如何にその「自我」の思想をインドより享けたか！西洋文化そのものが世界最高のアリア民族より出たことか！いかに多くの世界人がインドの思想宗教に救はれたことか！さうだ！そしてその思想と宗教とがいかに科學的であることよ。人々はそこに最高の思想面を見出し花よりなほ華かに咲く譬喩、そして生死超越の眞理をそこに見出したことであらう。

錢八料送・錢拾五圓壹各價定



# 懷疑・知識・信仰

新訂版

フイヒテ著  
陶山務譯

人生の意義は、何ぞ、大哲フイヒテの明快なる解答と深遠なる思索を本書に求めよ

われわれは、日々にかうして生きてゐる。生きてゐることが果して限りなき歡びか、堪へ難い悲しみか——之に明かな解答を與へることは、けだし至難な事に屬しよう。然し生きてゐること、生活してゐること、それは一つの大きな事實だ。よし永久不靈の眞理でないとしても、現實如實の眞理だ。この事實、この眞理を、どうしたらいいと言ふのか。いかに解明したらいいのか。——ここに思索が生れる、哲學が生れる。わがフイヒテは彼の深遠な學說を通じて吾々に具に啓示してくれた。懷疑より知識へ、知識より信仰へ、これ以外に思索の途は斷じてありえない。本書は迷へる羊に婦り行く魂の故郷を教くる聖書である。

定價壹圓五拾錢 • 送料八錢



# 刊新最のスルア

著 原アレクンシ  
譯人健野小・務 山陶

## 宗教信すべき乎

彼等の正體と化の皮を白日の下に  
暴露し、一切の宗教を清算せよ。

アプトン・シンクレアは、歐洲大戰當時凡にこの「宗教信すべき乎」原名（宗教の利潤）を書いてゐた。彼は米國の、キリスト教舊教と、キリスト教新教と及び泡沫の如くに出沒する諸宗教、宗教らしきものの、正體を、化の皮を、假借する所なく、あばき、ひんむき、さらけだした。而も

その依存する所が資本主義であり、その擁護する所が支配階級であり、その立ふさがる所が科學の前途にあり、その導く所が民衆の永遠の無智の道である事をシンクレアは何等怖れなく、我々の前に明かにした。

豫言者シンクレアの獅子吼を聽け！

錢八料送・錢拾五圓壹價定



# 刊新最のスルア

著史女イタンロコ  
譯次賢山内

グ  
レ  
ー  
ト  
・  
ラ  
ヴ

性的革命の夜は明けた。新しいロシヤには新しい世界の匂ひがある。我々はそこから學び、またそれを理解すべき義務をもつ。

コロンタイは「赤い戀」においては同志、愛人、夫としての男と次第に疎隔して行く女の惱みを描いた。本書ではその地位を逆轉して、妻をもつ同志と戀に落ちたコムニニストの女が次第に男に對する熱情を失つて行く經過を描いてゐる。男の暴虐と、無理解と、飽くなき獸慾の狂奔と、それに抗しなからずするところと、曳きづられて行く女の纏綿と、忍従と、涯しない情感の惑溺と——それに絡んで特異な愛慾劇を展開させてゐるのである。見よ！新しい女コムニニストの偉大な純情な愛無理解な男の蒙らせる数多い傷口！傷口から滴り流れ出る赤い赤い血の色を！

錢六料送 • 圖壹價定



# 刊新最のスルア

露西亞は果して

地上の樂園か？ 現實の地獄か？

現在のサウエート・ロシアをユートピアと見る人も、地獄と見る人も、本書に描き出された生々しい生ける事實に直面するの勇氣を必要とする。本書の著者は革命直後の露西亞を視察し、又最近國賓として招かれ、露西亞の真相を究めた某氏の匿名であつて、世界の疑問C・C・C・Pの正體を忌憚なく暴露した空前の快著である。

C<sup>エス</sup>  
・  
C<sup>エス</sup>  
・  
C<sup>エス</sup>  
・  
P<sup>エル</sup>

(サウエート社會主義共和國聯邦)

著律和他

『C・C・C・P』とは何か？ 暗號でも陰語でもない。

勞農ロシアの略語である。

第一のCは「聯邦」第二のCは「サウエート」第三のCは「社會主義」そして最後のPは「共和國」つまり『サウエート社會主義共和國聯邦』の意である。

本書に収めた無數の寫眞版は、殆んど

初めて發表された著者祕藏の蒐集だ。

錢八料送・錢拾五圓壹價定



# アスルの新刊

マグルリツト著  
大木篤夫譯

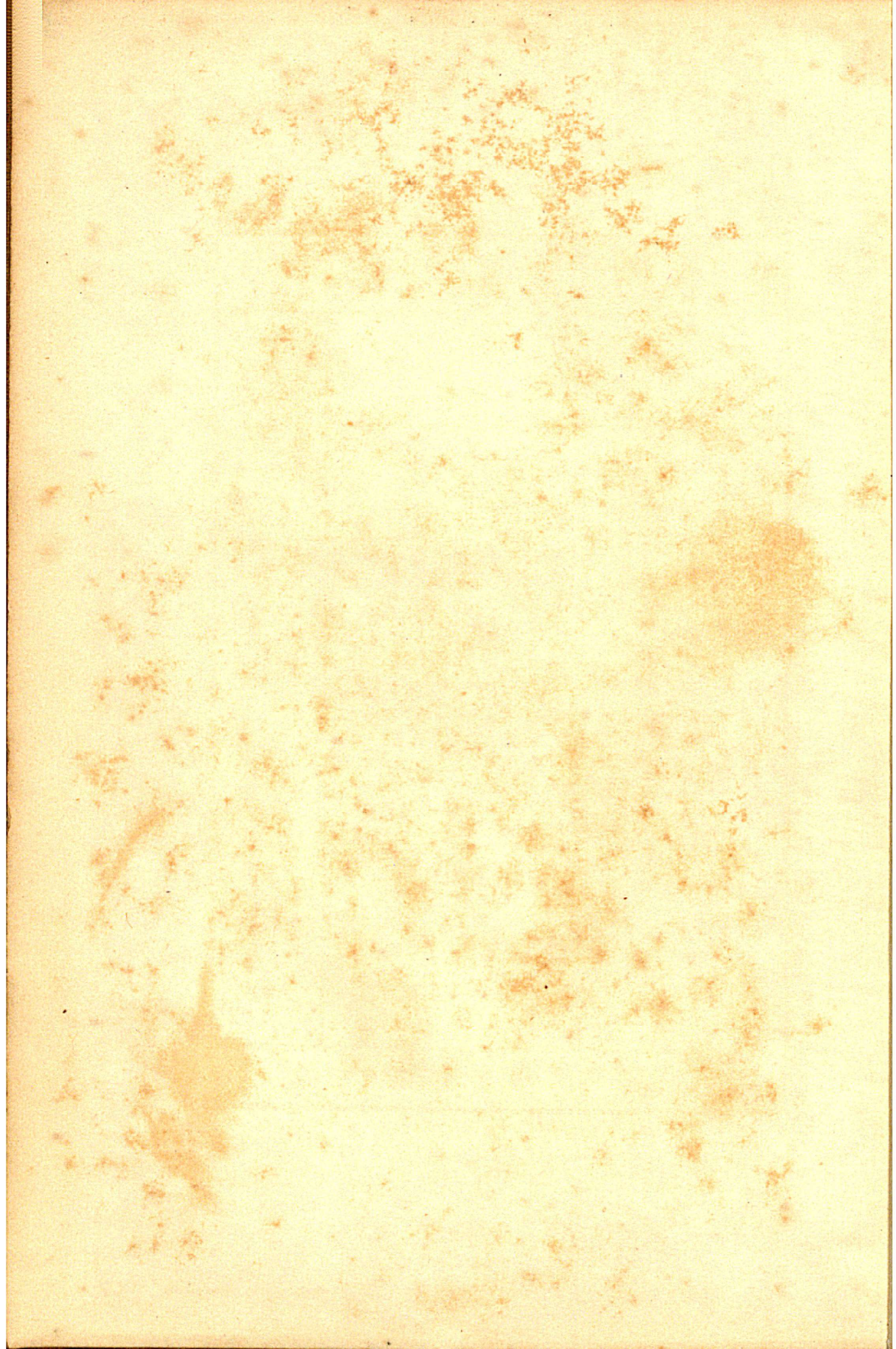
## 戀愛無政府

### 新エロチシズムの最尖端

本書は果して、フランスのあらゆる階級を震撼し、痛烈なる惡罵と怒號と聲を賣つたほどの所謂好色本であらうか。  
文豪アナートル・フランスはその社會觀上よりこの書に絶大の賞讃と辯護を惜まなかつた。  
大戰後に於けるフランス社會斷層面の赤裸々なる描寫、背徳腐敗の假籍なき暴露。新女ギャルソンの大膽不敵な出現！戦慄すべき戀愛生活、性生活の祕密。戀愛無政府状態の混沌より秩序の光明への憧憬行進曲！戀愛最もエロチックにして、然もまた道徳的なこの小説を現代日本に送る。  
偽善家は驚倒せよ！  
ブルジョアは憤激せよ！  
プロレタリアはこの崩壊相に拍手せよ、  
而して、日本女性には須らく解放の秘鍵を握れ！  
戀愛アナキーを本書に満喫せよ！

定価壹圓五拾錢・送料八錢











Ueber  
den Geist und  
seine Beziehung  
zum  
Unbewußten

DEUTSCH

VERLAG  
VON  
F. V. COHN